

ナザリックの核弾頭

プライベートX

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

見た目がバイオハザードの「タイラント」 or 「ハンク」の男がナザリックで奮戦する話。

反省はしている、だが後悔はしていない。

タグは徐々に増やして行く予定です。

ファンタジーを近代兵器で破壊しています。

その点を踏まえただでお楽しみ下さい幸いです。

目次

始動〔タイラント〕編

終わりの始まり	1
転移	15
検証：運動と武器と魔法	27
検証：形態変化	39
評価：決意	50
検証：実戦：カルネ村	62
実戦：カルネ村：暴君降臨	81
カルネ村：暴君覚醒	95
カルネ村：第一次戦闘終了	108
接触	117
絶望の使者 part 1	126

冒険者〔ハンク〕編

絶望の使者 part 2	137
絶望の使者 part 3	147
絶望の使者 part 4	156
決着	165
行動準備	177
冒険者登録	186
打算的討伐	195
組合へ part 1	207
組合へ part 2	215
依頼	224
大森林	233
妖巨人	245

合流	256
共闘	266
依頼失敗?達成?	278
英雄の条件	289
深夜の決闘	298
英雄計画 part 1	309
英雄計画 part 2	319
英雄計画 part 3	330
漆黒の英雄	340
突破	352
制裁	367
事後のち報告、時々トラブル	381
トラブルバスター part 1	395

トラブルバスター part 2	405
素顔	417
死神の一人旅	430
駆逐	443
切り札	456
王都に向けて	467
王都到着	484
if \ Abyss Watcher	498
(上)	

始動【タイラント】編

終わりの始まり

今、あるオンラインゲームが終わりを迎えようとしている。

時は2138年、場所は極東の島国”日本国”。

その日、ある一人の男が人知れず激怒した。

そして、元凶である邪知暴虐の運営をぶち殺さねばならぬと決意していた。

「呆れた運営だ、生かしておけぬ」

【YGGDRASIL】

ゲーム大好きな男が、ハマったDMMO―RPG。

数少ない休暇間や休日をも、完全徹夜でプレイするのが男の唯一無二の楽しみであり”

至福の休暇の過ごし方”だった。

ファンタジー溢れる世界観や、情け容赦ない弱肉強食のPK戦。

辛い現実を忘れさせてくれる、男にとってはある意味”癒し”でもあったのだ。

しかし、ある日その状況は一変する。

職業軍人であるが故、突如苛烈な戦地での作戦に参加が決まった。

ネットすら繋がらない、そもそも死ぬかもしれない。

いつ日本に帰国出来るか分からないのでは、ユグドラを引退をせざるをえない。

あまりのショックでゲボ吐きながらも、何だかんだで戦地へと赴く男。

只でさえ過酷な自然環境に加え、そこら中に死神が跋扈する戦場へ。

そんな、この世の掃き溜めみたいな所で約2年半男は戦い抜いた。

漸く帰国の許可がおりるや否や、あらゆる力を使い最短時間で日本へと帰国。

そして、脇目も振らず基地から自宅へと直行。

夕飯の準備も適当にすませ、はやる気持ちを抑えながら一通りの機材を装着して起動
させた。

!!!!!!
仄々の電脳世界へのダイブ、自分の脳にダイレクトに情報が送られる感覚が心地よ
い。

これから何をしようか、仲間と何を話そうか。

思春期のガキでもあるまいに、年甲斐もなくワクワクしてしまう自分が居る。

だが、時間も時間だしそんなに人は居ないかもしれない。

社会人プレイヤー故、明日の起床時間を考慮せねばならないのが痛い所。

只不安なのは、自分と同じく引退した者も居るのではないかと言う事。

せめて、お別れの挨拶位はしたいのが本音だ。

もつとも、突如長期離脱した俺が言えた義理ではないが。

まあ兎に角、行けば解るか。

我等がホーム”ナザリツク地下大墳墓”へと。

”ユグドラシルは本日00:00をもってサービスを終了します”

ログイン早々、コンソールパネルにデカデカとGMからの無慈悲な文字が表示された。

その間、僅か5秒。

「呆れた運営だ、生かしておけぬ」

激しい殺意と同時に、呪詛の言葉が自然に口から吐き出された。

そして、言葉とは裏腹にコンパネを操作しようとするが、指が震えてうまく操作が出ない。

謎の身体震えはやがて激しい吐き気と変化、最終的には泣きながらゲボ吐きそうに

なっていた。

ふと、フレンド欄を見れば2名反応がる。

「モモンガさんとヘロヘロさん……」

失意によつて支配された絶望の中、それは一筋の希望の光。

フレンドの反応がある場所は、” 円卓の部屋”。

即座に転移、その選択に何の躊躇もなかった。

墳墓内の転移に掛かる時間は、一瞬。

だが、不思議な事に酷く長く感じられる。

それもこれも、このゲームの終了まで残された時間は残り僅かだからだろう。

円卓の部屋の前に転移が完了した瞬間、男はその扉を勢いよく開けた。

「な、何ごとっ?!!」

突然の事に「うひゃあ」と声を上げて驚く” 髑髏”。

その髑髏の目の前には、ロングコートを着た大男が居た。

その、フランケン・シュタイン顔負けの大男の名は……” タイラント”。

ある極悪製薬会社が作った生物兵器と言う設定の、人工生命体型の異形種。

今日、運営に激怒した男のキャラである。

「こん、ばんわ」

とりあえず、挨拶をするタイラント。

何事に置いても、挨拶は大事なコミュニケーションの一つである。

しかし、髑髏と大男が見つめ合う不思議な光景は……控えめに言つて、不気味だと言わざるを得ない。

これが美男美女の構図ならば凄く絵になるが、この様子は最早ホラーでしかない。仮にキラキラの背景を入れて明るくしても、恐怖絵図の構図になってしまうのだ。

それは”異形種”故の、悲しい仕様であるので仕方ない事なのだが。

そして残念な事に、タイラントと入れ替わる様にへ口へ口さんがログアウトしてしまつていたので。

不覚、なんたる不覚。

もつと早く帰宅していれば、最後の挨拶位は出来たであろうに。

悔しさとショックで、無表情の死体顔が少し歪んだ気さえした。

まあ、実際はピクリとも動いていないのだが。

「た、タイラントさん！良かったあ！来てくれたんですね！」

「まあサービス終了を、約2分前に知りましたがね……」

「本当、残念です……」

久々の再開に喜び合う二人、しかし残された時間はあまりに少ない。

「この上は、ジタバタしても仕方がない。最後までいいカッコ良く行きませうかね」

「……ですね」

そう言うのと、二人は静かに円卓を後にする。

ユグドラシル最高十大ギルドの一つとまで言われた”アインズ・ウール・ゴウン”

ゲームの最後……いや、”世界の終わり”の時なのだ。

ならば、一番カッコいい姿で終わりたい。

お互いにお気に入りの装備を、これでもかと装着していく。

その様子は、まるで今から戦争か冒険に繰り出すかの様だった。

タイラントの装備は、ファンタジー主体の世界観からかけ離れた所謂、近代兵器

だ。

今より少し昔、20世紀頃の兵器をモチーフにしたものだと思われる。

ファンタジーの世界観と合わないと言われた近代兵器パッチ。

要求値や入手難易度の割りには微妙な性能が多く、当初話題にはなつたが直ぐ忘れさ

られた悲しいパッチの一つ。

何故ならば、見た目以外には既存の武器や装備とあまり変わらなかったから。

「だが、それが良い」

単純に、見た目がカッコいい。それ以外に、理由が必要だろうか？

そもそも、銃と言えば自分の商売道具。ど素人のパンピーに遅れを取る事などない。

異形種と言うだけで、見知らぬプレイヤーに理不尽に殺され、その上罵倒される。

戦いとは常に弱肉強食、只自分が弱いから狩られたのだと分かっている。

しかし、殺されれば当然はらわたは煮えくり返る。

駆逐してやる、一人残らずと何度枕を涙で濡らした事か。

復讐を誓い、気の遠くなる様な時間をかけてタイラントはたどり着いたのだ。

近代兵器で”ファンタジー厨”どもを蹂躪出来る領域までに。

物理、魔法共に高い耐性を誇る漆黒の防爆コート。

小規模の都市を一撃で吹き飛ばす、最終決戦兵器である”核弾頭”を装填したアト

ミックバズーカ。

最強の攻撃力と鉄壁の耐久力を兼ね備え、近接戦闘もこなす我が分身……。

それが、”タイラント”だ。

剣や魔法がメインの世界観を、完膚無きまで破壊すると誓った近代兵器増々キャラ。時には重火器をぶっぱなし、時には近付く者はその豪腕で叩き潰す。

ギルドでの立ち位置は主に遊撃と壁、殿を担当。

アウトレンジから敵を地域ごとアトミックバズーカで焼き払っていたら、いつしかギルド内からはこう呼ばれていた。

”ナザリツクの核弾頭”と。

様々な装飾品と重火器を装備し、重々しく歩く様子は最早”二足歩行戦車”と言うに相応しい。

二人が向かう場所、それは十階層にある”玉座”。

ギルド”アインズ・ウール・ゴウン”を象徴する特別な場所。

「……終わり、か」

タイラントは無意識に呟いた。

ギルドで過ごした日々が、走馬灯の様に目の前を流れている。

(それにしても、本当に良く出来ているな)

玉座にはNPCのメイド達が立ってはいる。しかしこれは言わばマネキン。

だが、このメイド達とてギルメン達が作り出した大切なギルドの仲間、言わば家族の様なものだ。

そんな家族を無下に扱うなんて、出来る訳がない。

絢爛豪華な広い部屋に、二人の異なった足音が響き渡る。

ギルドの繁栄と栄光を象徴する筈の玉座が、今日は何だか酷く寂しく感じた。

タイラントとモモンガの二人の後ろには、執事と六人のメイドが追従している。

しかし、NPC故に自分の意思で動いている訳ではない。

モモンガは中央の玉座に着くと、執事とメイド達を所定位置へコマンド入力し、丁度良く所で停止させた。

所詮は融通の利かない、簡素な移動プログラム。

このプログラム、好き勝手な文言では反応すらしない。

”生まれ”ではなく、”待機”と言わないと止まらないのだ。

ままならない、と常々思っていたがその動作すら”いとおしく”感じてしまうのは今日が最後だからだろう。

玉座の隣に美女が一人、立っている。

設定では守護者統括、ナザリック大墳墓の最上位NPCの”アルベド”だ。

見れば見る程に、素晴らしい造形に感心してしまう。

思春期の童貞の小僧なら、一発でノックアウトしそうな出来である。

そんなアルベドを暫く凝視していると、おもむろにモモンガがアルベドのコンソールを開いた。

膨大な量の文字がキャラクタークリエイイトのコンソール一杯に広がり、拘りの深さが伺える。

流星はタブラさんと、感心せざるを得なかった。

『ちなみにビッチである』

設定の最後の一行、タブラ氏が残した最後屁とでも言うべきだろうか。

こんな見た目清楚な美女で中身がビッチとか、最高かよ。

タブラさんとは良い酒が飲めそうだぜ、とタイラントはしみじみ思った。

「最高かよ、タブラ氏……」

「……え？」

「え？え？」

基本、巨乳のナイスバディの美人がドストライクなタイラント。

アルベドがビッチかどうかはあまり関係無いが、ビッチであったとしても何ら問題はない。

「ビッチかあ……」

「ビッチは、駄目ですか？」

「いや、いや！駄目って訳では全然なくて、何か勿体ない気がして……」

しかし、モモンガ的にはビッチはあまり良くない様に見える。

アルベドの設定を見なければ、別こんなモヤモヤした気持ちになる事はなかった。

”ビッチである”と言う一文は、気持ち良く最後を迎え様とするモモンガに迷いを生じさせてしまったのだ。

ならば、その設定を変えてしまえば良いではないか。

気持ち良く、後腐れなく終われるのならばやむ無し。

だが、ギルドメンバーが独自の拘りをもって産み出したNPCを弄って良いものかと
言う罪悪感も否めない。

暫し考えた後、二人は最終的な結論を出した。

「変更する、か」

「最後ですし、こんなモヤモヤして終わるのはちよつと……」

「まあ、タブラ氏も最後だからきつと許してくれるさ。何なら、俺が土下座しますわ」

「タイラントさんが土下座する姿が想像出来ませんよ……」

モモンガは普段使う事の無い、ギルドマスターの特権を行使する。

クリエイトツールを無視した強制的な設定の変更である。

多少の後ろめたさはあったが、コンソールを少し操作しただけで、“ビッチ”という言葉は消える。

当然の事だが、設定欄にはビッチの文字を消した事による空白が生まれてしまっている。

空いた空欄に、何か新しい設定を入れるべきか、否か。

しかし、そんな事を迷うにしても残された時間は少ない。

ええい、ままよっ！とタイラントは後ろから手を伸ばし、コンソールに文字を入力した。

『モモンガを愛している』

「完璧、だ」

「ちよ、ちよつと！何で自分の名前入れないのさ！」

「ふはは！文字数を考えたまえ、明智君」

「謀ったなっ！」

それは、ギャルゲーにおいて主人公の名前に自分の本名を登録し、自分に向かって「好

きよ、〇〇君」と言わせる様なもの。

その気恥ずかしさたるや、超絶級の悶絶ものである。

しかしながら、改めて設定を変える気は起きないし、そんな時間もない。

どうせ今日でサービス終了なのだ、最後までいいやりたい事をやってもバチは当たらないだろう。

楽しい時間はあっという間に過ぎ、玉座に静かに腰掛けるモモンガ。

そして、その後ろに控えるタイラント。

”オーバードロード”と”暴君”の二人は只最後の時を待った。

「ひれ伏せ」

遂にその時が目前に迫った時、モモンガがNPCに最後命令を下す。

その命令に従いアルベドと執事、6人のメイド達は臣下の礼をとる。

「モモンガさん……」

「最後まで、格好つけないと」

その意図を察して、骸骨顔を見たタイラント。

本当に残念そうな、何とも言えないやるせなさがひしひしと伝わってくる。

そんな意気消沈したモモンガの目の前に、タイラントはおもむろに手を差し出す。

少し驚きながらも、意図を理解したモモンガはその手を握り返す。

二人はがっしりと、固い握手を交わした。

「……共に戦った日々を俺は忘れない、ありがとう」

「最後が一人じゃなくて良かった。ありがとう、タイラントさん」

時刻は23:59:48を示していた。

もうすぐ終わるのだと思うと涙が出そうになる。

多分、ユグドラシルから離脱したら、泣いているだろう。

タイラントは直ぐに来るであろう、意識を引っ張られる感覚に身を委ねようとしていた……

転移

23 : 59 : 53

ちくしょう……

復帰したその日にサービス終了なんて……

こんな事って、あんまりじゃあないか。

いや、モモンガさんのがもつと辛いはずだ。

俺が居ない間もきつとギルドをずつと……

彼だつて社会人で仕事をしている。

それでもギルドを管理し維持し続けてくれた。

皆の居場所を守ってくれていたんだ。

ユグドラシルがもう過疎化していたのは知っていた。

でも俺はずつと好きだった。

下らない雑談が好きだった。

心踊る冒険が好きだった。

時間さえあれば15分でも入りたかった……

だが、俺は出来なかった。

ギルドの最後、最後に心の底から思う。

もつとこの場所に……

【ナザリック】に居たかった……と。

（あ、そういえばペヤ●グにお湯入れっぱだ）

感傷的な気分浸かっていたと思つたらこれだ。

自分の気持ちの切り替えの速さに嫌気がさす。

それは俺が社会人だからか軍人だからか。

いずれにせよ今回の休暇は退屈なものになりそうだな。

もうすぐ退屈で下らない【現実】へとログアウトする。

（この為に代休を貯めたのになんたる不覚だ……

いや、さしあたっての問題はペヤ●グだ。

捨てるべきか食うべきか……

これは筋肉ルーレットで決めよう……

あ、あれ？何か変だぞ……）

00:00:23

あれ？なんか時間過ぎてね？

あれ？あれれ？

「ナゼダツ！」

「どういふことだ！」

二人共、ほぼ同時に憤怒の声を上げた。

違和感を感じた時点で二人の行動は早かった。

幾つもある可能性をきつて捨て、冷静を装いながらコンソールを開こうと……

反応せず。

もう一度、手を何時も様にかざす。

反応せず。

あ？故障か？何か深刻バグでも発生したか？

それとも何だ、運営は俺を、俺達を馬鹿にしているのか？

なんたる事だ、覚悟を決めた男に生き恥を晒せと？

栄光の終わりを汚した、己を侮辱された思いが溢れる。

タイラントに關しては休暇を潰された事もあつてか怒り倍増だ。

モモンガと違つて殆ど利己的な事だが。

二人の怒号が静まりかえつた玉座に響く。

本来ならばその声に反応する者など居ない。

そう、隣に居るプレーヤーの……

【タイラント】と【モモンガ】以外には。

「ど……どうかなさいましたか？」

聞き覚えの無い綺麗な女性の声にタイラントは即座に反応した。

玉座に座るモモンガの前に巨体を滑りこませる。

アインズ・ウール・ゴウンの盾である自信と誇り。

不測事態から大将を守る為、身体が自然と反応していたのだ。

右手に持つガトリングガンのポイントアが声の主へと向けられる。

豪華絢爛な部屋に不釣り合いなエンジン音が響いている。

毎分約3000発の火力は圧巻であろう。

タイラントは油断無く状況を見極めようとしていた。

「も、申し訳ありません！

至高の御方の許可も無く発言したご無礼……

何卒、何卒ご慈悲をっ」

目の出来事が理解出来ない。

融通の利かないプログラムでしか動かないNPC が喋っている。

しかも何故か凄く謝られている。

あれ？あれれ？オカシイなコレ。

あ、夢かコレ。

実は全部夢でしたらっつてオチだろ。

疲れているんだな。

うん、違いない。

俺は騙されない、騙されないぞ！

『タ、タイラントさん！』

落ち着いて！落ち着いてください！』

突然のメッセに驚くが直ぐに反応した。

『何だ、何が起きているんだ？』

バグかパッチか？

団長！これは一体……』

『タイラントさん、一先ず落ち着きましょう。』

運営に連絡しようと思いましたが繋がりません。

そもそも分かっているでしょうが……』

『コンソールが開かない』

『それは……』

しかし、この〈伝言〉は使える様ですね』

『確かに無意識に起動していた……』

『どうやら此処での会話は聞こえないようです。』

見た限りでは深刻バグではなさそうですし……

まずはその、物騒なヤツを仕舞いましょう。

うるさいですし……』

『確かにうるさいからなコレ……』

『とりあえずNPC 達に劇的な変化がある。』

直ぐに襲ってくる気配も無いし……

ここは上位者として振る舞いましょう』

『了解、でもいざって時は「殺ります」よ』

タイラントはガトリングガンを仕舞い元の位置へと戻る。

白眼で見ているか見ていないか解らないがアルベドの方を流し目でチラ見した。

見て見ればガタガタと身体は震えている。

まるで叱られる前の子供の様だ。

タイラントは凄惨な罪悪感に襲われた。

女性には常に優しくがモットー。

その精神はこのユグドラシルでも変わらない。

(ガトリングガン向けちゃった……)

何時もの癖って言うべきなのか。

染み付いた習慣がゲームまで反映されているとは……

なんだワーカーホリックだったのか俺は。

しかし、NPC とは言え少しやり過ぎたか？

いや、この解らない状況でやり過ぎたに越した事はない。

まずは俺達の安全の確保が第一優先だ。

それにしても流石は団長。

モモンガの会話を聞いているタイラントは思った。

王者に相応しい態度でNPC 達に的確な指示を出している。

こういった状況に慣れているのか？

まさに指揮官、それも司令官クラスの対応だ。

その素晴らしい手腕に拍手を贈りたい。

とりあえず俺にもやる事がある。

謝ろう。

アルベドに謝ろう。

NPC に謝るってのも複雑な気分になる。
でも絶妙なタイミングを見極めて切り込む。

モモンガの隣に立つタイラントは不動の姿勢で待っていた。

アルベドに会話を切り出すタイミングを……

「アル……ベド」

低い、とても低い声でタイラントは言葉を発した。

「はっはい！」

先程のご無礼平に……」

「ユルス。」

ワレ、コソ……

スマナカツタ」

声が低いです。

凄く低いですよ、俺っ！

しかも片言とききたよ！

いや、まあこの見た目で喋りまくったら……

それは何だか嫌だなあ。

「ああ……」

寛大なるタイラント様に感謝申し上げます！」

アルベドの顔に笑顔が戻った。

よっしゃ！これで大丈夫、大丈夫だよな！

振り返って思わずガッツポーズを連発した。

もちろん、バレない様にね！

『タイラントさん、俺に考えがあります』

『何でしょうか……』

いや、理由は聞きません。

やりましょうや、団長』

『ありがとうございます。』

ではまずタイラントさんは六階層……

アンファイテアトルムへ行つて下さい。

リング・オブ・アイنز・ウール・ゴウン。

指輪の力が使えるか解りませんが……』

『了解、先に行つて安全を確保してきますよ』

解らないなら試せば良い。

駄目なら歩いて行くだけだ。

タイラントは何も心配していなかった。

『お願いします』

タイラントは即座に行動を開始する。

玉座の階段を重い足どりで降りて行く。

左手のロケットランチャーの安全装置を解除した。

転送した瞬間、戦闘にならないとは限らない。

自身の持つ瞬間火力最強の武器に絶大な信頼を置いている。

手に持つランチャーを肩に担ぎながら巨体は姿を消した。

(相変わらず、綺麗な夜空だ)

何故か夜空を見上げる【生物兵器】。

何度も言うが不気味だ。

そして誰がこの巨体が綺麗な夜空に感動していると思うだろうか。

意外にタイラントは感性豊かな男なのだ。

ブループラネットさんの自然に対する拘りには脱帽するしかない。

円形闘技場のど真ん中で大自然（人工的だが）に感動していると……

貴賓席から跳躍する影を確認した。

貴賓席か、俺は貴賓席で観戦するよりも……

愚かな侵入者を叩き潰していた方が多かつたからな。

そう考えてみたら此処も俺にとっては居心地の良い場所だった。

跳躍する影にランチャーを構え照準する。

おもしれえ、来るなら来い。

タイラントにはパッシブスキル【暴君の波動】がある。

同等及び格下の相手の行動を恐怖により阻害するオーラ。

動きが鈍った所にすかさずロケット弾と弾丸の雨を撃ち込む。

爆殺かミンチに出来ればそれでよし。

駄目なら肉弾戦で完膚無きまで蹂躪するだけ。

単純な攻撃だが今までコレを凌げた者はごく僅かだった。

重火器と巨体から繰り出される波状攻撃。

幾多のプレイヤーを葬った必勝パターン。

これで駄目なら奥の手を使うしかないのだが。

しかし、そんな懸念は空振りに終わった。

凄く見覚えのあるNPC。

確か【ぶくぶく茶釜】さんが作ったキャラ……

ダークエルフの男装少女と男の娘だったか？

そのキャラが目の前で臣下の礼をしていた。

「タイラント様？ わぁ本当にタイラント様だ！」

あれ凄く喜んで……？

何故だ？ 何故に喜ぶ？

こつち殺る気満々だったのに？

腑に落ちない感じがしなくもないが考え過ぎも良くない。

ここは上官としての威厳を見せなくては。

タイラントは意を決してコミュニケーションを図る。

言葉足らずの仕様で喋り難いのだが。

検証：運動と武器と魔法

モモンガさんに言われ円形闘技場に来たタイラントは立ち尽くしていた。

目の前のNPC、この子供は確か「アウラ」だったはず。

ダークエルフだけあって耳が尖ってる。

左右の瞳の色が違うな、オッドアイってやつか。

流星はぶくぶく茶釜さんが作ったキャラだ。

一見、軽装に見えるが結構防御固いぞこれは。

ナザリック地下大墳墓第六階層守護者の名は伊達ではないな。

魔獣使い兼野伏の「アウラ・ベラ・フィオーラ」。

タイラントは嬉しそうに顔を見られ、恥ずかしさから目をそらした。

しかし何で俺こんな好印象なのだろうか。

アウラ……このNPCとは殆ど接点はない。

俺が勝手に闘技場で戦闘していただけ。

何故なら凄く雰囲気出たから。

正義面した異形種PK野郎を誘いこみ決闘気分てぶち殺すのに最適な場所だった。

アホは雰囲気出せば直ぐに乗る。

ナザリックを攻略しようとした馬鹿野郎共も此処で迎撃したっけか。畏とも知らずに滑稽極まりない光景だったな。

此処は俺の【処刑場】でもあって頻繁に来てたはずなんだけど……アウラとかNPC ってあんま見かけた事なんて無かったなあ。

「いらつしやいませ、タイラント様。

あたしの守護階層へようこそ！」

「ソウカ……」

全然言葉が出てきません。

本当にありがとうございました。

いや、違う。

違うんだ、もっと俺は喋りたいんだよ！

挨拶はコミュニケーションの基本中の基本。

第一印象は凄く大切！

このままでは俺はコミュニケーション障なデカ男になってしまう。

何とかせねば……

「ジャマヲスル」

「お邪魔なんてとんでもないっ

至高の御方であられるタイラント様を邪魔者扱いなんて……

このナザリツクに誰も居ませんよ」

よかつた、何とかコミュ障にはならなくてすんだぜ。

まあ俺の巧みなコミュ力（キャバクラにてスキルup）

ならばそんな心配をする必要も無かつたか。

さて、団長が来る前に俺も色々試さないとな。

じゃないと盾としての使命が果たせん。

闘技場だし肩慣らしにはちょうど良い。

「マーレ！タイラント様が来てるんだよ！

早く来なさい！失礼でしょ！」

「無理だよ……お姉ちゃん……」

「憤怒の化身タイラント様を怒らせたいの！

とつと来なさいよ！」

……なんだって？

憤怒の化身？イヤイヤ、俺別に怒ってないよ。

怒るつもりもないよ？

まあ、とりあえず自分の顔をまず見てみよう。

自己分析から始めなければ何も解らないしな。

因みにリアルの俺はフツメンだ。

取り出したハンドミラーを顔の前へと持ってくる。

……………。

あ、これ駄目だわ。

完全にキレツキレですわ。

白濁した目！

顔色がすこぶる悪い！

そしてスキンヘッド！

どうみても怒ってます。

激おこぶんどりームでした。

だってしようがないじゃない！

悪魔に作られた【生物兵器】（設定）だもの！

「ヨイ、アワテルナ」

「でも……………」

「ケガシタラ、アブナイ」

タイラントはドスンドスンと足音を立てて走り出す。

最初は凄く遅いと思うが、それは間違いだ。

人外、規格外の重量が爆発的な加速力を阻害しているだけ。

大型トラックが全速で突っ込んで来る。

この表現がピッタリ当てはまるだろう。

圧巻の一言に尽きる。

それを臆病なマーレが見たらどう思うだろうか……

迫り来る、タイラントを見たらどうなるか……

「ひ、ひいいーごめんなひやいー」

タイラントの有り余る迫力に身体が硬直し……

目の前が真っ暗になった。

マーレは貴賓席の縁で気を失いかけていた。

あ、あれ？マーレが落ちそうだ！

あれは危ないぞ！待ってろマーレ！

俺が必ず助けてやる！

約束だ、必ず助ける！

タイラントは一目散に駆け出したのだが……

マールは実際落ちそうになどなっていない。

降りるタイミングを図っていただけだ。

臆病な性格故に飛び降りる事が出来なかっただけ。

完全にタイラントの勘違いとお節介である。

踏み出した一步は走ることと地面にめり込む。

走ること、風の如く。

そして大きく踏み出し跳ぶ体勢をとった。

片足で全体重を支え、爆発的な跳躍力で一気に跳ぶ。

足がめり込んだ大地は弾けとび、砂埃が舞った。

落下するマールを空中でキャッチするタイラント。

抱えながらあとと落ちるだけ。

重力に従いタイラントは落下する。

巨体が地面に着地した瞬間、地震と共に地面に穴があいた。

まるで隕石でも落下したのではないかと錯覚するような光景だった。

「ダイジョウブカ」

タイラントがマールを地面に降ろしながら言った。

事の原因であり震源地の中心人物が被害者に声をかける。

そう全てはタイラントが悪い。

別に助ける必要など皆無だったのだが結果的には良かったのか？

被害者のマーレは目を回しながらアウラの方へと歩いて行った。

よし、これで一つ目の検証は終わりだ（キリッ

中身の男は凄いドヤ顔をしている。

タイラントの方は全く変化は無い。

相変わらず顔は悪いままだ。

身体の動かし方はゲームと変わりはない。

寧ろ、調子が良いと言っても過言じゃないぞ！

まるで自分の身体の様動かせる。

ラグや時間の遊びが全く無い。

思考と身体がダイレクトにリンクしている。

『タイラントさん』

何時の間にか闘技場に到着していたモモンガから「伝言」で話しかけられた。

玉座での指示はどうやら終わったようだ。

ここからは情報の共有と検証か。

『団長、身体の調子が良すぎます。』

恐らくゲームの範疇を超えてるか」と

『ええ、その事を含めて俺達の力を見せ付けます。』

まあ私は本当に魔法が使えるかどうか試するのが目的ですが』

『確かに魔法職の団長が魔法使えないんじゃないや……』

ヤバイっすね』

『だからこそ、検証します。』

あと各階層守護者を此処に集合させますので……

留意と警戒をお願いします』

『了解です団長。』

【ナザリックの核弾頭】の本領見せたりしますよ』

モモンガがスタツフ・オブ・アインズ・ウール・ゴウンを掲げる。

あのギルド武器はギルド皆で作った最強の武器。

世界級のアイテムにも匹敵する汗と血と涙の結晶。

今のモモンガさんこそ持つべき物だと強く思う。

孤独と仲間が消えて行く絶望感に負けずにギルドを守ってくれた……

ギルドマスター・モモンガ専用にするべきだ！

彼が矛なら俺は盾だ、迫り来る脅威は全て排除する。

今まで出来なかった分、これから恩返ししよう。

まだあんまり良く状況解ってないけども。

次々と攻撃魔法を藁人形に放ってゆく様子を黙って見ていた。

魔法のリキャストタイムはユグドラシルと同じか。

共通する部分と違う部分を探すのは大変だぞ……

と言うか俺もやらなきゃ駄目だろ。

『団長、お願いがあります』

『何ですか?』

『アンデッドって召喚出来ますか?』

『それも結構大量に』

『召喚系はまだ試していませんが……』

『やってます』

モモンガがスタッフを掲げると大量のアンデッド……

ゾンビが闘技場、タイラントの目下に現れた。

どうやら召喚系魔法行使も問題無いらしいな。

「うわあ、この量のアンデッドを楽々召喚するなんて……」

流石モモンガ様！」

「そうだね！凄いやね！お姉ちゃん！」

双子がえらく団長に感心している。

此処は俺の凄さも見せつけねばならん……

ぐぬぬぬ……と若干の嫉妬と焦りを感じたタイラント。

ガトリングガンを取りだしエンジンを起動させる。

けたたましい機械音が唸りを上げ、引き金を引く。

六連のバレルが回転しながら大量の弾をばらまき始めた。

ゾンビ達を薙ぎる様に銃口をスライドさせる。

魔力をコーティングされた弾丸はLv80相当の戦士相手にも通用する。

それが毎分3000発の速度で発射されるのだ。

当然、ゾンビ達に当たればどうなるのか？

木っ端微塵、バラバラになつてしまふに決まっている。

いや、バラバラどころかミンチより酷いのかも知れない。

タイラントはこの武器を「ビーハイブ蜂メーカー巢製造器」と呼んでいる。

目の前にある物全てに等しく穴をあける武器に愛着をこめて。

【無限弾倉インフィニットマガジン】のスキル効果がちゃんと発動していれば弾が無くなる事はない。

それでも銃本体にする弾倉交換と排熱のリキャストタイムはある。

火薬の匂いと凄まじい爆音が闘技場に響き渡る。

薬莖が滝の様に吐き出され地面に落ちてゆく。

永遠に続くかと思われた騒音は突然止んだ。

空転する銃身の虚しい音だけが聞こえている。

見てみれば銃の真横にあるモニターに「弾切れ」とリキャストタイムが表示されていた。

空になった弾倉を引き抜いて新しい弾倉を装填する。

あとは排熱リキャストのカウンターが「0」になれば射撃が出来るな。

眼下に広がる光景はひき肉と化した「ゾンビだった物」しかなかった。

「あの量のアンデッドをあつと言う間にミンチにしちゃうなんて！」

流石タイラント様！

闘技場の覇者に相応しいです！」

「そ、そうだね……」

凄いやね、凄いやねお姉ちゃん……」

あ、あれ？

何かマールに引かれている気がする。

何故だ……？
解せぬ。

検証：形態変化

「根源の火精霊召喚」

モモンガの一言で一際大きな焔の渦が巻き起こった。

アンデッド召喚とは比較にならない程派手だな。

炎を巻き込んだ熱風がジリジリと感じる。

この熱さ、生身で空気を吸い込んだら最後……

喉を大火傷して窒息死だな。

まあ俺や団長は炎に対する絶対耐性を持っている。

アンデッドなら必須の耐性なのだ。

だから、火に対して心配は全然していない。

寧ろ、俺はこの防爆コートも着ているからな。

尚更問題無さすぎる。

あれ、でも何だか……

気持ちが高ぶってくるな。

俺の闘争本能にも火を着けたとも言うのか……

あ、でも落ち着いたわ。

でもまあ、このまま派手に殺りますかね。

ふっ、見える、見えるぞ……

私の敵が見えるっ！

「オオオオアアア!!」

それは咆哮。

その場に居た誰もが震え上がった。

タイラントの防爆コートが弾け飛び、岩の様な皮膚が露になる。

筋肉がドンドン盛り上がり、亀裂が身体に出来ていく。

隙間から見えるマグマの様な血液。

異常なまでに発達していく両腕。

何故か発動してしまった【溢れ出す力】
オーバーフローフォース

結果的に言うところ形態変化をした。

うむ、ハイパー見た目がゴツくなった。

耐久力、攻撃力、対魔力が爆発的に上昇するが……

その代償として装備品が一度全てリセットされてしまう。

もちろんその効果も全部消える。

しかし、そんなペナルティなど微々たるもの。

それを補って余りある力を行使出来るのだ。

一応言っておくけど全裸ではない。

ちゃんとズボンも履いているし問題無い筈。

「ゴアアアアアア!!」

咆哮と共にタイラントがブライマル・ファイヤー・エレメンタル根源の火精霊に突貫していった。

巨体からは想像も出来ない速度で走り出す。

先程の駆け足とは比べ物にならない。

身体強化の魔法をかけてもこうも速くは走れないだろう。

大地を削りながら巨体が走る。

あつ言う間に二体の距離は縮まり、タイラントは拳を強く握る。

そして走り幅跳びの選手が如く飛び上がると……

速度そのまま炎に殴りかかった。

暴君の拳が炎の精霊に突き刺さり、地面に叩き落とす。

落とすなど生易しいものではない。

最早、「大地に縫い付けた」と言うべきだ。

仮にも元素精霊に限りなく近い最上位の存在。

それをたった一撃で行動不能にする。
拳一つでだ。

まあ、あれを只の拳と言うべきなのか疑問は残るが。

地面にめり込んだ精霊を狂った様に殴り続ける。

まさしく【暴君】タイラント

暴虐と暴力の権化が其処には居た。

大きく振りかぶった一撃は地面ごと精霊を砕く。

見るも無惨な元・精霊の身体が燃えだした。

最後の最後で炎は大きく燃え上がる。

煉獄の炎がタイラントごと燃やし尽くそうとしていた。

しかし、何事も無かったかの様に歩き出すタイラントが居る。

炎に対する絶対耐性。

それは、ほぼ全裸でもしつかり機能している。

『タイラントさん……』

ガチでやりましたね』

『ある程度本気出さないと。』

弱い指揮官に兵隊は着いて来ないでしょう』

『確かにそうですね。』

此方もやりたい事は概ね出来ました』

『これで多少の事なら何とかかなりそうですね。』

まあ、団長安心して下さい。

いざつて時は俺が殿しますんで。

その間に逃げて下さい』

『そんな、逃げるなんて出来ませんよ！』

ゲームなら大丈夫でしょうけど……

此処で死んだら……

本当に死ぬかもしれないですよ！』

『団長俺はね、俺は……』

【死】に対しては別に何とも思っていない。

現実でもゲームでも何にも変わらねえ。

ああ、俺は此処でくたばるのかって死に際に思うだけだ。

ソマリアのあの時も……

いや、何でもない。

兎に角、団長が気にする事は何も無い。

遠慮なく逃げて下さいな』

『……分かりました、タイラントさん。』

その時が来たらお願いします』

少々昔の事を思い出しちまった。

全く俺も頭のどつかネジが飛んでるかもな。

まあ今の俺が出来る事やらないと。

この何だか良くわからん事態に巻き込まれたが……

いずれにせよ現実よりか……

少しは「面白くなりそうだ」。

バサリと漆黒の防爆コートを羽織りいつもの姿へ。

あれ？俺は一体どうやってコートを？

コンソールも開けないのに？

うお、手が空間の中に入ってるぞ！

何か気持ち悪いな……

しかも、アイテムボックスの中身が解るぞ！

脳に直接情報が送られてくる様だ……

これは凄いで、俺の手持ちだけでも暫く戦争できる。
こんなにアイテム持ってたかな俺。

何だか、もう何でもありだな此処は……

オジサン少し疲れてきたよ……

あの姿になると何か疲れた気がするんだよなあ。

現実と体力リンクしているわけじゃあなかるうに。

今も何か倦怠感があるし、精神的なものなのか？

しかし、これで俺の強さが二人にも解ってもらえたであろう。

さあ俺に羨望の眼差しを向けるが良いさ！

さあ！さあ！ドンと来なさい！ドンと！

「モモンガ様に注いでもらえるなんて！」

団長が双子に水を注いでいる。

流石は団長だ、部下への細やかな配慮に感服です。

と言うか団長は骸骨マンなのに何故、【無限の水差し】を？

の、飲めないよな……

骨だし、内蔵とか無いし。

しかし、しかしだ団長っ！

美味しい所を持っていきましたね……

ぐぬぬぬ、これがカリスマ性と言うやつか。

恐るべし団長、いやカリスマアண்டェッドか……

「テキタイ目標、センメツ完了」

大きな足音を立てながらタイラントはモモンガ隣まで来た。

静かにモモンガの後ろに控える最凶の護衛。

あの禍々しい姿ではなくいつもの大男の姿へ戻っている。

アウラとマーレはタイラントの迫力に気圧されていた。

先程の凄まじい戦闘を目の当たりにした直後だから仕方がない。

白濁させた目をして何を考えているか分からない。

岩石をそのまま削った様な体躯と未知の武器。

物言わぬ兵器な様な男に脅威を感じない方がおかしい。

「ゴ」苦勞、流石はナザリックの核弾頭と言った所か。

その強さに私はいつも感心している」

「ナザリックの核弾頭？」

アウラとマーレは聞き覚えの無い単語を聞き直した。

このファンタジーな世界に「核弾頭」なんて言葉は存在しない。

核弾頭つてのは比喩で危険物とか最終兵器とか……

しかし、何て説明したら良いものか……

自身の二つ名だし、自分で説明したいのだが片言で出来るのか？

「私が知る異世界において……」

全てを滅ぼす決戦兵器いや最強の魔法と言っておこう。

それに匹敵する強さを持つている彼を示す様な物だ」

おお、流石団長だ！分かりやすい！

そう、それが言いたかったのよ！

話し方と伝え方がやっぱり上手だなあ……

「オレハ、ナザリックヲマモル。

オレハ、家族ヲマモル盾ダ。

オマエ達モ、マモツテミセル」

何とか言いたい事は言えたぞ。

しかし、このタイラント・ボイスファイル……

俺の言いたい事を簡素にして発言するぞ！

あれか、キャラの知力に関係してるのか？

糞！これでは筋肉モリモリモリマッチョマンの変態じゃあないか！

だがレベルはすでにカンストしてるし……
時すでに遅し……か。

「タ、タイラント様……」

あ、あれ？双子が何か泣いてるぞ……？

何故だ、何故なんだ!?

やはり筋肉モリモリマッチョマンの変態が喋ったからか？

くそう、無口キャラで通せば良かったのか……

『団長、キャラメイクし直したい……』

イケメンに細マッチョに直したい……』

『いや、タイラントさん。』

あれは感動して泣いているのでは？』

「私達、モモンガ様とタイラント様でもっと怖いと思ってました」

「そうか？それが良いならそうするが……」

どうする？タイラントさん？」

タイラントは無口で頷く。

団長に全て任せると言う意味で。

見た目が最凶の二人が性格まで最恐になる。

想像さしただけで冷や汗が出でしまう。

アウラは大慌てで否定した。

ふっ、可愛いのアウラ。

団長がアウラの頭をポフポフ撫でてるぞ！

ぐぬぬぬ、羨ましい……

「おや、わたしが一番でありんすかあ!？」

ん？ 転移門ゲートから誰か出てきたぞ。

あれは確か、シャルティアだったかな？

ペロロンチーノさんが作ったNPC だった筈だ。

凄い、凄いぞ！

良く見たら彼の萌えに対する拘りが凝縮されている！

なにか執念じみたものを感じるが……

ペロロさん、貴方はやはり最高の男だぜ！

評価：決意

シャルティアが固まっている。

〈^{ゲート}転移門〉から出てきたと同時に固まっている。

しかも俺と团长の方を見ながらだ。

しかしスカートと膨らみ具合が凄いで。

何かが入ってるいのか、まあ人知の及ぶ所ではないな。

一応、夢が沢山詰まっているんだらう。

しかし、ロリで花魁口調の巨乳とか……

ペロロも解ってらっしやるぜ……

ドストライクです！

まさか、この顔でこんなゲスい事考えているなんて……

誰も思うまい。

俺のロジックは完璧さ、バレる訳がない。

よっ！タイラントフェイス！いいぞ！

『タイラントさん。』

心の声、漏れてますよ……』

『……嘘だっ！』

団長の一言で頭が冷えたぜ。

もう少しで俺が危ない奴だと思われる所だった。

今度から気を付けねばならん。

俺がトリップしている間にアウラとシャルティアが喧嘩してるぞ。

大変だ！何があつたんだ！

此処は年長者らしく仲裁せねば……

俺の毅然とした振舞いを見せてやるぜ。

タイラントは足音と地響きを立てながら歩き出す。

一步、また一步と歩く姿は物言わぬ迫力がある。

タイラントが動いた事を気づいておらず、二人はまだ喧嘩を続けていた。

マーレだけは俺が動く様を見て凄く慌てている。

喧嘩を止めようにもマーレではどうにもならないだろう。

だが安心したまえマーレ……

俺は全然、全然怒ってないよ。

悪い子の所には「^誦しま^悪つちやうおじ^根さん」^源が来るぞって注意するだけさ。

別に何かするって訳じゃあないよ。

さあさあ、悪い子は……どんどんしまっっちゃうおうねえ。

喧嘩をする二人の前に立ち見下ろす。

タイラントの巨大な影は楽々二人を飲み込んでいる。

この段階で喧嘩をしている当事者は気が付いたのだ。

自分達を見下ろす暴君の姿に。

「ケンカ……スルナ」

【暴君の波動】タイラントオーラが発動している。

絶望のオーラと同じような物だが……

何かスキル能力上がってないか？

自分でも解るぞ、これ凄いオーラが出てるぞ。

でも赤黒いオーラってどうなのよ……

「もうしわけありません！」

「キラツケロ」

違う、違うんだ。

もつと優しく、諭すように言いたいんだ！

もうこれパワハラだよ、パワハラ。

言葉少なく背中をかたる大男……

見方によってはカツコイイかもしれん。

「流石ハ御方ノ中デモ最凶ノ呼ビ声高キ御方……」

「コキュートス……」

おお、動く冷凍庫と言われたコキュートス。

彼の周りが凍りついているよ。

うん、完全に蟲ですな。

「良く来たな、コキュートス」

「才呼ビトアラバ即座ニ、御方」

しかし良く考えてみれば過疎化したユグドラで……

階層守護者ってどうだったのか？

襲撃なんて殆ど無かっただろうに。

凄く暇だったんじゃないかな……

やる事が無い仕事ほど退屈な事はない。

俺達の都合で作っておいて……

俺達の都合で用無しになって……

俺達の都合で消される……

全ての物には魂が宿る。

だから物は大切にしなければいけない。

俺達は便利な世に胡座をかいていた。

これは俺達人間に対する「神の罰」なのかもしれない。

「これで皆、集まったな」

モモンガの一言で思考の海から引き上げられた。

目の前には各階層守護者が集まっている。

デミウルゴスよ、一体いつ来たんだい。

寧ろ、気が付かなくてごめんよ。

「では皆、至高の御方々に忠誠の義を」

一斉に守護者各員が姿勢を正す。

揃った隊列は儀仗兵の様に美しい。

流石と階層守護者と言ふべきだな。

階層守護者が担当階層と名前そして臣下礼をする。

軍で言う所の將軍が来た時にやる挨拶みたいなもんか。

いつの時代もやる事は変わらんのね……

まあ、いざその当事者になってみて意味が解った気がするな。

まず最初に各指揮官を自分の掌握下に入れる。
あと部下の顔を覚えるのも大切だしな。

「モモンガ様、遅くなり誠に申し訳ありません」

小走りで此方に向かってくるセバスが見える。

団長が何か命令していたのだろうな。

でなければ遅刻なんてするはずがない。

「いや、構わん。」

それよりも周囲の状況を報告しろ」

「はっ、周囲一キロは驚くべき事に草原です」

ナザリック地下大墳墓の周囲は確か湿地帯の沼地だったはず。

それが草原になっているとは……

時間転移、空間転移、次元転移？

ただ俺達がゲームの中に入ってしまった訳じゃあないのか。

なんだか、ますます複雑化してきたぞ。

幸いな事に身を守るには十分過ぎる環境だが……

まずは足下を固めないといかんな。

ナザリック地下大墳墓の隠ぺいと防衛。

周囲の状況収集、警戒網の構築……

団長、あんた凄いよ！

良くそこまで適切な指示を出来るな。

並の指揮官よりも全然優秀だよ！

本当にリーマンだったのか疑いたくなるよ……

「最後に各階層守護者に聞きたい事がある。

まずはシャルティア、お前にとって我々ほどのような人物だ？」

「美の結晶と美の権化……」

この世で一番お美しい方々でありんす……」

俺達を見て美しいって言うのは君だけだと思おうよ。

趣味嗜好は人それぞれだけど。

「コキュートス」

「各階層守護者ヨリモ強者デアリ……」

比ベル者ナキ最凶ト最強デアラレル御方……

ナザリツク地下大墳墓ノ絶対ナル支配者カト」

まあ見た目だけなら最凶と言っても過言じゃあないね。

団長は魔法職については現状、最強だから間違つてないな。

流石はコキュートスだ、良く分かつてる。

「アウラ」

「慈悲深く、深い配慮を持った頼もしい方々です」

慈悲深くて深い配慮の出来る人……

団長、あんたは凄いよ。

ほぼ初対面の人にここまで言わせるなんて。

頼もしい……これは俺の事を言っているのか？

「マール」

「す、凄く優しい方々だと思います」

マール、君の目は間違っではないよ。

君だけはしまっちゃんおじさん来ても絶対守るから。

タイラントとの約束だ！

「デミウルゴス」

「モモンガ様は賢明な判断力と瞬時に実行される行動力も有された方……

まさに端倪すべからざると言う言葉が相応しきお方。

タイラント様は絶対なる力と他を寄せ付けぬ覇者の風格。

不言実行、まさに忠を尽くす事を身を持って示して下さるお方です」

うおう……凄いい高評価だな。

デミウルゴスは防衛戦ぐらいでしか見たことなかったけど。しかし、この評価を下げない様にしないと……

「セバス」

「至高の御方々の総括に就任されていた方。

そして至高の御方の盾で在られた方。

何より、最後まで我らを見捨てず残って下さった……

慈悲深き方々かと存じます」

本当に申し訳ない、セバス。

ネット環境に繋がらない所に移動だったの。

ユグドラインしたくても出来なかったのよ……

本当、ごめん。

「最後になったが、アルベド」

「至高の方々の最高責任者と最凶の盾でおられる方……

どちらも私どもの最高の主人であります。

そしてモモンガ様は私の愛しいお方です……」

ごめんなさい団長。

ビッチからモモンガ愛してる設定にしてしまつて……
本当に、本当にすまないと思つている。

でも、超絶美女に好きになつて貰えるなら……

俺は全然アリだと思ふよ。

「なるほど、各員の考えは十分理解した。

今後とも忠義に励め」

「オマエ達ハ、俺ガ、マモル。

オマエ達モ、ナザリック、マモレ」

再び大きく頭を下げた守護者達の元から二人は転移した。

瞬時に視界が変わり、闘技場から移動したのが分かる。

此処はゴーレムが立ち並ぶレメゲトンか……

二人は揃つて肩を落とした。

見えない重りがドスドスと床に落ちてゐる気がする。

そしてアンデッド故に呼吸はしていないにもかかわらず……

大きな、それは大きな溜め息をした。

『『アイツら……マジだ』』

『団長、あれは本気ですよ』』

『え、なんか評価高過ぎて別人かと思った』

『しかし、これでもう後には引けませんな』

『ですね、もうこれは深刻なバグではありません。』

我々は【異世界】に飛ばされたと考えるべきです』

『大昔の映画に【戦国自衛隊】ってのがあったが……』

現代の軍隊がタイムトラベルして過去の日本で戦う……

確かそんな内容だったな』

『結局、その軍隊はどうなったんですか？』

無事に元の世界に帰れたんですか？』

『いや、燃料と弾が尽きて全滅する。』

兵站の重要性を感じさせる意味では良い映画でしたね』

『まずは足下から固めて行きましょう！』

慎重すぎる位に情報収集して、それから行動する。

タイラントさん、頼りにしてますよ！』

『現代は情報戦が勝敗を決する。』

細かい事は分かりませんが、御供しますぜ大将』

タイラントとモモンガは互いに腕を組んだ。

この異世界で今の所、信用と信頼出来るのは目の前にいる者だけだから。異形の魔法詠唱者と最凶の暴君。

このナザリツク地下大墳墓の統治者と守護神。

二人の新たな戦いと冒険が始まろうとしていた。

検証：実戦：カルネ村

自室、心休まる憩いと癒しの空間。

何気に部屋の中は拘って作った気がする。

見よ、このウエポンラックを！

ロケットランチャー、対物ライフル、ガトリング……

大小、遠近様々な武器の数々……

素晴らしい光景だな。

もう軽い武器庫だよ、これは。

そして……

何だか良くわからない液体が充填されたカプセル群を！

中には生物兵器的なヤツが培養されてる。

うん、キモいな。だが、それが良い！

乱雑に見えて不思議と整った我が家！

近代化パッチで得られる家具家電を結集した……

【研究施設の様な】部屋だつ。

いやあ、色んな事起こり過ぎて疲れたよ。

実際、疲れなんて感じないみたいだけど……

精神的な疲れは蓄積されている気がする。

だってキリキリと胃の辺りが痛むんだよ……

しかし、とりあえず今は落ちつける空間にいるんだ。

思う存分癒されなくて……

タイラントは大きな作業台の上にガトリングガンを置き、分解した。

この武器の特徴は使用毎に【整備^{メンテナンス}】をしないと性能が低下する。

近代化。パッチで取得した多くのアイテムは整備が必要なのだ。

しかも、専用の作業台でしか整備は出来ない縛りもあり結構面倒くさい。

消費アイテム【潤滑油^{ガンオイル}】も必要なので尚更面倒に拍車をかける。

馴れた手つきで分解をしていくタイラント。

カチャカチャと金属音が部屋の中に響いている。

暫く無言で作業をしているとノックの音がした気がした。

おや、一体誰が俺の部屋に来たんだ？

別に誰かを呼んだ覚えも無いし、団長なら用事があればへ伝言するはず。

なら、この来訪者は誰だ……？

今両手が塞がって、それどころじゃないんだ！

「入レ……」

もう誰でも良いや、とりあえず入ってくれ。

考える事を諦めて作業に集中しよう。

まあ、何かしら用があるんだろ。

だが、コレが終わるまで待つててくれ。

結構繊細な作業なんだよ、これは。

整備の出来高によって威力がUPするのだから……

負けられない戦いが此処にある。

「失礼致します……」

ん？何か女の声が聞こえた気がしたぞ……

おいおい、俺も遂にヤキが回ったのか？

幻聴まで聞こえてきたとかヤバイなあ……

いよいよ精神がやられているな。

早いとこ整備して休まねば……

いや、待てよ。

気のせいかもしれないが確認は必要だよな。

きちんと確認しなければ、うん。

緊張からか錆び付いたブリキのオモチャの様な動きになっている。

意外にもタイラントの心は繊細なのだ、ある意味では。

振り返ると其処には薄いピンクの髪をしたメイドがいた。

メイド服の随所に迷彩柄が混じっている。

服装のセンスに凄く親近感が沸いたタイラント。

ウツドランド迷彩マフラーが素敵ですよ。

「プレアデスはシズ・デルタ……」

御身の前に……」

あれは幻聴ではない、これは幻でもない。

瞬き出来ないがシズをガン見している。

何故に……戦闘メイドが俺の部屋に？

全く解らん、俺呼んだっけメイド。

いや、呼んでないな。

と言うか自分の事は自分でやる主義だし。

一体、何の用なんだろ。

「何ノ用ダ」

「私は、タイラント様の、お世話を命ぜられました」

「ソウカ」

え？誰から？誰から命令されたの？

俺は聞いてない、聞いてないよ！

落ち着け、落ち着くんだ……

まずは状況と気持ちを整理しようか。

タイラントは大きく深呼吸をした……つもりだ。

実際は呼吸などしてないからこの行為に意味は無い。

だが、何故だろうか急激に感情が抑圧されていた。

(あ、何か速効で落ち着いたわ)

お世話と言われても別にしてもらう事ないなあ。

今の所、メンテの手伝い位しかないよ。

寧ろメイドにメンテをさせるってどうなのよ……

へへっ、オイラの身体のメンテなら大歓迎だがつ！

……………。

って違う、違うってばよ！

ちよつとした若気の至りなんだよ、あんまり若くないけど。

これでは只の変態オヤジじゃあないか……
ん、さつきから何かフリーズしてるぞ？
どうしたんだ？

「気二ナルノカ？」

「……凄い」

シズさんがウエポンラックに見とれてる。

何故だ？俺の武器が珍しいのかな？

確かにユグドラでもマイナーな武器ばかりだけども。

まさか、ミリオタなのかな？

うむ、解らん。

でも手持ちぶさたでも悪いからな……

よし、此処は共通の話題でコミュニケーションをとるか。

優しい上司だつてアピールせねば。

タイラントは作業に切りをつけて道具を置くとウエポンラックの前へと立つ。

メイドが特に見ていた対物アンチマテリアルライフルライフルを取った。

それをシズの前に持っていき前につき出す。

眼帯をして片目しか出ておらず人形の様は無表情だったが……

一目で分かる位に動揺していた。

「持ッテ、見テ、待ッテイロ」

「で、出来ない！御方の物を……」

「才前ノ、仕事ハ、無イ。

ダカラ、ソレ見テ、待ッテイロ。

壊シテモ、気ニスル事ハ無イ」

半ば強引に持たせると作業台に戻るタイラント。

チラ見でシズを見たが満更でもなさそうだな。

ガトリングガンの下位互換の武器だからな。

別に壊れても全然、問題ない。

むしろコミュニケーション取れたってだけでお釣が出る。

ふう、喜んでもらえて良かったぜ。

気まずい上司の部屋に居るのはキツいからな。

俺は空気の読める上司になるんだ。

なんか良い事したらテンション上がってきた！

折角だから強化しておくかな……

【止まらない、俺の創作意欲は、無限だぜ！】

タイラント本日の心の一句。

そうして時間は過ぎていった……

時と場所は変わりタイラントとモモンガは四苦八苦をしていた。

ミラー・オフ・リモートビューイング
【遠隔視の鏡】。

テレビとも昔の携帯電話【スマホ】とも言えるアイテム。

使い方を二人の異形があれよこれよとしているのは……

やっぱり何か不気味である。

『本当に使い勝手が悪いなあ』

『まあ、団長の手のサイズじゃあないと使えないし……』

タイラントは自分の手を見せながら肩を落とした。

この身体は良くも悪くもデカ過ぎる。

戦闘向きの身体ではあるが、一般生活するにはデメリットが多い。

まさか自分のアバターで生活する羽目になるなんて……

予想も想像も出来ないだろう。

寧ろ分かっていたのなら……

もつとイケメンなキャラにしたわっ！

『何だこれ、お祭りかな？』

鏡を見ていたモモンガの眩きに気づき、タイラントも覗きこむ。

小さく映し出された集落の映像……

蟻の様な物が忙しなく動いている。

画面をスクロールするとその様子がより鮮明に見えてきた。

『団長、こりや虐殺ですぜ』

タイラントは見馴れた風景にやれやれと頭を振った。

ファンタジーの世界に来ても人がやる事に変わりはなかった事に失望したからだ。

てつきりデイ●ニーみたいな平和で夢みたいの世界かもしれないと思っていた。

それがこれだ。

人間の本质は何処に行っても変わらない。

吐き気がする程不快にな気分になる。

『団長、どうする？』

『見捨てる、危険を犯してまで助ける必要はない』

モモンガを見ながらタイラントは思った。

きつと団長は自分の判断に納得はしていない。

指揮官としては素晴らしい判断ではある。

いまだ未知の状況で行動するには早すぎる。

まして俺達は「正義の味方」ではないのだ。

だが、何かがおかしい。

非戦闘員の虐殺が行われているのを見て何も感じない。

俺は職業軍人だ。

本来なら激昂し、上官殴ってでも救出しに行つたはず。

でも今は何とも思っていない、思えない。

頭にあるのはナザリックとその仲間達がどうなるのか。

只、それだけだ。

『たっちさんなら……』

迷わず助けに行くでしょうね』

罪悪感を吐き捨てるようにモモンガは言った。

―誰かが困っていたら助けるのは当たり前―

『確かに、彼は正義の味方でしたね。』

あの生き様は素直に尊敬する』

『あの人に僕は救われたんです。』

当時PKに合い続けて、だから……』

『団長、行きましよう。』

迷って後悔する位なら……

俺は納得して死にたい。

あとは、軍人として虐殺は看過出来ん』

『たっちさん……貴方の恩は返します。』

どちらにせよ実戦でしか分からない事ありますし。

行きましよう、タイラントさん！』

『了解だ、団長！』

「セバス！居るか！」

モモンガさんがセバスを呼んでナザリックの警備について指示をしている。

この村は比較的ナザリックに近い。

別動隊が周辺に居るかもしれない。

用心に越した事は無いだろう。

画面に逃げる少女の姉妹が映っている。

むう、背中を斬られて倒れた！

あまり、時間は残されていないな……

タイラントは転移門の魔法を起動させると……

床から棺桶の様なカプセルが現れた。

カプセルは観音開きに開くと中にタイラントが入れるスペースがある。そう、これは近代化パッチで転移門のエフェクトが変わっているだけ。タイラントが転移門の魔法を行使するとこれになる。

『そのパッチは有効なんですね……』

モモンガが苦笑いしながら此方を見ている。

骸骨故に表情は分らないが。

『うん、でも雰囲気出るでしょ……』

では、お先に』

タイラントがカプセルに入ると蓋が閉まり、勢い良く床に消える。

白い水蒸気の様な物がカプセルのあった場所に漂っていた。

床に消えたカプセルが何処に行ったのかは考えてはいけない。

転移門と同じく人知の及ぶ所ではないのだから……

モモンガは後詰めめの指示と完全武装のアルベドを更に呼び万全を期す。

異世界初のPKだ、負ける訳にはいかない。

程なくしてモモンガも転移門をくぐり姿を消した。

もう駄目だ、私達は此処で死ぬ。

村娘、エンリは震える妹を抱きながら諦めた。

どう考えても助からない。

自分達は目の前の騎士に殺される。

何故、こんな事になってしまったのか……

幾ら考えても答えは出ない、出る訳がない。

私達の様な弱者の命なんて、騎士達からしてみれば価値など無いのだろう。

偉い人の勝手な都合で、気分で殺される。

弱者には「抗えない」のだ。

絶対的な力の前では死神に命を刈られるのを待つしかない。

力一杯、妹に覆い被さり抱きながら自分の最後を待つ。

それが、今自分の出来る精一杯の抵抗だった。

一分、いや一秒でも妹を守らなくては……

その思いだけがエンリの体を動かしていた。

……ガゴオン
!!!!

絶望的な状況の中、物凄い音がした。
今まで聞いた事の無い音が。

恐る恐る、伏せた顔を上げると……

見たことのない物が地面から突き出ている。

鉄の固まりが、【棺桶】の様な物が地面から生えていた。

「な、何だよありや……」

「知らねえよーお前見てこいよー」

騎士達も【棺桶】に驚いている様だ。

だが自分達の置かれた状況に変化はない。

ただ少しだけ、私達の寿命が伸びただけだ。

騎士達の興味が棺桶から無くなれば私達は死ぬ。

諦めと焦燥が心を蝕んでいく。

その時、重たそうな鉄の蓋が突然ドスンと倒れた。

音だけでその重さが分かった。

そして棺桶の中から霧が出てきている。

中は暗くて良く見えない。

いつの間にか私も騎士達も奇妙な棺桶に釘付けになっていた。一体、この中には何が居るんだ？

呆然と棺桶を見ていたその時、中で何かが動いた。

確実に棺桶の中に何か得体の知れない「何かが」居る。

そして自身の心臓の鼓動が早くなるのが解った。

私の本能が此処から逃げろ、早く逃げろと言っている。

さっきの絶望が生易しく感じられるほどの……

圧倒的な恐怖の渦。

ガチガチと震えから歯が当たり音が出る。

妹も声を殺し、怯え泣いていた。

そして、その恐怖の原因が、ついに姿を現す。

鉄の棺桶の中から姿を見せた。

白濁した目をした……

黒服の死体の様な大男が。

「な、何だ貴様は！」

「薄気味悪い野郎だ……何者だ！」

騎士達は突然現れた大男に叫んでいる。

だが、男は何も答えない。

代わりにドスン、ドスンと足音を立て此方に向かって歩き出す。

見た目のせいだろうか、まるで「死体」その物が向かってくる様だった。

「び、びびるな！相手が丸腰だ！」

騎士の一人が向かってくる男に斬りかかった。

助走をつけながら、大きく振りかぶり斬りつける……が。

バキーンと金属音が森に響いた。

鋭利な剣の刃が身体に触れた瞬間折れた。

剣の途中からポツキリと折れたのだ。

自分の折れた剣を見て呆然とする騎士の頭を大男は掴む。

そして、軽々と持ち上げてしまった。

完全武装した騎士を片腕だけで持ち上げている。

常軌を逸した怪力に開いた口が塞がらない。

私も、もう一人の騎士も口を開き呆然と眺めるしか出来なかった。

目の前の信じられない状況は夢ではないかとさえ思えてくる。

「ああああ！痛い痛い痛い！」

離してくれえ！頭が！頭があああ！」

捕まれた騎士が痛みから絶叫し必死にもがいて懇願している。

ベキヨ、ベキヨベキヨベキヨ……

耳障りな音が捕まれた騎士から聞こえてきた……

良く見ると頭と顔を覆う鉄のヘルムが凹んでいるではないか！

ジタバタと暴れる騎士だが大男は気にもしていない。

大男は更に力を加え、ヘルムは歪さを増していく。

「いぎやいーいぎやいーいぎやいー！」

そして、騎士は断末魔とともに頭を握り潰された。

鉄のヘルムの隙間から赤黒い血が垂れ流れている。

グチャリとまるでリングを握り潰すと同じように……

大男は平然と人間の頭を握りつぶした。

事切れた騎士の死体をゴミを捨てる様に放り投げた大男。

私達の目の前に死体が転がってきた。

落ちた衝撃で歪に変形したヘルムが外れ、露になる。

頭と顔の原形を留めない、見るも無惨な死体が。

「ば、化け物……」

先程までの威勢は何処にいったのか、残った騎士はガタガタと震えていた。

大男は相変わらず無言で私達を見下ろしている。

この死の恐怖がいつまで続くのか……？

冷や汗が吹き出し、妹をより強く抱き締める。

……シ……ネ。

大男から低い、それは低い声が聞こえた気がした。

耳を澄まして、その声を聞いた瞬間。

エンリは声を聞いた事を心底、後悔した。

「死ネ」

はつきりと聞こえたのだ。

それは死神の死刑宣告の様に思えた。

騎士は手に持った剣を放り投げ、悲鳴を上げて一目散に逃げ出す。

情けない、あんな奴に私達は殺されそうになっていたのか。

女のような悲鳴を上げ逃げる騎士を見てエンリは思った。

大男は特に追いかける様子もなく、その場から動かない。

だが、その目線の先には逃げ出した騎士の方をしっかりと見ていた。

悲鳴を上げながら逃げる騎士に向かって大男は……

何処から出したのだろうか大きな筒を担いでいた。

私の身長位あるだろうか太い丸太の様な物に見える。

一体これか何が起きるのであろう。

エンリは目が離せなかった、いや離したらきつと殺される。

そうとしか思えなかったのだ。

そ!!!!!!
その時、爆音と共に筒が弾けた。

耳を突き抜ける様な音と閃光、そして衝撃。

凄量の砂埃が舞い、むせてしまう。

そんな砂塵舞う中、エンリはしっかり見ていた。

筒の先から火の魔法だろうか何が飛び出していったのを。

だんだんと離れる騎士に向けて煙りを吹きながら火の魔法は向かっていく。

そして、遠目から見ても分かる位に……

爆音と爆発で騎士はバラバラに吹き飛んで死んだ。

焼けた様な臭い^{化け物}が鼻をつく……

目の前に立つ大男に……

私達はあの騎士と同じように殺されるのだろうか……

エンリは再び窮地に立たされた。

実戦：カルネ村：暴君降臨

その者は歩く。

全てを薙ぎ払い、踏み潰しながら。

その者は進む。

立ち塞がる全ての者に、死を振り撒きながら。

そして生者達は悟った。

自分達の運命を、逃れられぬ死の運命さだめを。

「ゴミダナ……」

硝煙しょうえんが射出口から漂う中、タイラントは呟いた。

元々、職業柄か「殺人」に対して一般人よりは耐性はあった。

命令とあらば敵を、人を殺す、其処に私情などは無い。

祖国の平和と国民の平穏と言う大義名分の元……

数知れない戦場を、人知れず渡り歩いて来た。

多くの人を救い、また多くの人を殺した。

初めて人を殺した時は震えが止まらなかった。

何度も何度も、胃の中の物を吐き出す。

命令だから、殺した。

念仏の様に唱えたのを今でも覚えている。

得体の知れない恐怖に怯え、眠れない夜を過ごす。

目を閉じれば、死んだ者の断末魔が聞こえてくる気がした。

良心の呵責を無理やり押さえ込み、必死に心を殺す。

暫くすると、悩む事もしなくなる。

仕事に「慣れた」と言うべきなのか。

死者の事を考えるのを止めたのか。

いつの間にか敵を、悪党を殺す事に抵抗が無くなっていった。

命令の元に人を殺す事に躊躇しなくなっていた。

だが、今回は今までとは少し違う。

命令ではなく、自らの意思で、自分の気に食わない人間を殺す。

だがまあ、ある程度予想はしていたが……

特に何も、何も感じなかった。

足下に転がる、頭の潰れた死体を見ても。

前方に散らばった、惨たらしいバラバラ死体を見ても。

私的殺人をした罪悪感も恐怖も後悔もない。

路端の邪魔な石をどかした程度の気持ちしかないな。

「ククツ、人間ナド、止メテイタノニ……」

全く、一体俺は何を考えていたのか。

とつくに地獄行きの片道切符を死神から貰っている。

まともな死に方など、この俺が出来る訳がない。

それなのに、今さら人を殺した事に何を思うのかなど……

そんな事を考えていた自分に笑えてくる。

手に持つ撃ち終えた発射筒を捨て二人の少女の方を向く。

ドスンと重量物の落ちた衝撃で少女の姉妹がビクつ反応した。

良く見ると背中を怪我をしているではないか。

フム、どうしたものか。

丸太の様な腕を組んで考える。

そこへ、タイミング良くモモンガとアルベドが転移門から出てきた。

正に魔王と近衛の暗黒騎士の登場だ。

「露払い御苦労」

モモンガから発せられた劳いの言葉。

だがしかし、苦労など全くしていない。

雑魚の頭を握り潰して、逃げた薄情な奴を爆殺しただけだ。

「流石はタイラント様。」

見事なお手前でございます」

続くアルベドの過大な賛辞。

いや、だからね。

全然、流石でも見事でもないの。

頭をパツカーン、逃げた奴チユドーン。

簡単過ぎて正直ビビってるのよ私。

もつとギリギリのバトルがあるかと思ったの。

まあ大抵の攻撃なら耐えられる自信あるけども。

「それで、その生きている下等生物の処分はどうなさいますか？」

おやおや、アルベドさんが物騒な事を言っているぞ。

さては、あんまり今回の主旨を理解していないな。

モモンガさん、しっかり説明してやって！

タイラント・ボイスじゃ複雑な説明出来ないの。

日本語、ムズカシイネ……その気持ちが良く解ったわ。

「怪我をしているようだな……」

「飲め……」

おお、流石は団長だぜ。

アンデッドなのに下級治癒薬マイナー・ヒーリング・ポーションを持っているとは。

やっぱ、皆の事を考えていたんだなあ。

「の、飲みます……だから妹には……」

「お姉ちゃん！」

怪我をしている姉を必死に止める妹。

涙ながらに展開される姉妹愛、いや家族愛か。

だが、おかしい。

団長は怪我をしている姉を心配して下級治癒薬マイナー・ヒーリング・ポーションをあげた。

何故、彼女達は使う使わないうで揉めてんの？

『げ、解せぬ……』

モモンガ魂の眩き。

なんで親切であげたのに、拒絶されるのか。

理不尽すぎる仕打ちに肩を落としていた。

『ハハッ、それは団長の容姿が問題なのさ！』

僕に任せて下さいよ！』

ドヤ顔（中の人）でタイラントはアイテムボックスから取り出した……

応急スプレー
完全治療薬を争う姉妹に向かってスツと差し出す。

全ての傷を癒す、魔法薬。

まあ、近代化パッチで見た目が変わっているだけだが。

刮目せよ、ジエントルマンとはこう言う事だっ！

お嬢さん、コレを使ってね！
「ツ　カ　エ」

……………

「い、い、いも、妹だけ、だけは……」

「うあああん！」

あ、あれ？家族愛どころの話じゃなくなった。

何故か必死に命乞い＆大泣きをしたらぞ！

どう言う事だ、俺は君たちを助けたんだよ？

ほら見てよ、この頑強タイラント・ボデー！

カッチカチやぞ、カッチカチやぞ！

ゾクゾクするやろっ！

『げ、解せぬ』

『なんなの……これ』

二人の異形の者は頭や眉間に手を添え考えこんだ。

ぐむむむ……と唸り声が聞こえてきそうな迫力。

この見た目でそんな格好をすれば、否応にも不気味さは増す。

まして、髑髏顔の魔王と死体顔の化け物が……だ。

二人は自身の容姿と人間であつた頃のギャップに慣れていない。

考えこんでいると優しげなアルベドの声が聞こえた。

「御方々の恩情を無下にするとは……」

万死に値する、懺悔をしながら死になさい！」

「マテ、アルベド」

振りかぶられたバルティッシュを掴み、タイラントは言った。

タイラントの有無を言わせぬ覇気。

アルベドは即座にバルティッシュを下げた。

そう、せざるを得なかった。

こ、この美人さんは短気でいかんよ。

俺の危機管理危険関知センサーが反応してなければヤバかった。

そのバルティツシュで首切りとか本当に洒落にならん。

もつと落ち着いて物事を考えて貰わんなあ。

まあ、アルベドの気持ちも解らんでもないが。

「コレ、ツカエ。」

キズ、ナオル」

方膝を地面について目線を下げ、姉妹に喋る。

これは一つのコミュニケーションテクニク。

目線を下げる事によって威圧効果も下げる事が出来るのだ。

精一杯、優しく、分かりやすく話したつもりだ。

これで駄目なら、もう知らん。

無理やりでもその背中の傷にスプレー噴射したる。

それはもう、容赦無くブシューっと噴射したるで。

「わ、解りました……」

姉がスプレーを受け取り妹が恐る恐る背中にスプレーを噴射した。

神秘的な輝きの粒子が背中を包み込み、傷を一瞬で癒す。

不可思議なアイテムによる、不可思議な効果。

死体顔の無慈悲だと思われた大男が渡したアイテム。

まさか、自分達を殺さず助けてくれるとは思ってもみなかったのだろう。

正しく、鳩が豆鉄砲をくらった様な顔を姉妹達はしていた。

落ち着いた所で団長が姉妹に簡単な質問をしている。

こんな時でもしっかり情報収集とは抜け目がない。

俺達が知らない事やユグドラとの共通点を潰していく。

いや、もう貴方何者ですか団長さん。

しかも、ご丁寧に防御魔法増し増しと小鬼將軍の角笛まであげてるよ。

ぐぬぬぬ……アフターケアが半端ない。

『さて、団長。』

俺は少しゴミ清掃に行つてきますわ』

『お願いします、あとタイラントさん。』

タイミングを見て止めますので皆殺しは避ける方向で』

『……理由を聞いても?』

『我々の他にもユグドラシルから来た人がいるかも知れません。』

そこで、分かりやすく宣伝してやるんですよ。
アインズ・ウール・ゴウン此処にありつてね。

ユグドラで我がギルドの名を知らない奴はモグリですから』
『成る程、でもどうやって？』

『それはね……』

暫く、モモンガとタイラントは立っている。

今後の方針をく伝言で話しているからだ。

周りには聞こえない為、腕を組んだ大男と骸骨が立っている。

得体の知れない圧迫感が凄いが……

傷も癒え、気持ちも落ち着いていた姉妹が二人に意を決して話しかけた。

「あ、あの、助けてくださって……」

「ありがとうございます！」

「ありがとうございます！」

「気にするな……」

モモンガが姉妹の感謝に答え、タイラントは身の丈程ある【ある物】を取り出す。

アルベドとモモンガ、タイラントは村へと向かって歩きだす。

異様な容姿の三人だが、姉妹は叫ぶ様に訊ねた。

自分達を救ってくれた異形者の名を。

「お、名前を……」

ゆつくりと振り返り、モモンガとタイラントは答える。

かつて繁栄と栄光を欲しいままにした、誇りあるギルドの名を。

ナザリックを守り続けた、誇りあるキャラの名を。

「我が名を知るが良い。」

我が名は……アインズ。

アインズ・ウール・ゴウンだ」

「我が名ハ……」

アンチマテリアル

対 物 ライフルのコッキングレバーを引いて初弾を装填する。

ガチャンと大きな金属音をさせるとライフルを片手に再び歩き出す。

「我が名ハ、タイラント。」

ナザリックニ、仇ナス者ヲ、滅ボス者ナリ」

森の近くに居た若い騎士は逃げ惑っていた。

人生でかつてこれ程速く走った事があるだろうか。

武器を投げ出して、木々を縫う様にひたすら走る。

後ろから同僚の命乞いと断末魔、耳を突き抜ける様な異様な音が聞こえる。

だがそんな事を気にしている場合ではない、ないのだ。

7人居た仲間は今ももう、自分以外は居ない。

皆、爆音のした場所から突然現れた大男に殺された。

殺されたなんて生温い、挽き肉にされたとしても言った方がまだマシだ。

手に持った鉄の筒先から火が出たと思った瞬間。

隣の奴の首が落とした西瓜の様に弾けた。

唾然とする俺達をよそに人を、人間をまるで玩具を壊す様に殺す。

頭部を、身体を、脚を、腕を、千切り、潰し、捨てる。

あれは、人間では無い。

あれが、人間であつてたまるか。

兎に角、村に居る仲間と合流せねば。

この異常事態を知らせないといけない。

走る、走る、走る、走る、走る、走る、走る、走る……

若い騎士は必死に走っている。

後ろで聞こえた炸裂音。

気になるが怖くて振り返る事など出来ない。

直後、ふと足に違和感を覚える。

何故か足の感覚が、地面を踏みしめる感じが無い。

おかしい、何かがおかしい。

そして、自分は走っている筈なのに何故……

俺は何故、空を見てるの……か。

対物ライフルの大口径の弾丸は騎士の鎧ごと身体を真っ二つにした。

単発の威力と貫通力はドラゴンの鱗すらぶち抜く。

そんな物を人間に撃つたらどうなるか。

結果は見ての通りだ。

騎士は自分が死んだ事すら気が付かないまま、叫びながら死んだ。

絶叫と爆音が同時にカルネ村に響いた。

村人も騎士も皆、一点を見ていた。

黒煙が上がっている森の方向を。

そして、その直後何かが宙を舞っていた。

液体の様な物が村人に降り注ぐ。

「雨……う？いや血？」

目を凝らして落ちてくる物を見て皆、絶句した。

それは騎士の千切れた上半身が血と臓物を撒き散らしながら飛んでいたのだ。

広場の中央、人の集まる中心にグチャリと落ちた身体。

どんな事をしたらこんな死に方をするのか。

見るも無惨な仲間の死体を見る騎士と村人達。

素人でも解る圧倒的な殺意の波動と濃厚な血の臭い。

騎士達の見上げるその先、村と森の堺に何か居た。

それは漆黒のコートを着た、大男。

片手に細長い筒の様な物を持ち、もう片手には「人間」だった物を掴んで。

暴君が立っていた。

カルネ村：暴君覚醒

それは絶望。

その始まりは唐突だった。

耳を突き抜ける咆哮が合図かの如く……

化け物
大男の一方的な殺戮が始まった。

その異様な大男は手に持った鉄の筒を捨て歩き出す。

一步、また一步と着実に此方へと進んでくる。

本当に嫌な汗が全身から出てきた。

地面に転がる同僚の死体に目を向け思う。

フルプレート
全身鎧を着た人間が引き千切れているとは……

だが、鎧ごと胴体を千切れる人間など居る訳がない。

少なくとも、俺はそんな人間など見た事がない。

しかし、目の前の大男の左手には転がる死体の下半身が握られている。

丸腰の男を前に誰一人、向かって行く者は居なかった。

「く、くそつたれがあー！」

恐怖と緊張に耐えられなくなった一人の騎士が絶叫と共に斬りかかった。

半狂乱で絶叫しながら、力の限り剣を振り落とすが……

大男はまるで目障りな虫を払うように腕を振る。

本当に邪魔な物を退かす様に、振り向く事なく。

斬りつける剣を粉碎し、騎士の顔に男の拳が当たった。

「うぎっ！」

嫌な音と声と共に、首を歪な方に曲げふっ飛んだ。

剣や鎧、そんな物はこの化け物には全く意味が無い。

一発、たった一発の拳で即死だ。

無理だ、勝てない。

そもそも勝てる見込みが無いとか、そう言う次元ではない。

死ぬか生きるか……

この場からどうやって我々は生きて帰れるか……

それ一点に尽きる問題だ。

「神よ、ああ神よ……」

「どうか我等を御守り下さいっ」

ロンデス・デイ・グランブはそう吐き捨てる様に言う。

何故、神は敬虔なる信徒である我等をお救いにならないのか。

神の救いなど無いと分かった上で、言った。

身体が震え、鎧がカチャカチャと音をたてている。

そして、手に持った剣を見て痛感する。

自分の持つ剣がこれ程、頼りない物なのか……と。

「うああああー」

死の恐怖に負けた一人が、逃げ出す。

一目散に死にも狂いで逃げようとするが……

大男の投げた木材によって、数歩も踏み出さないうちに串刺しになった。

男が腕を伸ばして人差し指を左右に振っている。

逃がすつもりは無い。

不気味な程、無表情の顔がそう言っている様に思えた。

そして、目の前には息絶えた同僚の串刺しオブリエ。

貫かれた身体から臓物がはみ出し、強烈な臭いを放つ。

我々が此処から逃げる事は出来ない。

あらためてその事実を痛感する。

「オオオオオオオ！」

空気が、魂が震える。

感情など無い、死体顔の男が吼えたのだ。

だが、それは人の叫び声ではなかった。

そう、例えるならまさに化け物の咆哮。

自分の圧倒的な力誇示する獅子と同じ様に吼えた。

今まで俺達は命を「狩る」側だった。

無抵抗な者を一方的に只、殺るだけ。

だが、その立場が逆転した今、自分達に何が出来るのか？

答え？ 答えなど分かっている。

自分達が殺してきた者達と同様、祈るだけだ。

救われぬと分かっている上で、神に祈るだけ。

それしか、弱者にはそれしか出来ないのだから……

怯える敵を前にタイラントは咆哮する。

色々溜まったストレスを解消する為。

大声出せば少しは胃の痛み、ムカつきがとれるかと思つたから。だがしかし、実際はストレス解消どころか力が湧いてきた。

何故だ、何故俺はこんなに熱くなっているんだ？

(タイラントもつと熱くなれよ！甘えんなよ！全力でいけ！)

俺の心の師匠がそう言っている気がする。

う、うおお！やつたる！

俺、やつたるで！それはもうガツンと！

『ふう………』

目を瞑り、大きく深呼吸をした。

すると、カチつと頭の中の何かが切れた気がする。

タイラントが仕事場に、鉄火場に向かう時と同じ仕様にした。

仕事をする時の様に、感情の一部のスイッチを切つたのだ。

これから自らが行う、【私刑】をする為に……

見下ろす騎士達が怯える様子が一目で解る。

あれは、【死の恐怖】を知らない兵だと。

安全かつ無害な者しか殺した事が無い奴等だ。

……軍人の風上にも置けねえよな。

俺には解る、コイツ等が殺しを楽しんでたつて事が。

武器持たぬ者を殺す事になんの罪悪感を抱いていないつて事が。

【命令だから殺す】

俺達軍人は命令の下、武器を持ち戦う。

国の為、家族の為、信じる神の為、金の為。

戦う理由なんか、皆人それぞれだ。

何が悪で何が善なんて誰にも解らん。

俺だつて沢山殺したさ、それはもう数えきれない程に。

それでも、それでもだ。

人間としての良心、軍人の誇りを捨てた事は無い。

不正規戦争であつても、難民、市民を襲つた事など無い。

武器持たぬ者を守るのが本当の防人だろうに。

荒んだ心や考えは環境のせいだとずっと思っていた。

だが、どうもそうでは無いらしい。

こんな綺麗な自然がある場所でも、人は……

人は殺し合っている

【人間】 って奴は本当に罪深き生き物だ。
「ハハッ」

身も心も本当に人間を止めたからか。

凄く客観的に考えられたもんだな。

人殺しって事は俺もコイツらも何も変わらないのに。

だから、綺麗事は言わねえよ。

これは弱肉強食だ。

因果応報、自業自得、又は八つ当たり。

その身をもって知るが良い。

【死の恐怖】 っつてものを。

貴様ら本当の【絶望】を教えてやる。

弱者共よ、精々神に祈れ。

そして、後悔しながら……

死ね。

タイラントは駆け出す。

その巨体と重量からは想像も出来ない速度で。

ドスン、ドスンと足音を立てながら重戦車はドンドン加速した。

あつと言う間に騎士の身体の震えが視認出来る距離まで縮まる。

咆哮と恐怖で固まる騎士達を剛腕で次々と撥ね飛ばして行く。

タイラントの進行方向に居る者全て、例外無く蹂躪された。

必殺、剛腕アイアンクロー。

必殺、タイラント重み。

必殺、右ストレート。

必殺、ハガー市長仕込み回転ダブルリアット。

頑強タイラントボディから繰り出される肉体アクション。

当たった瞬間、即死亡。

半狂乱で逃げる奴、向かってくる奴。

皆、平等に叩き潰す。

「母さん！母さん！お母さん……！」

良い年してお母さんかよ……

まあ、余談だが良く死に際に叫ばれる「お母さん」。

実は結構多いのだ。

「お父さん」って叫ばないのは何故だろう。

不思議だなどししみじみ思う。

そんな泣き叫ぶ煩い奴の頭を掴むと……

円盤投げの要領で思いきり、投げた。

もの凄い勢いで燃えた民家の壁をぶち抜き、家は崩壊する。

まだ生きていたのか、中から火だるまで暫く叫んでいたが……

直ぐにその断末魔は聞こえなくなった。

返り血を浴びても黒色のコートは相変わらず不気味な光沢を放っている。

圧倒的な死の権化。

騎士達の【絶望】の始まりだった。

「神よ、お助けください……」

「神よ……」

自分達の死を悟ったのか一所懸命に祈っている。

まあそんな都合良く、救ってくれる神なんか居ない。

そう、【神は死んだ！】って言ってやりたい。

首を左右に傾け、左右の拳を身体の前で二回打ちつける。

ガキイン、ガキインと強化合金で出来た手甲が音と火花を放つ。

「貴様らあ！あの男を抑えよ！」

震えながら良くもまあそんな事言えたもんだ。

声のした方を睨むタイラント。

恐怖からか、元々なのか音程の狂った男の金切り声。腰が引け、お前本当に男か？と思える程滑稽な男だ。

「俺はこんな所で死んで良い人間じゃあない！」

お、お前！この村人共に雇われたんだろ？

なら金をやる！二〇〇金貨！

いや、五〇〇金貨だ！」

お前は一体何を言っているんだ？

俺に、お金を寄越してどうするつもりなんだ？

まあ見た目は人間っぽいけどさ。

人間ではないって普通解るだろうに。

さてはコイツ馬鹿か、馬鹿なんだな。

頭が、頭が腐ってやがる……早すぎたんだ。

やれやれ、このチャンプ級のノータリンをどうしてやるかね……

タイラントはため息をしたのち少し考えた。

そして、閃いた事を即座に行動に移す。

「……オギャアアアア！」

タイラントは馬鹿な奴の頭と脚を掴み、持ち上げると……
左右に思いきり引つ張る。

そう、身体を引き千切る事にしたのだ。

だいたい気に食わん事をするコイツが悪い。

金で何でも買えると思ってる奴。

命と信用は金じゃあ買えないんだよ。

こういう奴が平気で山や川、尊い自然を破壊する。

傲慢な成金馬鹿は死なねば治らん。

だから、楽には殺さない。

苦しみながら死ぬが良い。

更に腕の力を増して本格的に殺しにかかる。

「たじゆ、たじゆけで！」

お願いしまじゆ！なんでもしまじゆ！」

必死にもがくが「必殺タイラント握力」の前では無駄な抵抗でしかない。

ミチミチと嫌な音と鎧がひしゃげる音が聞こえてる。

口から胃の中身と血が混じった物が出て周囲に飛び散った。

耳を覆いたくなる男の絶叫が更に響き渡る。

「おかね、あがねあげましゅ！」

おだじゅげえてえてえ……

う、うえおおがぁ!!」

絶叫と共に男の身体は真つ二つに千切れた。

本当に腕力だけで人間を引き千切ってしまった。

それを見た騎士達は次々に吐き出す。

辺りに雨の様に飛び散る内臓と大量の血。

大男に握られる哀れな人間だった【物】。

その【物】の名はベリユース。

この殺戮部隊の指揮官で資産家だったゲスな男。

だがタイラントにそんな死に行く【物】の事なんて関係ない。

つまらない物を捨てる様に事切れた身体を投げ捨てる。

臓物が千切れた所からはみ出た死体。

それを見た騎士達の心は完全に折れた。

いや、木っ端微塵に砕けたと言って良い。

「いやだ！いやだ！死にたくない！」

「た、助けてくれえ……」

その異常で凄惨な光景を見て、あちこちから錯乱した悲鳴があがる。

此処に居たら間違ひなく殺される。

だが、逃げてでも同じく殺される。

騎士ロンデスは決断を迫られていた。

逃げて死ぬか、逃げずに死ぬか。

この究極の二者択一を。

カルネ村：第一次戦闘終了

「落ち着けっ！」

ロンデスは力の限り叫んだ。その叫びは部下の悲鳴を切り裂き、その場の時を止めたが如く、静寂をもたらした。不気味な静けさの中、間髪入れずに指示を出す。

「撤退だ！ 合図を出して馬と弓騎兵を呼べ！ 残りの人間で時間稼ぎだ！ 死にたくなければ動け！ 行動開始っ！」

静寂からの動、弾かれた様に騎士達は動きだす。

先程までの混乱、恐慌が嘘の様な機敏な動きだった。精鋭の騎士も顔負けの勢いがそこにはあつた。

訓練された兵士程、命令に良く従う。そう、兵士はある意味で【機械】に近い。彼等が熾烈な戦場で行動出来るのは【機械】的に【命令】に従う事で【個人】の思考を停止させているのだ。

洗練された奇跡の動き、一糸乱れぬこの動きは二度と出来ないだろう。

騎士達は自分がやるべき事を確認しあう。笛を吹く者、時間を稼ぐ者。後方に下がりを吹く仲間を守るべく、【肉の壁】になる為に残った者はタイラントに立ち塞がった。

「無駄ナ、足掻キダナ」

タイラントは決死の覚悟で向かって来る騎士を相も変わらず叩き潰して進む。特に急ぐ必要も無いし、後方に離れた騎士としてその気になれば蜂の巣に何時でも出来る。だからこそ、騎士達はが必死になって時間稼ぎをする様子が凄く滑稽に思えた。

成る程、これが「余裕」と言うものなのか。軍人として戦場において油断などはしてない。現に今も全く油断はしていない。あらゆる事態を想定し、最善の手段を講じている。それをもつてしても、余計な事すら考えられる程の心の余裕。

だからなのか、死に物狂いで斬り付けてくる騎士の必死な様子に笑いがこみ上げてくるのは。

絶望しか無い戦い、化け物の巨腕に次々に仲間が殺られていく。

一人は兜ごと頭を握り潰され呆気なく死んだ。

一人はその剛腕が直撃し体をくの字にして吹き飛んで死んだ。

「あと少し、ほんの少しで良い！時間を稼げ！そうすれば俺達の勝ちだつ」

必死に仲間を鼓舞するロンデス。自らも構える剣に力を込める。前方に居る仲間が一息で肉の塊になるのを確認した。ロンデスの心は恐怖と戦慄に支配されているが不思議と落ち着いていた。ゆっくりと近付く暴虐の権化を前に剣を構えて待ち受ける。乾坤一擲の一撃を見舞う為に。

「うおおおおおー」

雄叫びと共に駆け出す、逃れられない決定事項である死。だがそれを黙って受け入れる程、愚かでは無い。この「化け物」にせめて一撃、一矢報いてみせる。ロンデスは全力の一閃を袈裟斬りに振り抜いた。

極限の状況下、正に火事場の馬鹿力の一撃は生涯最高の一撃。

間違いない、最高の一閃だと確信していた。

静寂の世界で不意にパキーンと甲高い金属音が聞こえた。

折れた刀身が回転しながらゆっくり目の前を落ちていく。まるで自分の時間だけが遅くなっている様だった。回転する刀身の向こうに立つ大男の姿にロンデスは改めて絶望した。

自身の生涯最高の一撃は男の「指」に、たった一本の「指」に弾かれたのだ。まるで子供が振った小枝を折る様に、片手間の遊戯をする様に、刃は折られた。

そして大男はその巨体を半身にし、腕と身体を弓の様に引き、捻り、絞る。巨体からミシミシと音が聞こえ、爆発的な力が収束しているのが容易に解った。早く此処から逃げなくてはと頭では解っていたが身体が動かない。大男の身体から赤黒いオーラが見える。まるで血が蒸発し湯気になっている様だった。足が地面に縫い付けられている、いや足だけでは無い。身体も心も自分の全てが縫い付けられているのだ。

やがて折れた刀身が地面に突き刺さる。その瞬間、ロンデスの意識は途切れた。何故ならば爆発した剛腕に身体がバラバラに吹き飛ばされたからだ。それと同時に笛の音が吹かれた。皮肉な事に自身の死をもって「足止め作戦」は成功したのだ。

「タイラントよ、そこまでだ！」

修羅場に響く第三者の声は、騎士だけでなく村人も反応した。この凄惨な事態を全く理解していない様な軽い声、要するに軽い挨拶の様な感じである。

モモンガからしてみればタイラントが「掃除する」と言った時点でこの状況は容易に想像出来た。ましてタイラントはアインズ・ウール・ゴウンの前衛職であり、壁である。そう簡単に殺られるとは到底考えられなかった。

完全武装のアルベドと共に宙に浮かび、颯爽と村へと降り立つ二人。急転直下な状況が理解出来ない生き残りの騎士達は皆、立ち尽くしていた。

モモンガがカルネ村へと降り立ち、あつと言う間に事態を收拾させた。生き残りの騎士達にアインズ・ウール・ゴウンの名を刻ませて野に放つ。取り合えずの撒き餌は撒いた。あとは逃げた奴ら次第、果報は寝て待つだな。

団長はこの村の長の家に行き、この周囲状況とかを聞いている。特に周辺国家や通貨

について調べるとの事だ。団長はサラリーマンで主に営業をやっていたらしいから聞き取りとかそう言うの得意そうだから任せた。俺だとともに喋れないし、なんか村人達のトラウマになってるみたいだし……

ここは大人しくアルベドと外で待ってよう……。今日も空が綺麗だな……
「タイラント様、お聞きしたい事があります」

澄んだ青空をボケーと眺めていると隣に居るアルベドから声をかけられた。

珍しいな、アルベドから声をかけてくるとは……。でもアルベドとはちゃんと喋った事が無いからな、この機会にしっかりとコミュニケーションを取らないと。

「ナンダ、アルベド」

「何故、タイラント様は長きに渡りお姿をお隠しになってしまわれたのか……臣下として知りたいと存じます」

タイラントは直ぐに答える事が出来なかった。「現実世界」で忙しくてプレイ出来なかったのが事の真意だが、どう説明すれば良いか解らなかった。

アルベド……NPC達は一人、また一人と消えていく主人達を見てどう思ったのだろう。忠を捧げた主、創造主たる者達が消えていく時の気持ちはどんなに辛かったのだろう。恐らくは俺が想像も出来ない位辛く、絶望した事であろう。

それなのにサービス終了間際にポツと現れた俺に不信感を持つてもおかしく無い。

寧ろ、持たない方がおかしい。

「倒すべき、敵ガ居タ」

「え……？」

「ソノ敵ハ、手強ク、強大ナ物ダツタ……」

「タ、タイラント様をもつてしても強大な者とは……」

アルベドが凄く驚いている、フルフェイス故に表情は解らないが。

「矢弾尽キ果テ、コノ身モ、只、滅ビル、ノミ。ナラバ、我モ、敵ゴト滅ビル筈ダツタ……」

タイラントはアルベドに背を向けた。何だか喋っていて恥ずかしくなってきたからだ。言い訳するにしても、もつと上手く言えないものかと沁々思った。ボキャブラリーの少なさに嫌気がさす。もつと学生の時、真面目に勉強するべきだったな。

だから、やりたい事も見つけられずに逃げる様に軍に入ってしまった。自分で自分の可能性を捨ててしまったんだ。いや、ある意味開花したと言って良いかもしれない。滅茶苦茶な世界でしか通用しない才能だけだ。

ヤレヤレと頭を軽く左右に振るタイラント。自分の中途半端さ具合を再確認してしまい気分が更に下がった。

俺はこの身体を、この分身を使うに値するのか、生きる【価値】があるのか……と。

「ダガ、俺ハ、今モ、コウシテ【生き恥】ヲ晒シテイル」

「生き恥などと……タイラント様っ」

タイラントは近付くアルベドに手を出して止める。そして、しっかりとアルベドに、目の前に居る忠実なる臣下へ向き合う。

ドゴンと低く鈍い音がした。

なんとタイラントは頭を地面に打ち付けていたのだ。その衝撃たるや、カルネ村に軽い地震の様なものがあり、皆村人達はビビっていた。眼前で発生した珍事にアルベドは硬直している。おでこから煙が出ているタイラントを前に何をして良いか解らなかつたからだ。

現実世界通の俺は今、此処で死んだ。この場に居るのは新・タイラント暴君だ。この異界の【タイラント】として、ナザリックの【タイラント】に俺はなつたのだ！

だからこそ、俺は誓わねばならない。忠勇なる臣下達、いや新たな【家族】に。

「許サレル、ノナラバ、拾ツタ命、オマエ達ノ為ニ、使ウ」

蒼天に拳を掲げるタイラント。大昔の漫画で見て、超カッコイイと思つた世紀末霸王のポーズ。いつかタイミングがあつたらやろうと暖めていた渾身のネタだ。

「コノ命ヲ、ナザリック、家族ヲ、守ル為ニ、使ワセテクレ」

言いたい事を言うだけ言つたタイラントはアルベドの方を見る。アルベドはその場

にひれ伏し、本当に見事な臣下の礼をしている。

何故だ？何故にそんなに低い姿勢なのかな？結局、俺に都合の良い事しか言っていない……

「タイラント様の御心も知らずに不躰な事を……。この守護者統括アルベド、タイラント様に改めて絶対なる忠誠を誓います」

「良イ、頭ヲ上げロ」

タイラントはアルベドの両肩を掴むとその腕力を持つて立たせた。高級将校じゃあるまいし、こう言った態度をとられると恥ずかしくなる。何て言っても良いか解らないが、取り合えず元氣が出る様な事言えば良いだろう。

「オマエハ、団長ヲ、支エヨ。オマエ、シカ、出来ナイ」

「くふー！私にしかで、出来ないにやんて……」

めっちゃテンション上がったねアルベドさん。そりゃモモンガ愛してる設定にしちやつたからだと思うけど……。何だかタブラさんの作品を壊した様な……。汚した様な罪悪感が半端ない。設定変えた時はこんな事になるなんて知らなかった！って言うのは言い訳だよなあ。いや、もうこうなったら毒を食らわば皿までって言うし徹底的にやるしかないな。団長&アルベドをこのまま……。いや、無粋な真似は止めておこう。

身体をクネクネさせるアルベドを見ながら、俺はこの容姿で結婚とか出来るのである

うかと真剣に考えるタイラントだった。

接触

カルネ村では合同の葬儀が行われていた。墓地と言うにはみすぼらしい、墓石の代わりに置かれたであろう石が何とか墓地としての体をなしていた。村長が亡くなった人達に鎮魂の言葉を述べている。

タイラントはその葬儀を見て複雑な気分になっていた。それは錯覚と言うべきか、村の葬儀の様子が自分の記憶に埋もれた過去がフラッシュバックしていたのだ。

国の為に戦い、命を落とした部下達が国立墓地に埋葬される事無く、無名の兵士以下の扱いで処分された光景が鮮明に甦る。その棺桶には国旗も無く、見送りの儀式も無い。無縁仏として合同で埋葬されていた、あの時の様子が。

「全く、死んだその日に埋葬とは気が早いな」

「異界ノ、習ワシハ、解ラン」

「ワンド・オブ・リザレクション蘇生の短杖を使えば蘇生は簡単だが……」

「止メテ、オコウ、団長」

「肯定だ、我々に利益が無い。村を救ってやった、これで満足して貰おう」

アインズも、タイラントも「死」に対する処置には抜かりはない。前衛職であったタ

イラントも何度お世話になった事か。無論、タイラント自身も蘇生アイテムは複数持っている。戦う以上、常に損害を被るリスクを考えなければ足元を掬われる。備え有れば憂い無し、万全の体制を常に心がけているのだ。

要するに、二人がその気になればこの村全員死んだとしても蘇生は可能である。

しかし、【死】すらも乗り越えられる力を持つ者が世間に広まれば大変な事になる。まして大規模な術式も必要無く、ファストフード感覚で死者を蘇らせてしまう魔法詠唱者と……大男。

確実に厄介事に巻き込まれるのは間違いないだろう。例えば口止めしたとしても、きつと漏れる。生きている以上、絶対に話さないと言う確約など出来ないのだから。

アインズはアルベドに後詰めや今後の方針を説明をしている。特に不可視能力を持つシモベの派遣や誤情報による村の襲撃の中止命令等、中々忙しい様子だ。この後にまだ村長との話し合いの続きもある。

【ピンチな村を助けましたくめでたしめでたし】

そう単純に済めばどんなに良い事か。アインズだけに負担をかけてしまっている事にいたたまれなくなったタイラントはさすがにごとごとの場を後にした。

ドスンドスンと重たい足音を立てながら村の中を腕を組んで歩く。葬儀で無人となった村はシンと静まりかえっていた。

後詰め**の**兵といえ**ば**俺**の**部下、いや**「**兵器**」**を投入するべきか考える。人里に放つだけで無差別攻撃かつ接触感染するウイルスでゾンビを大量生産する便利な奴等だが……

「村ガ、壊滅スルナ……」

かつて俺達にケンカを売ってきた弱小ギルドの拠点に**復讐の女神**一**体**で襲撃させたら1時間足らずで壊滅させる成果を上げた。俺の**「**兵器**」**は殲滅、制圧戦ならば無類の強さを誇るが如何せん**「**生物兵器**」**の種族は知性が低いので難しい命令は実行出来ない。**「**殺す**」**か**「**殺さない**」**か位の単純な命令ならば可能かもしれないがそれでも怪しいものだ。まだ実戦投入は早すぎる。この世界の情報が足りない今、戦線の拡大は好ましくないからな。

それにしても、何かきな臭い感じがする。俺の第六感、戦場特有の匂いが、風がまだピリピリと身体に感じるのだ。大体こんな小さな村を襲撃する理由が解らん。盗賊ではない正規軍がわざわざ村を襲撃するのは不自然だ。

まさか此処が重要拠点？こんな小さな村がか？

なら食料確保の**為**か？しかし食料確保もしないで家を燃やしていた。

奴等**の**手慣れた様子を見る**に**行き当たりの襲撃**では**無い。何か他に理由があるならば、この戦、まだ終わり**では**無い。

大体、敵国のジエノサイド部隊を蔓延らせているのにこの国の治安組織は何をしているのだ？まあ、通信設備も移動手段も古代クラスの世界では迅速な対応も出来ないのも仕方がないか。

考え事をしながら歩いていたら村の入口の所まで来ていた。あまり賢く無い俺でもこの有り様だ。団長はこの未知の世界でナザリック皆の為に手探りで歩いている。それはギルド・マスターならやつて当然だろうなどと俺は思いたくない。我々が生き残る為には皆が力を合わせなければならぬ。なら俺は俺の出来る事を愚直にやるだけだ。有り余るこの力と軍事面で団長を支えナザリックの安全面をより強固なものにするのが俺の役目だ。

「神ノ悪戯力、悪魔ノ所業力……」

どこまでも続く青い空を暫く見上げていたタイラント。一体自分は何の為に此処へ来たのかと答えの出ない問題を改めて深く考える……が、何かがショートしたのだろうか頭から煙りが上がると弱々しく村の方へと戻っていった。

村の中をタイラントが歩いているといつの間にか前に何か立っている。目線を下げると其処には子供が居た。

あ、危ねえ……危うく踏み潰す所だった。歩いているだけでスプラッターとか本当に

嫌なので気をつけて欲しい。「飛び出し注意！タイラントは急には止まらない！」と書いてある看板でも後で作らせようかな……

その時、ボスつと身体に何かが当たる感覚があった。

前にいる子供、男の子が俺に向かって石を投げた様だ。何か俺、悪い事したかな？いや俺の見た目的な問題かな？しかし、良く俺に臆せず面と向かって石を投げれたな。ぶち殺した騎士達だつて俺に向かって来れたの一人位しか居なかったのに。俺は君に素直に称賛を贈りたいけど、ナザリックには優秀なセ●ムが居てな……

「至高の御方に対する無礼、万死に値する……」

ほら見なさい、凄く早いでしょ？優秀なのよアルベドさんは。大げさだと俺は思うんだよなあ、何も殺す事ないじゃない子供のした事なんだからさ……

躊躇無く降り下ろされたバルディッシュを軽く指で弾くとタイラントは大きく頷きアルベドを制止した。取り合えず子供の言い分を聞く為に。

「そんなに強いのに……何でお母さんを助けなかったんだよ！」

「知ラン」

タイラントは子供の必死な訴えを一言でバツサリ斬った。

いや、俺も言いたい事は沢山あるが出てくる言葉が少なく、単純になつてしまうのだから仕方がない。男の子もまさかそんな答えが返ってくるとは思つてなかったのか絶

句している。

まあ正直、こつちも行き当たりばったりで介入した様なものだし、到着以前の犠牲者に関してはどうしようもない。蘇生だつて不可能じゃないがするつもりも無い。君には悪いが御愁傷様としか言えないんだよな。

「至高の御方に向かつて……」

隣でガタガタと身を震わせてるアルベド。触つたら爆発してしまいそうな程怒っているな。その忠義には感心するけど、まずは落ち着こうか。深呼吸をしなさい、深呼吸を。こんな小さな事でイライラしてたらこの先大変だよ？美人なんだから寛容に広い心を持つて生活しようよ……

「弱キ者ニ、生キル、資格ナド、無イ」

タイラントは子供を掴むと顔の前まで持ち上げて言った。弱肉強食の真理を直に説いてやった。白濁した目と顔の迫力、想像を越えた恐怖で子供は直ぐに気絶してしまつた。別に怖がらせるつもりは無かつたのだが、この先またナザリツクの者に同じ様な事をしてかせば確実に殺られてしまう。だから少々お灸を据える意味で脅しておいたのだ。タイラントは子供を藁の山に放り投げると若干不服そうなアルベドと共にアインズが居る村長の家へと向かつて歩き出した。

日も暮れ、空が赤く染まる頃に漸く村長との話は終わった。やれやれ、まさか丸一日

かかるとは思わなかったな。団長曰く、この世界の事を知れば知る程分からない事が増えていく。でもそれが把握出来た事に意味があるとの事だ。今後のナザリツクの動きについては帰ってからじっくり話し合うと決め、村を出るべく歩き出した……が。

どうも俺の嫌な予感的中したようだ、聞けば村に向かって戦士風の集団が接近中で接触まで時間も無いと村人は騒いでいる。

やれやれ、泣きつ面に蜂も良い所だな。本当に気の毒に思うよこの村。

「ご安心を。今回だけは特別にただで助けしますよ」

団長も最後までやる方針に決めたようだ。まあここで見捨てるのも気が引けるし、薄情過ぎるか。殺るなら殺るで準備をせねば、時間があればより万全の備えが出来るが……事態は切迫してるので難しいか。

タイラントは「FIM-92 スティンガー」を取りだし肩に担ぐ、村人はその異様な光景にただならぬ何かを感じたが硬く口を閉ざした。触らぬ神に祟り無し、余計な事を言ったら大変な事になるのは考えるまでもない。

村長は全く生気を感じられないこの大男が心底怖かった。アインズを名乗る仮面の魔法詠唱者は確かに不気味だがまだ大丈夫だ。喋れるし、頭も良さそうだし、何よりも知性を感じる。だが、この大男は違う。何を考えているか分からない。分からないから恐ろしいのだ。魔法詠唱者の隣に立ち、村に向かってくる者を待ち構えているが、この

男の異常な強さを知っているが故に手放しで安心する事など出来ない。何故なら何時、その暴力が自分達に向けられるか分からなかったから……

「武装二、統一性ガ、無イ」

「只の野党か何処その傭兵団か、何にせよ警戒しなければな……」

「先制攻撃ヲ、開始スル」

「ちよ、ちよ待て、待つて待てい！気が早すぎる！タイラントよ！」

アインズは慌ててタイラントを制止し、ランチャーの発射を阻止した。いきなり此方から敵対行為をしてしまう事は避けたかったのだ。

あくまでもアインズ・ウール・ゴウンは救世主であり虐殺者では無い事を広めなければ今日の苦労は無駄になってしまう。だからこそ、タイラントには自重して欲しかった。

アインズの制止を受けて渋々ランチャーを肩から下ろす。タイラントとしては射程外からの先制攻撃は出来るならやりたかった。何故なら向かってくる集団は恐らく手練れであると確信していたからだ。タイラント・ズーム・アイで騎兵の姿を確認して改めて思う。先程の腑抜けた騎士とは違うと。

軍事組織が統制した装備である事には理由がある。それは識別だったり、士気の高揚、装備の互換性だったりと組織としてのメリットがあるからだ。

だが、この集団は明らかに違う。自分達の使いやすい様に装具を改造している。単純に戦い易さを追求している様子が装具から見とれた。奴等からかつての自分と似た何かを感じた。それ故に先手を取って撃滅してしまいたかったのだが。

そうこうしている内に統制された騎兵達が村へと入って来る。その数20騎。アイズとタイラントを警戒しながら前に見事に整列する。やはり自分の見立ては間違っ
てはいなかった事をタイラントは感じた。

そして、その集団の中から一人の男が前に出た。見るからに屈強そうな、恐らくは指揮官であろう人物だと一目で解った。

「私はリ・エステイーゼ王国、王国戦士長ガセフ・ストロノーフだ」

絶望の使者 part 1

その男はリ・エステイーズ王国の戦士長と名乗った。男は騎兵達の前に出るや否や油断無く俺達を見回し、後方に控えるアルベドを暫く見ていた。アルベドから視線を外すと再び鋭い眼光を俺達に戻し、自身の官姓名を名乗るに至る。

このガセフと言う男は生粋の軍人、いや戦士と言った所か。身体から殺意やら敵意が溢れているのは俺達を警戒しているからか？まあ俺も団長も見た目は悪いし、何しろ不気味だから警戒されても仕方がない。

暴力を生業とした職業において絶対必要スキルは敵の我との「戦力分析能力」だと俺は思っている。現状の私の戦力で敵は倒せるのか？その判断を正しく行える奴は戦場で長生き出来る。

コイツは恐らくは「ソレ」が出来る奴だ。精強な部隊は兵士を見れば解る。士気旺盛にして、部隊の統制が取れている……かつて俺の部隊がそうであった様に。

そう思うと何故か不思議と親近感が湧いてきた。それは俺が軍人として、同じ指揮官としてガゼフと言う男を評価しているからだろうか？この集団はとるに足らない人間

共と油断するには少々危険だと俺は思う。

恐らくこの戦士達は己の死を恐れず俺達に向かって来るだろう。圧倒的な力の差を知っても尚、たとえ最後の一兵になっても戦う事を放棄せず玉碎する。信頼出来る仲間、忠を尽くすに値する指揮官の存在、手強い部隊の見本みたいな奴等だ。

団長と村長がガゼフ・ストロノーフとやり取りをしている。喋れない俺が口を出す必要は無いだろう。リ・エステイーズ王国はこの地を統轄している国家って事は解っている。

しかし……だ、俺が今出来る事は「THE・威嚇」のみ。団長のちよい後ろに控えて全力で騎兵達を牽制をする。妙な真似したら即ぶち殺すと言わんばかりの殺気を放ち、睨みつける。現状、敵か味方すら分からんし、遠慮なんてしてられん。

だが団長の作戦を俺の軽率な行動でぶち壊してしまつては目も当てられん。もう少し、考えて行動せねばなるまい。

俺はもう、日本国防軍、特殊作戦旅団、特務少佐「的場巖」では無く、ナザリック地下大墳墓の「タイラント」として生きて行かねばならんのだから。

「そちらの御仁にも感謝申し上げる」

おおう、知らぬ間ガゼフ・ストロノーフが目の前で頭を下げている。戦士長と言う役職がどの程度のものかは分かんが身分も身元も分からない不気味さMAXの俺達に

敬意を示し頭を下げるとはな。村長や部下の反応を見れば分かるが驚愕すべき事なんだろう。

まあガゼフと言う男の人柄か、単にそんなに階級意識が低い世の中なのか、俺には分りかねるが真摯な態度には素直に好感を抱いた。

だが、貴様には言わせてもらう……いや言わねばならん。

「感謝スル、前二、反省シタラ、ドウダ」

耳を疑う返答にその場に居た者全て凍りついた。無礼極まりない発言に只でさえあまり良い雰囲気では無い空気の中、正に特大の爆弾を弾薬庫と燃料庫に直接投下した様なものだ。だがタイラントはそんな事はお構い無しに無表情のまま、ガゼフに淡々と言った。

「弱キ者、死ンダ。貴様等ガ、非力、故二」

「……返す言葉も無い」

「感謝ナド、要ラン。カヲ、持ツ者、ナラバ、示セ」

タイラントの手には先程の騎士の兜が何時の間にか握られていた。そして、その鋼鉄の兜をグシヤリと一息で握り潰すとガゼフの前に拳を突きだし、潰れた兜を落とす。

見るも無惨な鉄の塊と化した兜を見たガゼフは大男の尋常では無い怪力に驚きを隠せなかった。

「ご忠告、痛み入る。聞けば貴殿がこの村を救った立役者と。是非お名前お聞かせ願いたい」

村を救った事には違いないが、寧ろもつと厄介な状態になっていると村長は思っていたがそれを口に出す勇氣はなかった。噂に聞く戦士長ならばこの得体の知れない大男を倒せるかもと期待をしたが、一目見てそれが無理だと解ってしまう。強さの規格が違うのだ。恐らくこの戦士達が束になって戦つても結果は先程の騎士達と同じ運命を辿ると確信出来る。

だからこそ、この場において口を閉ざすほか村長に出来る事は無かった。

「タイラント、ダ」

「タイラントは私が最も信頼出来る腹心、いや友です。ですが人智を超えた呪いの影響でね、彼は上手く喋れないのですよ」

「それは難儀な事だ。だがゴウン殿の友であれば……」

ガゼフが何かを言いかけた時、血相を変えた一騎の部下が凄い勢いで村へと進入し、叫ぶ様に報告をした。

「戦士長つ！周囲に複数の人影！村を囲む形で接近中！」

まあ、なんと言う事でしょう。問題が問題呼び寄せる問題が発生したぞ。こんな辺鄙な村にガゼフも敵も本当にご苦労な事だな。巻き込まれる村の人は迷惑極まりない

だろうよ。

アインズ達は取り合えず村長の家へと向かうがタイラントはでか過ぎて入れないので家の窓付近に立ち、中の話が聞ける位置で周囲の警戒をする事にした。

「成る程、確かに居る……な」

ガゼフは窓から見えた人影を確認すると忌々しく吐き捨てた。見える範囲で三人が等間隔を保ちながらゆつくりと向かって歩んでくる。その隣には並ぶ様に浮かぶ羽根の生えた異形の者が居た。

奴等は其を「天使」と言う。

異界より召喚されるモンスターであり、スレイン法国では神に使えているとも言われているが真偽は不明だ。

『アークエンジェル・フレイム炎の上位天使だなあれは』

『アークエンジェル・フレイム炎の上位天使ですねあれは』

『ユグドラとある程度共通している事は認識していたがモンスターも一緒か』

『召喚モンスターとして存在しているのか……いや、あるいは……』

『次から次へと問題がてんこ盛りだ、なあ団長』

『ですね……はあ、こんな長引くとは思わなかった。演技するのも疲れるんだよなあ、早く休みたいよ……』

『同感だ……』

肩を落とすアインズとタイラント。精神的疲労は溜まる一方で発散させるすべは無い。食欲、睡眠欲、情欲、快楽的な欲求が全然湧かないのだから困ったものだ。仮に情欲が爆発したとしても精神抑制が発動してやる前から賢者モードになってしまふ。欲を断つ事に馴れたタイラントはさほど苦には感じていなかったがアインズにはキツイ面もあるだろう。

「ゴウン殿。良ければ雇われないか？」

ガゼフの依頼にアインズは直ぐには反応しなかった。ガゼフに加勢して此方に何かメリツトがあるかを考えていたからだ。軽率に加勢をすれば、今後王国に徴兵される等も考えられる。いずれは何処かの国に属するのも悪くないと考えているが今ではない。現状、ガゼフに加勢するメリツトは少ないと言えた。

「報酬は望まれる額を約束しよう」

ガゼフは更に畳み掛けた。それほどまでに事態は切迫している。事態だけでは無い。戦力も装備も、あの魔法詠唱者達と戦うには何もかもが足らな過ぎるからだ。

「お断りさせて頂く……と言いたい所だが条件付きで良ければ力になりましょう」

「願つても無い事だ、何なりと言つて欲しい」

「まず私達は村を守る事を最優先させてもらう。村の安全が確保でき次第、ガゼフ殿の

加勢に向かいましたよ」

「それは有り難い！この村を守れなくては何の意味も無いからな」

不意にアインズは窓を背にガゼフへと向き直した。夕陽が身体に被りその影がアインズの不気味さ更にを増す。嫌な冷や汗がガゼフの額を流れるが拭う動作すら出来なかった。

「我らに矛を向ける事がいかに傲慢で愚かな事か、力でしか分からぬのなら力で知らしめる。その力が……」

「コノ、俺ダ」

日も傾いた道をタイラントは歩く、特に急ぐ訳でもなく。堂々と道の真ん中を歩いている。

威風堂々とさえ思える姿だが状況が状況だけに異様としか言い様がなかった。武器を持つている訳でも無く、かと言って命乞いをしに来た様にも見えない。

遠目から見ても、かなりの大男だと分かるが……只、其だけだ。

そんな無謀な大男に嘲笑し、容赦無く天使を差し向ける襲撃者達。天使の持つ真紅の剣は男の身体を確実に貫く……筈だった。

天使が迫っているにも関わらず、歩みを止める様子を見せない。唯一先程と違ったのは大男の手に「黒い何か」が握られている。

見たことの無い道具をいつの間にか持つていたのだ。

ブウウウウウ!!

腑に落ちない事を考えていた瞬間、耳を貫く聞き覚えの無い爆音が響く。同時に差し向けた天使達が文字通り弾けとんだ。バラバラに、或いは穴だらけになり光の粒子を散らしながら消えたのだ。

何が起きたのか全く理解出来ず、その場に居た者は皆暫く呆けてしまっていた。あまりに突発的な事態に思考が追い付かなかったから。一人、正気を戻した者が再び天使を召喚し、大男へと突貫させるが……手に持った奇妙な回転する筒が向けられ再び轟音が炸裂すると共に火を吹くと、天使だけではなく召喚者ごと砂埃の中に飲み込まれ姿を消した。

爆音が止み、静寂が辺り一帯を支配する。やぎて一陣の風がビューッと吹くと舞った砂埃を散らす。

やがて砂埃の向こうに見えるくる塊。その「塊」を見た者は嗚咽と共に震え上がった。何故ならば、その塊は人としての原形を留めない只の「肉塊」だったからだ。

「何だ！何が起きたんだ！」

「ジ、ジャックが死んだ！どうなってんだ!？」

「ひ、ひでえ！ミンチよりひでえよ！神様っ！」

吐き出す者、神に祈りを捧げる者、震える者、誰一人として冷静さを保てる者など居ないかに見えた時、鋭い怒号とも言える指示が浮き足立った者を正気に戻した。

「隊列を乱すなっ！全員集合！天使を召喚し突撃隊形！一気に叩くぞー！」

恐慌状態に陥った中、一人冷静さを保った指揮官とおぼしき男が指示を出す。

村の包圍殲滅を任された分隊長トール・ラドクリフ。スレイン法国、陽光聖典に長く所属する猛者である。

その猛者をして目の前に居る大男から嫌な感じがしていた。まるで強大な魔物が目の前にいる様な感じがしてならなかった。本能という本能が警告を上げているのだ。此処から早く逃げろと、さもなければ死ぬぞと言わんばかりに。

震える身体と心に鞭を打ち、天使を召喚させる。戦力の出し惜しみはしない、一斉攻撃でこの違和感の元を断つ。

部下達を集結させ一斉攻撃準備をさせるツールだが、それが無意味だと知ったのはもう暫く後だった。

何処に隠れて居たのか約十名程が姿を現す。どうやら村を包围する部隊が集結した様だ。それに比例して当然浮かぶ天使も増えている。一对二十の戦力差だがタイラントにとっては脅威でもなんでもない。右手に持ったガトリングガンを起動させ発射、そして横に薙ぎ渡る。発射された弾丸の雨は哀れな標的達に容赦無く降り注いだ。

あの奇妙な音が聞こえた瞬間、集結した部下とその隣に浮かぶ天使が一斉に弾けた。あの筒は何かの飛び道具なのは間違い無い。当然、我々は飛び道具に対する防御魔法を発動させ行動している。つまり並大抵な攻撃では破られない筈なのだ。しかし、その魔法を易々と貫き、盾にした天使をも貫く攻撃。

身体が弾け、血飛沫を上げながら四肢がもげる部下の様子を見て思った。本当に何が起きていいのか分からない、これは夢なのではないかと。

しかし、何かが肩を穿った激痛で現実だと言う事を嫌でも認識させられた。凄い衝撃が身体を突き抜けると同時に吹き飛ばされ、何度も地面に叩きつけられながら岩に当たり漸く止まる。混濁する意識の中、立ち上がろうとするが腕が動かない。ぼやける目を凝らして腕を見た瞬間、ツールは後悔と絶望をした。

「う、腕があ！俺の腕があああ」

痛みがした腕を見てトールは絶叫する。

何故ならば右肩から下、上腕部から下が千切れて無くなっていたからだ。止めどなく流れる血が恐怖と痛みを何倍にも膨れあがらせた。

「全ク、煩イ、人間ダ」

片腕が千切れた人間の足を掴むと引きずりながらタイラントは再び歩き出す。

泣き叫ぶ男を無視して死屍累々の道を進む。目指す場所はガゼフ達が戦う戦場。ゆつくりと、だが確実に進んでいく。

ナザリツクに刃を向けた愚か者達に恐怖と絶望を届ける為に……

絶望の使者 part 2

獅子奮迅の活躍とは良く言うがガゼフの活躍はまさにそれを体現していると言っても過言ではない。周辺国家最強の戦士と言う肩書きは伊達ではなく、複数の「武技」を発動し群がる天使を次々に葬る。魔法の加護も無い武器で天使を殺る事が如何に困難な事なのかは、自身も敵も良く理解している。

だからこそ、敵は戦力を集結させ天使を差し向ける。ガゼフも素早く決着をつけるべく切り札を使う。一進一退の攻防が繰り広げられる戦場でガゼフは剣を低く構え、切り札とも言える武技を発動させた。

【六光連斬】

光の煌きのごとき神速の武技、一振りで六撃を放つ必殺技。立ち塞がる天使六体を一撃で両断し、光に還す。威力も見栄えも良い大技に、味方からは歓声が敵からは動揺の聲が上がった。

〈即応反射〉〈流水加速〉持てる武技を惜しみ無く発動し、天使を鬼神の如く切り伏せる。固まって抵抗する部下達はガゼフの姿を見て希望を持ち出す。この戦いに勝てるかもしれないと言う希望を。

「見事、しかし……それだけだ」

だが、敵指揮官の冷めた一言で熱した空気は一気に払われた。現実はその甘くは無。ガゼフが幾ら天使を斬って捨てても直ぐに新たな天使が召喚される。召喚者を倒さなければ魔力の有る限り直ぐに復活してしまう。天使を幾ら倒されても法国側の損害は実質的にゼロだった。

人員、装備、練度、個々の強さ、ほとんど全て敵に劣り、勝利への希望も消え、士気も無くしたガゼフ達に容赦無く法国の兵士達は天使達を差し向けた。武技〈戦気梱封〉が使える己ならばいざ知らず、武技も使えない魔法武器すら持たない部下達は天使を倒すには決定力が足りず、善戦するも次々と倒れていった。

何とかこの戦況を脱せねば全滅してしまう。ガゼフは只ひたすらに剣を振るった。持てる力の全てを使い、戦った……が。

「不味いな……」

完全に敵の術中に嵌まったと悟ったガゼフは小さく吐き捨てる。周りを取り囲む様に浮かぶ天使。隊長らしき男が合図だろうか腕を軽く振るう。

その直後、不可視の衝撃波の渦がガゼフをのみ込んだ。満身創痕のガゼフ身体を容赦なく次々と穿つ。鎧の金属が弾け飛び、口の中一杯に血が込み上げ吐き出した。間近に迫る死の気配を感じるが、もはや身体が言うことを聞かない。剣を構える腕に感覚はほ

とんど無く、足は震え踏ん張りがきかない。それでも戦う事を諦めると言う選択肢はガゼフには無かった。罪無き民を平気で殺す外道に屈する事など、あり得ない。

しかし、もう抵抗する力も残っているかどうかすら危うい。絶望的な状況だが、唯一あの村の事を心配せずにいられるのは不幸中の幸いだろう。あの二人の底知れぬ力を前にすれば心配する事すら失礼に値する。

「ハハッ、この期に及んで笑うとは狂ったか？ガゼフ・ストロノーフ」

「狂つてなど、いない。お前達の死に様を思つたら滑稽でな……」

「滅らさず口を……まあ良い。貴様もあの村もどうせ消えるのだ。今頃は別働の殲滅隊が焼き討ちをしている頃だろうよ」

「馬鹿め、お前達は分かっている。あの村には俺よりも強い御仁達が居る。お前達は、お前達はグリフオンの尾を踏んだのだ……」

「くだらん、貴様より強い者などこの国に居るはずなからう。案ずるな殲滅隊の長は俺の腹心だ、失敗などあり得ん。無駄な抵抗は止めておけ」

宙に浮かぶ天使達が一齐にガゼフへと殺到しようとした瞬間、ガゼフの意識が途絶えた。

いつそのこと走るべきか、タイラントは悩んでいた。夕焼けに向かって荒野をノシノシ歩いていたが、だんだん不安になってきたのだ。合流する予定の場所にたどり着く前に事が済んでしまうのではないかと。ガゼフには団長が転送系の課金ハズレアイテムを渡しているから、恐らくは大丈夫だと思う。

引き摺る男の絶叫も途絶え、とても静かになったが何か物足りなさを感じたタイラントは自身の目の前に哀れな男を持つてくる。まあ、片腕を欠損し長い事荒野を引き摺られ服はボロボロで皮膚も剥けた見るも無惨な状態だったのは予想通りだった。まだ息をしているのが不思議な位だが、興味なさげに地面に戻すと再び歩き出した。

地面に残っている複数の馬が駆けた跡が鮮明になって来ていると言う事はそろそろ目的地周辺である事を示している。恐らく、前に見える稜線の向こう側が戦場だと思いがやけに静かだ。

まさか、もう既に決着してしまったのか？ 仕事に遅刻した時の様な焦りを感じ、稜線へ向かって猛ダッシュする。一步大地を踏みしめる毎に地響きを立てながら疾走し、巨体からは想像も出来ない速度で稜線を走り抜け、そして跳んだ。これまた想像もしようもない高さまで跳ぶと辺りの景色は良く見える。眼下の荒野には戦士達の死体と、突き刺さった武器の他、アインズとアルベドが先程ボコツた奴等と同じ格好した集団と対峙しているのではないか。団長が此処に居ると言う事は、ガゼフは強制送還されたのか

……。重力に任せ、落下しながら考えていたが……
気が付いた時には着地する寸前だった。

「さて……。この天使は邪魔だな」

胸部と腹部に剣を刺している天使を引き抜き手前に放り投げた。投げ捨てられ態勢を崩した天使が再び浮かび上がろうとした瞬間、空から降ってきた【何か】にズドンと潰され光の粒子となつて消えた。

飛び散る砂埃と光の粒子の中、割りと大きなクレーター中心にタイラントが片膝をついて鎮座している。

漆黒の防爆コートに光の粒子が反射し、場違いな程幻想的だった。

「うおっほおっ!? タ、タイラント?! じ、実に良いタイミングだぞ!」

「イエス、マイ、ロード」

「アインズ様? 【うおっほおっ】とは一体……」

突然降ってきた大男に親しげに話した魔法詠唱者達。スレイン法国屈指の猛者達を前に雑談を始める始末。仮面の魔法詠唱者はほんの少し前まで剣で身体を二ヶ所も貫かれていた筈、にも関わらず平然とし挙げ句の果てには空から降ってきた謎の大男と会話をしだした。常軌を逸しているとかそう言った次元の話では収まりきれない出

来事が立て続けに起これば誰もがこんな反応をする筈だ。

ニグンはこの不気味な奴等に嫌な予感がしてならなかったが、現状此方の戦力のが圧倒的に上回っている判断。即座に天使を集結させ、防御陣形をとった。

「無知なのか、愚かなのか知らぬが我々を前に良い度胸をしている」

溜まりに溜まった不快感を吐き捨てる様に言うニグン。確かに不気味な相手ではあるが、この完璧な防御陣を突破する事は本調子のガゼフですら出来ないだろう。三十体の天使、そして自分の隣に控える様に浮かぶ自信の源とも言える高位の天使
プリンシパリティ・オブザベイシヨン
監視の権天使。

全身を鎧に包み、メイスを持った見た目通り防御に特化した天使だ。そしてその特殊能力、自軍構成員の防御力を若干強化する効果。これにより強化された天使達を突破し、此処まで辿り着くのは不可能、まして三人でなど論外と言う他ない。

「無知で愚かとは、いやいや手厳しい。だがこれは強者たる【余裕】と言った所ですよ」「無礼極まりないゴミ虫が、至高の御方々に戯れ言を……」

ニグンの挑発的な言動にアインズは冷静に皮肉り、アルベドは激怒して反応する。しかし、タイラントは特に目立った動きは見せなかった。白濁した眼で敵の動きを観察していたのと、ニグンの戯言にいちいち反応する事が面倒だったからだ。村を包囲してた奴等と装備や天使に特に変わりはない、指揮官の隣に居るデカイ天使……確か権天使シ

リーズの防御の個体だったはず。防御特化と言っても俺やアルベド、団長の攻撃を防げるとは到底思えない。勝ち誇った様な眼で此方を見ているのが若干癩に障るがまあ、良いだろう。

束の間の希望を見させてやる慈悲も時には必要だろうしな……

「さて、交渉は決裂、これ以上の対話は無意味だ。アルベドよ下がれ」

「たった二人で我々に勝てると思っているのか！ガゼフと言い、貴様等と言い余程の馬鹿だな！」

「無駄口叩いてないでさっさと来い。待っている此方の身にもなれ」

だよな、とアインズは隣に立つタイラントへ言う。無言で二人頷く姿からうんざりとした感じが滲み出ている。ここでふと、アインズはタイラントの手に持つボロ雑巾の様な物が付いた。

「して、タイラントよ。その手に持つてるのはなんだ？」

「……ワスレテタ」

……………。

「ハハハハハハハッ！」

髑髏と死体顔の二人が何故か声高らかに笑った。

地の底から響く様な低い笑い声は恐ろしいを通り越し、不気味。ひたすらに不気味で

ある。

「貴様等ノ、オ友達、ダ」

ひとしきり笑ったのちタイラントは手に持ったボロ雑巾をニグン達の方へ向けて投げ捨てた。

浮かぶ天使達が投げ捨てられた雑巾に一齐に剣を突き立て、串刺しにする。その時、蚊の鳴く様な小さな呻き声が串刺しの雑巾から聞こえた気がした。

確認するべく一人が恐る恐る雑巾に近付き裏返すと……

「こ、これはトト、ツール分隊長ですっ」

「何だどっ！では、あの村の包囲分隊は!?!」

「死んだよ、間違いなく」

動揺するスレイン法国の連中にアインズが静かかつ、冷淡に答えた。

「ありえん、ありえん！ハツタリだ！総員、天使を突撃させろ！急げ！」

「ヤレヤレ、やっとやる気を出したか。ではタイラント始めようか」

「ガッ、テン」

「まずは、目障りな羽虫を薙ぎ払え」

浮かぶ天使達が剣を突きだし、アインズとタイラントに向けて一齐に突撃をしようと

した……

その瞬間。

ヴオボゴンツ！と地響きを起こし、凄まじい爆音が空気を切り裂きながら、衝撃波と共に一気にニグン達の身体を突き抜ける。体感した事のない音と衝撃波にその場に立っていられた者は居らず、皆吹き飛ばされた。

それはまるで雷が目の前に落ちたかの如くの衝撃。ニグンは立ち上がろうとするが、目眩と激しい耳鳴りでのたうち回り、直ぐには立てそうになかった。

暫くして何とか立ち上がりはしたものの、辺りは砂埃が大量舞い上がって何も見えず、何が起きたかすら見当もつかない。

しかし、混乱する頭に疑問だけが次々と沸いてくる。吐き気すらする濃い火薬の臭いが妙に鼻につく。直後、部下の叫ぶ様な報告で全ての疑問は驚愕へと一気に変わった。

「て、天使達が居ません！消えています！」

「何故だ！何故消えたっ！」

「分かりません！あの爆音と衝撃波で我々も……」

「ありえん！三十体の天使が一瞬で消えるなんて……ありえんだろう！」

三十体の天使を一撃で葬ったタイラント。その脇に抱える大きく太いパイプの様な大砲。保有携行火砲では最大、最強の威力を誇る無反動砲……

【L6ウオンバット120mm無反動砲】

(レリック級)

一瞬で天使達が消えた答えは対人用のフレシエツト弾を殺到してきた天使に向けて放ったからだ。本来はアウトレンジから一方的に砲弾を叩き込むのがセオリーだが、その運用をせずに今回使用したのは見た目の迫力と圧倒的な威力で敵の戦意を根こそぎ削いでやろうと思つたタイラントの思い付きだ。

「次弾、粘着榴弾。装填完了……」

「シズ、後方爆風、気ヲツケロ」

「コピー」

「い、いつの間にシズ呼んだの……?」

さも当然の如く、タイラントの後ろで装填作業をするシズ。頭には頑丈そうなヘルメット、身体にはこれまた頑丈そうな防弾チョッキを着ている。しかしメイド服は着たままだ。ミリタリーとメイドのアンバランス感が何とも言えない。だが、タイラントはそれが良いと思つている。

妙に息の合ったコンビネーションの二人。これが軍人なのかとアインズは間近でシミジミ感じたのであった。

絶望の使者 part 3

(あれは何だ、あれは何だ、あれは何だ……!?)

ニグンは夢でも見ているのかと錯覚した。そうでなければ無数の天使が一瞬で葬られるなど説明がつかない。寧ろ、夢であつて欲しかった。そうでなければ、この現実を受け入れる事など出来そうになかった。

(アレは何だ? アイツ等は一体何なんだ?)

未だかつてこれ程まで感じた事のない恐怖。死の気配が身体の直ぐそこに在るかの様な感覚。身体が震え、汗が吹き出すが何とか恐怖を押し殺し平静を保つ事が出来たのは陽光聖典としてのプライドか。

驚愕するニグン等を前にアインズが一步踏み出す。その様を見て一同は思わず後退りをしてしまう。目に見えぬ「何か」を感じたからか……いや、その「何か」など分かっている。この不気味な魔法詠唱者からは尋常ではない殺意が滲み出ている。全てを飲み込む程のドス黒い殺意が。

「確か無知で愚か……と言ったか? まあ、良い。己の愚劣さを噛みしめながら……」

「死ぬ」

ブリュンシバリティ・オブザベイシモン

「監視の権天使っ！」

ニグンの掠れた声に従い、神々しいと言っても過言ではない天使が動き出す。全身が鎧の上位天使、その手には大きく頑丈そうなメイスが握られていた。しかし、この天使の特殊能力〔視認する自軍構成員の防御能力を若干引き上げる〕は自分が動くとその効果は消える。故に待機させておく方が賢い。だが、その効果よりもこの天使の力にすぎりたかつたのだ。得体の知れない〔化け物〕を前にして正気を保つ為には。

監視の権天使が動くと同時に部下達も次々に攻撃魔法を詠唱を始める。あらゆる魔法の一齐攻撃がアインズ達に降り注いだ。空気を、大地を穿ち塵も残さぬ様な徹底的な攻撃が展開された。まるで自身の恐怖を打ち払うかのように、半狂乱になりながら魔法を撃ちまくるニグン達だが……

ヴオゴンッ！

先程の爆音が砂埃の奥から響くと、目の前の監視の権天使の上半身が火花と共に弾け飛んだ。まるで硝子細工が砕け散るかの如く、木っ端微塵に爆散した。如何に防御に優れると言ってもタイラントの持つ120m 無反動砲、対巨竜用粘着榴弾を耐えられない筈がない。至極当然の結果だが上半身を失っても尚、フワフワと浮かぶ権天使。その滑稽とも言える様子を心底楽しみながらアインズは言う。

「そら、粗大ごみは焼却するに限るぞ……ヘルフレイム」

アインズの指先から漆黒の火が放たれる。しかし、火と言うにはお粗末な程小さな火だ。吹けば消えそうな程小さな火だが、その火が監視の権天使の身体に触れた瞬間、漆黒の火は全てを焼き尽くす焔と化した。離れた場所に居るニグン達ですらあまりの熱さに目すらまともに開けられなかった。余熱が顔に感じられるが恐る恐る目を開けて見ると、あまりに呆気なくニグンの上位天使は天に召されたのだ。

「う、うわああ!!」

悲鳴にも似た叫び声を上げながら魔法攻撃を乱射するニグン達。あの天使が、上位天使がまるで赤子の手を捻るより容易く葬られる様を見て正気を保てる者など居る筈が無い。死にたく無い、只その一点で盲目的に攻撃呪文を叫び続けた。

〈人間種魅了〉〈正義の鉄槌〉〈束縛〉 〈炎の雨〉〈緑玉の石棺〉

〈聖なる光線〉〈衝撃波〉〈混乱〉 〈石筍の突撃〉〈傷開き〉……

『全部聞き覚えのある呪文だな』

『ええ、全部ユグドラシルの呪文で間違いないです』

『解せんな、誰かが魔法を教えたのか？最初からそうなのか？』

『スレイン法国の人間にユグドラプレイヤーが居るのかな……』

『そもそも、この世界の宗教がどんなものかは知らんがキリスト教やイスラム教が在るわけではあるまい。だが奴等は天使を「アークエンジェル」と言う。それはおかしい。形の無い神の存在を想像し具現化するのは簡単に出来るもんじやない。それこそ何世紀もの時間が必要だ。故にキリスト教を知る人間がどっかに居るかもしれない』

『タイラントさん、宗教関係詳しいですね……』

『なに職業柄少しだけ調べただけさ。地球が駄目になる瀬戸際でも宗教の違いで戦争してる奴等とも付き合いがあったから』

『そ、そうですか。兎に角アイツ等からは聞かなくてはいけない事が沢山ありますね』

『まあ魔法ぶつけられるのも、鬱陶しいし……』

『そろそろ、アルベドがキレそうで怖い』

二人の気持ちの人が人知れず一つになった瞬間だった。

「ひゃあああああ！」

錯乱した一人が腰からスリングを取りだし礫を放った。魔法が効かない、まして天使の剣も効かないのに何の効果があるのか、しかし冷静な判断など誰一人として出来る状況ではない。ニグンすらもその行為を止める事なく只見ていた。放たれた鉄のスリン

グ弾はアインズとタイラントの頭にまっすぐと飛んでいく。人の頭位なら容易く碎く事が出来る重さの礫だ。直撃すればあるいは……淡い期待を抱くが、突然爆発音にも似た音がした。

一瞬、本当に一瞬の事だった。

後ろに控えていたアルベドとシズがアインズとタイラントの前に立ちはだかつていた。アルベドに関しては先程まで立っていた場所が、蹴った衝撃で大地がめくれ上がっている。アルベドは手に持ったバルデッイシユを振り抜き礫を打ち返す、シズは低い体勢からタイラントから借りた武器（持ち出し可）、中折れ式グレネードランチャーの40mm擲弾を発射する。ポンツと間の抜けた様な音と遅い弾道の煙のエフェクト、呆けて立ち尽くす礫を放った部下の頭が弾けた後、煙が身体近辺に着弾し、残った身体も跡形も無く吹き飛んだ。

「な、何が起きた!？」

「分かりませんっ、我々も一体……」

「すまないな、私の部下達がミサイルパリーとカウンターアロー、二つの特殊技術を使用して迎撃し打ち返したかつ、対人用擲弾まで発射したようだ。飛び道具対策に防御魔法をかけているようだが無駄だったようだな、申し訳ない」

「シズ、弾ノ、無駄ダ、控エロ」

「申し訳ありません、でもアイツ等、無礼にも、程がある」

「全くその通りよシズ、至高の御方々と戦うのであれば最低限度の攻撃と言うものがございます。あのような飛礫など論外です」

「確かに、だがそれを言ったらアイツ等自体が失格ではないか。なあ?」

アインズの侮蔑を含んだ問いにニグンは心底恐怖した。無表情の大男、不気味な仮面の魔法詠唱者、全身鎧の女、妙な柄の給土服の女、得体が知れない不気味なまでの力を持った者達。もう、手段を選んでいない場合では無いとニグンは決意を固めた。懐にしまっている「最後の切り札」を使うしかない……と。

「さ、最高位天使を召喚する。時間を稼げ!」

死への恐怖は都市規模の破壊をも可能にする最高位天使を召喚する事の躊躇いをすべてかなぐり捨てた。この天使を召喚するためにかかる費用や労力は想像を軽く越える。だが、コレを今使わないで何時使うのか?この得体の知れない未知の化け物共にはやはり、最高位天使でなければ話にすらならないだろう。二百年前、魔神の一体を単騎で滅ぼした最強の天使である……

トミニオン・オーソリテイ
【威光の主天使】を。

「最高位天使だと？あれは魔法封じの水晶だ、それにあの輝きは超位魔法以外を封じるものだ……」

「サガレ、团长、オレ、ガ、殺ル」

「だが、熾^{セラフ}天使級相手では……」

「オレハ、盾^ダ」

「タ、タイラント様！それは私めの役割……」

アルベドやシズの制止を振り切り、アインズの前へと立ち塞がるタイラント。絶え間なく攻撃魔法が身体に当たるがビクともしていない。元々、魔法耐性や物理耐性はずば抜けて高く、並大抵の攻撃ではタイラントにはダメージすら通らない。

だが熾天使ともなれば話は別だ。魔の対極である天使の中でも正しく最高位の天使。その聖なる力を持ってすれば如何にタイラントとて無傷では済まない。本気で戦わねばかなり不味い相手になる事は間違いない。

故に、相手が切り札を使うならば此方も使わない道理は無い。たかが人間相手に大人気無いと思うかもしれない。だが、暴虐の権化たるに相応しい力を使わない道理は何処にも無いのだ。

『オーバーフロー・フォース
「溢れ出す力」』

ニグンは手に持った水晶を規定使用方法通りに破壊すると眩い光が辺りを包んだ。地上に太陽が落ちたかのような爆発的な輝きは最高位天使の召喚を意味した。

そして、目の前には伝え聞く伝説の天使が降臨していた。

「み、見るが良い……この尊き姿を！ドミニオン・オリソリテ威光の主天使」

アインズはあまりに拍子抜けしたのか、頭痛がした気がした。最大限の警戒をしていたのにも関わらず熾天使ではなく、主天使が出てきた。驚きを通り越して最早何も言葉が出てこない。それなのに、目の前の男ときたらドヤ顔で「威光の主天使やで！」と言っている……、タイラントに至っては「溢れ出す力」を発動して狂化されてるから主天使程度では足止めにもならない。まあ、全ては最悪を想定して行動するのが最善の選択だと思っっているの、スレイン法国の皆さんには悪いが御愁傷様と後で言っておこう。

『熾天使でなく、主天使だ、と……』

『あー、なんか早とちりしたみたいですね僕ら』

『完全にオーバークルしてしまう件について話が……』

『まあ、彼等も少しは希望が見れたし良いのでは？』

『ならワンパンで片付ける、ワンパンでだっ！』

『大切な事だから二回言いましたね……タイラントさん』

威光の主天使の降臨で沸き立つニグン達だが、一方でタイラントの方も負けてはいな

い。身体の防爆コートと拘束具が弾け飛び、岩石の様な肌が露になる。その二の腕は巨大化し、裂けた肌の間に溶岩の様なラインが出ている。巨大化した片腕の爪が異常発達し、最早人間らしさなど何処にもない。

「諸君、紹介しよう。彼が【ナザリックの核弾頭】……」

「スーパー・タイラント超・暴君！」

絶望の使者 part 4

それは光輝く翼の集合体。翼の間から伸びる手には王権の象徴たる笏が握られているが、その他には頭も足も無い。異様な外見ではあるが、聖なる存在である事は誰もが感じていた。極光の中からその姿を現した瞬間、辺りの空気が清浄なものへ変化していたからだ。

正に至高善の存在が地上に降臨した。その存在を前にニグン達は昂る感情を押さえきれなかった。喝采、と言うよりは怒号と言った方が良いだろう。もはや何を言っているか理解出来ない様な叫び声が炸裂していた。

至高善の天使の対極である絶対悪の暴君。身体から立ち上る赤黒い蒸気と真紅のオーラからは禍々しい闘気が溢れ出し、頑強な岩石を削り出した様な凶悪な巨軀。中でも特に注目すべきは【腕】だ。左腕の手の爪が異常発達し巨大化、最早手の原形など留めていない。只々、自身の敵を切り裂く事しか使い道など無いその巨腕はタイラントが【人ならざる者】である事をありありと物語っていた。

「ば、化け物め」

ニグンは対峙するタイラントにそう言った。いや、呟いたと言った方が正しいかもしれ

れない。人智を超えた善と悪が目の前に存在する、まるで神話の一説の中に存在しているかの様な感覚は身体と心を震わした。

聖なる存在が絶対悪たる存在を滅ぼす。聖職者として、神に使えし者としてこれ程【燃える】展開があるだろうか？いや、金輪際無いと断言出来る。

部下達も同じ気持ちであろうか口々に「天罰を」と叫んでいた。この不気味な闖入者達には散々煮え湯を飲まされてきたのだから当然の反応だ。

ニグンは満足気にほくそ笑むと、高らかに笑った。抑え込まれた恐怖が笑い声になって溢れ出てくる。今度は此方の番だ、たつぷり恐怖を刻みこんでやると言わんばかりに。

「ハハッ、化け物共め！最高位天使を前に貴様らも本性を現したかつ」

「いや、別に」

アインズが喋れぬタイラント代わりに簡潔に答えた。それに続き、うんうんと超・暴君とアルベド&シズが同意して頷いている。

この愚か者、何を勘違いをしているのか知らないが、別に本性など現していない。つい先走り過ぎて本気を出してしまっただけなどと恥ずかしくて、とても言えたものではなかったが。

単純に強者たる余裕、しかし、そんな余裕などニグン達に理解出来る筈がない。最高

位の天使を前に恐れも、怯えも、何も示さない異常さは驚愕を通り越してある種の悟りに近い呆れにもなっていた。

「ば、馬鹿な！この天使を前に何故、そんな態度が出来る!?ありえん、ありえん、ありえん！」

心底、呆れたアインズはやれやれと、ため息混じりに首を振ると愚か者に諭す様に語りかける。

「……貴様は足下で這いつくばる虫をいちいち恐がるのか？随分、暇なんだな。無駄口叩いてないで念仏でも唱えたらどうなんだ？」

ゾクリ、とニグンは背中に冷たいものが走る。

アインズ等の言動や態度からは恐怖や不安などは皆無、改めてコイツ等は本気だ、本気で「威光の主天使」を恐れていないと確信した瞬間だった。

だが、そんな本能の警告を素直に聞ける状況ではない。寧ろ、その事実を認めてしまったら己が信じてきた全てを否定してしまう事になる。そんな事があって良い訳がない。否、あつてはならない。

「じ、邪悪なる者よ！塵も残さず消え失せるが良い！ホーリースマイト聖なる極撃！」

怒号にも近い叫び声に威光の主天使は静かに反応する。手に持った笏が弾けた直後、

対峙するタイラントに清浄なる光の柱が落下、直撃した青白い光の柱は超・暴君の巨軀を完全に包み、邪悪なる者を浄化をせんと一層輝きを増す。

それは人間が決して到達出来ない領域の魔法【第7位階魔法】。その威力は極限級であり、人も悪魔も、善も悪も、その極光に飲み込まれたならば皆等しく灰塵となる。

正に神の天罰の一撃と言うに相応しい光景、極光の御柱が悪を滅するべくその力を遺憾なく発揮した瞬間だった。

『何だかチクチクする、これがダメージを負う感覚なのか？』

『端から見たら凄い光景ですけど意外と冷静ですね……』

『この状況が予想の範疇だからか？いや、想定外の事態と言えば想定外だ』

『成る程、ダメージを負う事による痛みの感覚はちゃんとあるって事か』

『精神的な面、意識や記憶だけじゃなく身体、神経系までもがキャラとリンクしている……もう、夢とかそういう線は消えたな』

『タイラントさん、感じる痛さは具体的にどの程度の痛さですか？』

『安いスタンガンを押し付けられた感じ』

『結構痛そうな気がしますけど!』

『ハハッ、頑強タイラントボデーに死角など無いっ』

『あ、我慢してるだけです。解ります』

『それなりに痛い、それは確かだから気を付けよう』

『了解です。これでまた一つの疑問が消えました』

「か、か、か、下等生物共があああ!!」

『『あ……』』

極光の御柱にタイラントが飲み込まれながら、呑気にアインズと会話をしていた最中アルベドの絶叫が響き渡る。アインズとタイラントは侮っていたのだ。ナザリックに存在するNPCの持つ忠誠心を。

真の忠を捧げた者に対し牙を剥き、目の前で噛み付いている。部下として【守護者】として看過出来るものではない。本来ならば、至高の御方々に無礼な戯れ言を言った時点で極刑は確定。しかし、慈悲深き御方々は【言わせておけ】と言う。ならばと控え、耐えがたい罵詈雑言と無礼千万な態度も我慢してきたが……もう駄目だ。

アルベドは怒りの一撃を見舞わんと手に持ったバルディッシュを振りかぶった……が。

「ちよ、ちよつと待てシズ、その物騒な物は何だ？ 見た事あるぞソレ、危ないよソレは！
それは危ない！」

「後方の、安全確認、良し……」

「シ、シズ、シズ!?!前を確認しなさい!前を……」

「You Lose, big guy」

カチン、と静かに引き金が引かれた。

「R . P . G!!」

無表情でシズは肩に担いだロケットランチャー【RPG-7V2】（タイラントから貰った）をアインズの制止を無視して躊躇い無く発射した。TBG-7Vサーモバリック弾頭がアインズとアルベドの直ぐそばを掠めて飛んでいく。

ある意味二人はお約束と言うべきか、寧ろそうしなければならぬと言う謎の使命感に駆られ、叫びながらスローモーからのハリウッド回避をして弾頭を見送った。

弾頭から小型安定翼がカシャつと小気味良い音と共に展開された直後、ロケットブースターが唸りを上げながら威光ドミニオン・オーソリテイの主天使に向け飛んでいく。

使い捨ての携行対竜火器でも威力だけならトップクラスを誇るRPGシリーズ。反

面、命中精度の悪さや射撃後の硬直時間の長さ、撃った事によるヘイト率の上昇などマインス面も多く、一部のプレイヤーから「自殺兵器」とも言われていた武器でもあった。何故、シズがアインズの制止を無視し、ランチャーの発射を強行したのか？シズ本人も自分の行動が理解出来なかった。それは一種の「バグ」かもしれない。最優先されるアインズの言葉よりも「やらねばならない」と言う自分の我が儘が単純に勝っていたのだ。

ではそれは何故か？電子演算機能をフルで稼働しても明確な答えは出ない。命令不服従をした理由が「ムカついた」、「怒りで我を忘れた」などでは説明にもなっていない。しかし、現状、導き出された答えの中でもっとも理由らしい理由はこれだけだった。

一方で出鼻を挫かれてしまったアルベドは迷っていた。無礼千万の下等生物に死の鉄槌を与えてやろうとしたらシズに先を越されたからだ。

（守護者統括としてアインズ様の命令不服従に対する罰を与えるべき、でもゲボドブ下等生物の一連の行動や言動は不快極まりなかったわ。情状酌量の余地はある。寧ろ、シズがやらなくても私が殺っていたから……難しい判断ね）

「アルベドよ、真剣に何かを考えているのは結構な事だ。だが、何故抱きついている……」

「アインズ様、私こう見えて【非常に】華奢なもので……」

その着ている鎧は何なのだとアインズは思ったが地雷を踏みそうなので黙っていた。

シズが放ったRPGの弾頭は真つ直ぐ天使へと向かって飛んでいく。しかし、弾頭が光の柱に差し掛かった瞬間、光の中から伸びてきた「腕」に掴まれた。

ロケットブースターが空しく噴射されているが前に進む事はない。すると腕は弾頭を上空へと向けると握るその手を放した。解き放たれた弾頭は天高く空へとぐんぐん飛翔したが、ある程度まで昇った所でブースターの燃料が切れたのだろう、先程までの勢いが嘘の様に重力に従い落下する。行き場を失ったTBG-7Vサーモバリック弾頭は天使と超・暴君の丁度間に落ち大爆発。極光と舞い上がる砂埃と小石、爆風と熱風でニグン達の視界は完全に奪われ何も見えなくなってしまった。

嗅いだ事の無い臭いと舞い上がった小石がパラパラと降ってくる。耳鳴りも酷く、自分の声でさえまともに聞こえない。視覚、聴覚が効かない不安感は怒号となって放出される。

爆発による目眩も残る中、ニグンはひたすらに叫び続けた。

「一体、何なのだ！あの化け物はどうなった！」

積み重なる不安と焦りから怒鳴り散らす。だが、その問いに何故か誰も反応しない。

この不気味な静寂が永遠に続くかと思われたが、突如としてその静寂は破られた。

「て、て、天使があ、天使があ」

尻餅を付き、失禁をした部下が前を指を指しながら叫んでいる。恐る恐る、部下の指さす方を見ると……

そこにはズタズタに引き裂かれ原型を留めていない「威光の主天使」。そしてその天使の上には超・暴君がニグン達を睨みながら立っていた。

決着

(何故だろう、手持ち無沙汰感が半端無い)

光の柱に包まれ、演出が派手な割りに微妙な痛みの中でタイラントはリアクションに困っていた。

ニグンご自慢の威光の主天使の攻撃魔法【ホーリー・スマイト聖なる極撃】は属性が悪に傾いている程に効果を発揮する魔法だ。となればカルマ値―500の極悪であるタイラントに対し絶大な威力を発揮する筈。しかし、レベル100の防御力と対魔法レジスト能力、各種防御スキル、更に凶化された事による基本能力値のブーストで総合防御力は飛躍的に上昇しており、聖なる極撃程度の効果を発揮した所で大したダメージなど負う訳がない。

そもそも、頭がおめでたい可哀想な人間の為に【少しは】希望を見させてあげようと言うある意味サーブ精神、ボランティア精神でわざと攻撃を食らってあげてるので、予想通りとは言えあまりに拍子抜けた威力を体感してみても、改めて困り果てた。

(うおーやべえ……アルベドが爆発した)

タイラントの唯一誤算は従者アルベドの爆発だった。アルベドが憤怒する気持ちは理解出来なくはない。寧ろ、その厚い忠誠心には感服さえしている。だが、少しばかり

タイミングが悪いのが問題だ。拍子抜けする威力とは言えダメージを負うには良い機会である。その辺にいる人間や野良モンスター程度ではダメージのダの字も出ない程度の攻撃力だ。なので、良くも悪くもこの天使は自己能力の実証実験には丁度良い【教材】、早々に壊されるのはなるべく避けたかった。

(アルベドの突撃だけは団長に止めてもらわ……な?)

【タイラント・イヤー】は奥様方の井戸端会議や内緒話、乙女の甘いガールズトークから上司の悪口まで些細な音も聞き漏らさない素晴らしい集音性能を誇る【地獄耳】である。そんなタイラント・イヤーは聞き慣れた【発射音】を騒乱極める光の中で探知したのだ。

(あの雑な感じな重低音、無駄に大きい後方爆風……。間違いない、シズの奴めRPGを撃ちやがったな)

発射音を感知したと同時に振り返り、直ぐに状況を把握したタイラント。シズに渡したのはRPG-7V2、通常弾頭ではなくサーモバリック弾頭仕様の筈。HEATや破片効果で殺傷するのではなく、高熱高圧力で人員や陣地を攻撃する広域殺傷を目的とした弾頭だ。単体の敵に対して使うのはセオリーではないが、主天使程度ならばサーモバリック弾の直撃にすら耐えられないだろう。威力だけなら運営も太鼓判を押してたRPGシリーズ。最大の問題点である命中精度もガンナーであるシズならば問題ないに

等しい。

(しかし、何故団長はシズに撃たせたのだろうか？団長とてRPGの威力は承知している筈なのだが……何か考えがあつての事なのか？)

タイラントは難しい決断を迫られていた。弾頭を見送り、そのまま天使と取り巻きを焼き殺すか。弾頭を止めて、己の手で天使をぶち殺すのか。

『モモンガさんから応答ありません』

何度も「伝言」をコールしてみたものの、何故か反応がない。無機質な機械的な返答が返ってくるだけだった。

(くつ、団長から返事がない！只の屍の様だ！どうする俺！覚悟を決めろ！ええい、南無三！)

タイラントが下した判断は……【自分の手で片付ける】だった。

シズのRPGから撃ち出された弾頭の速度は、当初115m/sまで一気に加速、約10mで固体ロケットに点火し最大で295m/sに達する。そんな速度で飛翔する

弾頭をタイラントは意図も容易く掴んでみせた。

(うおう、結構な推進力だ！流石ロケットランチャーの名は伊達じゃあないな……)

片手で固体ロケットの推進を制御するのは見た目以上に難しい。しかも、タイラントはまだ【聖なる極撃】をその身で受けてる状態だ。いくらダメージを負わないと言っても濃密な光の滝に打たれている様なものだから、当然身体を動かすのに支障は受ける。掴んだ弾頭を投げ捨てるには体勢的にちよつと厳しい。安全かつ、敵にあまり損害が出ない方向へと捨てなければならぬ事を加味した結果、進行方向を上空に変更させる事にした。

固体ロケットの燃料は約500m程しか持たない。その後は慣性によって進むだけなので暫くすれば自然に落ちるだけ、そんな変な所には落ちないだろうと少々楽観的に考えていた。

案の定、弾頭は天使とタイラントの丁度真ん中に落下し、接触信管は見事に起爆。小型の気化爆弾だけあって派手な爆発をしてくれた。大量の塵や砂が舞い上がり、爆風と熱風のコンビネーションならば最高の目眩ましになって、何も見えまい。

(フーン、俺はその間に天使をボロ雑巾にしてやる作戦を実は立案(今)していたのだった！)

思い付きとは言え、そうと決まったタイラントの行動はすこぶる速い。その強靱な脚

力をもつて発動した【縮地・極】。踏み出した音すら置き去りにする速度は残像すらも見せる。数十メートル離れていた威光の主天使まで一瞬で肉薄した。

顔の無い天使なのでその表情は解らないが驚愕したに違いない。目にも止まらぬ速度から放たれた凶刃の突きは易々と天使を貫き、逆袈裟に切り裂く。哀れ上半身が真っ二つに割れた天使は無様にバタバタと身体を動かす、しかし怒り狂った暴君はその凶刃を止める事はなく、徹底的に身体を切り刻み、打ち砕き、引き千切った。

【威光の主天使】、美しい羽の集合体であった嘗ての面影は無い。その身はズタズタに切り裂かれ、神々しく輝いていた羽も、威光の象徴たるその冠も、悪を滅ぼし善を救う為の腕も、その全てが形を残す事なく大地に散乱していた。

驚くべきはこの惨劇、時間にしてほんの数秒の間に行われた事だ。凶化状態限定の必殺技とも言える威力爆発、最速の多連攻撃アクション。

必殺技とは読んで字の如く、相手を必ず殺す【技】である。故にこの凶化連続攻撃はタイラントにとって必殺技である事に間違いはなく、数少ない切り札の一つと言っても良い。

因みにこの技に明確な名前は無い。好きだったレトロ格闘ゲームの強キャラ、殺意の波動を極めし修羅の必殺技に敬意と愛着を込めてタイラントはこの技をこう呼んでいる……

【瞬獄殺】と。

「て、て、天使があ！天使があ！」

先程までの威勢は何処に行ったのか、大の男がお漏らししながら叫んでいる。砂埃のカーテンも捲られて哀れな奴等の絶望劇場第二幕が盛大に開演した。

まずは最高位天使（笑）の解体ショー、いや解体処理現場の見学と言った所か。既にその形を維持している事自体が不思議でさえある威光の主天使。その無惨な骸の上に立つ暴君は踏みつける脚に力を入れ、天使の骸を大地ごと容赦なく踏み潰す。

限界を迎えた主天使の最後はゴシヤッと音を立て、残った身体が砕け散り呆気なく現世から姿を消した。

ニグンには、もう何も打つ手も切り札もなかった。

天使が砕け散る様子は、まるで夢でも見ているかと錯覚した。あまりに信じられない事が一度に起きすぎて頭と精神的な処理が追い付かない。そして部下達が一齐に俺の方を見ているが煩わしくて堪らない。俺を見るな、俺を見ても何も変わらない！と怒鳴りたい衝動をグツと抑えた。

「ま、魔神だ……」

【魔神】誰かがそう呟いた。

古の伝説で十三英雄によって倒されたとも、封印されたとも聞く邪悪なる存在。

目の前の化け物やその後ろの集団からら滲み出る禍々しい波動は封印から解き放たれた【魔神】と言った方が正しいだろう。だが、今更そんな事が解った所でどうにもならない。全ては遅すぎたのだ。何もかもが遅すぎた。

「流石のお手並みだ我が友よ、その力に最高の敬意を示そう」

アインズが拍手をしながら静かにタイラントの隣へと歩いてきた。タイラントは首元に「Tウィルス抑制剤」を投与し、身体に満ち溢れる力の要因であるTウィルス活性を瞬時に抑える。すると凶悪なまでに膨張した身体はみるみる萎み、何とか人間に見える範疇に戻る。

しかし、その様子はまるで安いスプラッター映画を見ているかの如くグロテスクであった。最後には何処から出てきたのか防爆コートと鋼鉄の拘束具がタイラントに装着され、プシューと言う蒸気の排出と共に元のタイラントになった。

「では、余興は終わったか？こちらも忙しいのでね、終わりにしよう」

「ちよ、ちよつと待って！待って欲しい！アインズ・ウール・ゴウン殿、いや様！」

「全く、覗き見とは感心せん。貴様等の仲間は覗きが趣味なのか？私の対情報系攻撃性防壁が発動したから大して覗かれていないが気分が悪い」

ニグンは本国から監視されていた事に驚いたが、今はそれどころでは無い。何としても助かりたい、その一心だけがニグンを突き動かしていた。

「わ、私達！いえ、私だけでも構いません！い、命だけはどうか助けて下さい！」

藁をもすがる思いでニグンは必死に懇願する。地位も意地もプライドも、恥すらかなくなり捨てた醜い「人間の本性」剥き出しの光景がそこにはあった。

『あーらら、指揮官が部下を見捨てたよ』

『死に物狂いってやつですね……生で見ると結構エグいなあ』

『生の感情剥き出しでは、理性的な会話など絶望的だ』

『しかし、対応に困るなあ。全員連れ帰るとなると正直面倒だ』

『団長、部下を見捨てた屑隊長だけで良いのでは？』

『確かに、仲間を、部下を見捨ててまで生き残りたいなら……生きてる事を後悔させてやりますよ』

『決まりだ、じゃあ俺とシズは先にナザリックに戻ってニューロニスト達に準備する様伝えるわ』

『お願いします。ああ、やっと帰れる……』

『すこぶる疲れた……気がする。疲れない身体の筈なのに』

必死に何か喋っているニグンを無視してタイラントとシズは歩き出した。この哀れな人間は死よりも恐ろしい事がこの先待ち構えている。まあ、自らが望んだ事なので同情の余地は無い。我らナザリックに喧嘩を売った時点で人生終わった様なものだが。後は団長が上手くやってくれるだろうから何の心配も無い。早く戻って特別情報収集官に拷問部屋の準備と調整、各種重火器の整備をせねばならないので、帰ったら帰ったでやる事てんこ盛り。

なのでタイラントとシズは足早にナザリックへと戻って行った。

く ナザリック地下大墳墓 玉座 く

「申し訳、いけません、でした……」

シズ・△は片膝を付き、深々と頭を下げ謝罪している。

全てのやる事が終わり、アインズとタイラントはアルベドとシズに何か褒美でもやろう考え、玉座に呼んだのだがアルベドがその前にやらなくてならない事があると言っ

た。先の戦闘でのシズの命令不服従に対する査問が優先され現在に至る。

そこにはプレアデスの副長でもあるユリも呼ばれ、監督及び教育不行き届きを問いただされており、「頑張った者にご褒美あげるアットホームな雰囲気」は其処には無く、何となく重たい空気が玉座を支配していた。

「シズ、貴女の行動は間違っていない。でもアインズ様の御命令を無視するのはプレアデスとして、許されるものではないわ」

「全ては私の教育不足です。アインズ様、我々プレアデス如何様な処分でも甘んじてお受けいたします……」

「良く、ヤツタ、シズ。許ス」

重苦しい雰囲気をタイラントが一気にぶち壊しにかかった。こんなパワハラ紛いの雰囲気ではナザリックはブラック企業になってしまふ、そんな事はさせない！強い使命感の乗った一言はアルベドをワンパンで沈黙させた。

「しかし、タイラント様……」

「良いのだアルベド。シズとて悪気があった訳ではあるまい。全ての罪を私は許す」

アインズのこの一言で全ては片付いた。アインズとタイラントは顔を見合わせると示し合わせたかの様に頷く。

「この場の皆に徹底するが私の主義は【信賞必罰】だ。故に此度の件で厚い忠誠を示した二人には褒美がある。アルベドは私から、シズにはタイラントから褒美を渡す」

アルベドはアインズから褒美を手渡され、身体を小刻みに震わせている。表情や佇まいに特に変わった様子は無い。しかし、アインズは思う。まるでアルベドが噴火前の活火山の様な気がしてならなかった。

一方シズはタイラントの前まで来ると深々とお辞儀した。そして、顔を戻すと目の前には想像もしなかった【物】があった。

「し、射程400、フェイズドプラズマライフル……」

それは間違い無く【神器級】に部類される武器であった。一発の威力は雷の第8位階魔法に匹敵する威力を誇り、その操作性や速射性能は数ある銃器の中でもトップクラス。入手方法も難易度も超絶級のプラズマライフルを前にシズの頭はショット寸前だった。

「あり、ありが、ありがとう、ござま、ござます……」

「いけない、シズったらショットしてしまいました。アインズ様、タイラント様、シズをお下げしてよろしいでしょうか？」

「良い、任せたぞユリ」

「畏まりました、では失礼致します」

「で、では私も持ち場に戻ります……」

「お、おう、アルベドよご苦労だった！下がって良いぞ！」

アルベドは玉座の間の扉を閉める瞬間までは本当に優雅だった。

「いよっしやああああ!!」

玉座の間の壁は思っている以上に薄い。アインズとタイラントはしみじみ思った。

冒険者【ハンク】編

行動準備

その日、アイNZは絢爛豪華な自身の執務室でタイラントと談話をしていた。

他愛もない雑談から始まり、お互いの情報整理、今後の方針や必要なアイテムの有無、戦略的拠点の確保、人員の割り振り、資源や脅威になりうる国家の情報収集等、ゲームでは無い本当の統括者の立場になってみると考えなくてはいけない事は山の様にあり、しがないサラリーマンだったアイNZにとっては未知の悩みでもあった。

天の助けか、偶然かは神のみぞ知る所だがタイラントの中身の職業は国防軍人であり又指揮官でもある。士官学校での成績は中の上辺りだったが、若くして佐官まで上り詰めたその実力と行動力。

それは数多くの実戦と修羅場を経て培った経験とその手腕があつてこそその実績だった。タイラントがギルドを離脱したのも狂乱と混沌が渦巻く中東近辺へ派兵されたからだとアイNZも知つてはいたが、積極的に仕事の話はしない様にしようと言うギルド暗黙のルールがあつた。それに配慮し今まで遠慮していたが事態が事態な為にアイNZはタイラントに助言を求めたのだ。

『ふむ、独裁者として部隊、ましてや「国家」を運用した事が無いから分かん!』
『いやいや、分からんって早くないですか?!』

『団長、軍隊つてのは命令があつて初めて行動が出来る。これは分かりますね?』
『ええ、まあ……それぐらいは』

『今の我々の立場は国家元帥と將軍みたいなもんな訳で、俺がやつてた木っ端中隊長とは立場が違い過ぎるんだ。指揮官には指揮官の、兵隊には兵隊の役割つてのがあつてだな……俺はどつちかつて言ううと後者の方で前線指揮官だったからなあ』

『一般人から見たら違いが良く分かりませんよ』

『うーん、命令を出す側と実行する側の違いか? 要するに「明日此処で死ぬ」と言う有難い命令を俺は「明日此処で共に死ぬのう」と部下に命令する立場だっただけさ』

『な、成る程……』

『だから団長は難しい事考えないでドーンと構えておけば良いんだ、ドーンと』

『でも、現場でなきや分からない事もありますよね?』

『勿論、現場は常に変化している。あらゆる状況を分析し判断する能力が現場に居る指揮官には必要不可欠だな』

『だったらやはり現場に出てある程度の地位を確立するのも悪く無いか……』

髑髏顔を歪めながら……実際に歪んでいないが腕を組んで深く考えこむアインズ。

カルネ村以降、中々地上進出は進んではない。アンデッドである以上、迂闊に人間と接触すれば当然敵対されるだろう。なら、不可視や人間に限りなく近い見た目の者に人間社会に送り込めば良いのではないかとも思う……が、現場は常に変化している、慎重な判断を求められる場合もある。一つの判断ミスが大事を引き起こすかもしれない。ナザリックの存続を揺るがしかねないリスクを背負うのは精神的にも大変よろしくない。

『まあ思うに団長、今後は情報収集に力を入れるべきさね』

『確かに、特に”ユグドラシルのプレーヤーの有無”ですな』

『その通り、俺達の脅威になりうる存在の有無を確かめ、必要に応じて排除する』

『只でさえ、アンデットってだけでPKする奴が沢山居ましたし、我々も相当敵作りしましたしね……』

『ほとんど嫉妬と因縁の類いだがね、ゲームと現実の区別出来ない廃人共は恐ろしいぜ』
『この転移がナザリックだけでも限らないですし、いきなり攻め込まれたら堪ったもんじゃあない』

『繊細な判断が必要な作戦だ、俺が直接出張るしかなさそうだな』

『その見た目で（笑）？』

『ええ、何か（キリッ）』

H A H A H A H A H A H A ……

死体顔と髑髏顔が笑っている。不気味を通り越して最早恐怖絵図でしかないが本人達はツボったのか大爆笑している……何が面白いのかは不明だが。

アウラからの現時点での報告ではナザリック地下大墳墓近くの森林ではプレーヤーの存在は影もなく、森を抜けた先の山脈のふもとに広がる湖まで順調に進んでいる。元々、人が住みやすい環境ではない地域だったからかも知れないが一先ず、ナザリック近辺にプレーヤーの存在がなかった事に安堵していた。

故にもつと足を伸ばして都市規模の場所での情報収集が必要だとちようど考えていた所だった。アインズはタイラントも同じ事を考えていた事に改めて感心し、安堵していた。

しかし、一番の問題はアインズの不在を守護者、特にアルベドが承知するかが焦点になるとタイラントは踏んでいた。タイラントもアインズも上クリエイト・グレート・アイテム位道具創造を使用すればアンデッドの見た目の問題は解決される。一時、アインズが束縛された生活に嫌気がさして部屋から抜け出てたのを柱の影で見っていたから知っている。その不自然に柱からはみ出た巨体と様子をエントマに見られて本気で心配されたのは秘密だ。

兎に角、アインズ不在間のナザリックを取り纏め、運用出来るのは守護者統括のアルベドをおいて他に居ない。そもそも、アインズが不在するならタイラントが残り指揮を

すれば良いのではとも思うが長らく席を空けた事と極めて複雑化された地下要塞とも言えるナザリックを長らく不在したタイラントに完全に御せる自信がなかった。不完全な運用をする位なら完璧な運用が出来る部下が居るなら任せられた方が良いに決まっていると団長を説き伏せて晴れてアインズとタイラントは地上へと出る決意に至った。

「成る程、アインズ様とタイラント様は長らくお出かけになると、タイラント様はシズを連れて行くのですね？ 畏まりました。ではアインズ様のお供は……」

段取りを決めてアインズは緊張した面持ちでアルベドを呼んだ。タイラントとの綿密な作戦を実行する時が来たのだ。

然り気無く、自然に、さも当然な会話の流れでナーベラル・ガンマだと伝える……

遂にこの時が来たかと、アインズとタイラントはそう思った。生睡を飲み込み（気のせい）吹き出す汗もそのままに（気のせい）、覚悟を決めてアインズは言った。

「いや、アルベドにはナザリックに残っ「お供は私が致します」……え？」

アインズに被せる様に満面の笑みでアルベドは言った。そう、〔ナザリックに残って〕の部分を上書きしたかの如く、完璧なタイミングで「お供は私が」を被せたのだ。

アルベド……先の先を潰しに来たかっ！ 出だしの時点で想像よりも遥かに強敵だとアインズは確信した。

『こちらアインズ、タイラント応答せよ』

『らりるれろ！らりるれろ！らりるれろ！』

『ちよ、ま、タイラントさん?!』

『ハハツ！無様だな！アインズウ!!』

『タイラントオオオオ!!』

脳内無線の様式美をするアインズとタイラントだがアインズの置かれた状況が好転することはなく、アルベドの説得はやはり相当難しいとタイラントは思った。

まあ、アインズが言つて駄目なら片言タイラント voice では絶対無理だとタイラントは確信していた為、暇なので久々の上位道具創造を使用する事にした。

幻想的な光が身体を包みこむと、体格が異常な巨体から一般的な巨体へと縮む、身に纏う漆黒の戦闘服と真紅のアイピースが特徴的なガスマスクと黒色の鉄帽、身体にフィットした防弾チョッキ、鋭利なバヨネットと拳銃を持った近代的な兵士のそれになったタイラント。

軽く跳び跳ねたり、試しに拳を突き出してみる。シュツツと拳が空気を切り裂く鋭い音を鳴らし、ならばと振り抜いた蹴りはブーツの重さを感じさせない速度で空を切った。

繰り出される拳と蹴り、鋭く振られる銃剣、【CCC】とも言われる近接戦闘技術はタ

イラントの最も得意とする事の一つだが、現実での身体よりも良く動く、いや動き過ぎる。

それは最高峰のモンク故に当たり前と言えば当たり前だが、あまりの身軽さにタイラントは驚愕し、感動していた。

「この姿になるのも久しぶりだな」

高ぶった感情のあまりに発した言葉がコレかとタイラントは自身のボキャブラリーの貧相さに少し呆れた。

もつともガスマスクを通しての声はお世辞にも良い声色ではなかったが片言タイラント voice ではなく、ちゃんと喋れていた事に遅れながら本人、及びその場に居た者は驚きを隠せなかった。

「普通に喋れているのか？タイラント」

「マスク越しを普通と言えるのか疑問だが片言ではないらしい」

「そうか、だがその姿……まるで【死神】だな」

全身、黒一色と真紅の目をしたその姿は死神の名に相応しいとアインズは称賛した。

「ああ、ナザリックに楯突く愚か者限定だがね」

タイラントは親指を立て、自身の首を切る様に横に一線した。見た目は縮んだがパワー自体は変わっていない、むしろ身軽になった分凶悪さに磨きがかかったと言っても

過言ではないだろう。

モンクとガンナー、中近距離戦闘に対応出来るタイラントに死角はない……とも言えない。

この姿では重火器の使用は当然制限を受ける。筋肉モリモリマッチョマンの変態ではないのだから。固定砲台や重機関銃などは撃てない。精々、軽火器程度までであろう。しかし、あまり人目がある場所で近代兵器を使うのも問題ありだ。面倒事になるに決まっている。

剣にしる魔法にしる、技術と才能がものを言う。だが、銃は違う。素人でも使う事が出来て、簡単に剣や魔法の達人を葬れる。

剣の技術も、武技も、詠唱も要らない。尚且つ連発が出来て、大魔法に匹敵する威力……そんな便利な物があると権力者が知ったとしたらどうなる事やら。

顔に群がる虫をいちいち叩き潰す時間が勿体ない。時は金なり、善は急げ。せつかくの現地行動を有象無象に邪魔されては堪ったもんじやない。既に拳が凶器、ならばそれを生かさねばとしみじみ思う。

隣でアルベドを必死に説得するアインズを見て御愁傷様と心から思ったタイラントではあったが無情にもその場を後にする。

扉を開けると入れ替わる様にデミウルゴスが部屋へと入ろうとしていた、デミウルゴ

スはタイラントに深々と一礼するとアインズとアルベドの痴話喧嘩にしか見えない戦場へと身を投じていった。

『タイラントから团长へ、援軍を投入した。繰り返す、援軍を投入した、オーバー』

『援軍確認、これより我は突貫します！』

『幸運を祈るっ』

頑強に抵抗していたアルベドだったがデミウルゴスが投入された事により、結果的には作戦は成功した。

だが、デミウルゴスの魔法の一言にもアルベドは鋼の精神力で正に悪魔の甘言をしりぞけ、すったもんだ揉めた結果、出発日までの間アインズと添い寝（おさわり可）でアルベドが遂に折れた。

デミウルゴスをもってしても簡単には攻略出来ぬ恋する女はある意味でナザリツク最強なのかも知れない……

冒険者登録

「これより状況を開始する」

ガスマスク越しの低い声が薄暗い部屋に響く。タイラントの研究室兼私室で最終的な作戦の確認と装備品の選定、点検をする為シズを呼び寄せたのだ。

アインズとタイラントによる二方面作戦、敵対勢力下における情報収集活動及び、偽装身分での地位獲得が本作戦の骨子であり、ナザリックが存続する上で決して失敗の許されない重要な作戦であると改めて自覚させる。

「現時点をもって俺の呼称は【少佐】とする」

「少佐……了解しました」

深々と頭を下げるシズを見るタイラント。少佐って名前と言うか階級じゃないかと思っただろう？

まあ……その通りなのだが。

実を言うとタイラントは新しくゲームをする際の名前を決めるのに時間を掛けるタイプであった。自分の分身を作るのだから絶対変な名前にしたくないと出だしから毎

回試行錯誤している。

今回の作戦に当たっても偽名とは言えモモンガだから「モモン」と言う安直な名前にした団長に密かに驚愕し、言い知れぬやるせなさを感じていた。

「名前から【ガ】一文字抜いただけやんけっ！団長もつと熱くなれよっ！」

……と人知れず部屋で叫んでいたのは内緒だ。

しかし、団長の名前を散々デイスつていた割に結局タイラントも新しく名前を決めきれず、最終選考に残った「タイラー」と「ボウク」も安直以外の何物でもなく結局の所、人が考える事など大体一緒だと言う事が判った。

このまま安直な名前を使うのも何か癪なので生前、いや前職の階級【特佐】を制式な階級に直した名称【少佐】で何とか落ち着かせた。

「火器の使用は基本的に命令あるまで使用不可だ。代用としてコイツを使え」

タイラントは柵から一挺のボウガンを取ると投げ渡した。急襲突撃メイドから火器を奪ったら存在する意味さえ危うくなってしまふ。時代的にも不自然でない原始的だがレーザー兵器が蔓延る現代においても君臨する元祖無音兵器、弩。

名を怒りの強襲フューリーアサルトボウガン弩。

かつて、味方から見捨てられた兵士がたった一人で敵を壊滅させた。その際に使用した武器は辛うじて残ったコンバット・ボウだけだったと言う。

その憤怒の兵士が用いた弓を参考に作られた経緯がある強襲弩だが、所詮弓矢でしょ？と侮るなかれ。

この強襲弩はなんと鏃が変えられるのだ。通常の鏃だけでなく戦闘ヘリ、いやドラゴンすら木端微塵にする威力の擲弾鏃や、ワイヤー仕込み、鎗矢 e t c ……多目的に使用できるボウガンなのだ。

「状況に応じて使いこなせ、出来るな？」

「問題、ありません」

「出発は別示する、解散」

「コプー」

一礼をして部屋を出て行くシズを見送り、部屋に残るタイラント。先発のアインズ達が出発してから出るので後発組は出発まで多少時間があった。

（必要な装備も揃えた、認識の統一もよし、対魔法用具も万全……忘れ物は無いな）

これではまるで遠足前の子供じゃないかと思うが高ぶった感情は精神抑制の効果で一気に冷める。

だが、このじわりじわりと胸の奥で静かに燃える火はそんな簡単に消える様なものではない。異形の怪物になり人間性など欠片も無くなったと思っていたが、どうやらそんな事は無いらしい。

精神は人間、身体は異形の怪物、本当の俺は一体どっちなのか。

目の前に現れる自身の幻影に、もう幾度となく同じ自問自答をしている。しかし、明確な答えなど出る訳もなく、無意味な時は過ぎて行く。

この神の悪戯としか言えないこの“イカれた世界”で俺はどうあるべきなのか？銃剣の切っ先を幻影に向けタイラントは一人呟いた。

「例え俺の行き着く先が、地獄の釜の底だったとしても俺は其処でも戦うだけだ」

銃剣を横に一線鋭く振り、自身の幻影の首を切り裂く。幻影が消えるのを確認し、腰のホルダーに銃剣をしまうとタイラントは静かに部屋を後にした。

くり・エステイーゼ王国

エ・ランテル、三重の城壁に囲まれた城塞都市。隣国のバハルス帝国とスレイン王国の境界に位置するリ・エステイーゼ王国の軍事拠点でもある都市だ。

その三つ内、丁度真ん中に当たる市民の生活区、商業区エリアに“冒険者組合”は存在する。

対モンスターに特化した傭兵とも言うべき冒険者だが、実力だけで成り上がる事が可能だと考えれば多少は夢がある職業かもしれない。

だが、担保に自分の命を出さなければならぬのは言うまでもないだろう。

今日も冒険者達や依頼者がひっきりなしに出入りする組合を見るにやはり冒険者と言う職業は無くしてはならないものだと言うことだった。

そんな組合近くの薄暗い通路の影から往来する人を伺う怪しい奴が居た。

情報屋【狐目のカパーゾ】

このエ・ランテルで裏から表まで様々な【情報】を売る小悪党だ。

情報を売ると言っても大した情報など当然持ち合わせている筈もなく、大衆紙や噂に毛の生えた程度の情報しか知らない詐欺師だ。挙げ句、駆け出し冒険者を狙っては粗悪な地図やアイテムを売りさばく本物の小悪党なので質が悪い。

所詮は冒険者くずれの“ダスクワーカー”だが小悪党らしく身の丈にあつた依頼しか受けない事と弱者のみとしか戦わない、そして小心者特有の危機察知能力の高さから、ゴキブリ並みの狡猾さを持つ男として知られていた。

今日も狐目が冒険者組合の入り口が見える所で冒険者達が首から下げるプレートに目を配る。

狙い目は“銅”のプレートを下げる奴だ、そして見たことない顔の奴、ガキならば尚更良し。

開いているのか閉じているのかわからない細かい目で往来する人をくまなく観察する。

見覚えのある奴ばかりが出入りする中、カパーゾは組合の前で立ち止まる二人組に目が止まった。

一人は全身真っ黒な布製の鎧を着た男、大小のポケットが身体中に着いた変わった鎧だ。

しかし、最も特徴的なのが丸い兜と顔を覆った奇妙な仮面だ。真紅の大きな目玉と頬に突き出た平たい筒の様なものが男の不気味さに拍車をかける。

しかし、赤目の男以上に目が行くのは隣に居る美女だ。

淡いピンク色の長い髪と片目を隠す眼帯、茶色の全身を覆うローブだけのシンプルな身なりだが、精巧な人形の様な美貌に只々目が奪われる。

そもそも、最近も冒険者組合に絶世の美人が現れたと話題になった。

数日前、黒髪の美人が現れたが今度のも勝るとも劣らぬ美貌である。

だが、前回もそうだが美人の隣りには見るからに屈強そうな男が必ずいる。

黒髪美人の隣りには絢爛華麗な全身鎧を身に纏い、二本グレートソードを背負った誰が言い出したかは知らないが”漆黒の戦士”だったか？

そして今回の男は見る者が見れば分かるその立ち振舞いは「暗殺」を生業にしている奴だと直ぐに分かる。

近寄り難い濃い殺気を放つあの仮面の男は一体何人の人間を闇に葬ったであろうか。

まともな考えが出来る奴ならば不必要に近寄りほしくない。

俺だつてあんなヤバい奴に商売なんてしない。金より自分の命あつてのものだから。しかしながら、綺麗な花には得てして多くの虫が群がるもんだ。

ほら、命知らずの野郎共がああ二人にもう目をつけている。

「同業者か冒険者だが知らんが間抜けなこつた」

不幸な未来しか見えない間抜けにそう吐き捨てるとカパーズは立ち上がり、目に付いた如何にも”お上りさん”な駆け出し冒険者の方へと近づいて行つた。

タイラントこと少佐とシズは冒険組合の前で少し建物を確認すると中へと入つた。

中に入ると奥にあるカウンターが目に入り、そこが受付なのだとい目で分かつた。

まだ冒険者として登録していないのでまず登録から始めなければならぬ。異世界にもやはりお役所仕事つてのは存在するのかと自然とため息が出る。

カウンターに向かつて歩き出す辺りにいる有象無象の冒険者達が、タイラントの物珍しさからかシズの容姿からか知らないが舐め回すように見ている。煩わしい視線だが此方から問題を起こすつもりもないので、特に反応する事なく歩を進めた。

「……冒険者として登録したい」

ガスマスク越しの低い声に受付嬢の笑顔が少し引きつった。まあ、こんな不気味マスクに声をかけられたのだから無理もない。

「は、はい！新規登録の方ですね！」

「俺だけでなく、連れも同じく登録を頼む」

後ろに居るシズの方を見てから受付に言う。その更に後ろの冒険者達はシズが単独かと期待していたのか「やはり連れだったのか！」と落胆の声と大きなため息が部屋に響いた。

その後、受付嬢から冒険者の軽い説明を受ける。説明されて分かったのはこの「冒険者」と言う職業は中々面倒だと言う事だ。

冒険者になると渡されるプレート付き首飾り、これが冒険者としての力量を示す物であり、階級である。駆け出しに配られるプレートは銅。軍隊ならば二等兵と言った所か。

当然、二等兵には二等兵に見合った依頼しか受注出来ない。行き急いだ冒険者を無駄に死なせない為の処置であった。

「こんな、小遣い程度の依頼しか出来んとは……」

タイラントはマスク越しに見える張り出された依頼書を見て落胆する。文字解読と言語理解の効果もつ指輪を装備している為、日常生活に支障はない。

一通り目を通し、深い落胆と共に受付嬢に訪ねる。

「もつと難しい依頼は受けられないのか？」

「規則なので……申し訳ありません」

主に採取と雑用とも言える依頼しか受ける事が出来ないとなると、冒険者として名を上げるには一体どれだけの時間が掛かるのか……想像するだけで憂鬱な気分になる。

タイラントが受付嬢とやり取りをしているさなか、組合の扉が勢いよくドカンと開かれ、開くと同時に息を切らし、血だらけの男が中へと転がりこんだ。

突然の出来事にロビーは静まりかえるが、弱々しく立ち上がった血だらけ男の叫び声で一同は凍りつく。

「城、門近くで、ま、魔物が……現れたっ」

打算的討伐

血だらけの冒険者が発した言葉に騒がしかった組合のロビーは一気に静まりかえった。

このエ・ランテルに、ましては城門近辺に魔物が現れるなど前代未聞の事態に他ならない。

街、それに続く街道は頻繁に冒険者による魔物の討伐は行われている。勿論、何事も完全と言う事はありませんが、それでもリ・エステーゼ王国の要所の城塞都市である。安全面は其処らにある村程度とは比較にもならない。

駆け込んだ冒険者のプレートは「ゴールド」であり冒険者の中では中堅層に位置する。個々の技能や才能もあるがこの男が決して弱いと言う訳ではない。寧ろ手練れの冒険者が城門付近で魔物と戦い、撤退を決意する事の意味は語るまでもない。

「おい！大丈夫か！」

自身に駆け寄る冒険者に肩を借り何とか起き上がる男。身に着けた鎧は所々がへこみ、手に持つ盾は半分からは破け、剣に至っては柄を残して折れている。

想像するに容易い光景がこの街の目と鼻の先で今も行われているのだ。

「コ、カ、リス……コカトリスが……」

「何っ、コカトリスだどっ!？」

その時だった、エ・ランテルの街に鐘の音が鳴り響いたのは。

街の鐘が鳴ると言う事は即ち「緊急事態」である事を意味し、道行く人は阿鼻叫喚しながら逃げ惑い、商人達は屋台の売り物を必死に仕舞おうと右往左往する。

そして、警鐘が鳴ると言う事はもう、「城門付近」の事態ではなくなつたと言う事だった。

「動ける奴は全員行くぞ！もたもたするな！」

「応！」

ロビーの冒険者達は各々の得物を手に組合から勢い良く飛び出して行く。数にして20〜30人程であろうか、この世界のコカトリスがどれ程強いかイマイチ良く分からないタイラントだが、血相を見るにそれなりにヤバい魔物なのだろう。

「……コカトリスとやらは強いのか？」

顔面蒼白の受付嬢にタイラントはそう尋ねた直後、「何を言ってるんだコイツ」見たいな感じで受付嬢に睨まれた気がした。

そして「まあしようがないか初心者だし」と小さな声でボソツと呟き、深いため息と共に受付嬢が答えた。

「コカトリスは数いる魔物の中でも特に危険な魔物で、対象を石化させるプレスや強靱な身体、オリハルコン級の冒険でも苦戦する強力な魔物です！」

「成る程、感謝する……シズ行くぞ」

「コピー」

タイラントは受付カウンターを後にし、入り口へと向かう。

どうやらコカトリスとやらは中々に強いらしい。この体の肩慣らしには丁度良い相手かもしれない。

不気味なマスクで表情は分からないが受付嬢は冒険者成り立てのこの男がコカトリスの元へと行くと確信した。

「ちよつ、ちよつと待ちなさい！^{カッパ}銅の貴方達が敵う相手じゃないのよ！大人しく此処に

居なさい！」

「……人手が足らんのだろう？」

「それでも貴方が行く必要はありません！組合の権限を行使してでも止めますよ！」
恐らくはタイラント達の身を案じての老婆心だろうがこのままでは埒があかない。

当初の予定から脱線する事になるが仕方ないと割りきった。

この魔物の襲撃は俺達の「名を売る」千載一遇の大チャンスと言って良い、絶対逃す訳にはいかない”イベント”に他ならない。

「こんな下らん【物】で俺を判断するな」

タイラントはそう言うのと貰ったばかりのプレートを引きちぎり、受付へと投げ渡す。あまりに突拍子な出来事に受付嬢は動く事が出来なかつた。

「登録は辞めだ、【冒険者】として駄目なら【個人的】に行く、文句あるまい」

「ま、待ちなさい！」

我に返つた受付の制止を背にタイラントとシズは組合を後にした。

くエ・ランテル居住区 中央広場く

普段であればこの広場は市民の憩いの場だ。広場の中央には綺麗な噴水があり、季節の花が広場を彩る。

そんな市民のささやかな憩いの広場は一瞬で地獄と化した。

国軍兵士が外壁に設置されたバリスターや弓で街へと侵入を阻止すべく飛来したコカトリス相手に城門を閉め奮戦したのだが逆効果で、攻撃に憤怒したコカトリスが突如急降下、呆気なく街への侵入を許してしまった。

幸いにも、広場には駆け付けた冒険者達が集結しており突発的ではあったが降着したコカトリスとの死闘が開始された。

合図と共に一齐に矢と魔法が放たれ、雄叫びと共に力自慢の戦士達は肉厚な大剣や刺突戦槌を振りかざし、剣士達は鋭利な剣で斬りつける。

しかし、戦士の重い一撃もコカトリスの体勢を多少崩すだけに留まり、鋭い剣や矢、魔法さえも分厚く硬い羽毛を貫く事は出来なかった。

「プレスに気をつけろっ！」

一人の冒険者が叫ぶと同時にコカトリスの口から濃い緑色の噴霧状のプレスが吐き出される。

その緑色の霧に包まれた冒険者は断末魔を上げる間もなく、一瞬で無機質な石像へと変わってしまった。

石化プレスの範囲はそれほど広くはないが、近接職が斬り込むには危険な間合いに撒き散らされ、プレスの容赦のない威力を目の当たりにした以上迂闊に近づく事は出来なかった。

遠距離から攻撃するにしても、頼みの魔法はこの場に居る魔法詠唱者の威力では決定的な火力不足で致命的なダメージを与えられず、事態は膠着状態になってしまった。

「コイツラハ、オレヨリヨワイ」

目の前でたじろぐ人間達を前にそう判断したコカトリスは耳を貫く甲高い奇声を上

げると翼を大きく広げ首を振りながら、冒険者達へと向かって走り出した。

鳥独特の歪だがその巨大からは想像も出来ない速度で立ち足はだかる人間達を次々と撥ね飛ばし、いとも容易く冒険者達の防衛線を食い破り蹂躪した。

必死の抵抗むなしく、一人また一人と冒険者達の数は減っていく。

力の差がありすぎる、これでは皆殺しだと誰かが言ったが、そんな誰もが感じている絶望的な事実を受け入れる訳にはいかなかった。

この化け物を倒せる者が来るまでの時間稼ぎでも良い、この広場から絶対に出す訳にいかない。

決死の覚悟をした冒険者達は再度、悪夢の渦に突撃を開始する。

己の全てを懸けて……

【ヨワイ、コイツラハ、ヨワイ】

そう、改めて感じた。

自慢の鋭利な嘴で目の前の人間を軽く啄めば構えた盾を破壊し、身体を貫く。すると人間は赤くなり倒れる。

……楽しい。

強靱な脚や羽を振れば近くにいる人間が赤くなりながら沢山飛んでいく。

……楽しい。

一度ブレスを吐けば面白い様に石のオブジェが出来上がる。それを踏むと心地よい音でバラバラに崩れる。

……楽しい、楽しい、楽しい、楽しい、楽しい、楽しい！

動物的な本能だろうか、強者ゆえの驕りかは定かではないがこの若い魔物は今、初めて感じた快樂の赴くまま弱者の殺戮を楽しんでいた。

人間が命尽きる事で咲かせる「血の花」と「人間の血の味」を味わいながら、楽しんでいた。

その時だった。

「……おい、鳥野郎」

不意に頭に直接語りかけられた、そんな気がしたのは。

必死に斬りつける人間達を無視し、声がした方を振り返るコカトリス。

言いたくない違和感が、恐怖が自身の背中から強く感じる。

しかし、目を凝らし良く見た先に居た違和感の元は只の「人間」だった。

途端コカトリスは先程以上に、けたたましく咆哮し怒り狂った。

その様子は、軽く難ぐだけで壊れる人間に自分が少しでも恐怖を感じた、弱く愚かな人間ゴトキに恐れをなした事をかき消すが如く凄まじい咆哮だった。

地獄と化した広場にいる全ての者が怒り狂った化け物に恐怖する。突然凶暴化した巨体は近くにいる邪魔者を尾の一振りで薙ぎ払い、吹き飛び倒れた所にプレスを吐き出し一掃する。

そして、怒りに歪んだ顔で半ば残骸となった噴水の方を睨む。

その魔物の怒り視線が向けられた方向、半壊した噴水を背に奇妙な仮面を被った赤目の不気味な黒い男、身の丈程の長さの弩をもった女の二人が立っていた。

自身の強さを誇示しているのか、威嚇しているのか、翼を広げ、天に向かい咆哮するコカトリス。

「オレノガツヨイ！オレノガツヨイ！」

まるでそう言っているように聞こえた。

お前らは弱いのだと、軽く捻り潰せる餌でしかないのだと、そんな態度で対峙する鶏が喚いていた。

絶対強者の主君に対し、多少身体が大きいだけの鶏がまるで弱者を脅す様なその姿は酷く不敬で不快。

シズにとっては見るに絶えないものだった。

「……畜生風情が」

普段あまり感情を顔に出さないシズがこの時ばかりは怒りに顔を歪め、同時に構えた

弩の引き金を引いた。

その直後、甲高く咆哮するコカトリスの顔面に矢と蹴りが派手に炸裂した。

小さな目に黒檀の矢が深々と突き刺さり、まるでアンテナが目から生えた様になっている。

そして、いびつに歪んだ嘴は蹴りの衝撃で碎け、ドス黒い魔物特有の血が辺りに飛び散り、咆哮とは違う痛々しい鳴き声が広場に響き渡る。

この一瞬の出来事だが、蓋を開けてみれば単純なものである。

コカトリスとタイラントの彼我の距離は約20m程離れていたが、その距離を軽い跳躍で一気に詰め、その顔に飛び蹴りをかましただけ。

一方、シズの弩から放たれた矢はまるで誘導されていたかの如く、真っ直ぐ目玉に吸い込まれ串刺しにした。

シズに渡された怒りの強襲弩は“使用者の怒り”に応じて威力や性能が向上する効果を持つ武器だ。

自分達にとつて神にも等しい至高の御方を侮辱されたシズの怒りは相当なもので、今回武器の性能は最大限に発揮されたと思われる。

タイラントからしてみれば欠伸が出る程のやり取りだが、並みの人間にとつては視認すら出来ない達人の領域。

それこそ、劍聖や戦士長、英雄の域に達してやつと見えるか見えないかと言った所か。当然この場に居る冒険者達、コカトリスでさえ何が起きたのか全く理解出来なかった。

「あ、あんたは一体……」

突然、目の前に現れた仮面を被った黒服の男にそう尋ねた一人の冒険者。

コカトリスの鋭い鉤爪の一撃を盾越しに受け重傷ではないが継続して戦うには厳しい傷を、腹部と腕に負ってしまい動くに動けないでいた。

いつ殺られるか分からない、そんな恐怖と戦う中、いきなり奇妙な仮面の男が現れたのだから驚くのも無理はない。

「……詮索なら後にしろ、死にたくなければ下がれ」

「すまねえ、後は頼むー」

コカトリスの足元で倒れる生き残りの冒険者は如何にも怪しいタイラントを見て得体の知れない恐怖を感じたが、忠告に素直に従い素早く後方へと下がっていく。

深手を負いながらも無駄なく下がれる様子を見るに、伊達に魔物を相手商売している訳ではないとタイラントはしみじみ感じた。

一方、砕けた嘴と潰れた目から血を垂れ流し、感じた事のない痛みで見境なく暴れるコカトリス。

血の混じったブレスを撒き散らし、狂った様に暴れているが、タイラントは事も無げに近付く。

凶悪な速度で振りぬかれた翼を鼻先ギリギリで身体を反らして見切り、体勢を直しながら腰の入ったフックを腹部に抉りこむように叩きこむ。

その鋼の様な拳は、硬くしなやかな羽毛を穿ち、その奥にある肉や骨を砕きながら拳は腹へとめり込んだ。

もつとも頑丈な筋肉で守られた腹部に腕が肘の辺りまで食い込んでいる。口から吐きでる吐血の量から恐らく内臓に壊滅的なダメージを負った様だ。

瀕死のコカトリスの様子をみれば一目瞭然だが、放たれた拳の威力たるや凄まじく、大型トラック並みの巨体が殴られた衝撃で浮かびあがる程だった。

『グゲエ……』と断末魔の鳴き声を絞り出し、大量に吐血をしながら力なく前のめりにその巨体がドスンと倒れた。

正に一瞬の出来事だった。

黒い服の奇妙な奴が広場に現れてからコカトリスが倒れるまでがあまりにも早すぎて、誰も理解出来ていない。

応援要請したオリハルコン、アダマンタイト級冒険者ならばまだ分かる。

しかし、目の前に居る男、コカトリスを倒した男はプレートすら着けていない。

つまりは冒険者ですらない、言わば奇妙な黒服の一般人が強力な魔物を素手で倒したのだ。

先程まで怒号飛び交い、阿鼻叫喚の広場がシンッと静まりかえっていた。

「……拍子抜けだ、戻るぞシズ」

「コピュー」

タイラントとシズが事切れたコカトリスの骸を暫く見ていたが興味が無くなったのか足早に広場を去ろうとする。

「おう、兄さんちよつと待ちな」

野太い声で後ろから制止されたタイラント達は立ち止まりゆっくりと振り返る。

其処には男か女かはつきりしない体格の……重たそうな刺突戦槌を持った恐らくは女性が立っていた。

組合へ part 1

(これは少々……弱すぎやしないか?)

口から黒い血を垂れ流すコカトリスの骸を見下ろしながらタイラントは思う。

一目見て、まだ若い成熟しきつてない魔物だと判断したので、とりあえず「軽く」殴って様子を見ようとしたらパンチ一発で死んでしまった。

タイラントの予定では、このコカトリスとギリギリの死闘の末、何とか止めを刺し「あぶねえ、このマスクがなければ即死だったぜっ」とガスマスクの有効性を宣伝しつつ、と爽やかな感じで言いたかったのだが、初撃の一発で決着が着いたのでその目論見は御破算になった。

この世界の人間は前回のカルネ村の一件で其れほど脅威ではないと確認したが、魔物に関してはまだ情報は乏しく、情報不足の面も否めなかった。しかし、今回の魔物「コカトリス」には拍子抜けも良い所だと言いたいようがない。冒険者の中でも上位の者でも苦戦をするというだけで「期待」していたのだから尚更だ。

まだ見ぬ強敵との死闘やギリギリの攻防、その強敵を倒した時の達成感など、日頃の

激務で忘れかけてた”初心”と言うやつを思い出せるかと期待していたのだから。

(返せよ、俺のワクワク……)

しかし、蓋を開けてみればパンチ一発でお陀仏してしまう鶏ではないかと思うだろうが、個の強さで言えば十三英雄どころか伝説の魔神級の力を持つタイラントのパンチを耐えられる方が逆におかしいと考えるべきである。

まして、その辺にいる多少強い魔物程度が「必殺タイラント右フック」を食らえば大体の生命体は確実に死ぬであろう。

アインズですら、全力のタイラントの攻撃をまともに食らえば命に関わる程のダメージを負うと言わしめる、言わば近接職の極みに達している事をあまり自覚していないが故に出た贅沢な不満だった。

「……拍子抜けだ、シズ行くぞ」

何故だろうか、コカトリスの死体を見ていたら不意にケン●ツキーが無性に食べたくなってきた。

食欲など【生物兵器】たるタイラントには不要な欲求に他ならないが、”的場 巖”だった頃の残り滓だろうかさはさだかではないが、この時無性にジャンクフードが食べたくて仕方がなかった。

自分でもよく分からない食欲に襲われる……兵器としての沽券に関わる不思議事態

だが、どうしようもないので立ち去ろうとした時、不意に後ろから声をかけられた。

「何の用だ、……お嬢さん」

「ははっ、お嬢さんとは中々見る目があるじゃねえか！」

やはり女で合つてたかと心底安堵した。実は内心冷や汗だらだらものだったのは言うまでもない。

「阿呆、それはお世辞ってヤツだ」

更にガタイの良い女の後ろから変な仮面を被つた小柄な女が表れた。フードと仮面で一目見ただけでは性別は判断しにくいが目の中の“乙女”程ではなかった。

「……改めて聞く、何の用だ？」

「ああ、すまねえな。俺達是要請受けて来たまあ援軍だ。で単刀直入に聞くがよ、コレを殺つたのはお前さんか？」

無惨に横たわるコカトリスの骸を指差し、女はタイラントに問う。

特に隠す必要もないので一度死体に顔を向けてから、不気味な赤目マスク顔を頷かせて答えた。

「ああ、殺つた」

「冒険者でもねえアンタらが？ 笑えない冗談だぜ」

一触即発とは正にこの事を言うのだろう。

乙女（自称）は肩に担いだ己の得物だろう刺突戦鎚を構えた。

対するタイラントは拳を握り絞め、首を無造作に回し、足を軽く開いて拳を前に出し構える。

別に構えなくても良いのだが、身に染み着いた習慣なのだろうか無意識の内に自然と構えていた。

まるで爆発寸前の炸裂弾が目の前にあるかの息詰まる様な緊張感が辺りを包み、二度目のただ事ではない雰囲気野次馬や、生き延びた冒険者達は動く事が出来なかった。

（フム、なんだこの状況？）

俺、何か気に障る様な事を言ったであろうか？それともアレか組合に反抗したから偉い人から危険分子と判断されて消されるオチなのか？

おいおいおい、冗談じゃないのはこつちだ。地上デビュー初日でお尋ね者とか作戦が頓挫するじゃないか！

ぐぬぬ、ドヤ顔でナザリツクの守護者（プレアデス含む）に「この作戦、余裕だな（キリッ」って言って出てきた手前、恥ずかしくて帰れん！

い、いかん！何とかせねば……

表情はマスクで分からないが激しく動揺するタイラントはさておき、目の前に居る見るからに猛者の乙女の正体はエ・ランテルに存在する冒険者達の頂点、アダマンタイト

級冒険者であり【蒼の薔薇】メンバー、名をガガーランと言う。

カヨワイ乙女でありながら刺突戦鎧を巧みに操る謎多し可憐なる戦士（自称）なのだ。まあ、そんな事を知るよしもないタイラントは何とかして丸く収める算段を模索していた。

現段階において冒険者関係の揉め事、特に冒険者に刃傷沙汰を起こす気はない。

その気になれば、この場に存在する者全てを皆殺しにする事は朝飯を食うより容易い……が実行すると今後の活動に大きく影響し、場合によってはアインズ達をも巻き込んでしまう事態になりかねない。

あくまでも偽装身分の地位の獲得と情報収集が今回の作戦目的である。

目的を逸脱する行為は厳に慎むべきなのだ。

「おい、そのの脳筋共。いい加減にしろ」

一触即発で対峙する二人に呆れたのか仮面女が声をかけた。

するとその場に居るだけで腰が抜ける様なピリピリした雰囲気は消え去り、ガガーランは戦鎧を下ろすと豪快に笑いながらタイラントの肩を叩いた。

「ハハハッ、納得したぜ！ 兄さん強えな！」

「……………程々にな」

「謙遜することたあねえよ、ここ最近見た連中の中でも兄さんが一番強いぜ」

「……何度も言うが用件はなんだ」

全く話が進まない事と最悪の事態を回避した事、安堵と苛立ちが入り交じる複雑な心境のタイラントだが、何時までも長話しをする程暇ではないので多少語気を強めて問いかけた。

「ああ！お前はもう下がれ！話が進まん！」

業を煮やした仮面女がガガーランを押し退けてタイラントの前へと出てきた。

タイラントの前に立つと仮面女の小柄さが顕著に分かる。

(ふむ、小さいな……)

まるで小学生と大柄の外人位の差があるが、他人の身体的特徴を蔑む程、タイラントは無粋な男ではない。

あまり知られていないが、暴君でありながら一割五分位は紳士の要素を兼ね備えている生物兵器（紳士）は世界広しと言えどタイラントだけであろう。

因みにタイラントは身長小さめの女性はストライクゾーンではありませんので悪しからず。

「お前、今凄く失礼な事考えていたろ」

「……身長が低いな、としか思っていない」

「それが失礼だろ！……まあ良い、お前に聞きたい事がある組合まで一緒に来い」

「……俺は“冒険者”ではないぞ？」

「阿呆、事の経緯は聞いている。黙って着いてこい”新米”」

俺を新米と呼ぶ、事の経緯を知っている、と言う事はこの二人は冒険者組合経由でこちらに來た援軍なのか？

いや、寧ろ俺達受付にプレート投げ返しちやっただのに登録破棄になってなかったのか。

「……随分と良心的な職場だな」

「受付のジャネットは弟を亡くしている。冒険者になってすぐ無茶な依頼を受けてな」

「……成る程」

受付がやけにしつこく止めて來た理由が分かったタイラントはこの時少しだけ罪悪感を感じていた。

組合の決まり事や規則にただ従え、と強制されていたと思っていたので受付嬢が単に融通の利かない頭でつかちかと思っていたからだろうか。

何にせよ、もう一度組合に寄らなければならぬのだ。どうせ嫌でも顔を合わせるのだから、一言位は謝っておこうと思つたタイラントだった。

「だから一言位は謝っておけ」

（い、今そう思ってた所ですう、やろうと思ってきましたあ、言われるまでもありません
ですよ〜）

ガスマスクのお陰で表情は全く分からないが、やろうと思っていた事をやれと言われた時の何とも言えない敗北感を心の中で悪態について晴らすタイラントだった。

組合へ part 2

目の前で起きた事が信じられなかった、いや理解出来ないと言うべきか。

突如、街に来襲した魔獣コカトリス。その名に違わぬ力をもって街は人命と共に多大な被害を出したが、その最後は呆気なかった。

赤目の妙な仮面をした全身黒づくめの男と、まるで人形の様な隻眼の美女の二人組に意図も容易く討伐されたからだ。

コカトリスに命懸けで挑んだ俺達が決して弱い訳ではなかった、それだけは間違いない。

幾度の修羅場を切り抜けた手練れの冒険者達が束になってもコカトリスと言う魔獣はそう易々とは討伐なんて出来ない非常に獰猛な魔獣なのである。

だが、一部の例外で言うのならオリハルコンいや、アダマントイト級冒険者、または噂に聞く王国戦士団長ならば単騎での討伐も不可能ではないかもしれない。

それこそお伽噺に登場する勇者、十三英雄の領域に踏み込んだ力が有れば。

しかしだ、目の前のコカトリスをパンチ一発で物言わぬ屍に変えたのは見た事も、聞

いた事もない奇妙な二人組だ。

鋼の刃すら弾き返す魔獣の体毛を貫く拳を持つ者なんて存在するのか？暴れる魔獣の眼を正確に撃ち抜く、それこそ針の穴を通す様な緻密な射撃が出来る者がいるのだろうか？

最早これは馬鹿げた夢ではないかと錯覚さえした。

少なくとも俺は、このエ・ランテルにそんな事が出来る人間など知らないし、聞いた事すらない。

……でもまあ、今はそんな事を考えても仕方ない。

あんな化け物の鳥を真つ向から相手して、拳げ匂にドテっ腹に一発食らった上でこうして生きていられるのは他でもないアイツ等のおかげ以外のなにものでもないからな。

後であの赤目の野郎に（あの美人さんも含めて）一杯奢らなければならねえな……

【生存者】ゴールド級冒険者 孤狼のディアツカ。

「貴方達、無事だったの!？」

負傷した者や応援で駆けつけた冒険者達でござった返す組合に連行され、つい先程まで

問答していた受付嬢に組合に入るやいなや、凄い剣幕で言われた。

冒険者のプレートを投げ返した手前、心配されるいわれは全く無いのだが、表情を見るにこの女は本気なのだろう。

「……無事だ」

言葉少なく、要点だけを正確に返したつもりなのだが仮面女に何故か脛を蹴られた。

「もつと他に言う事があるだろう、馬鹿者」

脆弱な存在が何を偉そうにとも思う……が、致し方ない。階級社会において上下関係、先輩後輩の関係は絶対だ。個人の實力はともかく駆け出し冒険者？であるのだからここは黙って従う他に選択はない。

瞬間湯沸し器の如く沸き上がった負の感情は、これもまた一瞬で抑圧される。

アンデッド特有の精神耐性の恩恵に感謝せざるを得ない。

何故なら一時の感情に流されずに済むからだ。

元人間の俺が言うのもなんだが、ナザリックの一般的な認識として「人間は淘汰されて当然な存在」が浸透している。

下等な虫の様な存在、害虫、良くて家畜と言った所か。まあ十人十色と言う古いことわざが言う様に別に個人が何を思っていようが別に良い。

しかし、その感情を所構わずむき出しにするのは、場合によっては非常に不利になる。

今回の様な潜入工作作戦にはアルベドを筆頭に偏った至上主義を持つ者は特に作戦の成否に直結する影響を及ぼす可能性が高い。

人間とは自身に向けられる「感情」に敏感な生き物だ。

誰だつて自分の事を嫌いな者と仲良くしよう、理解しようとは思わないし、そんな奴とは距離を置く、あるいは排除しようと考えてる。

それが個人からその家族、友人、他人へと広がってゆき、マイノリティの排除、弾圧へとなる。

だからこそ、その根元たるこの内に湧くこのドス黒い憎悪の感情を上手くコントロールし、抑圧出来なければ円滑な任務遂行など出来ないと俺は考える。

顔にも、態度にも、その空気すら出さない鉄壁のガード、ポーカーフェイスが求められる任務なのだ。

「……先程の無礼を詫びる、すまん」

カツンと踵を鳴らし気を付けをすると、タイラントはそのまま頭を下げた。

高圧的な物言いだ、その謝罪の諸動作は洗礼されており、どこかの騎士団の儀礼にも見えた。

脱帽時の敬礼をタイラントはしたに過ぎないのだが、長く軍隊に居た為か、新兵時代に身体と心に叩き込まれた”基本教練”はこの異世界においても通用した。

因みに余談だが最敬礼はこの敬礼の頭の角度が10度から45度になり、天皇陛下又は隊員の棺以外に実行する機会はない。

(何故、タイラント様が頭をさげているのか)

至高の御方の一人、暴虐の権化たるタイラント様がたかが人間にこうまで従う必要性はあるのか？

(否、考える迄もなく否)

従う必要性など皆無、何故ならタイラントは支配者だからだ。

圧倒的な力で立ち塞がる全てを薙ぎ倒し、蹂躪し尽くす「力」を持つ者。動物的でしかない人間、そんな物が従がわせて良い存在ではないのだ。

あの鳥もそうだが何故、弱い者ほど身の程をわきまえないのか。

そう考えると、今までどうでも良かった人間と言う存在がとたん憎くなってくる。

(堪え難きを堪え、忍び難きを忍べ)

出発前にタイラント様が言った事はこの事だったのかと確信した。

屈辱的とも言える状況、しかし堪え忍ばなければならない時があると。

自動人形として感情が無い訳ではない。主君に対する侮辱を間近で見なければならな

い、手出しが出来ない苦痛がこれ程とは想定外だった。

無理やり抑え込んだ感情で内部の回線がショートしそうだ。

だけど、従者として選ばれたからには堪えてみせる。

【撃鉄を起こせ】

命令ある、その時まで。

「そ、そんなに畏まらなくて良いわよっ」

不気味マスクが割りと素直に頭を下げた事に少し慌てた様に受付嬢ジャネットが言った。

その様子を確認してからタイラントは頭を上げ、首を左右に傾げコキコキと骨を鳴らした。

疲労など感じぬ筈の身体だが、どうもまだ慣れない気がするのだ。身軽になった分、今までの頑強タイラントボデーとのギャップだろうか？

首を捻りながらシズの方を見てみるが、何時もと変わらない表情でホツとした。

これがナーベナルあたりだったら大変だっただろう。

制止する間もなく第八位階魔法をぶっ放しそうだから恐ろしい。

それに比べてシズはどうだ。そう、何時もと変わらない無表情が素晴らしい。

まるで骨董品のPCの焼き付き防止のスクリーンセーバーが起動している状態と言
うべきか。

無、ただひたすらに無だった。

「しかし、俺達が来るまでもなかつたぜ！なあ？」

自身の獲物の刺突戦槌を肩に掛け、タイラントの背中をバシン！と勢い良く叩いた。

ガガーランのパワーコントロール皆無の過激なスキンシップを食らうと大概の者は
悶絶する。

しかし、人外を人間サイズに圧縮したタイラントにとっては子猫に噛まれたと同等程
度、別段気にもならなかった。

「？ガガーラン、貴女達がコカトリスを……」

「違う違う、あの鳥野郎殺つたのはこの兄さん達だ、ええと……」

「……少佐だ」「シズ」

「シズにシヨーサだな？そーいやあ自己紹介まだだったな？俺はガガーラン、こつちの
小さいのイビルアイだ」

「この二人は王都でも有名な【蒼の薔薇】のメンバー、アダマンタイト級冒険者なのよ！」
まるでババーン！と言う効果音が聞こえてきそーな程何故かジャネットが二人を力

強く紹介する。

「んで、この受付がジャネットだ。俺達の昔馴染みだからな、あんまり困らすなよ！」

正直あまり興味は無かったが、このガガーランとイビルアイは其なりに有名な冒険者なのだろう。

まあ、人間にしては多少は出来る部類に入るだろう。だが、イビルアイと言う仮面の女はただの人間ではない。

寧ろ人間なのか、異形の者特有の気配と力を感じるに混じり者か、真祖か。

どちらにせよ、俺の脅威には程遠い存在ではあるが。

しかし、出る芽は早いうちに駆除すべきか……

「なんだ？何か言いたい事でもあるのか？」

不意にそう言われ、気が付くといつの間にかイビルアイを凝視していた。

「……変な仮面だな、と」

「お前に言われたくないわっ」

イビルアイ鋭い蹴りが脛にクリティカルヒットした瞬間、ビクつと反応しそうになった。

痛みなど当然感じないが何か嫌な感じはするのだ。画面越しの出来事でも股間を強打した時の息子がヒュンとする感じに良く似ている。

古来より、脛とは別名弁慶の泣き処とも言われる。

古の猛者、武蔵坊弁慶すら泣かした人体の急所の一つである。

階段を踏み外し鋭利な角で脛を強打した時、魂に刻まれた痛み記憶、思い出すだけでも恐ろしい。

要するに、脛を蹴るのは止めなさい（マジで）

依頼

襲撃の騒乱も漸く落ち着きはじめ、タイラントとシズは組合の奥の部屋へと案内されていた。

応接室なのだろうか、多少座り心地の良さそうなソファードとテーブルが置かれている。受付嬢ジャネットに案内されソファードに腰掛けると同時に足を組み、考える。

特に疲れている感覚は無いのだが、気分的な物なのか？ソファードに腰掛けると何だか身体を癒してる気がするのだ。

さて、恐らくこれから組合のお偉いさんがこれから来るのであろう。でなければこんな所に連れて来られる理由はない。

まあ、大方コカトリスの件の事情聴取か冒険者登録の事か。何にせよ此方の思惑通りに事は進んでいると言つて良い。

あの煩い二人組とも別れたのでやつと話しも進むだろう。振り返ればどうにも扱い難い人間だった。筋肉女はともかく、仮面女の方は警戒すべきだ。もしかすると俺達が入外だと気が付いていたかもしれない。

とは言え今さら何が出来るのか。高ランク冒険者を口封じに暗殺なんて全くもって

ナンセンスだ。

「……忌々しい」

色々最悪の仮定ばかりが頭をよぎり、気が緩んだのかつい呟いてしまった。

いや、呟くと言うよりか吐き捨てたと言えるが。

「ん？何か言った？」

「……これから誰が来るのかと考えていた」

「ざつきも言ったと思うけど、組合長が直接貴方に会って話しがしたいって事で此処に来たのよ」

「……成る程」

組合長と直接話せるのか、登録初日から御目通り叶うとは僥倖だ。

ふむ、この調子なら作戦第一段階の〔冒険者になり、それなりの地位を獲得する〕は何だか早く達成出来そうだな。

しかし、組合の長たる者が高々受付の話し一つでこうも早く動くものなのか？

俺達がコカトリスを倒した事は現場に居た奴と例の二人しか見ていないはず。

まして古代中世と同じこの世界であの大混乱の状況下、正確な情報伝達が出来ているとは到底思えない。

よほど自分の職員を信頼しているのか、まさか遠視の魔道具でも使用して直接見てい

たか？

いずれにせよ、この早い接触には何か裏があると考えるべきか、いや深く考え過ぎか
……

(ああ、葉巻が恋しい)

こうやって何か面倒事を思案するときは決まって葉巻をくわえてたなあ。身体に悪
いから止めるとよく軍医と副官にドヤされてたっけ。

葉巻と言つても俺が持っていたのは安物の合成葉巻で、高級な天然キューバ産なんで
映像でしか見た事ない。死ぬ前までにはどうにか手に入れてみたいと思つていたが
……

(所詮、叶わぬ夢か。もつとも此処では葉巻の存在すら怪しい)

懐かしい葉巻の味を思い出していた時、応接室の扉が開いた。

「君が……例の新人かね？」

応接室に入つて来たのは白髪で40代位だろうか、口髭が妙に立派な男だった。

タイラントは組んだ足を優雅にほどき立ち上がる。その立ち振舞いだけを見れば傲
慢で無礼な新人としか言えない。

だが、タイラントとして前線の士官として長く生活してきた。現地の族長やパルチザン
との交渉、他国の士官との会談や調整などを数多くこなしてきたのだ。

だからなのか、その傲慢とも見える動作も自然と”さまに”なっている。まるで何処かの貴族の立ち振舞いの如く見えた。

「……御初にお目にかかる」

(俺はTPOが分かる生物兵器なので挨拶が出来るのだ。まして相手は組織の長なのだから無駄な軋轢を生まない為にも第一印象は大切、上手くやらねば……)

右後ろに控えるシズに合図すると少し遅れてシズもお辞儀をした。

タイラントは初対面の第一印象を非常に気にしているが、ガスマスクのせいで基本、第一印象好感度マイナスからスタートなのを分かっている。

「うむ、私はプルトン・アインザック。このエ・ランテルの冒険者組合長をしている」

(プルトン・アインザック……)

この男が組合長か。タイラントはマスクの中で目を細め、まじまじと顔を見ていた。

続いてタイラントとシズは言葉少なく自己紹介をした。

「街始まって以来の一大事だったが、君達のお陰で被害は最小限で収まった。まずは礼を言っておこう」

(あれだけの大惨事で最小限？成る程、流石に口は良く回る様だな)

「……新参者の我々が出過ぎた真似をしてしまったようで」

挨拶変わりなのか多少皮肉をきかせた台詞を肩をすくめながら言う。これから押し

付けられるだろう面倒事に対する当て付けも含めてあえてこの言い方で言っただけだ。
「いや、君達が居なければ市民にも被害が出ていたかもしれない。そうなるのは冒険者組合の沽券に関わる事態だ」

だが、そんな皮肉を意に介さない組合長に促され、タイラントはソファアに座る。
いくら軽量化されたとは言えタイラントの体重をズシツとその身に受けたソファアの華奢な脚がミシミシと泣き声をあげていた。

「……それで、どうも我々を……存知の様だが？」

先制パンチと言わんばかりの直球の質問をぶつけるタイラント。

交渉は相手に舐められたら終わりだ。此方の正体ははっきりしてない今だからこそ、有利な方向へ誘導しなければならぬ。

「ああ、君達の事はジャネットと蒼の薔薇の二人から」詳しく聞いています。何でもあのコカトリスを仕留めたとか」

いやいやと首を左右に振り、半ば呆れる感じでタイラントは否定した。

あの程度の魔獣など障害にすらならないが、ここは下手に出て様子見をしようと判断したからだ。

「……先輩方が死力を尽くした結果に乗っただけだ」

「謙遜する事はない。腕利きの冒険者が束になっても歯も立たなかつた魔物を君達が容易く、かつ一撃で倒した……そうだろう？」

（大した自信だ。魔獣をワンパンKOなんざ単なる与太話だろうと思うのが普通の筈、確信あつての自信か）

「……解らん、組織の長たる貴方がそんな不正確な情報を鵜呑みにするのが」

「生き残つた者達とアダマンタイト級冒険者二人の証言、十分信じるに値する話しだと思わないかね？」

ニヤリと笑うプルトン・アインザック。友好的な笑みなのか腹黒い笑みなのかは現状では判断出来ないが、とんだ狸に目を付けられたものだ。

「……この際、事実かそうでないかはどうでも良い。俺達をどうするつもりだ」

「そうだな、そろそろ本題に入ろう。私は君達を高く評価している。得体は知れないが実力は確かの様だしな」

（やはり、タダで物事は進まないか。ある程度予想はしていたが、後は要求の内容によつてプランを変更する必要があるな）

タイラントは気が抜けたのかマスクの中で深い溜め息をついた。偽造身分の確立へのプランは予定よりも早く達成出来そうだと。

コカトリスの急襲は全く予想外であつたが、渡りに船だつたとも言える。マッチポン

プとも思われそうだが本当に突発的な出来事だった。

もし仮にコカトリスの襲撃が起きなかった場合、タイラントは時を見て自分の軍団から手頃な兵器を街へと投入するつもりでいた。

その場合、投入された物にもよるが今回以上の被害が出ていたかもしれない。

もともと、都市殲滅に長けた兵器なのだ。あの程度の魔物に苦戦している様では”試作暴君”数体で商業区画一帯は壊滅していただろう。

それを考えれば、今回死傷者が冒険者のみで半壊したのが広場だけなのだから被害が軽い物に思えてしまう。

(こころも簡単に事が進んでいたのだ、やっと予定通りつて事か)

「君達には特例でミスリルプレートを渡しても良いと個人的に思っている。だが、登録したての新人にミスリルを渡す前例はない。無用な誤解を防ぐ為にも君達には実績を作ってもらおう」

「……当然だな」

「聡明で結構だ。君達には指名依頼を受けてもらう。内容は……」

街道の上空を飛行する二体の蟲。そしてその強靱な脚に抱えられる様に持たれたタ
イラントとシズ。

組合長から渡された依頼書には人食^{オー}大鬼^ガと小鬼^{ゴブリン}の活性化調査と書かれていた。

「……オーガとゴブリンの活性化調査程度でミスリルに飛び級出来るのか？ よほど組合
は人材不足なのだな」

「少佐、それ、違う……」

「……ぬ、これか」

副課目的な達成依頼の方に目がいっていたが、メインの達成依頼は「森の賢王なる魔
物の討伐」とあった。

「……」名付きの魔物の討伐か。成る程、中々ゲームっぽいな」

「既に、何人か、冒険者が、付近に居る……」

まあ、これから向かう森はあの村に近いようだが、俺の姿は前回と全然違うし村人
見られても正体がバレる事はないだろう。

他の冒険者の方も新人だから顔見知りには居ない筈、ブツキングしたら誠意ある交渉か

口封じ……いずれにせよその時考えよう。

アントマから借りた巨大昆虫ジャイアントビートルの重低音な羽音を暫く聞いていると目的地上空に到着したようでシズの降下シークエンスが始まった。

「座標2583 3855 目的地上空 降下準備」

「……準備良し」

「準備完了確認 拘束解除 5秒前」

ピキイーと蟲が甲高い鳴き声をあげる。

おい、蟲よ。それは注意喚起のベルのつもりか？ そう言えば目もいつの間にか赤色になってるし、何かこの蟲色々オリテイ高いな……

(さて、ともあれ久しぶりの地獄行きのエレベーターか)

「4 3 2 1……降下」

カウント0と同時に巨大昆虫の赤色から青に変わり、同時に脚が開き拘束から解除されたタイラントとシズは深緑が生い茂る森の中へと落ちて行った。

大森林

「……やれやれ、まさか森林浴が出来るとは」

タイラントとシズは無事に目的地である大森林に着地し、見渡す限り木しかない樹海のど真ん中に居た。

極度の環境破壊により、タイラントの知る地球にはこの様な森林など殆ど存在しない。人の底知れぬ欲が母なる自然を大地を破壊し尽くしたからだ。

初めて体感する森林浴、抗Tーウィルス抑制剤により限りなく人間に近い状態と化しているからか、空気中の「癒しエネルギー」的なものを身体が敏感に感じとっているのかも知れない。

「シズよ、この全身に感じるエネルギーはマイナスイオンと言う。存分に感じろっ！」

「コピュー」

「……………」

（あー、感じる、感じる感じる。凄い感じる。今俺感じてるよー）

一体何が楽しいのか、人氣が無い事を良いことに足下も安定しない樹海の中で無言で

手足をバタつかせて変な動きをしている一組の男女。

はつきり言つて怪しい以外に何物でもない。

ぶつちやけタイラントは森林浴の「し」の字も理解していない。

だいたいマイナスイオンなど発生条件やその効力、存在や定義自体が曖昧なのだが、そんな事タイラントが知る由もない。

所詮、かつて見た資料映像のにわか知識と森林の雰囲気には踊らされているだけなのだが本人が満足しているのなら最早何も言うまい。

この圧倒的なフォレストパワーに理屈抜きで気分が高揚していたのだ。

美しい自然を愛して止まなかつたギルドメンバー……

〔ブルー・プラネット〕

ユグドラシルで、いやナザリックで現実では失われてしまった広大な自然を忠実に再現させていた自然をこよなく愛した男。

ナザリック地下大墳墓の第六層、彼が作ったその星空は特に素晴らしい。

まるで身体が星の海に吸い込まれるような、美しい夜空に凄く驚いたのを良く覚えて
いる。

だが、その時もこの美しい星空も所詮は紛い物なのだと思つてしまつていた。

〔これはゲームの世界だけの物だ〕

夢から覚めれば、星など欠片も見えぬスモッグで覆われた濁った空しかないの
と思っていた。

最悪な物を見すぎたからか、美しい自然を素直に楽しむ事、感じる事も出来なかつた
愚かな自分。

（俺は今漸く分かったよ、ブルー・プラネットさん）

貴方の感じていた事とその思いを。

自然とは偉大で、絶対に失わせてはならなかつた素晴らしい物だと。

タイラントはただ黙って、右手を左胸に当て頭を下げた。

この美しい自然とそれを愛した仲間に最高の敬意を示す為に。

「……と、まあ少々調子にのり過ぎたが、行動を開始する」

「コピー」

号令と共にビシツと気を付けをしたシズが何とも凜々しい。

（ふむ、あれほど高揚した気持ちも一気に醒めたな……）

自分でも驚くほどの気分の浮き沈みの激しさは未だに慣れない。

まるでメンヘラかジャンキー、若しくは鬱の患者みたいな感じだな。

しかし、名付きの魔物を討伐しろって割には全く情報が無いのはいかなものかと言

いたい。組合からの直接依頼されているのだからもっとしつかりしているのかと
思っていた。

まさかとは思うが、この広大な原生林の中から探し出して狩れって事か？

だとすればとんでもない依頼だぞこれ。

そもそも、この森はアウラとマーレが团长からの命令で調査探索しているし、同時に
拠点の構築も進めているからその他のシモベ達も大勢存在している筈だ。

大量の異物の侵入はその土地の生態系、特にパワーバランスを崩す。小鬼^{ゴブリン}や
人食^{オウク}大鬼程度の魔物は直ぐに淘汰されてしまっただろうな。

あれ？ オークやゴブリンの活性化してもしや俺達が原因なんじゃね？

「……動体センサー起動、この辺り一帯をスキャンしろ」

「動体センサー起動、動体物、反応過多」

やはり動体センサーはあてに出来ないか。

元々動植物の宝庫であるジャングル、シモベ達の侵入で更に過密になっている森を
少々甘くみていたな。

「……有視界の熱源探知へ切り替えろ」

「コピー」

これならば視野内に限るが動物物の熱源を探知する。範囲は限られるが発見がはるかに容易になるし、先制的な索敵により有利な戦闘展開が出来る筈だ。

さつきからシズの性能に頼りつきりだが、仕方がない。

正直もう面倒だから空中からナパーム弾で森を焼き払いながら目標を探す事も考えたが……

きつと俺のように自然の事を少しも顧みない人間が美しい地球を破壊し尽くしたの
だろう。

そう思うと何だか急にやるせなくなり、実行する気が失せてしまった。

(不思議なものだ、人を殺すよりこの自然を破壊する事の方がよっぽど罪悪感を感じ
る)

現実の世界に居た時よりも俺の精神はかなりドライになっている気がする。

少なくとも敵兵とは言え酷い死体には同情したし、非戦闘員を戦火に巻き込んだ時の
胸糞悪さは覚えている……筈。

そう考えるとやはり俺は変わってしまったと確信した。

かつての自分が持っていた正義感などは無く、敵(人間)を殺す時に感じていた同情
も躊躇も無い。

人を殺す事を「目障りな虫を叩き潰す」と言った本当に気軽な感じで行っていると
言っても過言ではない。

くつ、何故に今更自己分析なんぞをしているのだ。

いや、目の前の広大なジャングルを前に俺は現実逃避をしているのかもしれない……
「……アウラでも呼べば良かったのだろうか」

野獣使いと野伏のアウラならば森の中での活動はお手の物だろう。

しかし、階層守護者には団長から不在の間それぞれ仕事を与えられている。いたずら
に呼び出して調査の邪魔するのは良くない。

それに過去の戦史研究で調べた「ベトナム戦争」なる戦争はこのようなジャングルで
の戦闘だったと書かれていたし、個人的に興味があった。

特に数の有利を覆す密林でのゲリラ戦法は大いに関心したものだ。

現場の地形地物の把握は実際に目で見て、身体に感じなくては地の利を最大限に生か
せない。

ここは今後の勉強と経験も含めてこのフィールドワークを楽しむ事にしよう。

「熱源反応関知、前方、距離約100」

「……数は」

「約40、程度」

「……よろしい。シズよ、武器の使用制限を一部解除。小火器の使用を許可する」
 「味方のシモベ……かも」

残念ながら、熱源探知では敵か味方かの判断は出来ない。そこに何かしらが「居るか、居ない」か判断出来るだけだ。

「……味方ならばよし、敵ならば殺す」

我らのシモベ達の侵入が活性化の原因ならば、暴れる家畜共を適度に間引くのまた我らの務め。

タイラントはおもむろに両手を真横に伸ばすと、何も無い空間を掴み、引き出しを引く様に前方に向かって何かを引っ張り出した。

ディメンション・ガンラック
 「次 元 銃 架」

何も無い空間から突如引き出された二つの長い銃架。そこには大小様々な形をした、おびただしい数の銃が整然と格納されていた。

そんな大量の銃の中からタイラントは、左右の銃架から迷う事なく一挺ずつ形の異なる銃を取り出す。

【右手 火薬式 軍用自動小銃 AR—18】

【左手 火薬式 軍用自動散弾銃 SPAS—12】

どちらも聖遺物級の武器だが雑魚相手の火力ならば十分過ぎるであろう。

シズも愛用の魔銃を取り出しており、準備は万端のようだ。

「……さあ狩りの時間だ。【撃鉄を起こせ】」

ジャキン、と場にそぐわぬ乾いた金属音が樹海に静かに鳴った。

その日、静かな大森林で事件が起こった。

バアゴン!!

突如鳴り響いた低い破裂音。

森の空気をも震わしたその音は、背の高い木々で羽を休ませていた鳥達を空へ追いやり、地上の小動物達は巣や茂み、地面の穴蔵へと慌てて隠れた。

その破裂音を発した道具の先、一匹の首から上がない小鬼ゴブリンの死体が鮮血を吹き出しながらドサリと地面に倒れる。

タイラントの左手に持った黒色の二本の筒が重なった武骨な形をした銃【SPAS—

12」の銃口からは微かに煙が上がり、辺りは硝煙の匂いが立ち込めていた。

【散弾銃】
ショットガン

その威力と性能は至近距離での戦闘で特に発揮される。

散弾銃は至近距離の射撃でクリティカルヒットの確率があがる効果を持つ反面、ダメージの有効射程は他の銃と比べると非常に短い。

しかし、運の無いこの小鬼は見事に「会心の一撃」が決まったようで、撃たれた頭部はミンチになって吹き飛んでしまった。

「テ、テギツ!？」

他の見張りの小鬼が何か言葉を発しようとした瞬間、タイラントは右手に持った「AR-18」の引き金を引いた。

先程の銃声とは違ったバラバラと言った規則的な連続した破裂音が鳴り響き、大量の弾が発射されている。

AR-18はごく一般的な突撃銃アサルトライフルの一つであり、至短時間で多量の弾を発射出来る優れた銃だ。

ユグドラシルでも威力や総弾数のバランスが良く、遠近どちらも対応でき、銃の装備で迷ったら突撃銃を選択しておけば間違いないかった。

しかし、驚くべきは片手だけで連射の反動を制御し、ぶれる事なく撃ち続けているタイルントの腕力だろう。

銃口から閃光と共に放たれた鋭利な弾頭は最早「生きた的」と化した小鬼の全身を易々と食い破り、一瞬で只の肉塊へと変えてしまった。

無惨な姿となった小鬼達は巢の見張りだったのだろうか、異常を察知した小鬼達が次々と大きな風穴から飛び出して来た。

「ナンダー・ナンダー！」

自分達が置かれた状況が把握出来ないまま入り口付近で右往左往に狼狽える小鬼共に向けて左右の銃を腰だめに構える。

そして、群れた子羊達に容赦の無い銃撃を浴びせかけた。

耳を覆いたくなる様な騒音だが、撃たれる側からすると断末魔すら上げる事を許さない、まさに悪魔の咆哮そのものだろう。

無慈悲に発射された無数の弾は小鬼だけでなく、その後ろにある風穴の岩に当たり火花をあげる。

その火花は小鬼の飛び散った血と見事にコラボレーションしており、森の薄暗さも相まって多少綺麗見えた。

だが、そんな穢れた火花に見とれている暇もない。

付近に潜んでいたのか、音に釣られてきたのか小鬼ゴブリンや人食オウ大鬼クが続々と姿を現してきたからだ。

予測よりも遙かに多い数を前に呆気なく取り囲まれたタイラントとシズ。

棲みかを荒らされた怒りか、同族を殺された怒りか。

取り囲んでいる連中の鼻息は荒く、随分と興奮しているようだ。

傍目から見たら完全に四面楚歌の状況だ。

しかし、二人に焦る様子は微塵も無い。退屈そうに腰や腕を回す余裕っぷりだ。

「ヤロウツ!!ブッコロシタラアアア!」

そんな余裕に痺れを切らした一匹が唸り声と共に棍棒を振り回しながら二人に向かつて来た。

短気を起こしたのは脳筋バカの代名詞、人食オウ大鬼ク。

只力任せに無茶苦茶に振り回しているだけ棍棒。

だが、その威力は太い木の幹をまるで小枝の如く簡単にへし折っている。

豊かな森の環境を破壊しながら突進してくる野獣。

人の身体を遙かに上回る巨体が血眼で迫ってくる様は正に圧巻。

並みの冒険者ならば揃って震え上がるだろう。

だが、そんな見え見えの接近を許す程、タイラントは甘くはない。

銃口を向けられ人食い大鬼はその無駄に太い脚を薙ぎ払う様に撃ち抜かれた。

脚と言う支えを失った巨体は駆けた勢いのまま、醜い顔で地面を削りながら派手に倒れこんだ。

タイラントは次々と迫る小鬼を片手間で撃ち抜きながら、片方の銃を肩に担いで歩きだす。

獣らしいうめき声を上げ、痛みにのたうち回る巨体のそばまで来ると止めと言わんばかりの蹴りを炸裂させた。

破壊的な威力の蹴りを食らった人食い大鬼は森の木々をバキバキとなぎ倒しながらぶっ飛び、突き出た大岩に激突して爆散、完全に絶命する。

「……次は誰だ」

畜生なりに感じた死の恐怖に震えるゴブリン達を見回しながらタイラントはそう静かに呟いた。

妖巨人

変な匂いと濃い魔物の血の匂いが森に充満している。

僕らの森は、大自然の生命力に満ち溢れて、深緑と太陽の光が差し込むコントラストが抜群に素晴らしい森だったのに。

今日、僕の住む森はいつもと違った。

そこらじゅうに魔物の骸が転がり、弾け折れた木々、そして血と臓物が散乱した無惨な地獄絵図になっていた。

【名も無き森の妖精の日記】

静かな森を地獄に変えた張本人であるタイラントは黒い血だまりの中を骸を気にもせず歩を進める。

グチャリ、グチャリと足の踏み場もない位に散乱した形容し難い肉塊を避けもせず踏みながら歩いていった。

そして死体があつとも集中している地面に空いた風穴の入り口の前まで来ると片手

を上げてシズに何かの合図をした。

合図と共にシズは巢とおぼしき巨大な風穴に近付くと取り出した火炎放射機を無慈悲に放射した。

液体燃料に引火した炎の渦はゴツゴツとした岩で出来た風穴の中を焼き尽くさんと一氣に燃え広がった。

言わずもながら比較的穴の浅い所に身を潜めていたゴ布林達が真つ先に火だるまになり、業火に焼かれた無数の断末魔の叫び声や風穴の中でこだまする。

身体で燃え盛る炎を消さんと必死に暴れるゴ布林。ゲル化したガソリンは付着したら簡単に消えない。燃えた身体を地面や壁に擦りつけようと、雨水が貯まった水溜まりに身体を浸そうと身体の炎が消える事はなかった。

【火炎放射機】第5位階の魔法に匹敵する炎を継続的に放射する事が出来る火器の一つ。

その威力は鋼鉄ですら容易く融解させる熱量を誇り、対人、牽制、殲滅、焼却、あらゆる用途で使用可能な火器であり、個人携行武器としては破格の汎用性能を有する兵器である。

ただ欠点と言えば火炎放射機は専用の燃料タンクを常に携行せねばならず、その多くは【重火器】に分類され重量物の為移動速度にペナルティを受け、使用する為には其な

りの筋力が必用になる。

しかし、タイラントが所持する火炎放射機は放射機下部に小型タンクが装着され一体化しており、携行性能と取り回しを特化したカービン・モデルで移動速度、使用制限にペナルティを受けない仕様のも物だった。

当然小型故に火炎の放射量と射程、使用時間は本家に比べると格段に落ちてしまう。だがトータル的な性能は高く纏まっており、現状懸念すべき点は何一つないだろう。現に、炎に飲み込まれたうち回る様子を見るにその威力は凶悪の一言に尽きる。魔物とは言え生きたまま業火に焼かれ、もがき苦しむ様子は同情さえしそうになる。陽の光りも届かぬ闇の中を自ら照らしながら、もがく。

ゴ布林達は暫く死のダンスを踊るとボタンと倒れ、真つ黒に燃え尽き息絶えた。

「……汚物は消毒するに限る」

マスク越しに焼け焦げた不快な匂いがしそうなゴブリンの丸焼きを見ながらタイラントはそう呟いた。いや、何故かそのセリフは言わなければならない気がしてならなかった。

「……仕上げだ」

「コピー」

タイラントの号令で再び火炎放射機から炎が放たれる。焼け焦げた風穴を更に焼き

尽くす炎。最早動く【物】など何もなく、炭化したゴブリンとおぼしき肉塊がチリチリと燃えているだけだった。

ちなみにこのような洞窟などに火炎放射をすると、洞窟内の酸素が炎に全て食い尽くされ、たとえ火から逃れたとしても酸欠による窒息死は免れられないのだ。

その昔、第二次世界大戦末期、沖繩に上陸した米軍は日本軍や民間人が潜む洞窟やウドなどにこれと同様の事を行っている。

真に恐るべき事は「正義」と言う名の大義名分があれば人間は相手が【人間】であろうと【魔物】だろうとそれは些細な事でしかなく、こう言った行為を躊躇いなく行えると言う事だろう。

正に自身の「敵」か「味方」か、ある意味では単純明快だ。

しかし、その程度の違いで人間は虐殺を平気で実行する事が出来る。それは、人類の歴史を少し調べれば容易に解る事だが敢えて記そう。

突然だが、しばしばタイラントは自分に不思議な違和感を感じる事がある。

その正体は自身に残った人間性と効率的に脅威を排除しようとする生物兵器としての思考との整合性が取れない時に生ずる精神的なバグの様なものであると推測される。

だが元が軍人だけに生物兵器的思考に比較的早く順応する事が出来た。

故にタイラントは「人間」と「兵器」の思考の食い違いを只の違和感として感じているだけで済んでいる。

だがこれは、人によつては多重人格障害や、または精神崩壊をしかねない重度の欠陥である事は間違いないのだが……

本人はあまり気にしていない。

タイラントは放射機の炎が止まると手に持った発破用のダイナマイトを取り出した。

そして導火線を放射機に近付け残り火でを着火すると、風穴へと投げ込んだ。

導火線が焼けるジジジと言う音が穴の中で静かに響き、底も見えぬ闇の中に落下していった。

「……離脱するぞ」

「アスタ・ラ・ビスタ・ベイビー……」

ダイナマイトの落下を見届けると何処かで聞いた事があるセリフを言つてから風穴の入り口から遠ざかるシズ。

後にシズは何故か言わなければならない使命感にかられたとタイラントに語る。

二人が悠々と離脱して暫くすると、低い籠った爆破音と共に地面が揺れ、風穴の入り口は付近の地面ごと崩れた土砂や木、岩、がゴブリンの死体もろとも飲み込み、穴は完全に埋もれた。

「……害虫駆除は巢ごとやる、鉄則だ」

「(っ)もつと……もっ」

視角外からの不意急襲的な一撃は相づちをしようとしたシズ、ヤレヤレと肩を竦めていたタイラント達を風ぎ払う様に放たれた。

しかし、一見油断していると見れた兩名の行動は振られたそれよりも一段速かった。目にも止まらない速度で左右に散った二人、コンマ数秒前まで居た場所が地面ごと抉れ、バンツと激しく弾けた。

二人を襲った得物は剣と言うには太過ぎで、鉄塊と言うには鋭利過ぎた。

だが、一見粗末に見える剣の”様な”物を見るからに使い込まれ、数多の血を吸ったであろう禍々しさが確かにあった。

そんな奇襲の一撃を回避した二人は、間髪入れず手に持った銃を構え、体勢が整う前にも関わらず引き金を引く。

曰く、反撃とは即座に行わなければ意味がない。合計3丁の銃からは大量の弾が吐き出され、舞った砂ぼこりに写る影に向かって容赦なく叩き込まれた、筈だった。

「……ほう」

いつもと同様に其処には銃弾で蜂の巣になったデカイ生ゴミが転がっていると見ていたタイラント。予想外の光景に感心のあまりつい声が出てしまった。

そこには、多数の銃弾を受けても尚生存している人食い大鬼オウよりも遥かに大柄な“何か”が居た。

「血の匂いするから来てみたら、何故人間居る!？」

（流石に小銃弾程度ではかすり傷にもならんか、見た目からしておそらく妖巨人トロールだろう）

タイラントは目の前にいる醜い筋骨の化け物をトロールだと一目で看破した。環境適応性が高いモンスターであり、場所によって様々な種類が存在し、高い再生能力は驚愕に値する。

現にタイラント達が放った銃弾で与えたダメージは全て再生されてしまっている。

更にトロールは単体ではなくオーガ4匹を従えていた。

（見慣れぬトロールに、オーガを従えて偵察？低脳筋肉馬鹿が組織的に行動しているとはジョークにしては中々面白い）

「……知るか、貴様の足らん頭を少しは使え」

タイラントはトロールの問いに自分の頭を指で指しながら小馬鹿にした態度で答えたが、それと同時にシズに手信号で単切に合図を出していた。

【合図で薙ぎ払え】と。

「ぬうう！人間如きが東の地を統べる「グ」の一番の子分の俺を馬鹿にするか!」
「……己が馬鹿だと言う事が解るとは大したものだ」

軽口を叩きながら、スラッグ弾を装填したSPASを向け連続で引き金を引いた。
ガスオートマチックの連続射撃の制圧力は並の魔物など一瞬でミンチへと変える。
まして、大型魔物用のスラッグ弾ならば尚更だ。

しかし、その弾をもつてしてもトロールの再生能力を凌駕する事は出来なかった。
弾が穿った皮膚はみるみる再生し、一見すれば致命傷とも思える頭部へのダメージも
無駄弾になった。

「フハハ、やはり」腰抜け” だな人間！チマチマと弱き者の攻撃だ！」
トロールの聞き捨てならない単語が聞こえ、思考が固まった。

「……腰抜けだと?」

その一言を聞こえた瞬間、シズは心底恐怖した。

タイラントの背中から溢れ出た圧倒的な憤怒の殺意が、ビリビリと感じる。

かつてナザリック地下大墳墓が襲撃された時と同等かそれ以上のプレッシャー……

この暴君の必滅の殺意を感じていないのかと、トロールの方をチラッと見たがこの筋
肉達磨は全く気が付いていない。

自分の力を信じきった、盲目的でなんと愚かなことか。いずれにせよ、この愚か者は間違いなく死ぬ。

それもとびきり惨たらしく。

「……もう一度、言ってみろ」

手にした銃を離し、脚に力を入れ、拳を強く握り締める。

「グハハ、”腰抜け”め！調子に乗るなよ、今度は俺……」

その時、激しい突風が森を駆け抜けた。

それはパァン！と何かが弾けた音と共に、風が森を貫いたのだ。

音すら置き去りにした空気の衝撃波はトロール中心に発生し、森を駆け抜けた衝撃の威力たるや凄まじく、木々の葉に残る雫を全て吹き飛ばす。

衝撃で弾けた雫はまるで雨の様に森の中に降り注ぎ、それは異様な光景と言わざるを得なかった。

また空を覆って浮かぶ雲は真つ二つに割れ、さながらそれはモーゼの如く。

その空を見た者は皆、天変地異の前触れだと恐れ叫んだ。

「……誰にも、誰にも”腰抜け”なんて言わせんぞ」

タイラントはそう呟くとトロールの身体を貫通している右手をゆっくりと戻す。胸付近にはまるで大砲でも撃たれたのでは？と疑ってしまう様な大きな穴が一つ出ていた。

一体いつ間合いを詰めたのか、タイラントは瀕死のトロールの前に立っており、全身に返り血を浴び、その右手からは白煙が出ている。

この一連の惨事は全てタイラントの仕業である事は間違いないが、その速さは完全に常軌を逸脱しており、シズですら動きを捉える事は出来なかった。

必殺の拳を受けたトロールは強力な回復力も發揮出来ずに口からゴボリと血を吐くと倒れ、完全に息絶えた。

トロールが最後まで手にしていた剣モドキも主を追う様に地面へと落ちる。

カラン、カランと乾いた金属音は、凶悪な武器の一つとしては何とも無様な最後だった。

ほどなくして、指揮官を失った残されたオーガ達の統制は呆気なく瓦解し、シズが腰だめに構える通称ヒトラーの電気ノコギリが逃げ惑う子羊達へと向けられた。

「アスタ・ラ・ビスタ」

死刑宣告をしたシズが引き金を引くとドババババツ！と爆音と共に驚くべき速度で発射される7・92×57mmモーゼル弾。

装甲車両にすら効果のある弾丸はオーガの身体をまるで紙を切り裂くが如く解体していく。

人間ならば三脚を使用しなければまともなマズルコントロールなど出来ないが、シズは事も無げに射撃をしている。

(さ、流星は自動人形と言った所だろうか)

無表情で機関銃を掃射するシズを見て、改めて人外の類いなんだなあと感じる。

そして、ベルトリンクの弾が全て無くなる頃にはシズの眼前に動く物は何一つ無かった。

合流

「……フム、少し殺り過ぎたか」

冷静になって辺りを見渡すと、そこには碎けた木々、飛び散る臓物、転がる死体は数知れず、当初の環境保護意識など欠片も感じさせない光景が広がっていた。

「流石は少佐、お見事です」

シズの賞賛に少し浮かれるタイラント。

だが、この地獄絵図をそのままにしておくのは些か気が引けるし、何より近代火器の痕跡を残すのも問題がある。

下手に誰かに見つかれば調べられ、いらぬ詮索を受けるやも知れない。

中世程度の世界で近代兵器はオーバーテクノロジー過ぎるのだ。

この世界では剣や槍、弓、が一般的な武器であり、一部の者が魔法を使えるのを確認している。

個々の才能や努力にもよるが、武器を其なりに扱うには時間がかかる。

剣にしても只闇雲に振っても物は斬れないし、弓にしても素人ではまともに矢を射る

事は出来ないだろう。

まして魔法など言うまでもない。専門的な知識や技術がもつとも必要とするに違いない。

だが、銃は違う。

まず扱うだけなら誰でも出来る。

厳しい鍛練を積んだ剣の達人を初めて銃を持った一般人が倒すのも不可能ではない。要するに〔近代火器〕の存在はこの世界のパワーバランスを崩壊しかねない存在であるのだ。

人間は新たな技術を直ぐに軍事に使用したがる。

それは、この世界においても変わらないだろう。そして、いずれは自らの手で世界を、星を破壊する。

「……度し難いものだ、人間とは」

タイラントはそう吐き捨てると、魔物の血溜まりの中心で手を上げる。

「クリエイト・バイオウエボン
生物兵器・創造」

タイラントがそう言うのと、地面から金属カプセルが飛び出した。

ガコンツと重々しい音を立て蓋が倒れると中から「大きな球根の様な物」がゆつくりと姿を表す。

それはT―ウィルスが植物に感染した結果誕生した巨大食人植物

BOW〔PLANT―42〕

もとは暇な研究者の興味本位で生まれた物兵器だが、この際それは置いておこう。

タイラントは地を這う大きな球根〔PLANT―42〕を持つと辺りを見回し、とりわけ一番大きな木の上部へ向け投げた。

バキバキと枝を折りながら太い木の幹へとぶつかると、球根から無数の触手が伸び、あつと言う間に大木の一部になってしまった。

しかし、大木の一部と言うには禍々し過ぎる色合いの本体と巨大な触手、生物から養分を摂取する事に特化した触手の先端は固く口の様な作りになっており、捕まったら最後、哀れな獲物は生きたまま体液を吸い尽くされるだろう。

またウィルスの影響である程度知能があり、多少の意思疎通は可能の植物だが、断じて可愛さなどはない。

この巨大な植物のBOWは対物理攻撃に非常に高い耐性を持っている為、生半可な攻撃ではダメージを与える事は出来ない。

まあ見ての通り植物なので火には滅法弱いが、この大型植物を焼き尽くせる炎を操れる人間はそう居ないだろう。

「……今日から此処がお前の持ち場だ」

タイラントの言葉を理解したのか、触手が活発に動き反応している。

一応、創造主であるタイラントに敬意を示しているのか触手でおじきしている様にも見えた。

素直な反応に少し可愛さを見いだしそうになるが、直ぐに考えを改める事になった。ウネウネと動く巨大な触手が自身の足下に散乱する肉片を片つ端から絡めとり捕食し始め、その植物らしからぬアグレッシブな養分補給は想像以上にグロテスクでゾワゾワと鳥肌が立った気がした。

食事をしているだけなのに気持ち悪いとは心外だと言わんばかりに触手を動かしてタイラントに抗議している〔PLANT―42〕だったが、タイラントの塩対応に植物なりに悟った。

（我が主は触手駄目系だったのか……）と。

大量のゴブリンやらオークの死体を摂取してすくすく育つ〔PLANT―42〕は自身の支配地域を大木を中心に着々と広げる。

剥き出しになった地面には太い蔓が何本も重なり伸びて、その蔓の蠢きは一帯の森そのものが生きている様な状態になった。

放置していても太陽光と水があれば最低限生存出来る仕様な上に、肉をモリモリ食べ

た事によって貯蓄された養分により、強固な身体を形成、圧倒的な力を得たようだ。

更に、この植物が本気を出せば独立した分身【PLANT-43】通称“イビー”を生み出す事が出来る。

【PLANT-43】は【42】に比べ人の背丈程まで小型化してしまうが、植物の欠点である移動不可を覆す植物だ。

凶悪な戦闘能力そのまま鈍足ながら移動出来る恐ろしい進化を遂げた植物、スーパー植物と言った所か。

(ふむ、緑が戻ったな)

今回破壊してしまった自然をPLANT-42を森に寄生させる事によって戻した事はタイラントの思惑通りだった。

しかし、如何に植物と言えど強力かつ、冷酷で残忍な生物兵器である。

並みの魔物、冒険者など太刀打ち出来ずに餌になってしまうのは目に見えている。

確実に危険度の増した森になった事は疑いようもない事実なのだが、元々森の力の均衡が崩れていた今となっては些細な問題なのかもしれない。

「……さて、このブタゴリラの処分をどうしたものか」

自身の前に倒れるトロールの骸を見ながら溜め息混じりに呟く。

一応、ハンティングトロフィー的な物を取るべきかと思うが組合の討伐証明部位が何

処か分からない。

かと言ってこのまま放置するのは些か勿体ない気がする。やはりこれは、古より続く我が祖国の伝統に基づく方法でやるしかないか。

そう決めたタイラントはザシュツとトロールの首筋に手刀で一閃すると首がポトリと落ち、その首を拾うとロープで適当に括り肩に担ぐ。

「……首を持っていけば間違いないだろう」

「要らなければ、エントマが食べるかと」

エントマと言わず俺が処理すると言っているが如く自己アピールする植物を軽くあしらひ、引き続き森林の探索を開始しようとした矢先、深刻な問題が発生した。

「この先から、強い力を感じるでござるー！」

突然聞こえた声に驚き、咄嗟に身を潜める二人。

見ればやたら大きいハムスターが森の奥から現れ、かつ言葉を喋って此方に向かってくる。

それだけでも十分衝撃的だが、タイラントズームアイはその後ろに続く人間5〜6名を確認してしまった。

(くそ、迂闊だった)

PLANET-42の支配地域は熱源探知、動体探知が全く使い物にならないとは言え、此処まで接近を許すとは正に油断の極みか。

臨戦態勢を取れとPLANET-42とシズに指示をし、自らも先制攻撃のタイミングを伺う。

(……可哀想だが仕方あるまい)

シズとタイラントは触手に捕まり木の上部へと上がると撃ち下ろしの射線でMG-42を構え、標的が射程に入るのを静かに待つ。

この場でタイラントが直接始末しなくてもPLANET-42に任せれば良いとも思う。

しかし自らの油断から招いたこの事態、念には念を入れるべきだと判断した。

有効射程内侵入を確認し、ジャキンツと初弾を装填して引き金を引こうとした瞬間、タイラントは向かってくる人間の先頭を歩く者に見覚えがある事に気が付いた。

(あれは団長、それと後ろに居るのはナーベラルか?)

撃ち方待ての指示をシズにすると、颯爽と集団の前に飛び降りる。

重さを感じさせない着地は漆黒の鎧を纏う戦士とその従者以外の者の度肝をぬいた。

タイラントに続いてシズも飛び降り、不思議な格好の美女の優雅さすら感じさせる着地に一堂はまた驚いた。

「……これ以上近づくな」

タイラントは集団に立ちはだかると、マスク特有の低い声で 静かにかつ威圧的に警告をする。

「理由を聞いてもいいかな？」

先頭を歩いていた漆黒の鎧の戦士が警戒しながら答えた。

「……手に負えん巨大な魔物が居る。死にたくなければ引き返せ」

まあ全然手に負えるけども、ここはそれらしく言って何とか誤魔化すしかない。

まだ、ゴブリンやらオーガやらの死体だって残ってるし、汚いし、臭いし、e t c……。残念ながら、余計な物を团长以外に見られるのは得策ではないのだよ。

「何と！某に任せて欲しいで」

（おのれ、空気を読め獣めが！ややこしくなるだろう！）

【黙れ獣、殺すぞ】

タイラントは「暴君の波動」をハムスターに当てながら睨む。すると巨大ハムスターは可哀想な声を出してひっくり返って気絶してしまった。

愛玩動物に対して酷い仕打ちだと思うが、話がややこしくなるので即座に排除をせざるを得なかったと自分に言い聞かすタイラント。

因みにタイラントはネコ派である。

「それは君の力を持ってしても苦戦する程か？」

「……如何にも、だが貴方が居れば話しは別だ」

ガシツと固く握手をする親しげな真つ黒な二人。そのやり取りを見ている他の者は只呆然と見ている事しか出来なかった。

一つだけ分かる事は、あの誰も寄せ付けない雰囲気を出していたモモンがこうも親しく話すのだから、この男は余程の存在なのであろうと確信していた。

「……ナーベも息災だったか」

「はっ！お氣遣い有り難く存じます」

タイラントはモモンの後ろに控えるナーベにも親しげに声をかけるが、ナーベは方膝を地面について頭を下げる。あまりにも仰々しい挨拶にモモンの方を見るが、モモンは諦めてくれと言わんばかりに肩をすくめた。

「な、何故あのナーベちゃんがこの不気味マスク野郎に……」

何故かな後ろにいるぱつと見チャラ男の様な男がシヨックを受けている。

しかし不気味マスクとは失礼な奴だな、法律と警察が居なかつたらぶち殺している所だぞ。

ふっ、このマスクの格好良さが分からんとはな。

所詮はチャラ男よ、ハイセンス装備の価値が分からぬ俗物だと言うことか。

「本当に無礼な下等生物糞コロガシね。ぶち殺すしかないわ」

「いっぺん、死んでみる？」

冗談なのか、本気なのか分からないが二人の美女から放たれる殺意はチャラ男へ向って一直線、取り敢えず南無阿弥陀仏と言っておこう。

「その扱られる様な視線！大好物です！ありがとうございます！」

（な、なんて強い（メンタルが）男なんだ……!!）

タイラントはチャラ男にドン引きしつつも、ハートの強さに感心せざるを得なかった。

共闘

『ち、ちーす……』

『こ、こんちわー』

………

『何故、此処に!?!』

がっちり握手をしながらも、内心二人はとも焦っていた。

いずれカチ会う事はあるだろうと思っただけはいたが、まさかこんなに早くも合流してしまふとは本人達も予想だにしていなかったからだ。

しかし、そこはガチフルフェイス装備の強みが遺憾無く発揮され、恐らく顔に出ているであろう驚愕の表情は絶対にバレてはいない。

もつとも、死体顔としゃれこうべでは表情も何も無いのだが、この際細かい事は投げっておこうか。

『団長、兎に角今は話を合わせて欲しい』

『ですね、任せます』

今、二人の異形は密かに腹を括る。

『何とかアドリブで切り抜けるしかない！』

……と。

握手した手を離し、少し離れるとタイラントは肩に担いだトロールの首を入れた麻袋を乱雑に地面に置いた。

グチャツと麻に染み込んだ血が不快な音を立てる。中身こそ見えないが、それが「何かの首」だと言うことは誰が見ても明らかな物だった。

『漆黒の剣』リーダー、ペテル・モークは突然現れた謎の男を前に背筋が凍る様な冷たい何かを感じた。

見るからに怪しい真っ黒な装いの男と不自然なまでに整った美女の二人組。

真紅の大きな眼が特長的なマスクで顔色を伺う事は出来ないが、その身から放たれる猛者の風格はモモンと同等かそれ以上、いや禍々しさだけなら間違いなくこの男の方が圧倒的に上だ。

一応、冒険者のようではあるがどちらかと言えば非合法の依頼を専門で請け負うワ

カーと言った方がしっくりくる。

一体この男は何者なのかと言う疑問と関わってはいけない事に関わってしまったのではないかと言う不安が思考を支配する。

だが今は、モモンさんの知人だと言う事を信じる以外に選択はなかった。

「……さて、鈍足の息子達が追い付きそうだ」

「成る程、面白い」

二人は顔を合わせ静かに呟くと、己の得物を構え戦闘態勢を取る。

モモンはその背に担いだ二本の上等なグレートソードを、タイラントは鋼鉄すら砕く自慢の拳を握り締め、モモンと背中合わせに構える。

「私達もやるわよシズ」

「合点、承知」

シズは背中から取り出したボウガンを構え、ナーベは詠唱の準備をしつつ自然体に構える。

それぞれが主をしつかり援護出来る位置に立ち、迎撃態勢を整えた。

隙なく構える四人の姿は、正に歴戦の猛者と呼ぶに相応しい貫禄であり、それは実力に裏付けされた物である事は誰の目にも明らかな事だった。

そんな中、同僚の言葉使いが主の影響を受け変化しているとナーベは強く感じていた
……

生物兵器を生産するに当り、タイラントは「支配種」と言う特殊スキルを持っている。
る。

このスキルを行使する事により、範囲内にいる全ての生物兵器を自他問わず、自身の支配下に置く事が可能だ。

まあ、別にそんなスキルを使わなくても基本的に自身が召喚したモンスターは自身の支配下になるし、数が必要なら他人から奪わなくても自分で新たに召喚すれば良い話なので……

ほぼ、無駄なスキルである。

実際、「種族」生物兵器は不遇職と言われ、既存の種族の劣化版の烙印を押された哀れな種族だ。

極めて高い防御力と遠近問わない近代戦闘スタイルが売りだが、器用貧乏さを払拭出来ずに数多のアップデートの波に飲まれた悲しい過去を持っている。

だが、生物兵器を極めた暇人達は少なからず存在した。

時に所属ギルドの盾として、時に圧倒的なバイオテロで敵対勢力を恐怖の底へ落とす

使者として。

タイラントもその数少ないその一人である。

話を戻そう。

通常ゲーム内では時間経過と敵を倒す事によって貯まる生産ポイントを消費して”生物兵器”を生み出す事が出来た。

現状、生産ポイントなるものは確認してはおらず、一体どのような条件や何を消費して兵器が生産されているのかは本人もわかっていない。

個人的に有力だと思うのは時間経過でポイント上昇、現状これを信じてやりくりしていく他に選択の余地はなかった。

タイラントはPLANT―42に密かに指示を出し、大量の分身PLANT―43を準備をさせていたのだ。

見た目は蔦の束と核である蕾で出来た植物人間。

それが大量に蠢きながらゆっくりとタイラント達の方へ向かっている様は、不気味以外に何物でもない。

まあこの際イビーの見た目が悪いのは好都合と言えるだろう。

正体不明の化け物を正義の味方が倒すのは非常にロマンがある、その心理を突いた【マッチポンプ】が本作戦の骨子だ。

最も手頃で印象的な演出が出来るが所詮は茶番。しかし、茶番とは本気で演じてこそ面白いのだ。

『これで下準備は完了。団長、後は状況見て退却でよろしくです』

『タイラントさん？これどんな状況？』

『まあ、所謂マツチポンプってとこですな』

『成る程、では囲んでいる敵は……』

『俺の眷族の分身だから壊しても問題無し』

『なら、適当に戦って一旦撤収しましょうか』

『了解』

【森が蠢いた】【帰らず森】【人食い花】

後に森から命からがら生き延びた者達は口を揃えてそう言った。

その【帰らずの森】真相は言うまでもなく、タイラントが破壊した森の緑化の為に放つ

たPLANET—42だ。

この食人植物は豊富な獲物と良い気候環境のお蔭でモリモリ成長し、増えに増えた触手地獄から逃れられた者は少ない。

近い将来、冒険者達の一種の都市伝説になるのだが、それはまたいずれの機会に話す事にしよう。

その気味の悪い蠢きはまるで巨大な魔物の腹の中に居るか様な錯覚すらする程不気味で、漆黒の剣のメンバーはまとめて震え上がる。

森の深部が恐ろしく、おぞましい場所だと言うのは理解していたつもりだった。

だが、改めてその認識の甘さを実感し、モモンと言う稀代の英雄とも呼べる者の力に頼り過ぎていた自分達の浅はかさを後悔した。

キチキチキチキチ……

何かの鳴き声とも言えなくもない音が暗い森の奥から聞こえてくる。

それも、ゆっくりとだが確実にこの場所に迫ってきている。

段々と不気味な音は大きくなり、やがて音は森の四方八方から聞こえてくる様になった。

「か、囲まれた!」

「おい、冗談じゃねえぞ! 何だコイツら!」

野伏であるルクルットは咄嗟に木々の間から見えた影に向かって矢を放った。

チームの目であるルクルットには薄暗い森の奥で動く「何か」をいち早く捉えていた。それと同時にその「何か」は明らかに敵だと言う確信、ほぼ反射的に矢を放っていた。放たれた矢は頭部とおぼしき蕾の部分に直撃をしたが特に効いている様子はなく、刺さった矢を蔓で出来た腕で引き抜く。

続けて矢を放つが結果は同じで効果は無く、何の足止めにもならなかった。

暗がりから姿を表した殺人植物郡は触手をうねらせながら、獲物である人間達を取り囲むように布陣し、嘲笑うかのように一段と活発に蔓を動かす。

「……これをさえ、普通の矢では効果は薄い」

タイラントは呆然としているルクルットへ炸裂鏃の着いた矢束をぶつきらぼうに投げ渡す。

ルクルットは渡された矢を見て、上等とは言えない自分の矢と比べると妙な鏃が着いてはいるが、矢として使うには勿体ない出来だと思った。

しかし、化け物の気味の悪い鳴き声が現在自分達が生きるか死ぬかの状況だと言う事を再認識させ、自身の悠長な躊躇いを一蹴させた。

「ありがてえ！赤目の旦那！」

ルクルットは受け取った炸裂鏃の矢をつがえると鏃の重さを改めて感じ、斜め上気味を狙って渾身の力で引ききった矢を放った。

曲射弾道を描いた炸裂弾頭は吸い込まれる様に蕾に直撃、破裂した。命中したイビーは蕾の大半を欠損させ、体液を撒き散らしながら倒れ、その活動を停止させた。

「おらあ！見たか化け物！俺って格好いいだろナーベちゃん！」
相手にされてないのに健気にナーベにアピールするチャラ男。

人間嫌い同盟会員のナーベ相手に諦めないその鋼のメンタルだけは称賛に値するよ。
(だが、使い馴れない重たい矢を初弾で命中させるとは、そこそ腕は立つな、このチャラ男の認識を少し改める必要があるか?)

まあ、イビーに行動不能のダメージを与える事が出来たのは単純に炸裂鏃の威力であつてチャラ男個人の力によるものではない。

タイラントは気軽にこの炸裂鏃を渡したが、一本単価は中々高価な部類に入る弾薬だと言ふ事を伝えておきたい。

鏃の威力は40mmグレネードとほぼ同等程度で、これがあれば大抵の魔物は爆殺可能なのだ。

しかし所詮は矢なので銃と比べれば射程も使い勝手も劣る。

火矢の上位互換と考えれば多少サーブिसした所で俺としては痛くも痒くないし、気にもならない。

「な、何故下等生物などに……」

心底悔しげな、いや悲しげな表情で此方を見るナーベ。

いや、折角だから役者に小道具を与えたつもりだったのだけど不味かったか？

シズにも大量に渡ししてるし、無限弾倉の効果で取り出し放題なのよ、ホラこんな感じに。

腰に着いた弾囊から明らかにサイズが違う弓矢を引き抜く。

まるで、かつて存在したと言われる珍獣「青狸」の四次元ポケット●の様な光景だ。

もう言うまでもないが、気にしないで欲しい。

「では、我々も始めようか」

「……合点承知」

そう言った瞬間、二人は一斉に動きだす。

目の前のイビーに向かって一息で間合いを詰めると、タイラントは挨拶がわりのアツパークアツトを蕾に炸裂させる。

腰の入った渾身の一撃、電光石火の身のこなしから放たれたアツパーは無駄にデカイ蕾にめり込み、破裂させた。

バンと言う音と砕け散った草の破片、緑色の体液が宙を舞い、その衝撃と威力の大きさを物語る。

自身を構成する核である蕾に深刻なダメージを負ったイビー。

いくら物理攻撃に高い耐性を持つとは言え、規格外な攻撃に対してはその耐性も無力、当然ダメージを負う。

体液を撒き散らし、触手を弱々しく動かす瀕死のイビーをタイラントは乱雑に掴むと強引にポイツと投げ捨てる。

そして、トドメと言わんばかりに手に持っていた炸裂鏃の矢を野球選手顔負けのフォームから投げた。

怪力&強肩から射出された矢……と言うか最早槍と言った方が良いかもしれない矢は頑丈な蕾の外殻を易々と貫き、背後の木に串刺しにした。

深々と鏃が刺さった半壊した蕾は遅延信管の効果で時間差で爆破炎上、イビーは一気に燃え尽きた。

ピギイイイイ

耳障りな断末魔を上げて燃える息子。少し可哀想だと思ってしまう自分が居た。

だが周りを見ればモモンが無双シリーズが如く、バツタバツサと豪快な草刈りをしていた。

高い物理耐性（笑）、哀れな息子達よ、我等ナザリックの栄光の礎となってくれ……次々と伐採されていくイビーを見て、駐車場の草刈りを思い出すタイラントだった。

狭い森の中でグレートソードを振るモモンと阿吽の呼吸で合わせる様に拳を叩きこみ、投げ飛ばすタイラント。

蝶の様に舞い、蜂の様に刺す

その言葉を体現している激しくも優雅なその様子は、まるでお伽噺に登場する英雄に相違なかった。

「……退路を開く、退くぞ」

タイラントは焼夷手榴弾を取り出すとイビーが集中している一角に投げる。

すると焼夷手榴弾はボンと弾け、あつと言う間に一面にいたイビー達は炎に包まれた。

燃え盛る大量のイビーにシズとルクルットは有りつただけの炸裂矢を一斉に撃ち込み纏めて爆砕、木っ端微塵に吹き飛ばす。

切り開いた通路を確認すると皆一目散に恐怖の森を後にした。

依頼失敗?・達成?

人食い植物の巣と化した森から命がらから脱出した一行は、激しく乱れる息を整えながら全員の無事を確認しあつた。

ペテルは薄暗い森の入り口を見ながら思う。

そして、つい先程の地獄から無事脱出出来た事が未だに信じられなかつた。

森の深部で得体の知れない化け物達に囲まれるなんて、絶体絶命の危機だ。

普通なら全滅していてもなんら不思議ではない状況だったが、そんな想定外の事態を根底からぶち壊す【規格外】の存在のおかげで無事五体満足で森から出れた。

しかし五体満足と言えど、死に物狂いで魔物と闘い、足場の悪い暗い森を全力疾走したのだ。

当然、皆の身なりはボロボロ、身体の方は満身創痍である。

「此処まで来れば大丈夫だろう」

モモンはそう言うのと両手に持った剣を背中に戻し、バサツと真紅のマントを翻す。満身創痍とは程遠いその立ち振舞いは、今しがたの出来事など無かつたかの様だ。

「……とんだ災難だったな」

一方、肩をすくめながら心にも無い事を言ったタイラント。

本当に災難なのは頑張つて増やした自身の分身を無慈悲に伐採されまくつたPLANNT-42の方だろう。

タイラント達ならばPLANNT-43が何体居ようが準備運動にもならない相手だが、この世界の住人達では対処が分からなければ数体で手に負えなくなるのは安易に想像がつく。

ましてPLANNT-42本体にいたつては、要塞と化した支配区域と植物らしからぬ頑強さも相まって並の冒険者では束になつても敵わないだろう。

森の深部で見た事無い魔物に包囲される、この冒険者達は生きた心地がしなかつただろう。

見知らぬ有象無象なら容赦なく捨て置くが、団長が組んで行動しているからには何か考えあつての事なのでだろう。

まあ、名を得るには目撃者が必要、きつとこの冒険者達はその為のスピーカーに違ひあるまい。

(……ならばそれに便乗させてもらうしかないな)

「薬草採取で死んでたまるかつてんだ」

「ま、全くである」

「本当に死ぬかと思った……」

「はあ、はあ、はあ……」

口々に生きているからこそ吐ける愚痴混じりの溜め息、激しい息遣いを横で聞き流しながら、タイラントは先程から背中に刺さる視線に少し不快感を感じていた。

誰しも覗かれて良い気持ちはしないだろう? 例えそれが”味方”であったとしても。腕を組ながら視線の感じる方向に顔を向けると何かが慌てる様子が見える。

(あれはアウラ? しかし、確か大森林を調査中だった筈。この場に居るのは何故だ? 俺は呼んで無いし……団長が呼んだのか?)

団長が呼んでいたとすればアウラには悪い事をした。殺気混じりに睨んで少々驚かせてしまった、反省せねば。

『いやあ、いかんね、どうも』

『どうかしましたか?』

『後ろの木にアウラ居るでしょう? つい気になって睨んじゃって……』

『あ! 言うの忘れてました! すみません!』

『いやいや! 職業病みたいなもんだから! 隠れて見られるのが苦手なんですよ……撃たれそうで』

『何か、殺し屋みたいですな』

『し、しがない公務員なんですけど……』
確かに殺し屋と言っても間違いは無いが、職業軍人とは言え肩書き上は一応公務員なのだ。

殺しだけを生業としている生粋の殺し屋と一緒にされるのは少し悲しい。

まあ、やっていた事に大した差は無いのだが。

気が付けば太陽は傾き、夕焼けの紅い光が大地を照らしていた。

もうすぐ日は沈み、夜になるだろう。当然だが夜の森には夜行性の魔物も数多く存在する。

そして先程のPLANET-43達も追って来ていないとも限らない。奴等は足は遅いが食欲のみの単純思考だけにとっても執念深い。

何れにせよ、日の暮れた森の目と鼻の先でいつまでも長居するのは愚か者だけだ。

さっさと移動した方が賢明だろう。

「……移動すべきだ、日が暮れる」

「そうだな、一度村に帰った方が良さそうだ、皆さんよろしいかな？」

「ね、願ってもない、早いところ戻りましょう」

皆立ち上がると急いで帰り支度を開始した。疲労した状態でも最低限やるべき事が出来る辺りが素人と冒険者の違いであろう。

こんな危険な場所から直ぐにでも離れなければ、と言う強い思いが自然と行動に出てい
るだけかもしれない。

普段よりも早く準備は整ったのは言わずもなながら、だ。

「タイラ……いや、少佐はどうする?」

「……森の探索に戻る、依頼を達成していかないのね」

まるで何かの買い出しをする様な気軽さで再び森に入ると言ったタイラント。

組合からの依頼は森の賢王の討伐だ。手掛かりも無しに帰ったら今後の予定が大幅
に狂ってしまう。

団長はある程度地道に名声を上げていくプランの様だが、俺は組合上層部に直接腕を
売るので、失敗は許されない。

何事にも信用第一の姿勢で行かねばならん。いい加減な奴だと思われたら終わりだ
からな、社会人として。

「正気ですか?!夜の森は危険ですよ!」

冒険者らしくない服装の背の低い男に怒鳴られた。

見た所、武器らしい物も持っていないし、見た目からして非常に弱そうだ。

だが、魔法詠唱者ならば見た目が弱そうでもとんでもなく強い場合は多々あるし、人
は見かけによらないとは良く言ったものだ。

しかし、この如何にも草食系の……うん、とりあえず草男としよう。

この草男からは何の強さも感じられない、本当に只の一般ピーポーなのかもしれない。
い。

だが、こんな危険な所に何故居るのだ？自分の身の程が分からん奴は戦場では直ぐに死ぬし、仲間には迷惑がかかる。

少し、お灸を据えねばならんな。

「……至つて正気だ、危険か危険でないかの判断は出来ている」

タイラントはその不気味な顔を草男の顔に目一杯近づけた。

防護マスクから漏れる吐息、赤目の圧迫感、威圧感たるや尋常ではなく、草男は気絶しそうになっていた。

「あまり私の依頼主を脅さないで欲しいな、少佐」

モモンがタイラントにやれやれと言った感じで止めに入った。

少し悪戯が過ぎたかと思つたタイラントは直ぐに顔を離す。余程不気味マスクに驚いたのか尻餅をついてしまつていた草男。

もつと肉を食べ、肉を！そんな優男で草食系なんで俺は認めんぞ！

『ところでタイラントさんの依頼つて何です？』

『ん、森の賢王の討伐ですけど、何か情報あります？』

『え!? 森の賢王!?!』

『ええ、森の賢王です』

『……賢王居ます』

『え、何処に?』

『後ろに』

『何が?』

『賢王が……』

タイラントはモモンの後ろをスツと覗く。そこには先程気絶させた凄く大きい喋るジャンガリアン・ハムスターが鎮座していた。

あの愛嬌のある愛玩動物ハムスター、それを規格外の大きさにしたのが森の賢王。

一体、何の冗談なのか。むしろこんな可愛い奴が森のボスとか他の魔物とか悔しくないのかっ!!

それを見たタイラントはモモンの肩に手を置き、項垂れながら首を振った。

『いやいやいや、嘘は良くない』

『いやいやいや、嘘言つてない』

『ハムスターが賢王とか世界観が全く分からん……』

『同感ですが、事実なんですよ……本人もそう言ってますし、ほら』

タイラントはモモンに促され、巨大ハムスターと対峙する。

常識的に考えてハムスターに向かつて喋るなどこれこそ正気の沙汰でない。何とも言えない羞恥心を感じながらタイラントはハムスターに話しかけた。

「……お前が森の賢王なのか？」

「いかにも！某は森の賢王と呼ばれていたでござる」

タイラントは頭痛がした気がした。巨大ハムスターが喋るだけでも衝撃的なのに、喋り方が変ときた。

マイナーな方言とかではなく、日本の古き良き時代に存在した侍の喋り方なのだから。

このハムスター、もしかしたら時代劇でも見て言葉を覚えたのかもしれない。

『何故、侍口調なのだ』

『なんででしょう……』

『もう意味がわからん』

『と、とりあえず！このハムスターは我らナザリックの新たなペットもとい仲間になったので……』

『そうか、仲間になったのか……なら殺せないな』

『なんか、すみません』

『……このトロールの首だけで何とかなるか?』

『まあ、今後の事も話す必要あるだろうし、一旦カルネ村に一緒に行きましょう』

『あ、了解です』

色々と採めたがモモン一行とタイラントはカルネ村に戻ると言うことで話は纏まり、足早に森を後にした。

「改めて紹介しよう、私の無二の友であり相棒でもある……」

タイラントはカルネ村に着き、一息ついた後にモモンと行動を共にしていた冒険者達に夕食がてら紹介された。

別に自己紹介とか必要ないと思っていたがコミュ障だと思われるのも嫌なので、夕食に参加した。

もつとも夕食など食べる必要は無いし、防護マスクを取ると中々ヤバイ顔を晒さなければならぬので非常に面倒なだけだ。

団長の様に魔法で顔を変えられると便利なのだが、生物兵器である仕様上、顔は既存の状態からTーウィルスの感染度、強化寄生虫を寄生させる事位でしか変化しない。

現在のタイラントの死体顔なんて晒したらどうなる事やら、安易に想像がつく。

(うん、絶対ドン引きされる)

だって、しようがないじゃないか。

僕、生物兵器なんですもの……

「……名は故あって捨てた、少佐と呼んで欲しい」

ありきたりだが、無難な自己紹介をするんだっ！

俺はやれば出来る奴なんだ、断じてコミュ障ではない。

ゲームだって自己紹介の欄に紹介文書くの俺超得意だったんだからな！

因みにこれがタイラントの紹介文の一例である。

趣味：【俺の趣味をあえて紹介するなら俺の趣】

一体、何処が得意だったのか問い詰めたいクオリティーだった……

英雄の条件

そう広くない部屋を灯すランタンの淡い明るさがタイラントの出で立ちをより不気味に見せる。

隣に並び立つ、誰が見ても屈強な戦士だと一目で分かる漆黒の鎧を纏ったモモン。

そして、誰が見ても暗殺者か変質者にしか見えない黒いBDUを着たタイラント。

この不気味な二人に共通するのは無駄に黒く、無駄に強い。

諸行無常、弱肉強食の世界に於いて強さとは一つの正義とも言える。弱い者は死に強い者が生きる。崇高な信念あれど力無くしては意味は無い。勝った者が正義であり、負けた者が悪なのだ。

命の価値が現代、いや現実よりも軽いこの世界では力こそが正義、力こそが全てだとタイラントは確信していた。

幸いな事に現状で脅威と成りうる存在は確認されてはいないが一寸先は闇、今後絶対に現れないとは言い切れない。

なんせ未知の世界、自我を持ったNPC達、自分達以外のプレイヤーの存在の有無、等々不確定要素は相変わらず満載だ。

最早この世界自体が夢、若しくはストレス過多による精神崩壊が原因で作りに出した妄想、虚構類いなのかもしれないとも思えてくる。が、目の前に居る奴等は確かに”人間”だ。

精巧なデータで再現された”物”ではない。一人一人が確かな意思を持ったれっきとした人間だった。

この世界に飛ばされ随分経ったが、こうまじまじと人間観察する機会はあまり無かった気がする。

愚かにも我らに楯突いた人間、打算的に接触した組合員、考えてみれば団長以外ともにも会話していない。

まあ会話する必要がなかったのだからしょうがないのだが、今後の活動の事を踏まえ積極的に行動していかねばならない。

「……モモンは戦友だ。隣に居るのはシズ、短い間だが宜しく頼む」

タイラントに促されシズはスカートの端を持つて挨拶をする。何気ない挨拶動作だが、シズの見た目の美しさもあって皆見とれていた。

見た事のない装いの男と美女の不自然な二人組だが、モモンの知り合いと言う事もあり、二人の怪しさはさほど気になっていない様子だ。

しかし何だろうか、気まずい雰囲気漂っている気がする……

モモンから端的に紹介され、そして言葉少く自己紹介したタイラントだったが、標準装備されている筈のコミュカ（笑）はあまり發揮されず、気のせいかと思われていた。まずい雰囲気は確信に変わり、かつその空気は部屋を完全に支配していた。聞きたい事は山ほどある、しかし聞くに聞けない空気を経験した事は誰しも少なからずあるだろう。

例えば合コン等で女性陣に話を切り出す時とか、特にこの空気になる。

『空気を読むスキルは大切にしたい所だが、この際そんな物は捨てちまえ!!』

『タイラントさん、心の声がだだ漏れですよ!』

『おっと、こいつあうっかり……』

『『八平かつ!!』』

『『H H H H H H H H H H H H H H A』』

一体何が面白いのか、いまいちギャグのセンスと笑いのツボが解らない大人が二人居るが気にしないで貰いたい。

寧ろ、何故このフランクさを出せないのか。まあ出したら出したで問題だが。

「……何か質問があれば遠慮なく聞いてくれ。答えられる範囲で答えよう」

沈黙を破るタイラントの問いかけに素早く反応したチャラ男がシュツと手を挙げた。

チャラ男は尻込みする仲間を横目に無駄に大きな声で質問した。

「お二方はどのような関係なんでしょうか！」

チャラ男の突拍子のない質問に部屋に静寂が訪れた。

ふむ、シズと俺の関係と言われても健全な上司と部下の関係だとしか言えないが客観的に見るとどうなのか？

謎のイケメンマスクと謎の美女のコンビ、好奇心を掻き立てられるのは致し方あるまい。

だが待てよ、もしや年頃の娘っ子を連れ回す不気味マスクとでも思われているのではないだろうか……

(だとすれば非常に度しがたい、度しがたい事態だ)

大切な事なので二回言ったが、正直何と返せば正解なのか解らず、返答に困りぐぬぬ……とマスクの中で唸っているとシズが自分と俺を指さし淡々と質問に答えた。

「部下、上司」

そう、それ。それが言いたかった。

流星はシズ、余計な事を混ぜないシンプルな回答が即座に出来るなんて痺れるし憧れるぜっ！

「惚れました！一目惚れです！つき「無理」あ、はい」

チャラ男が何を血迷ったのかシズに告白したが呆気なく撃墜された。

まあ、被せ気味に無理と言われたらもう何も言えないよね。

哀れチャラ男、精々身の程にあった女性を探したまえ。

「この下等生物は本当に懲りないわね。一度死になさい。そうすれば少しはまともな頭になるかもしれないわ」

ナーベラルの容赦の無い毒舌がまた部屋に静寂を導いた。

ータイラント脳内ー

実況：（おおっとー！ここでモモンの後ろに控えていたナーベラルから毒舌の追撃がチャラ男に仕掛けられたあ！）

解説：いやあ、流石は人間嫌い同盟の斬り込み隊長ですね。五感すべてから放たれる嫌悪感たるや親の敵の前にしてもそうそう出せるものではないですよ）

実況：（一般人がこれをやられた立ち直れませんからね。特殊な性癖でも持つてれば耐えられるかもしれませんが、心的ダメージは相当なものでしょう）

解説：（本当に人間が嫌いじゃなければ出てこない罵詈雑言ですからね、やはりナザリック代表クラスの実力を秘めた選手です）

~~~~~

(い、いかんいかん。脳内タイラントの実況と解説に聞き入ってしまった)

「仲間が大変失礼しました……、私はこの”漆黒の剣”リーダーのペテル・モークです」

「……あの森を損害を出さず良く生き残れたな、大したものだ」

「いえ、あれはモモンさんとショーサさんのお陰です。我々だけだったらどうなっていたか……」

「確かにあれは流石にヤバかったな！あ、俺はルクルット・ボルブだ、赤目の旦那！」  
「こ、このチャラ男、立ち直り早くないか？いや寧ろダメージを受けていないのか!?どんな強心臓の持ち主なのよ……」

「確かにお二人は英雄と呼ぶに相応しいのである！」

「ええ、目指す頂きの高さを再認識しましたが……」

小さい童顔の魔法詠唱者の見た目少年？とやたらデカイ男が話に割って入ってきた。

会話が弾んできた流れに”計算通り”とマスクの中ニヤリと笑うタイラント。見よ！これが俺のコミュ力だと言わんばかりだ。

人見知りなのに何を馬鹿な事を……とタイラントを知る人間ならば言うだろう、故に気にしたら負けである。

「彼は魔法詠唱者のニニヤ『術師』、そっちの大きい方は森司祭のダイン・ウッドワンダー」

一通り自己紹介も終わって適当に雑談しているのだが、個人的にすごく気になる事がある。

それはやたら会話の中に“英雄”と言うワードが出てくるのだ。

この世界の事情は分らんが英雄にでも飢えているのか？まあモンスターがその辺を彷徨く位だからやはり魔王とかいるのだろうか。

しかし、何だろうか。英雄ってワードには良い思い出はあまりないな……

『今時、戦争行くなんて正気かよ？』

(至って正気だよ、間抜け)

『なんだよ的場、お前“英雄”にでもなりたいのかよw』

(そんな事知るか、なりたけりやテーマがなれ)

『お前達は“英雄”なんかじゃない！只の殺人鬼だ！』

(利口だな、良く分かってるじゃないか)

そう言えば、戦争に行く時も復員した時も周りからピーチクパーチク言われたからか。

平和に浸りきった愚民共に何を言っても無駄だし、只仲間の為に命を懸けて戦う事の尊さなんか理解出来ないだろうから黙っていたが。

誰しも英雄になろうとだなんて思っていない。

只、結果的に英雄と勝手に呼ばれるだけ。

やれやれ、真の英雄ってのは死んだ奴等の事を言うのにな……

「……俺は英雄などではない」

静かに、しかしハッキリと聞こえる声でタイラントは呟いた。その剣幕を前に皆、会話を止め振り向いた。

「……本物の英雄と言うのは、自分の命」と他人の命の二者択一を迫られた時、迷わず他人の命を選択出来る者が英雄なのだ」

蛇に睨まれた蛙が如く、漆黒の剣の面々は固まってしまふ。

自分の命と他人の命、どう考えても自分の命のが大切に決まっている。

自らの命を捨てて他者を救う、言うは容易い。しかし、本当にそれを迷わず実行出来る者はこの中に居るだろうか？

故に真の英雄と呼ばれる者は自身の死を持つて証明されるのだ。

「皆さんもお疲れでしょうし、今日は解散しましょう」

気が付けば随分夜も更けていた。軽い懇談会みたいな感じだった筈なのに重い話題で締め括ってしまったな。

あくまで俺の持論であつてそれが全てじゃあないのだけど。

まあ、好き好んで英雄になろうとする奴は大概早死にするのが世の常だから精々気を付けてもらいたいものだ。

## 深夜の決闘

夜も更け、草木も眠る丑三つ時。

カルネ村から少し離れた森の開けた一画にタイラントとモモンガは対峙していた。

漆黒の鎧を纏った大男と漆黒のBDUを着た大男。

ナザリックの頭領と大幹部の二人が何故こんな時間のこんな所に居るのか？

時は遡ること約2刻程前の話しになる……

【漆黒の剣】との軽い顔合わせも終わって直ぐの事だった。

森での一件の疲労もあつてか割りと早く終わった顔合わせ。

早く終わったら終わったで二人は特にやる事がなかったのだ。

この世界の娯楽、一般的に酒飲むか女を抱くかだろう。

それも出来なきや後は糞して寝る位だが、アンデッド故に酒も女も睡眠すら必要無い。

ならば有り余る時間を二人は一体どう潰すのか？

色々試した結果、雑談位しかやる事がなかった。

普段からメッセージで雑談しているが、やはり面と向かって話す方が落ち着く気がする。

それは元は人間だからか、まだ完全にアンデッドに染まりきってないからか……  
だが対等に話せる相手がいたのは良かったとはつきりと言える。

ナーベラルやシズとでは命令、もしくは業務的になつてしまう。

それでは最早会話ではない。

それに本来の自分をさらけ出す訳にも行かないので凄く気を使うのだ。

その点、あーでもない、こーでもない、他愛もない会話が出来てこそ雑談。

同じ価値観を共有出来るありがたさをお互い身に染みて感じていた。

思い出話しから始まりそのうち白熱したPVP議論に発展、そして現在能力が縛られた自分の強さは如何程のものなのかと言う疑問にぶち当たる。

お互い本気で戦う機会はあまり無い。

今まで本気を出す前に皆相手が死んでしまうので自分達が強すぎるのか相手が脆弱過ぎるのかの境が良く分かっていなかった。

まあ恐らくナザリック勢の強さはこの世界では群を抜いている事は確かではある。

だが、この世界に存在する未知の魔法やアイテム、そして武技なる物の存在。

己の力を過信し油断をしていたら、痛い目をみるのは自分自身だ。

いずれ徹底的に調べなくてはならないが、今は現状をしっかりと把握しようとの結論に至った。

そうと決まれば即断即決、二人は直ぐに村を後にする。

要するに、二人は超暇だったのだ。

淡い月の光を受け反射する漆黒の鎧と真紅のマントが映えるヒーロー然とした装いのモモン。

一方、無駄を省いたデザインの黒一色の戦闘服に赤黒い色のアイピースが特徴的なガスマスクとフリッツヘルメットの怪人。

一見すると古い特撮ヒーローの決戦みたいな構図になっている。

中世対現代、時代を越えた装備クリエイトが出来たのもユグドラシルの醍醐味だった。

「さて、始めようか」

「……ああ」

モモンは二本のグレートソードをタイラントはコンバットナイフと拳銃を取り出し構える。



絶望と憤怒。

人ならざる者の濃厚な殺気が辺りを支配すると先ほどまで鳴いていた夜鳥や虫の音がピタリと止んだ。

深夜の森の静寂の中、一体何が合図になったかは定かでは無いがその激闘の火蓋は唐突に切つて落とされた。

「ぬん！」

手に持ったグレートソードを全力で振り抜くモモン。オーガの強靱な筋繊維と皮下脂肪で守られた体も容易く両断した強烈な一撃。

一切手加減をしていない、そんな一撃を向かってきた黒い影に遠慮無く叩きこんだ。

「……」

一方、一息で間合いを詰めモモン渾身の一撃を体を捻るだけで回避するタイラント。その爆発的な加速のまま飛び込み前転すると体を大きく捻り、胴回し蹴りに発展させた。

鋼鉄のハンマーと化した足をモモンは剣で弾くとガキーンと言う金属音と共に火花が宙を舞った。

（くっせ、やっぱり速い！）

タイラントの予想以上の速さの攻撃、反撃の流れとタイミングの良さに動揺を隠せな

いモモンガ。

そもそも、中近距離戦闘の専門家と魔法職の自分とでは土俵が違い過ぎる。

PVPは相手の正確な情報、そして何より経験がものを言う。

情報と言う点ではお互いの手の内は大体分かつてる。

ならば後は経験とセンス、どちらもタイラントの方が自分よりも一枚上手なのは当然の事だ。

(これ、本当にヤバいかも……)

間隙なく振っている筈の二本の剣は空を斬るばかりで掠りもしない。

対してタイラントは少ない動きで剣を避けては、蜂の一刺しの如く反撃をしてくる。

たまらず距離を取れば、容赦なく拳銃を発砲して立て直す暇も与えない徹底ぶりだ。

久々のPVP、弱体化&アイテム使用禁止のタイマンバトル。

ごり押しでは通用しない相手との戦う難しさを徐々に痛感する。

「くっ！」

パンパンと乾いた銃声と同時に銃弾が鎧に当たり火花を散らす。

ジワリとダメージを受けた感覚があると言う事は弾丸は聖属性の物を使用しているのだろう。

今回はルール上拳銃だけで済んでいるが、普段タイラントの持つ重火器であつたらと

考えるだけでゾツとする。

だが効いている素振りは絶対に出さない。

何故ならPVPは騙し合い、出し抜いてこそ勝機を見いだせるものだから。

この一方的な状況を打破すべく、モモンは再度攻勢に打って出た。

(畜生、火力が足りねえ！)

一方タイラントは自分の火力の無さにストレスを感じていた。

この身体はいつものT-103型に比べて格段に速度と汎用性は上がっている。

しかし、タイラントの代名詞とも言える圧倒的パワーと強靭さを引き換えなのが痛い所だ。

重火器も使用制限され、耐久性も物理攻撃力も半分以下にまで下がっている。

レベルで言えば大体60前後程の数値であろうか、全く著しい劣化である。

(こんな事なら拳銃縛りしなければ良かったなあ……)

間合いを取るモモンに拳銃を発砲するがいまいち効いているか分からない。

拳銃ではそこそこ攻撃力のある45口径でこの様だ。

次回からは一段階上位のマグナムの装備を視野に入れないと駄目だなと思った。

この手合わせする際に決めたルールは3つ。

一つ、殺さない程度に本気でやる

二つ、アイテムの使用不可（回復も含む）

三つ、魔法、銃火器の使用不可（拳銃は可）である。

恐らく、軽火器が使用出来ればもつと楽に戦えたと思うが無い物ねだりしても仕方がない。

ならば対アンデッド用の弾丸、祝福が施された純銀製の弾を使用して被弾効果の向上を狙うしかない。

アンデッド特効弾の使用は卑怯かとも思うが弾丸の指定はルールに無い。

選択出来る全ての手段を使ってこそこの戦いだ。

私情や罪悪感などで遠慮していたらこっちが喰われるだけ。

本気を出して殺り合うからこそ、遠慮などしない。

撃ち尽くし空になった弾倉を投げ捨て、素早く新しい弾倉を再装填する。

そんな時、団長が一気に間合い詰めて攻勢に転じて来た。

「……対アンデッド弾だぞっ！ちい！」

一瞬の動揺から一瞬の隙が生まれる。

反転攻勢、急に突撃してくるモモンの剣幕に気圧され、つい銃を乱射してしまう。

対応としては悪手の極み、心理的に対アンデッド弾を過信していたのもいけなかった。

被弾も恐れぬモモン決死の一撃はタイラントの持つ拳銃を見事真つ二つに切り裂いた。

「よっしやあー！」

「……見事、だが甘い！」

一矢報いたのも束の間、即座に体勢を立て直したタイラントはモモンに組み付くと首返しを敢行。

不意急襲的な反撃にモモンは対応出来ず、呆気なく地面に倒され、かつ首元にナイフを突き立てられた。

手合わせとは言えナザリックが頭領モモンガ、いやアインズ・ウール・ゴウンに泥を着けた。

この状況、モモンガLOVEのアルベドが見ていたら発狂してしまうのではないか？

【マーシャルアーツV】の拘束効果も相まってモモンは完全に死に体になっていた。

「……チエックメイト」

「降参だ」

降参の宣言を聞いたタイラントは拘束を解きナイフを仕舞う。

そして手を差し伸べ倒れたモモンを起こす。

「流石だと言わせてくれ、タイラントさん」

「……いや、俺もまだまだ甘い。早くこの身体に慣れないと駄目だ」

「うむ、油断せずにお互い精進しよう」

二人は軽く拳を合わせ、森を後にしようとするがその前にやらなくてはならない事がある。

『ふむ、ばつちり見られてたな』

『ええ、見られてましたね』

手合わせ開始して間もなくして感じてた気配が3つ。

まあギヤラー位居ても構わないし、プレアデスだしで何も言わなかったが……

職業柄なのか覗かれるとあまり良い気がしないのも事実。

だが前向きに捉えればこの状況、中々美味しいのではないか？

『俺達最初から気付いていたんだぜ？（ドヤア）が出来るのか……？』

『おお、それは定番！定番ですよ！』

『ありがてえ、ありがてえ！』

古いアニメとかで良くある展開にテンションが上がる二人だが容赦のない精神抑制

発動で速攻落ち着いた。

「覗き見とは感心しないな」

モモンは振り返ると、後ろの茂みに向かって言った。

あくまでも自然かつクールに決める、これが重要だ。

「ルプー、だから言ったじゃない……」

「あー！そんな事言ってズルいっす！」

「観念、する」

茂みから出てきたのはプレアデスの3人娘、ルプスレギナ、ナーベラル、シズだった。

まあ、別に見られたから何？って感じだが我々の威厳を保つ為にもビシッと指導するぞ。

「さて、何か言いたい事はあるか？」

モモンとタイラントの前に跪き頭を垂れる3人は観念した様子で特に申し開く事は無い様だ。

覗きがバレたのだからしょうがない。

見たければ見たいと言えば良かったのだ、見られて困るものでもなかったし。

だが、罰を与える程の事でもない。

この失敗を糧に是非とも成長してほしい。

「……覗くならばバレない様にやれと言う事だ、精々精進しろ」

「はっ」

「では解散だ、我々は村に戻る。この失敗を次に生かす事だな」  
そう言うともモンとタイラントは今度こそ森を後にした。



## 英雄計画 part 1

「それで、タイラ……少佐の仕事の方の目処がついたから復帰したと」

「……ああ、中東での仕事が終わって最近帰国したんだ」

「中東！それまた随分遠くに行ってましたね」

「……僅かに残った化石燃料をどの国も狙っているのさ、それこそ死に物狂いになつてな」

カルネ村へ戻るモモンとタイラントは薄暗い夜道を並んで歩いてた。

戦い後の余韻もあつてかいつも以上に会話が弾んだ。

その内容もついに人間だった時の仕事関係の方向へ行ってしまう。

お互い世間で言う所の社畜と公僕。

職は違えど苦勞の絶えない環境で過ごした経験はアンデッドと化した今でも鮮明に覚えてる。

寧ろ、現在においてもその行動や思考の基準になつていると言つても過言ではない。

願わくば、この疲れ知らずの身体が元の身体であつたらどんなに楽が出来たかと思つてしまうのもしばしばだ。

更に思い出してみれば、他のメンバーとの会話も職場での苦労話が多かった気が……

定期健康の結果やサービス残業日数、果ては休日出勤etc……

特にヘロヘロさんのは鬼気迫るものがあつた気がするなあ。

目を閉じればほら、辛く苦しい記憶が鮮明に……

「……酷いもんだ、どこもかしこも汚れきつてる。人も世界も」

天然資源の枯渇、壊滅的な環境破壊、大量破壊兵器の拡散、横行するテロリズム。

滅び逝く世界に思いを馳せるとドス黒い感情がにじみ出てくる。

保身しか脳のない政治家、平和に浸りきつた愚かな民衆、そして世界に広がる戦火の

渦。

自分の尻に火が着いている事に気が付かない、気が付けない。

そして土壇場になって己の非力を嘆き、呪い、死ぬ。

人類は自らの手で作り上げた悪意に飲まれ滅ぶ。

そう、滅ぶべくして人類は滅ぶのだ。

「何だか悪い顔になつてるよ、少佐」

話しかけられ思考の海から引き上げられたタイラント。

どうも考え事すると回りが見えなくなってしまうのは悪い癖だ。

「……顔はお互い様だろうか？そのヘルムの下は骸骨じゃないか」

自虐的な中傷は同じ様な中傷で返すのが様式美だと思っている。

やれやれと言った雰囲気でもモンの肩を軽く叩き言い返すと何故か不思議と愉快な気分になった。

H A H A H A H A H A H A H A H A ……

二人共普段キャラを作ってる為、滅多に声に出して笑う事は無い。

この身体になってから急激な感情の起伏は喜怒哀楽関係無しに、精神抑制が発動して一瞬で冷静になってしまう。

まるで死人に感情などは要らないと言わんばかりに容赦なく発動するのだから恐ろしい。

それ故に（まだ“笑う”事が出来る）と二人は内心ホツとしていた。

しかし普通に笑っているだけなのだが、地の底から聞こえてくる様な低い声の笑いは、知らない人が聞けば恐怖でしかない。

その上、声の主が完全武装の怪しい黒い男達ならば尚更笑わないで黙ってた方が姿相応と言えるだろう。

真夜中の森に不気味な声を響かせながら二人は村へと歩みを進めた。

凱旋、そうこれは凱旋である。

大切な事なので二回言ったが何故そんな事を言ったのか？

それは現在進行形で起きている事態を言っているに過ぎない。

モチモチした大福の様な大きなハムスターの身体に跨がる黒い戦士。

相反する見た目の組み合わせだが、見方を変えればまるでスラ？ムナイトの様な凛々しさだ。

なんて素晴らしい光景なのだろうか！見ろ、人がゴミの様だ！

「これは羞恥プレイか何かか……？」

「……ああ、その認識は間違っていないよ」

道行く人の好奇の視線や微妙に聞こえる賛否の声に漸く自身の置かれた状況を理解し始めたモモン。

漆黒の剣のメンバーが妙にハムスケを絶賛するものだから我等のハムスターは愛玩動物と言う価値観がおかしいのか？と勘違いしてしまっていた。

如何に強力な魔獣と言えど見た目は非常に重要であると再認識せざるを得なかった。

「……ハム公も運が良かったな、森で俺と先に出会ってたら問答無用で蜂の巣だったからな」

ハムスケの頭をペシペシと叩きながらサラツと恐ろしい事を伝えるタイラント。

こんな愛らしいハムスターでも敵であるならば一切容赦しない、それが暴君クオリテイ。

必要なら親兄弟、飼い犬とて容赦無し。

因みにハムスケの触り心地は、柔らかく仄かに暖かい毛並み、モフモフ好きにはたまらん肌触りだ。

「先に出会ったのが殿で本当に良かったでござるよ……」

タイラントの恐ろしい事実を聞いたハムスケは、先にモモンと出会えて良かったとしみじみ感じていた。

この人ならマジで殺るな、いや殺るね。

そう動物的、本能的な直感がタイラントが冗談で言っている訳ではないと告げていた。

そうこうしている内に街に到着、モモンは登録の為に組合へ、漆黒の剣面々は薬草の荷卸しで一旦別れる事になった。

タイラントはアインザックからの依頼、「森の賢王の討伐」は見て分かる様に完全に失

敗である。

何故なら先にモモンが目標を生け捕りにしてしまったから。

代わりと言えば聞こえは良いが、果たしてこの妖巨人の頭が何処まで評価されるかが問題である。

無論、どんな言い訳をしようが目標を速やかに発見、撃滅出来なかつたのは事実。

依頼失敗の結果は甘んじて受け入れなければならない。

「……依頼の期限は明日だが、この首だけでも組合に預けるか」

腐敗防止薬をかけた為にそこまで腐乱してはいないがそれなりの大きさの頭が入った麻袋は正直邪魔だ。

それにドス黒い血が滲んだ袋を持って街を歩くなど論外だ。

只でさえ不気味マスクと美人の目立つ組み合わせなのに、余計なトラブルを招く要素を追加する必要は無い。

そう判断するとハムスケに乗るモモンから少し遅れて組合へと向かった。

モモンを乗せてノシノシ歩くハムスケの後ろ姿は正に威風堂々たる佇まい。

だが乗ってる本人は何かの罰ゲームを受けている様な感じなのが残念だ。

ではタイラントが代わりに乗ればと言われたら丁重にお断りをするのは言うまでもない。

しかし、これがハムスターでなく同規格のトカゲや甲虫ならモモンも羞恥プレイとは感じる事はなかったのではないだろうか？

まあ騎獣の王道と言えはやはりドラゴン、次席にグリフォンなどの幻獣、ユニコーンやペガサスも無論外せない。

このファンタジー世界ならば必ず何処かにいる筈、いつかキャプチャーして乗り回してやろうとタイラントは密かに決意を固める。

だが、先にモモンがこのどれかに騎乗していたらタイラントは嫉妬のあまり2〜3日位自室に引きこもり、枕を涙で濡らす事になる。

「報告、【漆黒の剣】生命反応3消失」

不意にシズから告げられた不穏な報告。

生命反応消失⇨死、別れてからこの短時間で漆黒の剣PTがほぼ全滅した。

仮にも一端の冒険者3名がこうもあっさり殺られるものなのか？

少し腑に落ちない気がするが、いずれにせよ我等ナザリック宣伝用人間をぶち壊した

輩に若干の苛立ちを覚えると同時に、一体どんな面をしているのかと気にもなった。

「……シズ、此れを持って組合に行け。俺は少し“遊んで”くる」

「ロジャー」

そう手短かに言うとは手に持った麻袋をシズに渡し、今しがた歩いてきた道を駆け足で引き返した。

「もう壊れたの？つまんなあーい」

無惨に横たわる年少の亡骸に向かい不満を言う軽装の女。

常人なら直視出来ない様な拷問をしておいてこの言い種、根っからのサディストかサイコパスの類いなのは間違いない。

手に持ったステイレットをクルクルと回し、物足りなさげに目の前に広がる死体を見渡す。

この女が只の殺人狂と違うのは桁違いに強いと言う事だろう。

元漆黒聖典クレマンティーヌ、英雄級の實力を持った、生粋の殺人鬼だ。

「あーあ、もつと時間をかけたかっ……」

「……フム、中々派手に殺ったものだ」

その時クレマンティーヌは驚愕、そして戦慄した。

いつの間にか自分の目の前に黒づくめの男が居たのだから。

何の気配も音も無く、まるで最初から其処に居たかの如くしゃがんで死体を調べてい



る。

このクレマンティヌをもつてしても、接近を全く探知出来なかった、そして今も自分などまるで眼中に無い様子の男に言い知れない恐怖を感じた。

「な、何者だ、テメエ！」

ステイレットを構え、先ほどの声色とは違うドスの効いた声で誰何するクレマンティヌ。

普段なら条件反射でぶち殺していた筈。

が、この妙な仮面をした男はいつもと何かが違う。

どういう訳か、攻撃するにも最初の一步が踏み出せなかった。

今、踏み込んだら確実に死ぬ。

これ見よがしに隙だらけの背中と後頭部に踏み込もうとした瞬間、身体が急ブレーキをかけた。

このまま考え無しに刺突を敢行していたら、回転ハンマーの様に振られた拳が自分の首から上を吹き飛ばすビジョンが見えたのだ。

この男の必殺の間合いに入ったら死ぬ。

達人だからこそ分かってしまう彼我の実力の差。

圧倒的な殺意の塊を目の当たりし、金縛りにあっているかの如く、身体が動かなかつ

た。

「……喚くな女、殺すぞ」

たった一言、タイラントは立ち尽くす女に言った。

ドス黒い殺意と憤怒を乗せて……

## 英雄計画 part 2

ドス黒い殺気を撒き散らしながら、タイラントはゆっくりと振り返る。

赤目の仮面とフリッツヘルメットの不気味さは、数多くの修羅場を潜り抜けたクレマガスマスクンティーヌでさえ息を飲んだ。

「……全部で二人、遊ぶには少々不足だな」

くぐもった低い声が不気味さに拍車をかけ、見た事の無い真つ黒な生地の方が異様さを際立たせている。

そして何よりもはっきりと分かるのはこの男が自分達を完全に舐めている事。

何故それが分かるのか？

歯牙にもかけない相手に警戒する必要などない。

生かすも殺すも自分次第、その余裕は態度なり言動なりで自然と出るもの。

現にこの男、この場において武器を取り出し構える素振りも見せない。

この男にとって秘密結社ズラーノーン幹部二人程度、全く脅威ではないと言う事。

元漆黒聖典第9次席の実力をもっても“不足”と言う位に。

要するに対等に戦う気など全く無い。

遊び半分か暇潰し、又は余興の一種程度にしか考えていない事は明白だった。

「舐めるんじゃないやあねえぞ、このクソがあ!!」

古の名も無き戦士は言った。

侮辱を受けた戦士が取るべき行動は二つ。

相手を殺すか、己が死ぬか。

受けた侮辱をそのままに生きる事は許されぬと。

クレマンティーヌは戦士である。

人の道を外れ、外道に落ちたとて己の能力に絶対的な自負、プライドを持っている。

戦士として相手にもされない。

その辺の有象無象と一緒にされた対応。

当然、我慢など出来る訳がない。

得体の知れない恐怖を振り払うかの様な咆哮。

それと同時に〈武技〉を発動し、タイラントへ突貫を試みた。

この男は相当な手練れ、慢心するだけの實力があるのも認める。

まともに殺り合ったら確実に負ける事も百も承知。

だが格下だと侮って油断している今こそ、千載一遇のチャンスだ。

武技を発動させた不意打ちならば勝機はあるかもしれない。

相手は達人、だが此方も達人。

下に転がる木偶の棒達とは違う、私は英雄級の実力を持つ強者なのだ。

怒りに任せた場当たりのな物ではなく、怒りの感情すら計算に入れた攻撃行動。猫科の動物が獲物に飛び掛かる前の低く、しなやかな姿勢。

クレマンティーンは己の殺人術が最大限に発揮する間合いに一息で跳び込んだ。

(チャンスは一度、一撃で仕留めるっ)

〈疾風走破〉〈超回避〉〈能力向上〉〈能力超向上〉

武技よって限界まで引き上げられた身体能力は、最早超人の域へ達したと言っても過言ではない。

更にだめ押しの〈流水加速〉によって、その速度は爆発的に向上する。

自分以外の時間の流れが操作された様に遅く間延びした空間の中を、一人流れる水の如く移動するクレマンティーン。

武技を合計5つ同時に発動させた必殺の一撃。

驚異的な速度で放たれたステイレットの鋭利な切っ先は、空気を切り裂きながら低く決り込む様に無防備な喉へと迫った。

(もっらった！)

この間合い、このタイミング、完全に決まった。

この私を舐め腐ったクソ野郎の喉笛直撃コース。

ステイレットに仕込まれた魔法も食らわせば間違いない致命の一撃になる。

あとほんの数センチ、コンマ何秒かで男の断末魔が、絶叫が聞こえてくるだろう。

(妙な仮面ひつぺがして血のあぶくを吐き、のたうち回る姿を笑って眺めてやる)

勝利を確信したクレマンティーヌはほくそ笑みを浮かべ……

ガキン。

加速した身体が硬い何かにぶつかり急停止する。

同時に切っ先から感じたのは、喉笛に突き刺さる感触ではない。

何かとても硬い物に、そう岩にでも突き刺したような、そんな感触だった。

「……で、もう終いか?」

そして間を置かずひどく落胆しきった、低く底冷えする様な声が聞こえた。

「ば、馬鹿な……あり、えない」

何が起きたか理解出来ない、いや理解したくない。

こんな事があつて良い筈がない、起きる筈がない。

死角からの攻撃、タイミング、武技、全てが完璧の一撃だった。

なのに何故？なぜ？ナゼ！

この私のっ！必殺の一撃が、渾身一撃が、たった“指二本”で摘ままれてるなんて  
!!

「……遅い、やり直せ」

ステイレットを摘まんでいる指を弾くと、呆けるクレマンティーヌを壁際まで吹き飛ばした。

タイラントは吹き飛ばされる女を見ながらふと思う。

激昂からの攻撃動作の速さ、死角からの高速の突きまでの流れ、この女は“そこそこ強い”部類に入る戦士なんじゃないかと。

そう言えばあの村で会ったガゼフ なにがし 某も生身の人間にしては強い部類だったそうな。

まあ、俺はガゼフ某の活躍を直接見ていないからなんとも言えないが。

団長曰く、“そこそこ強い”。

状況も違うし、性別も違うし、一概に比較はするのは難しい。

だから“そこそこ”と感じた人間、大体同じ位の強さと考えるのが妥当だろう。

「……どうした、二人掛かりでも構わんぞ？もつともそつちの奴はあまりやる気が無い様だが」

タイラントはそう言うのと足元に転がる剣を蹴り上げて手に取ると、後ろの扉に向かっ

て投げつけた。

ズドンと音を立てて剣は勢い良く扉に突き刺さる。

扉を貫通した剣の先はその奥に居たカジットの眼前で止まった。

(此奴つ、気付いておった!)

目の前で止まった剣の切っ先に大いに肝を冷やしたカジット。

それ以上に、あのクレマンティーヌが赤子の手を捻る様に軽くあしらわれる光景に絶句していた。

こと戦闘に関して、比類なき強さを誇るあの女をもつてして歯が立たないとは……  
今回の目的は既に達成している。

クレマンティーヌのお遊びに付き合って死ぬつもりなど毛頭ない。

ふき出る冷や汗を気にする事なく、カジットは即座に撤退を決めた。

「……逃げ足だけは早い。で、お前は どうする?」

殺りたければさっさと来い、そんな意味を込めてタイラントは漸く構える。

その時、腕に適当に巻き付けていた冒険者の証であるプレートが露になった。

それを見たクレマンティーヌの目が見開かれ、ワナワナと震え、叫べんだ。

「嘘だ、嘘だ、嘘だ! お前が銅プレートだなんて! ありえない!」



「……貴様もコレを気にする輩か、度しがたい」  
駆け出しの冒険者たる証をプラプラと見せつける。

たかが銅を見せつけた所でだから何だと、普通ならそう思うだろう。  
銅や鉄のプレート持ちなどその辺に掃いて捨てる程居るのだから。  
だが、タイラントの場合はプレートと強さが全く比例していない。

プレートは強さの目安、しかし何事にも当然例外はあるものだ。  
その時、倒れていた漆黒の剣の屍が立ち上がり、一斉にタイラントに向かって襲い  
だした。

「……なるほど、臆病者がやりそうな事だ」

迫る動死体を見ながら先ほど逃げたハゲの仕業だと看破する。

おそらく奴はネクロマンサーか黒魔術使いか何かだろうと。

だが、この程度のゾンビで俺をどうにか出来るとは思ってははいまい。

(ならばこれは、只の時間稼ぎか?)

タイラントに覆い被さる様に襲ってきたのは森司祭のダイン・ウッドワンダー。

数時間前まで生きていた顔見知りが生ける屍になって襲ってくる。

まるで一昔前のB級映画みたいな展開だ。

「……少々不快だな」

こみ上がる不快感を吐き捨て、即座に近接即死カウンター【処刑】を発動させる。散漫な動きのダインを軽くいなすと、一瞬でその背後に回り込む。

そして無駄に大きい頭を掴んで捻ると、不快な音と共に首の骨がへし折れた。

既にダインの死命は制されてはいるが、念には念を入れる。

その歪に曲がった頭部を離す事なく更に捻り、非常識な腕力で首を無理やり捻り切った。

半ば千切った形になったが、断面からは血がふき出る様子はなく、ドロドロした黒い血の様な物が流れている。

それはもう人間ではなく、「アンデッド」に成り下がった証拠だった。

残る二体のゾンビ、野伏のチャラ男とPTリーダーのペテルだ。

あれだけ無駄口を連発していたチャラ男など最早見る影もない。

今の奴の口からは、無駄口の代わりに呻き声と血と吐瀉物が混じった物が出ているだけだ。

そんなチャラ男の首にタイラントは正面からナイフを一気に突き立てた。

深々と刺さったナイフを前蹴りと同時に引き抜くと、倒れた胴体を踏みながら拳銃を頭部に発砲、その脳髄を破壊する。

団長との模擬戦で打撃力不足を感じた45ACP弾。

だが、こうして普通の標的相手に使用してみると凶悪過ぎる威力だと言う事を再認識した。

最後に接近するペテルへ容赦なく数発弾丸を撃ち込む。

45口径の強力なストッピングパワーに加え、純銀製の弾頭はアンデットに対して絶大な効果を発揮する。

弾丸を撃ち込まれた傷口は焼け爛れて煙が上がり、ペテル・ゾンビは小刻みに痙攣し棒立ち状態になった。

タイラントは攻撃の手を緩める事なく、ナイフの届く間合いまで近づく。

全ての弾を撃ち切った銃をホルスターに仕舞うと、ぶつきらぼうにナイフを薙ぎる様に一閃振った。

ナイフにしては長く分厚い刃が肉と骨を容易く断つと、首は重力に従って床に落ちた。

落ちた首がゴロゴロと床を転がり、足に当たり止まる。

足元の苦悶の表情のペテルの首を拾いあげ、まじまじと見ているといつの間にか感慨に浸っていた。

本来ならばこいつ等には団長と俺の森での活躍を大いに宣伝してもらおう筈だった。

その為にこちらでも色々と策を弄し、その結果も殆ど完璧と言えた。

あとは座して待つのみ！ホワイトホール、白い明日が待つてるぜ……  
そんな感じになる予定だったのだ。

しかし、肝心の核となる人間が死んでしまつては、今までやった事が台無し、すべてが水の泡になった。

（それもこれも、全部あのハゲのせいか……大体ハゲは俺だけでキャラは足りているんだよっ！）

あのハゲ、絶対、許すまじ。

「……女、戻つてあの臆病者に伝えろ」

空気が変わる、それはこの事を言うのか。

クレマンティーヌは先ほどとは比較にならない無い恐怖を感じていた。

これ程の純然たる殺意を撒き散らせる事のできる人間など存在するのか。

いや、コイツは「本当に人間」なのだろうか。

奥歯がガチガチと音を立てている。

そう、クレマンティーヌ様ともあろう者が恐怖で震えていたのだ。

だが、それも無理もない話だ。

何故ならば、目の前のコイツは……

「必ず、コノ俺ガ、殺シテヤル、トナ!!」

人間などではなかったのだから……

## 英雄計画 part 3

死屍累々の大惨事の現場と化したバレアレ邸の倉庫に一人立ち尽くすタイラント。

その原因の一端である二人組は既に逃走して此処には居ない。

床に倒れた見るも無惨な姿になった漆黒の剣の面々を見下ろしてハアと一つため息をつく。

久々に感じる吐き気と頭痛をミックスしたかの様な気分の悪さ……の様なもの。

自己嫌悪とでも言えば良いのか……はつきりとした答えは出ない。

時々起こる表現しがたい気分の悪さだが、これが起きる度にある意味自分の「人間性」を再確認してしまうのは何かの皮肉なのだろうか。

見知った人間を躊躇いなく壊す、自分はここまで残酷で残忍だったのだろうか？

心の中で無意味な自問自答をしている自分に唾棄をする。

そして不意に沸いた不安の様な疑問を強制的に振り払うと拳を強く握りしめる。

（この身体になって散々人殺しをしておきながら、今になって「良心の呵責」に苛まれているとでも言うのか？）

ナンセンスも甚だしい、今さらにも程がある。

この世は弱肉強食、強き者が正義で弱き者は悪。

弱さは罪であり自己責任。弱い故にコイツ等は死んだ、只それだけだ。

今感じているのは知己故の同情、いや哀れみと言った方が正しいか。

しかし、それは人死に対するとするよりかは飼っていた愛玩動物が死んだ時に感じるものに近い気がする。

だから別にコイツ等の敵討ちをしてやろうとか思った訳ではない。

何せ、漆黒の剣にトドメを刺したのは他ならぬ自分自身、そんな事を思う事自体がお門違いと言うものだ。

だがタイラントは部屋中に倒れている漆黒の剣の骸を拾うと整然と並べ始める。

そして欠損した部分は判る範囲で本人の所へ置いてやった。

並べてやる事で先程の部屋の惨状よりは多少マシなった様に見える。

しかし、何故タイラントが有象無象の人間にそこまでしてやるのか？

理由は二つ。

一つは、ナザリツクの駒として働く筈だった者への義理。

二つは、一応冒険者として変な波風を立てない為の保身的な意味合いから。

仮にも同業者の死体を前に放置していたらどんな悪評が回るか分からない。

ましてこれから名声を上げて行かねばならないのにマイナスなイメージは必要ない

のだ。

まあ、この惨事の元凶がタイラント自身だとバレたら身も蓋も無い話なのだが……

「ンファイレーアやーい、モモンさんが来たよー」

時同じくして、バレアレ邸にしわがれた声が聞こえて来る。

どうやら家主がモモンを伴って帰って来たようだ。

タイラントはこの時、心底死体を整頓しておいて良かったと思った。

あんなブラッド・バスの中心に仮面被った男が立っていたら容疑者と勘違いされてもおかしくない。

取り敢えず、死体を調べてるフリでもしておけばこの場は大丈夫であろう。

タイラントは拷問死したであろうニニヤと呼ばれた術師の遺体の前に膝をついた姿勢になる。

「ひっ！一体なんじゃこれは！アンタは誰だい！」

本来ならば薬草保管する倉庫、今現在では猟奇殺人現場と言える倉庫へ家主が到着した。

「リイジーさん、彼なら大丈夫です」

あまりの惨状に腰を抜かすリイジーを下がらせ、タイラントに近づくモモン。

そして変わり果てた漆黒の剣を見て、ある程度状況を察した。



「少佐、状況は？」

「……死亡4、生存1」

「成る程、漆黒の剣は全滅……か」

「……ああ、それも随分と遊ばれてな」

タイラントはニニヤのフードを捲りその顔を見せた。

その顔はパンパンに腫れ上がり、眼球は潰れ水晶体が涙の様に垂れていた。

その常人なら直視出来ない酷い有り様は顔だけでなく指先に至るまで全身に及んでいる。

他のメンバーは正に一目瞭然の言葉通りの様子だ。

だが敢えてタイラントは説明する。

そうする事によつて話しを聞く第三者に、事態の深刻性をより鮮明に印象付ける事が出来るから。

「……他の残りは動死体にされたのでな、俺が始末させてもらった」

「舐めた真似をする、不快だな」

「……ああ、同感だ」

二人は立ち上がりながら不快感を露にする。

（団長に至つては俺よりも長く漆黒の剣と接していたんだ、何か感じるものがあつた

のだろう)

何となくそう感じたが、タイラントはモモンにその事を聞かなかった。

詮索屋は好きじゃないし、過度な詮索などをして良い事など無い。

健全な人付き合いは適度な距離感が必要なのだ。

「それで、生存1と言うのはまさか……」

「……薬師の小僧が生存している、今の所はな」

「今の所は……か」

「ンファイレアは無事なのかい！」

「……あの小僧なら下手人共に拐かされた。まあ拐かす位だ、何か利用価値があるの

だろう」

「ふむ、私が考えるに時間はあまり残されてないと考えるべきだ」

「……ああ、あのネクロマンサーの慌てた様は見ものだった。確か計画どう……とも

言っていたな」

タイラントとモモンの会話を聞いているリイジーの顔色は真っ青を通り越して蒼白

になっている。

下手人はこの赤目の仮面の予期せぬ反撃を食らって慌てて逃げた。

赤目の話しぶりから下手人は顔も見られている。

と言う事は、手段を選ばずに計画とやらを早める可能性は十分考えられる。だとすれば孫の生死が切迫している事は明白だ。

「一体、どうすれば……」

「依頼したらどうだ？」

意気消沈するリイジー・バレアレにモモンが静かに告げた。

「まさに冒険者に依頼する案件だ、違うか？」

更に畳み掛ける様にモモンは呆けるリイジーに言った。

リイジーの瞳に僅かながら希望を見いだした光が灯る。

「リイジー・バレアレ貴女は幸運だ。目の前に居る我々こそ、この街で最高で最強の冒険者だ」

「……おぬしなら兎も角、その赤目もかい？」

「ああ、言つてなかつたな。彼は私の唯一無二の相棒で戦闘の専門家だ、実力は私が保証しよう」

「そうかい、なら私から言う事はないよ。おぬしらを雇うよ！孫を救つておくれ！」

「賢明な判断だ、リイジー・バレアレ。報酬は、そうだな……お前の全てを貰う」

「す、全て……」

「そう、全てだ。それで孫が助かるんだ、安い代償だろうか？」

最早、冒険者との契約ではなく悪魔と契約したかの様な恐怖を感じたりイジードが、背に腹は代えられない。

感じた気味の悪さを振り払いモモンに再度懇願をした。

「承知した、わしの全てを差し出そう……必ず孫を助けておくれ」

「契約は交わされた、後は我々に任せて貰おう」

そう言うともモンはタイラントの方を向いて会釈をする。

「……情報収集系魔法など使う必要はない。手は打っている、シズ」

タイラントは極小の羽虫型ドローンを先程のクレマンティヌとのやり取りの最中に仕込んでいたのだ。

あえて相手を泳がすのもPK戦では必要な駆け引きの一つだ。

この偵察用「マイクロ・ドローン」は使い捨ての課金アイテムの一つで、一度きりしか使用出来ないが発見が極めて困難な挙げ句、敵の対抗魔法によるカウンターの心配がない。

何故ならドローンに対して何か外的、魔法的な干渉があった場合、即座に爆発してしまふからだ。

ドローンと受信機又はそれに類する物か種族であれば使用可能と言う、実に使い勝手の良いアイテムである。

しかし、一応レアな部類に入る課金アイテムなので数に余裕はなく乱用は出来ないのが珠に傷である。

「コピー」

シズはおもむろにスカートのの中から街の地図を取り出すとテーブルの上でバツと広げた。

何故そんな所からと思うが突っ込んではいけない。

古来よりメイドのスカートの中は神祕のベールに包まれているのだから……

「……奴らの反応は此処、墓地だ。シズ「マイクロ・ドローン」の映像は受信出来るか？」

「受信レベル：低 静止画像になります」

「……構わん、映せ」

「コピー」

シズの目から壁に映し出された画像には夥しい数の動死体が蔓延る墓地だった。

次々とスライドされた写真の中にはンフィーレアとおぼしき人物が写っているものもあった。

それを見たモモンは大きく頷き、地図の墓地の部分を指を差して言った。

「決まりだな、これより我々は墓地へと強襲を仕掛ける、各々準備をしろー！」

「……合点承知」

その号令を聞いたタイラントは即座に次元武器庫を発動させた。ディメンション・アーモリー

激しい光と共にバレアレ邸の倉庫が一瞬にして物々しい武器庫へと変わる。

その変わり果てた倉庫を見たレイジーは無意識の内に呟いていた。

「あ、あんた達は一体何者だい……？」

「……この事は墓場まで持つて行く事だレイジー・バレアレ。さもないと貴様の短い余生が更に短くなる」

「最早我々は一蓮托生だ、その事を良く肝に銘じる事だレイジー」

シヨースと呼ばれた赤目の仮面男とモモンに睨まれたレイジーは無言で頷く。

寧ろこんな非常識な事を他人に言つた所で到底信じて貰えないのは明白だが。

タイラントは壁や棚に置かれた銃や弾を無造作に取り、カートを取がしながら追従するシズへ渡す。

そして二人は山盛りになったカートから物を取り出しながら、銃には弾薬を装填し、予備の弾倉やナイフや手榴弾、果てはロケットランチャー等過剰な迄の武器を全身に装備していく。

「……シズ、敵の本拠地に殴り込みだ。細かい事は気にするな、遠慮は要らん、全力で叩き潰すぞ」

「コピー」

一通り装備が終わった二人が機関銃を肩に担いで立ち上がると……何故か？ デエエエン／＼と言う効果音が聞こえた気がした。

「モモンさ……ん、あの二人は何を始めるつもりなんですか？」

「多分、第三次大戦だろう」

そう言うのと四人は颯爽と墓地へと向かって走りだした。

## 漆黒の英雄

エ・ランテルの外周部の城壁内、その約四分の一の広さを誇る巨大な共同墓地は西側地区に存在する。

わざわざ巨大な墓地の区画を作るのにはアンデッドの発生場所を限定する事で、万が一の不測事態が起きた時に対処しやすくしているのだ。

そもそもアンデッドが何故発生するのか、その原因は不明な点が多い。

基本的に人が死んだ場所、特に戦場跡や遺跡、ちゃんと弔われる事なく放置された遺体等がアンデッドになると考えられている。

このエ・ランテル近郊も帝国との戦場がある為に巨大な墓地が必要だったのだ。

王国も帝国も互いの戦死者は戦時であつても丁重に弔う協定すら結んでいる。

アンデッドは生者にとって共通の敵と言うのがこの世界にとって常識だった。

故に、この共同墓地を囲む外壁は当然頑丈に出来ている。

そして、日夜衛兵や冒険者達が巡察しアンデッドを退治して共同墓地の平穏を守っていた。

「な、なんだこりゃあー」



「ア、アンデッドの群れが……」

外壁の上で警備していた衛兵達は目の前に広がるその凄惨な光景に絶句する。

一面に広がる墓地全体に蠢く死体の群れを見れば当然の反応と言えよう。

まるで墓地をひっくり返して死体を全部出したかの様な、いやエ・ランテル中の死体が一齐に動き出したと言つても過言ではないだろう。

更にその中にはより強力なアンデッドも確認出来る。

土を掘り返した匂いと腐った死体の匂いが辺り一帯に広がり、絶望的な状況をより鮮明にさせる。

「か、鐘を鳴らせ！ 応援を呼ぶんだっ！」

「下に、中に残った連中はどうする!?!」

「諦めろ！ 今門を開けたら終わりだぞ！」

圧倒的な死の濁流が迫る中、衛兵達は慌ただしく動き始めるが何一つ統制は取れていなかった。

正に蜂の巣をつついた騒ぎとはこの事を言うのだろうか。

「突き続けろ！ 絶対に門に近付けるなっ！」

衛兵達は手に持った槍を一齐に突き出す。

外壁の高度はおよそ4 m、取り敢えずは安全地帯と言える壁から攻撃する事は今出

来る上での最良の策であろう。

門に近づくゾンビを片っ端から突いていく。

焼け石に水と分かかっていてもやらずには入れなかったのだ。

「た、助けてくれえ！」

突然、外壁の衛兵の一人が叫ぶ。

その身体にはピンク色の紐の様な物が巻かれていた。

「か、絡まって取れない！助けてくれ！」

駆け寄る仲間必死に捕まるが、抵抗虚しく壁の下へと引き摺り落とされた。

やがて断末魔の叫び声の後に、グロテスクな咀嚼音が聞こえてくる。

その一名を皮切りに次々と壁の下へと落下する兵士が続出する。

一瞬にして壁上是安全地帯ではなくなったのだ。

「くそっ！【オーガン・エツク内臓の卵】だ！」

卵の様な形をし、その裂けた腹の中には大量の内臓が蠢く非常にグロテスクなアンデッド。

この触手の様に伸びる腸が腹から飛び出し、壁の上の兵士達を絡め取って落下させていたのだ。

アンデッドを放置するとそこにはより強力な個体が生まれる。

これだけ大量にゾンビが湧けば強力な個体が短時間で発生するのは必然だ。  
「さ、下がれ！全員下がれ！」

衛兵隊長はたまらず撤退命令を下す。

安全な筈の外壁の上から槍突き刺して門を何とか守っていた。

しかし、その優位性も危うくなった今、いたずらに兵士を失う訳にもいない。

当然その決断は、現状をより悪化させたの言うまでもない。

濁流を辛うじてくい止めていた障害がなくなり、これ幸いと死者の群れは一気に門へと殺到する。

そして、門へと到達したアンデッド達は原始的な本能の欲するがままに、ひたすら門を叩く。

死して尚、満たされる事のない“食欲”の赴くままに、生ある者を“喰らう”為に、門を叩く。

ドン……ドンドン……ドンドン、ドンドンドンドン!!

墓地の門を叩く音は徐々に増えていると同時に

ミシミシと堅牢な筈の門が悲鳴を上げて始めている。

圧倒的な数の暴力。

一体一体は脆弱な個体だが、その数はその脆弱性を補ってあまりある脅威だ。

応援が来るのが早いか、門が破られるのが早いか。

これから起こるであろう大惨事を想像すると、背中に流れる汗は凍てつく様な冷たさに感じられた。

剣を握る手の震えは全身に広がり、鎧がカチャカチャと音を立て始める。

衛兵として職に殉じるか、恥も外聞も捨てて逃げ出すか。

衛兵達は究極の二者択一を迫られていた。

「やれやれ、やっと着いたか」

「……途中からハム助に乗って「よーし、さっさと始めようか！」」

不意に場違い極まる会話が後ろから聞こえてくる。

衛兵達は恐怖で硬直した身体を何とか動かして、振り返る。

そこには、あまりに奇妙な姿の男女合わせて4名と巨大な魔獣一匹が居た。

派手なフルプレート鎧を纏った男と赤い妙な仮面をし、見たことのない装いの男。

そして、こんな状況でも息を飲んでしまうような美女が二人。

あまりにも、あまりにも怪しい。

半ば諦観した様子で奇妙な集団を眺めているとその首元や腕に金属のプレートが確認出来た。

冒険者だ！

絶望の闇に一筋の光が見えた様な気がした……がその儂い光は一瞬にして消えた。

【銅のプレート】

その男達のプレートは駆け出しも駆け出しの冒険者が着ける物だったのだから。

最低ランクの冒険者にこの状況を打破出来る力などある筈はない。

此方の過度な期待などで駆け出しをいたずらに死なせる必要などないのだ。

衛兵隊長はあえて語気を強めて言った。

「お前達！早く此処から……」

そう言いかけて不意に気付く背中から感じる何かの気配。

衛兵達は外壁の向こう、墓地側から見える異様な姿に自らの死を直視した。

無数の死体が集まって出来た巨大なアンデッド、ネクロスオーム・ジャイアント集合する死体の巨人が壁越しに此方を見ていたのだ。

あ、死んだ。

死体の巨人を見た者は直感的に悟った。

隊長に至っては最早逃げる気も起きなかった。

絶叫し、無様に逃げ出す部下達を責める気もない。

衛兵とて人間だ、偶々衛兵と言う職について、訓練して、武器を持っているだけの人間なのだから。

「少佐、やれ」

鎧の男がそう言うと、仮面の男が何かを背中から取り出し突きだす様に構える。

それは先端部が丸く、大きな「こん棒」の様な物だった。

(まさかあんな物で戦うつもりなのか?)

やはり馬鹿な奴だ、どうしようもなく愚かで、間抜けな駆け出しだと確信する。

(馬鹿は死ななければ治らない、まあアイツが死んだらその次は俺だ……)

諦めの境地に至った隊長はもう考える事を止めた。

この馬鹿な冒険者の次はどうせ自分が死ぬのだから。

どの道、壁を越える様な巨体のアンデッドなど並みの冒険者でも歯が立たないだろう。

変な期待などしないで潔く死……

!!!!

突如、耳を裂く様な破裂音がこん棒から唸った。

半ば呆然とこん棒の先端を目で追うと、勢いよく飛翔した先端は死体の巨人の上半身

に吸い込まれる様に直撃する。

そして、ボンツという破裂音と硝煙が死体の巨人を包みこむ。

生暖かい風が煙を四散させると、そこには驚愕の光景があった。

壁から大きくはみ出て見えていた巨人の上半身が……無い。

そう、あのこん棒の先端が上半身を木っ端微塵に吹き飛ばしていたのだ。

「う、嘘だろ……？」

現実か夢かの区別がつかない、一度に多量の情報が頭になだれ込み理解が出来なかった。

（ああ、全部夢だ。こんな夢でしかありえない）

アンデッドの大量発生から今に至るまで全てが夢であるという結論を出す隊長。

でなければこんな非常識な事の説明がつかない。

無理矢理自分を納得させようとするが、直ぐに現実へと引き戻された。

爆散し焼け焦げた大量の臓物の肉片が時間差で雨の様にびちゃびちゃと落ちてきたのだ。

「一体、何が……」

突然の出来事に衛兵達は総じて何も反応出来ないでいた。

自身に降り注ぐ血と臓物を拭う事なく、只々そのあまりにも不可思議な事態に吞まれ

ていたのだ。

「……きたねえ花火だ」

飛散する肉片を見てタイラントはそう不快そうに一言呟いた。

【パンツァー・ファースト30】

使い捨て携行対巨竜兵器で一番グレードが低い武器だ。

だが安価で取り回しが良く、そこそこの威力をインスタント感覚で発揮するのでタイラントのお気に入り武器の一つでもある。

安心安定の威力に満足しつつも、ミディアム・レアの焼き加減の肉片と血が雨の如く降り注ぐ様子は正に地獄の釜の蓋を開けた様な光景だ。

(しかしこの光景、何処かで見た事がある様な気がしてならない……)

!!

そうか、戦史資料室で見た【第一次世界大戦】だ。

古い榴弾砲の弾が塹壕へ一斉着弾した時の吹き飛ばされる大勢の兵士か似た様な感じだった。

そんな様子を生で見れてある意味貴重ではある、でも生ゴミが降ってくるのを見て良い気分になる訳がない。

まあ、今さら何を言っているのかも思うが。



四人十一匹は門の前まで進むと、果然と立ち尽くす衛兵に向かって開門を迫る。  
「……おい、呆けてないで門を開けろ」

タイラントは近くの衛兵にそう要求するが悲鳴の様な声で拒絶されてしまった。  
それは当然といえば当然の反応である。

門の向こうの墓地は最早アンデッド達の巢窟と化しており、今この門を開けたら大惨事になる事は間違い無い。

数多の化け物が蠢き、辛うじてその侵攻を防いでいる最後の防衛線である門を何故今開けねばならないのか。

とても正気の沙汰とは思えない、そう考えるのが普通だろう。

「お前達正気か……この先にはアンデッドの大群が居るんだぞ！」

隊長が先へ進もうとするタイラントの肩を掴み止めようとする、が身体から発せられる威圧感に気圧され後退る。

とても駆け出しとは思えない、それこそ名のある傭兵や一流の冒険者の様な覇気、いや殺気を感じた。

生き急いだ虚勢やったりでは無い。

コイツ等は本気なのだ、本気でこの地獄に行くつもりなのだ。

「……俺達は冒険者だ。其処に化け物が居る、ならば狩る、狩り尽くす……それだけ

だ」

「その通り、理由などそれで十分だ。門を開けたくなくればそれで良い。我々は勝手に行かせて貰おう」

そう言うともモンは背中から二本のグレートソードを抜き、タイラントは手に持った機関銃のコッキングレバーを引く。

そして二人は一跳びで外壁を飛び越し、墓地の中に入って行った。

「あ、あんたらも行くのか？あの中に！」

「当然でしょう？ゴミむ……臆病者はそこで大人しくしてなさい」

「早く、行かないと、おいて、行かれる」

「ちよ、ちよつと待ってくれ！あんた達、いや、奴らは一体何者なんだ!？」

ナーベとシズは妖艶に微笑み、こう答えた。

「漆黒の英雄よ」



## 突破

「……ほう、数だけは揃えたな」

壁を越えた先はアンデッドが所狭しと蠢く、グロテスクな光景が広がっていた。

正に感染極まった某都市の如く、絶望的な状況を絵に描いた様な感じだ。

しかしこの状況、ラストは核ミサイルでエ・ランテルごと吹き飛ばす展開しか見えて来ないのは気のせいだろうか？

まあ、ゾンビ作品の創作物の最後とえば、大爆発で町ごと全て木っ端微塵と大体相場は決まっている。

だが流石に中世の世界観でいきなり核ミサイルが飛んで来るなんて事は無いよな？

超位魔法、あるいはそれに類する未知の何かならば可能性としては0ではないが。

(いかんいかん、また悪い癖が出ている)

そんな事は無いと分かっている。

しかしそんな起こり得ない事を考えてしまう、これは最早病気か何か？

そもそも現在の俺が置かれている状況を見てみる。

俺が“ゲームのキャラクター”として存在している事自体が非現実的な状況なんだ

ぞ。

そんな非現実的状況で、もっと非現実的な事を想定したって、頓珍漢な事の上無いだろうよ。

「所詮は下位アンデッド、倒すには造作もない事だがやはり数が問題か」

モモンは二本のグレートソードを回転させ構え直すと、溜め息混じりにそうぼやいた。

ゾンビ一体一体の強さを度外視しても、この数は迅速さを要求される現状では無視できない問題である。

途方も無い量のアンデッドが、まるで濁流した川のように墓場を飲み込もうとしている。

こんな時、団長の範囲魔法攻撃ならまとめて一掃する事など朝飯前だろうが、現在は脳筋戦士モモンである。

モモン必殺技：アトミック大回転芝刈り（勝手に命名）で殲滅前進しても、時間が掛かり過ぎてしまう。

ハゲに辿り着いたら『薬師の小僧は死んでました、テヘペロー』、だなんて事態だけは絶対に避けねばならない。

正に肉の壁、戦いは数だよ兄貴っ！と言っていた將軍に感心する所だろうか？

しかしっ！こんな時こそ俺の出番である！

ある時はステゴロ喧嘩マン、そしてある時にはソルジャー。

ここは我輩が一肌脱いでしんぜよう……

《スキル》

【トリガー・ハッピー】

【ホイットマン・フィーバー】

発動。

「少佐、任せる。派手に殺れ」

「……クク、圧倒的理不尽をご覧に入れよう」

モモンの号令を合図に、タイラントは目の前のアンデッドの群れに構えていた機関銃の引き金を引く。

腰だめで持った7.62mmの機関銃が、待つてましたとばかりにドドドドと重低音の咆哮を上げる。

そして、激しい閃光と共に大量の弾丸を吐き出した。

発射される無数の弾丸、その数発おきに発射される曳光弾がまるで光の矢の如く映る。

光の矢は眼前のアンデッドの群れを無慈悲に穿いてゆき、腐った、あるいは乾燥し

きつたアンデツドの身体を一瞬で木っ端微塵に破壊し尽くし、容赦無く只の肉片へと変えていった。

対アンデツド用【純銀弾】の効果と射撃専用スキルの発動。

その威力は馬鹿げた域に達しており、只のアンデツド相手では完全にオーバーキルである事は言うまでもない。

銃とは人を殺す為だけに磨かれた技術の集大成である。

人類は有史以来、いかに安全に効率良く敵を殺せるかを常に考えている。

古の原始人は素手よりも頑丈な石を使い狩りをし始めた。

今度はその石を削り刃にし、やがて剣や槍、斧が生まれた。

だが、人は考える。

もつと安全に獲物を殺せぬものかと。

剣槍よりも遠くから攻撃出来ぬものかと、考えた末に弓が誕生した。

だが、また人は考える。

より強力に、安価で殺せる様にならないかと。

扱う者の技術を要する弓や剣、達人と素人では歴然とした差がどうしても生まれる。

人を育てるには相当な時間と労力が必要だ。まして争い事、戦が絶えない時代では悠

長に訓練などしている間など有りはしない。

素人でも安価に達人と同等の戦力に成りうる物とを考え、弓を進化させた弩を作り上げた。

そんなこんなで時は流れ、人は数多の武器を考えては戦に使う。

そして黒色火薬が発明され、約8世紀頃に遂に銃の原型が誕生する。

以降、その存在は以後の戦場の在り方を根本から塗り替えた。

例えば、時は群雄割拠の戦国時代にま遡る。

無敵と言われた武田騎馬軍団を打ち破ったのは、かの第六天魔王織田信長。

信長は銃の有用性にいち早く気づき、長篠の戦いではおよそ3000丁もの銃を調達し、運用する。

圧倒的な遠距離火力により騎馬軍団を撃破せしめ、特に火縄銃の三段撃ちは一つの軍事革命とも言われる。

だが、皮肉にもサムライの時代に終止符を撃った兵器もまた銃である。

ともあれ、魔法と言う不可思議な事象をかなぐり捨てた異世界の工業技術、いや武器技術の結晶。

何世紀にも渡り改良進化を繰り返し、如何に多くの弾を発射でき、如何に効率良く多くの人間を殺す為に生まれた末に辿り着いた進化の極致。

そんな武器である機関銃が、たかがゾンビの群れ程度に遅れをとる筈など無い。



ゾンビは劣った知能いや本能で察した、機関銃あは不味いと。  
しかし、察した所でゾンビに成す術などない。

危ないから近寄ろうにも、ヤバイから遠ざかろうにも、基本的に動きが鈍いアンデッドではどう足掻こうと無駄であった。

「圧倒的理不尽、確かにその通りだ」

目の前で展開される機関銃によるゾンビ解体ショー。

墓石や枯れ木、遮蔽物ごとゾンビを薙ぎ払う熾烈な銃撃は正に銃弾の豪雨。

一方的な殺戮は墓地に文字通りの屍山血河の地獄を作り出す。

ファンタジーを根本から破壊する、近代兵器による蹂躪。

剣と魔法の世界観？そんなの関係ねえ！と言わんばかりに機関銃をぶっばなすタイラント。

そして、永遠に続くと思われた銃撃音は弾切れを境に漸く止まった。

「……クソツタレ共、お休みの挨拶が無いぜ？」

そう吐き捨てる銃口から白煙を上げ、発射可能限界を迎えた機関銃をぶっきらぼうに投げ捨てる。

投げ捨てられた銃は地面に落ちる事なく粒子となつて収納空間に消え、タイラントは新たに背中から中折れ式擲弾銃を取り出した。

再度集まりつつあるゾンビの集団に40mmHE弾を撃ち込もうとした時、プレアデスとナーベが到着した。

「シズ、現在地」

「申し訳ありま「殿！殿！周りが大変な事になっていてござる！」せん、モモン……さん！」

おいナーベが若干イラついているぞ？ハム公よ自重しろ。いつか丸焦げにされるぞ、割りとマジで。

「状況は見ての通り、全面敵だ」

「……状況は最高、我々はこれより突撃を敢行する」

「御意」

ビシツとプレアデスの二人が気を付けをし、直後に戦闘態勢をとる。

シズはスカートのの中から突撃銃を取り出し、ナーベは両腕に電撃を帯電させた。準備は万端、あとは突撃命令を待つのみである。

「時間が無い、一点突破だ！一気に駆け抜けるぞ！」

突撃する直前にタイラントは重要な事を思い出した。

衛兵の応援の手勢や新手の冒険者等の妨害勢力の対処である。

お膳立てするだけで、美味しい所を持って行かれるなど許せたものではない。

あくまで新参の冒険者の我々の立場はお世辞にも高くは無い、寧ろ低いだろう。かと言って気に食わないからと冒険者や衛兵を殺す訳にも行かない。

起こりうるリスクには手を打っておくべきだ。

「……ハム公はしんがり殿だ。この場において門を守ると同時に新たに墓場に侵入する冒険者ハイエナと衛兵を排除しろ」

「こんな所に一人にしないではほしいでござる！後生、後生でござるよお〜！」

その時、散漫な動きのアンデッド達が急に活発に動き出した。

アンデッドは「生ある者」に強く反応する。

そう、ハムスケの「生命」に敏感に反応したのだ。

明らかに対行爲をしているにも関わらず、いまいちモモンとタイラントに対して反応が薄かったのは、要するに同族だと思われていたからだ。

オーバードロード バイオ・オーガニック ウエポン  
死の支配者と生物兵器

同族だと一括りにされるのは些か癪だが、一応は同じアンデッドの部類ではある。あながちゾンビ達の反応は間違っていない反応だった。

「……見ろハム公、良い肉付きのお前を見て奴ら元気になったぞ」

「ひい、某は美味しくないでござる！」

何かでかいモフモフがオーバリアクションで怯えている。

しかし何故だろう、可愛いと思ったら負けた様な気がする……

『いかんいかん、働かざる者食うべからずだ。可愛い見た目なんぞに俺は騙されんぞ！』

「……貴様も栄光あるナザリックの一員ならば、その忠義を此処で示せ！」

正に暴君、正に憤怒、有無を言わせぬ濃密な覇気がハムスケを襲った。

実際は一瞬でもハムスケを可愛いと思ってしまうたのを恥じたタイラントが、大声を出して誤魔化しただけである。

それに気が付いているのはモモン只一人だけだった。

『つぶねー、マジつぶねー、バレル所だったぜ……』

『聞こえてますよ、心の声ガバガバですよ……』

後に、この件についてタイラントはモモンにレポートを提出したがそれは諸般の理由により割愛させてもらう。

「でも、流石にこの量は某だけでは厳しいでござるよ……」

ハムスケとてトブの大森林で森の賢王と言われた魔獣。

自分の力量と対する敵の戦力差の計算は出来ているつもりだった。

まして相手はアンデッド、死の塞がった死兵であり、その数の暴力は決して侮れるも

のではない。

新参者故、モモンに良い所を見せたい気持ちもあるが、主君に使えろと決めた以上無駄に死ぬつもりもなかった。

おまけに下手に手傷を負えば、アンデッド化する可能性も大いにあり得る。

主の命令に逆らう事に後ろめたさはあったが、無理なものは無理とハムスケなり言っただのだ。

気落ちしながら答えたハムスケを見てタイラントは腕組みをして考えてみる。

そして一つの結論に達する。確かにハムスケの言う事はもつともな事だ。

只、単純にハムスケが臆病風に吹かれたのであれば、一考する価値無しで強力な強制力をもって命令を実行させるつもりだった。

だが格下の相手とは言えこの量のアンデッドだ。

戦闘中に負傷する可能性は十分大きいだろう。

感染した巨大ハムスター・ゾンビなど想像もしたくないし、せっかくネームドモンスターを騎獣にしたと言うのに、それをアンデッドにしてしまつてはモモンの名に傷が付く。

【漆黒の剣】無き今、英雄モモンを演出する為にはハムスケと言うネームバリューは今後否応なしに必要になってくる。

なので、この魔獣は大事にしなくてはならないのだ。

「……ふむ、ハム公の言い分にも一理ある。良かろう、クリエイト・バイオウエボン生物兵器・創造」

そうタイラントが唱えると、地面から鉄のカプセルが6つ地面から勢い良く飛び出した。

そして、プシューと空気が抜ける音と共にカプセルの重そうな蓋がボタンと倒れ、中から緑色の異様な姿をしたモンスターが現れた。

〔ハンターα〕

人間と爬虫類の遺伝子を組み合わせたB・O・W。

爬虫類ならではの硬い鱗と、異常に発達した爪、素早い動きで獲物を確実に詰める恐怖の狩人。

安価な生産コストな上に、俊敏性、凶暴性、耐久性、どれをとっても素晴らしい性能を誇る。

中でもその鋭利な爪から繰り出される攻撃 // 首刈り // は低確率で即死判定すら出す。

そして何よりB・O・W. の中でも比較的賢い部類に入り、簡単な命令の実行、仲間との連携攻撃すらも可能。

まさに狩人と呼ぶに相応しい強力な生物兵器である。

「……我が息子達よ、狩りの時間だ。群がるゴミ共と、そうだな……墓場に侵入する人間は全て、殺せ」

「ひい、凄く怖いのが出てきたでござるうー！」

甲高い咆哮を上げ、残忍な狩人達は動き出した。

その大柄の身体からは想像も出来ない機敏な動きで、次々と手当たり次第にアンデッド達に襲い掛かり、その鋭利な爪で切り裂いて行く。

カタログスペックだけ見れば、中位アンデッドのデスナイトと同等程度かそれ以下だ。

しかし、ハンターは群れで狩りをする。

一体だけでもそこそこ強いのに、群れるとなればその戦闘力はぐんとはね上がる。

並みの冒険者ではハンターと目が合った瞬間に首が飛ぶだろう。

「……これで寂しくなろう？ さあ貴様も務めを果たせ」

「な、なんじゃこの音はっ！」

墓地に響いた聞き慣れぬ爆音にカジットは肝を冷した。

それはある意味確信めいた直感でもあった。

背中に流れる凍てつく汗と、見に覚えがある濃厚な殺気。

「奴が来た」、あの赤目の黒い悪魔が宣言通り自分を殺しに来た……と。

「くっ、何故こんな事に！何故……！」

野望達成を目前にして、とんでもない障害にぶち当たったカジツトは酷く狼狽する。

圧倒的なアンデッドの壁、自称最強の戦士であるクレマンティヌ、そして二体の骨スケルトン、ドラゴンの竜と言う切り札。

だが、何故かそんな万全とも言える備えが心もとなく感じるのだ。

「は、早く儀式を進めねば……」

墓場に響く爆発音がだんだんと近くになっていく。

侵入者達は隠れて行動などしていかない、あの大量のアンデッドの群れを正面から薙ぎ払いながら此処に向かって来ている。

狂っている、常識的に考えればどんなに腕に覚えがある冒険者としてそんな事はしない。

だが、次々と減っていく召喚したアンデッドとのラインがそれが事実である事を裏付けていた。

「あちゃー、カジツちゃんこれはヤバイわ。アイツが来た」



ふざけた声ながらも、顔が真剣なクレマンティーヌがそう言った。  
「くつ、あと一歩だと言うのにつ！」

!!!!!!  
自分達の直ぐ後ろで起きた爆発に儀式を行っていたズーラーノーンのメンバー全員が振り向いた。

爆発によつて立ち込める砂ほこり、パラパラと小石が落ちるその奥から一つの影が姿を現す。

「……よお、首はちゃんと洗ったか？」

煙を上げる擲弾銃に新たな弾を込めながら、狼狽える集団に向けて親しげにタイラントはそう言った。

中折れした銃を戻す際に鳴るカチンと言う心地よい金属音が、静まりかえる墓場にいやに響く。

赤目の死神がやって来た。

カジットは自分に向けられた妙な筒を睨みながらも、言い知れない恐怖に支配されていた。



## 制裁

「……挨拶代わりだ、コイツを食らいな」

タイラントは、狼狽えるカジットやその取り巻きの反応や返答を待つ事なく、グレネードランチャーを発射した。

容赦の無い先制攻撃、完全に敵だと分かっている相手に何を躊躇う必要があるのか。

「先ずは殺してから考えろ」これはタイラントの行動指針の根幹である。

ポン！と言う気の抜けた音と共に擲弾は発射され、カジット達の頭上より少し上へ向けて飛んで行った。

(あ、外れた)

なまじ弾速が遅いので、その弾道が目標よりもだいぶ頭上へ飛んで行くのが良く見える。

絶対手元が狂ったのだらうとモモンは思った。

そう思うのも、タイラントは発射前にわざわざ銃をクルリと回転させてからだ。

その無駄極まる動作は決め台詞も相まって格好は良かった、昔の西部劇みたいで。

しかし、それで攻撃を外してしまつては本末転倒である。

こと、戦闘に関しては真面目なタイラントらしくない、そうモモンは思った。

だがその刹那、KKKの黒バージョンの覆面集団の真上辺りでボンツ！弾が破裂、爆風と共に鋭利な針の様な物が辺り一面、その爆煙直下に降り注いだ。

タイラントが使用したのはフレシエツト弾、鉄製の矢弾を投射する主に対人用の特殊な弾頭。

ほんの挨拶代わりの軽いジャブ、本当にそんな気軽さでタイラントはこの弾を選んだのだ。

数ある特殊弾頭の中でも攻撃範囲は優れるが威力は最弱の部類に入っていたフレシエツト弾。

最初期の頃に対人特化の範囲攻撃と言う事で勇んで使ってみるが……

「がっかりだよーホントにもうがっかりだー」

そう叫んでしまった程、蓋を開ければ残念な仕様だった。

見た目派手なエフェクトの割に肝心の威力は据え置き、更にそこまで範囲も広くないと言う使い勝手の悪さ。

なまじ実物の威力と脅威を知っているだけに、ショックを受けた事は忘れてはいない。

だからこそ、この程度の攻撃で死ぬ様な三下は眼中にすらない。

御大層な格好をしているだけの只の「案山子」と言った所だろうか。

「グギギギ……」

瀕死の人間の弱々しい呻き声が静まりかえった墓地に響く。

フレシエットの矢弾の雨をもろに浴びた者の様は正に針ネズミ。

その比喩が全く比喩になっていない部下達の有り様にカジットは絶句する。

間一髪の自身の防御が間に合ってなかったらと考えると冷や汗がドツと噴き出した。

「……この程度の攻撃も防げないとは。全く呆れた部下だとは思わないか？」

やれやれと、心底呆れた様子で地面に転がる針人間を見下ろしながら、タイラントは  
そう一方的に語りかける。

それも、さも他人事の様な飄々とした態度で。

タイラントの足下では、血だるまの針人間が浅い呼吸と激しい痙攣を起こしビクンビクンと歪な動きをし始めた。

その凄惨な部下の姿を見てカジットは中々その問いかけに答える事が出来なかった。

「……少し、見苦しいな」

ドン！

そう呟くとレッグホルスターから銃を抜き、痙攣する針人間の頭を次々に発砲していく。

大口径の拳銃で撃たれた頭は熟れた果実の如く弾け飛ぶ。もつとも、飛び散っているのは果汁などではないが。

一発で頭部の大半を欠損し、あれほど活発に動いていた身体はピクリとも動かなくなつた。

その様子は、まるで機械が黙々と作業しているかの様だった。

淡々人間を処理する殺人機械。

その何の感情も、躊躇も無く頭をぶち抜いていく様子は、数々の殺人や拷問をしてきたクレマンティーヌですらその異質さに背筋を冷した。

一通り処分し終えると、首と肩を回しながらモモンに近くに歩いて行く。

「……さて、そろそろ仕事するか相棒」

「そうだな、我々の務めを果たすでしょう」

モモンとタイラントがそう言うのと、各々が武器を構え戦闘体勢を取る。

モモンは背中から剣を取り出し、ナーベはバチバチと両手に魔法を蓄積させ、タイラントとシズはガチャンと銃に初弾を込めた。

準備万端、いつでも殺れる。

この一触即発のピリピリとした空気が漂う段階に来て、漸くカジットは言葉を発した。

「貴様等は何故、儂の邪魔をするのだっ!？」

「……はっ、散々待たした挙げ句のセリフがそれか？」

「わ、儂の数年の計画を!こんな所でっ!」

「……計画?馬鹿を言うな。お前は既に俺達の計画を台無しにしているんだぞ?」

「な、なに……?」

怒りから驚愕の表情に変わるカジット。

まるで身に覚えがないと言った感じである。

本当に呆れた感じのモモンが嫌悪感丸出しの態度でカジットに教えてやった。

「薬師の家、冒険者、これで分かるか?」

「あ、あの時のっ!!」

カジットは後悔した。

何故あの時クレマンティーヌの無駄な殺しを看過したのかと。

コイツ等は仲間の敵討ちに来たのだ。

あんな名も知らぬ冒険者程度の為に……

「お前達が殺した冒険者達は我々の名声を高める為に必要だった。それを全部台無しにしたお前達は大変不快だ」

故に、殺す。

モモンがカジットに向けたグレートソードからは明確な殺意が放たれていた。

「……俺はあの女に伝えておけと言ったのだがな、必ず殺してやる」と

タイラントは「そう言ったよな？」とあさつての方向の暗闇に向かって拳銃を向けた。

（あちやー、やつぱりバレてるか……）

クレマンティーヌは背中に鋭い殺意を感じ、墓場から離脱しようとしていた歩みを止めた。

歴戦の戦士であるクレマンティーヌは勝てぬ戦いはやらない。

フレシエットの雨を「不落要塞」で何とか凌ぎきり、早々に逃げの一手を選択した。

赤目は大した攻撃ではないかの様に言っているが、それは大きな間違いだ。

あの鉄針の雨を初見で凌げる者など、そうそう居ない。

（まずい、まずい）

数ある状況の中でも反吐が出るほどの最悪と言って良い。

何故か？

離脱に失敗し、完璧に捕捉された。

そして、見るからに完全武装した赤目の化け物と戦う羽目になった。

【死】

今までこれ程強く感じた事があつたであろうか。



## 【絶望】

強者だからこそ分かってしまう力の差、万に一つ勝ち目の無い勝負。

「……さて、役者は揃った。存分に殺し合おうか」

「おい女、お前の相手は俺だ。同じ剣士のよしみだ、一対一で相手してやる」

モモンはフードを深く被ったクレマンティーヌを指名し、さつさとかかって来いとかりに挑発する。

クレマンティーヌは歓喜し、そして激怒した。

「はっ！赤目の取り巻き風情が調子乗ってんじゃねえぞ！」

「キャンキャンと弱い犬ほど良く吠える……」

「てめえ、殺すっ！ぶっ殺す！」

モモンに剥き出しの殺意をぶつけるクレマンティーヌ。

あの赤目の取り巻き、相当な手練れである事は分かる。

だが、一つ言えるのはコイツは赤目程強くはない。

あの絶対的な【死】のオーラを感じないのだ。

随分と良さげな鎧を着こんでいるが、装備だけ立派で中身は微妙と言うパターンに違いない。

「ふっ、少佐が居ては集中出来ないか。向こうでやるか？」

心底馬鹿にした感じでクレマンティーンに言うモモン。

まあ、あからさまな挑発である。

この程度の挑発に簡単に乗るようなら、存外この女も大した事ないと思う所だ。

「その余裕、絶対後悔させてやる」

「是非してみたものだ、その後悔とやらを……な」

「……安心しろ、俺は手を出さん。そっちはそっちで存分に殺つてクレ」

タイラントはそう言うともモンに向けて親指を立て合図する。

【健闘を祈る】と。

眼だけで人を呪い殺せそうな怨嗟の表情のクレマンティーン。

温度差の激しい二人は、静かに墓地の奥へと消えていった。

（絶対楽しいだろうな、団長）

モモンにとって初の決闘、初のガチンコ白兵戦。

手練れの戦士との戦闘で学ぶ事はきつと多い筈、是非とも近接戦闘のスキルアップに繋げて欲しい。

まあ、あの程度の相手なら団長が「本気になる」「事はないから全然心配はしていない」が。

「……さて三対一だが、まさか卑怯とは言わないよな？」

「最早、語る事などあるまいっ！」

カジットはそう絶叫し、手に持った死の宝珠を掲げると珠は鈍く光だす。

そしてカジットの切り札とも言える骨スケリトル・ドラゴンの竜が姿を現した。

「……おいでなすつたぞ、盛大に歓迎しようか」

「センパー・ファイ」

「シズ、その掛け声は何……？」

腐つても鯛、もとい腐つてもドラゴン。

そんな強大なモンスターを前にして、間の抜けたやり取りをする3人にカジットは憤怒した。

「こ、こやつ等馬鹿にしおつて……やれい！」

カジットの号令で骨の竜が動きだし、三人を踏み潰さんとその巨体を急降下させる。

素人じゃあるまい、そんな見え見えの攻撃など当たる訳がない。

三人は一斉に分散回避、即座に反撃に移った。

「……シズ斉射三連、ナーベは俺に合わせろ」

「〔御意〕」

シズは回避の最中いつの間にか取り出したブルパップ式大口徑ライフル〔GM6—LYNX〕を担ぎ顔面目掛けて立て続けに発砲した。

発砲と言うより破裂と表現した方が良いデカイ音がその威力をまざまざと物語る。

発射された50口径弾が硬い頭蓋骨に直撃、火花と骨片を散らしながら骨の竜は大きく仰け反る。

その間にタイラントとナーベは肉弾戦に切り替え、一気に距離を詰める。

そして、隙だらけの骨野郎にタイラントはハンマーブローを、ナーベは殴りと蹴りの鋭いコンボを叩き込んだ。

まるでアダマンタイト製のハンマーでぶつ叩いた様なタイラントの強烈な一撃は、たつた一発で頭蓋に縦一線の大きなヒビを入れる。

規格外の規格外による破壊的な一撃。

まあ、良く頭蓋の原型が残ったと言うべきか。

骨の竜の強みは高い魔法耐性。

故にこの場で言えば技縛りをしているナーベには相性が悪い相手だ。

しかし、此処に居るのはナーベだけではない。

脳筋ソルジャーとトリガーハッピー人形と言う魔法ともっとも縁遠い存在が二人もいるのだ。

全くもって哀れとしか言い様がないカジットの切り札である。

「…………この程度でヒビ、カルシウムが足りてない証拠だな」

「この程度でショーサ……さんのお手を煩わせるとは、やはりゴミ糞ゲボドブ野郎ですぬ」

「……………、ゴミ糞ゲボドブ野郎は少し言い過ぎではないか……………」

部下の辛辣な相手への形容に少しだけ引いたタイラント。

さすが人間嫌い同盟の期待のホープ、全くぶれないその姿勢、歪みの無さには脱帽だ。

「……………まあ良い、火力で圧倒しろ。さっさと終わらせる」

タイラントは背中から取り出した箱型四連装ロケットランチャーを引き出して展開させ、発射。

ドシュツッ！と発射されたロケット弾は勢い良く翔んで行き、傷んだ骨の竜の頭蓋骨は直撃を受け爆散。

更にはナーベの電撃補助を受けたシズの50口径。

最早それは電磁投射砲。

強化された弾は四肢の骨、胴体を次々と撃ち砕き、骨の竜は完全に沈黙した。

「くっ、儂にはまだ……………ぎゃっ!!」

カジットが再び死の宝珠を掲げようとした瞬間、シズはその腕を撃ち抜いた。

50口径で身体の一部を撃たれたらどうなるのか？

まあ、その惨状を想像するのはそんなに難しくない筈。結果はカジットを見れば一目瞭然。

「腕は肩から下のほとんどが無くなる」だ。

「儂の腕、腕があ!?!」

腕を無くした精神的ショックと経験した事のない激痛。

耳付近を弾が通過した際の衝撃波で鼓膜は破れ、同時に三半規管はその機能を停止。

激しい目眩と吐き気が一気に襲いかかり、傷口からは当然の大量出血。

激痛、目眩、吐き気、激痛、目眩、吐き気。

終わる事のない、絶望サイクルにカジットの心は完全に折れた。

「……終わりだ、この愚か者を跡形もなく消し飛ばす」

「ウーラ」

「御意」

シズはカジットの頭に狙いを定め、ナーベは両手に激しい電撃を纏わせる。

そしてタイラントはロケットランチャーを構え、引き金に指をかけた。

「おかあ……」

今際の際の最後のセリフを聞く事なく、三人は一斉攻撃でトドメを刺した。

三者三様の凶悪極まりない攻撃はオーバーキルも甚だしい。そもそも、人間相手に放つものではない攻撃ばかりだ。

対物ライフルとロケット弾、ナーベの本気の魔法攻撃〔二重最強化・連鎖する龍雷〕。言うまでもないが、その直撃を食らった哀れカジットは肉片一つ残る事なく灰塵に帰し、漸く処刑は終わった。





## 事後のち報告、時々トラブル

ロケットランチャーと特大の雷撃を受けたカジットは、千切れた腕だけを残して跡形も無く消えてしまった。

千切れながらも後生大事握っている宝玉をまじまじと見るタイラント。

召喚系、或いは操作系のアイテムだと言う事は分かったが、専門外の為か其ほど詳しくは分からなかった。

まあ、団長が見れば何かしら分かる事なので別段気にしてはいない。

それよりも、今回の騒動の首魁を灰にしてしまったのは少々やり過ぎたと思ってる。

しかも残ったのは千切れた腕だけと言う。

果たして、この腕だけでカジットの身元が分かるだろうか？

否、分かる訳がない。

現代のDNA鑑定や細胞再生技術でも有ればワンチャンで身元確認出来たかもしれないが、そんな高度な医療技術をこの世界に求めてどうする。

せめて首だけでも残っていれば良かったものを、こう木っ端微塵に吹き飛ばしては最早どうにもならん。

だが、もう殺ってしまったものは仕方ない。

この宝玉だけでも残ったのだ、これだけでも十分な収穫だろう。  
いや、そうであつて欲しい。

「……と、とりあえず団長の所に行くか」

バツが悪そうに呟くと、収納空間からMG-42を取り出し重そうなコッキングレバーを勢い良く引く。

ガチャンと金属音と共に初弾が装填されるのを確認し、脚を持って腰だめに構えた。  
「……南無阿弥陀仏、精々成仏してくれ」

簡単過ぎる念仏と共に耳を劈く射撃音を響かせながらゾンビを掃射するタイラント。

機関銃の中でもトップクラスの射撃レート誇るMG-42は、この場においても「ヒトラーの電動ノコギリ」の異名通りの性能を発揮した。

そして本日2度目の掃射、その効果の程の詳しい説明は不要であろう。

只々、目の前に存在する物が”電ノコ”で解体されているだけだから。

なに？もし射線上に冒険者や衛兵が居たらどうするかって？

そんなもん、大小様々な異形が犇めいていて、かつトリガーハッピーな銃に狙って撃てと言う方が無理な話である。

まあ出来なくはないが、仮に人間が居たとしてタイラントから言わせてみればそんな所に居る方が悪い。

所謂”死人に口無し”。

生ける者も死す者も皆仲良く、風穴こさえて死んでくれつつ事さ。

ああ大丈夫、安心してほしい。この銃は、”無痛ガン”だ。

痛みなど感じる前に逝ける筈。

眼前に存在する全てに等しく死を与え、偽りの命を容赦無く刈り取りながら、黒い死神は散乱する屍を避ける事なく歩を進めた。

「終わったな」

モモンは鋭く突き出されるレイピアを弾き返し、バックステップで距離を取ると意味深げに呟いた。

「あ？何言つてんだテメエ」

「終わった、と言った。貴様の相棒、いや上司？まあどっちでも良いか……あの男は死んだと言う事だ」

「下手な嘘で……「嘘ではない」

「貴様もあの爆発音を聞いただろう？少佐は殺しのプロだ、間違い無く奴は死んだ」

「ごちゃごちゃと五月蠅えんだよ！クソ野郎！」

低い姿勢からステイレットを喉元へ突き上げる。

その致命の一撃をモモンは辛うじて弾き、お返しとばかりにグレートソードを袈裟斬りに振り落とす。

人間離れた腕力から繰り出される一撃、細身のステイレットで受ける事など到底出来る訳がない。

しかし、武技“不落要塞”を発動させたクレマンティーンは、そんな一撃ですらすステイレットで軽くないしてしまふ。

直撃すれば只では済まない、二本のグレートソードから繰り出される怒涛の連撃。

上下左右から振られる剛刃を避けながら、鎧の隙間を狙って鋭い刺突を穿つ。

正に戦士としての経験の差が如実に現れていると言つても過言ではなかった。

状況としてはクレマンティーンの優勢、装備と腕力は凄いが間違つても負ける事の無い相手である。

しかし、何かがおかしい。

何か得体の知れない不安感が身体をじわじわと支配してくるのだ。

(クソツ、何なんだこの違和感は！)

この異変を感じたのは、カジットが死んだと言われた直後辺りから。

あれは只の駆け引き、単なる揺さぶりとして切り捨てるべき戯れ言。

普段ならば、笑いとぼして終わる弱者の戯言にしか過ぎない。

しかし、先程確かに聞こえた大きな爆発音。

そして、それに続くように聞こえてくる散発的な破裂音。

小刻みに聞こえる破裂音はだんだんと此方に近付いて来ている。

その近づく破裂音に反応する様に、クレマンティーンの身体は自然と震えが生じていた。

「くっ!?」

唐突に、脳裏に焼き付いた悪夢が鮮明に思い出される。

”死”そのものを可視化した、或いは体現したあの”赤目の化け物”の事を。

そんな化け物が、絶対的な殺意を持って近付いて来ると思うと正気ではいられなかった。

「ア、アイツが、アイツが来る……」

頭から爪先まで一気に駆け巡る悪寒は、敵を前にして無様にもガタガタと身体を震わせる。

ある意味では人間らしい反応、恥ずべき事ではないのだが。

「ほう、ちゃんと”恐怖”を感じるらしい。狂人と言つても所詮は女か……」

だが改めて”それ”を指摘をされる、いや馬鹿にされると恐怖を塗り潰す怒りが瞬間湯沸し器の如く一気に沸いた。

自分より弱い奴に嘗められる程、癩に障るものはないからだ。

!!!!

ぞれは人間とは思えぬ絶叫、ある意味”咆哮”とすべきか。

恐怖で固まる身体を動かす為の噴火の如し怒り。

「アイツなんか怖くねえ！野郎ぶつ殺してやああるっ！」

恐怖と怒りが入り混じった絶叫と共に、クレマンティーヌはモモンに突撃を敢行する。

その爆発的な加速からの突撃は、彼女の生涯において最速にして最高の刺突であつ

た。

全ての思考をかなぐり捨てた捨て身の馬鹿力と複数の武技を重ねて発動させた最速の刺<sup>□</sup>。

その切っ先はモモンの顔面、兜の僅かな目の部分の隙間を正確に捉え、深々と突き刺さった。

「まだまだあ!!」

突撃の勢いそのまま、脚をモモンの体に絡ませ固定させると、もう一本のステイレットも突き刺す。

更にはだめ押しの仕込み魔法の同時発動。

ファイアーボール  
ライトニング  
 <火球> <雷撃>

必ず殺す、読んで字の如くとは良く言ったものである。

正に必殺のコンボをクレマンティーヌはモモンに叩き込んだ。

炎と雷撃を眼球部分に突き刺してお見舞いしたのだ。

間違いなく、コイツは死んだ。

確信の手応えに漸くクレマンティーヌの顔に笑顔が戻る。

考えてみれば初から気に食わない野郎だった。

赤目の腰巾着風情でイキってタイマンすると抜かしやがるクソ野郎。

御大層な装備を着けていたが、戦ってみれば武技も使えない只の見かけ倒し。

力任せに剣を振り回すだけの木偶の坊に、負ける筈がない。

微動だにしないモモンから飛び降りると、身なりも整えずにクレマンティーヌは一目散に走りだした。

早くここから逃げなくてはならない、その一心で。

「クソツ、今日は厄日……」

その時、カラン、カランと甲高い金属音が後ろからした。

同時に感じる異様な気配に、恐る恐るクレマンティーヌは振り返る。

「致命の一撃と武器の仕込み魔法か。やはり勉強になるな、実戦と言うものは」

其処には髑髏しやれこつこの目の部分に刺さる二本目のステイレットを抜きながら、気怠げに喋る髑髏が居た。

「エ、エルダーリッチ……!」

「もう少し遊びたい所だが、少佐を待たせる訳にもいかんからな……」



クレマンティヌは驚愕していた。

目の前の戦士の正体がエルダーリッチだなんて誰が想像出来るだろうか。

エルダーリッチは主に魔法攻撃を主体とする魔物。

そんな魔物が鎧を着て、剣を振り回して戦うなど聞いた事もない。

” 武技抜き ” で見ればかなり手練れの戦士であった……

いや、エルダーリッチだからこそ武技が使えなかったと考えれば辻褄が合う。

ならば自分は、” 魔法を使うまでも無い相手 ” だったとも言えるのか。

モモンの戦士ごっこ、所謂 ” ナメプ ” は彼女に僅かに残っていた戦士としてのプライドを完全にへし折った。

直情的な怒りや大きな敗北感、自己の思考や判断力を著しく鈍らせる。

その結果、彼女は敵を前に ” 呆けてしまう ” という決定的な隙を生んでしまった。

こと決闘、いや戦場において相手に隙を見せればどうなるのか。

歴戦の戦士ならば嫌と言う程分かっていた筈だったが……

「しまっ……!!?」

それは ” 時既に遅し ” と言うのだろう。

一瞬、時間にしたら一秒にも満たない。

呆けた意識を戻した時には、グレートソードの刃はクレマンティヌの眼前にまで

迫っていた。

その剛刃は一刀のもとに首を両断し、勢い余った頭部は吹き飛び、それは高く宙を舞った。

顔は“信じられない”驚愕した様な表情ままで。

程なくして、頭部を無くした身体は鮮血を噴水の様に吹き出しながら、崩れ落ちる様に倒れる。

それは、墓場の骸がまた一つ増えた瞬間だった。

「PKで弱みを見せたら死ぬ、それだけだ」

そう言うともモンは、恨めしそうに睨む頭部を軽く蹴り、骸の海へと沈めた。

元漆黒聖典第九席次クレマンティーン。

その波乱と狂気に満ちた女の人生の最後は、実に呆気ないものだった。

墓場のゾンビ。パニックから翌日、モモンと少佐は朝イチで冒険者ギルドへと赴いていた。

先日の墓場の騒動の報告をしに来ていたのだ。

ギルドに着くなり、奥の応接室の様な部屋に押し込まれた二人は取り敢えず目の前のソファアに腰掛けた。

お供のプレアデスの二人はギルドの待合室に置いて来たのには理由がある。

下手に人間嫌いのナーベラルを立ち会わせて、不敬な態度をお偉いさんにとられたら面倒な事になるのは明白。

第一印象はとても大切だと断言したモモンの判断で待機して貰う事にしたのだ。

シズはナーベラルの監視、と言うよりお守りだ。

待機させたナーベラルを一人にしたら、何をしでかすか分かったものでは無い。

その為の保険と言った所か。

うん、ナーベラルとても扱い難いぞ。

しかしながら、トラブルと言うものは本人が起こさない努力をしても、寧ろトラブルそのものが自分に降りかかってくる場合がほとんどではないだろうか。

そもそも、この二人自体がトラブル発生装置の様な物だと言う認識をモモンとタイラントは過小に評価してた。

二人はこの認識の甘さを事後、嫌と言う程思い知る事になる。

「なんだろう、無駄に待たされてる気がするぞ。嫌な予感がするなあ……」

この部屋に案内されてから既に1時間は待たされている。

いくら銅（カツパー）とは言え仮にもエ・ランテルを救った冒険者には変わりはない。此方を焦らしているのか、馬鹿にしているのかは分からないが、やはり銅級は銅級なりの扱いなのであろう。

「……俺はナーベの方が心配だよ。人間相手だと堪え症が無いから」

やれやれと深いため息をするタイラント。

それは、ガスマスク越しでも分かる程デカイため息だった。

今更だが、人間嫌い同盟の若手エースを目の届かない所に置いて来た事に不安を覚えたからだ。

その心境は、出来ない子を持つ親と言った所だろうか。

「おお、確かに待合室に置いて来たのは少し迂闊だったなあ……」

「……うーむ、まあシズも居るし大丈夫だろ」

とても嫌な予感がする、が考え過ぎだろうと邪念を振り払う二人。

そして、未だに現れないギルド長を待ちながら、タイラントとモモンは不毛な時間をしりとりをしながら過ごしていた。

所は変わり、待合室で待機するプレアデスの二人に場面は移る。

現在二人が置かれている状況は、やはりと言うか何と言うか、案の定トラブルに巻き込まれていた。

前提として、プレアデスは総じて並外れた”美女”である。

人間のあらゆる方面の美と欲望、そして願望を詰め込んだ終着点の造形美。

そんな黄金に輝く甘い樹液を出す木を、飢えた雑虫共が見逃す筈は無い。

要するにトラブルが起こらない筈がないのだ。



## トラブルバスター part 1

誰かが言った”沈黙は金”であると。

ある者は言った”口は災いの元”であると。

故に、シズは目を閉じて自身に向けらる雑音の一切を遮断し、只々不毛な時間が過ぎ去るのを待っている。

まあ、薄汚い野良犬の群れが一斉に自分に向かって只吠えているだけだと思えば、幾分か気休めになった。

そんな雑音に真面目に耳を傾ける必要など全く無いからだ。

そして、此方が反応しない限り相手の話題が0から進む事は無い。

仮に”沈黙”している事が原因でトラブルが起きても、相手が一方的に難癖付けてきたと堂々と言える。

”問題を起こすな、問題も起こさせな”

主からナーベを頼んだぞと任されたからには、その命に従うのみ。

今も爆発しかけた短気な同僚の手の甲をつねる。

”それは駄目だ”と言う事を痛みと共に伝える為に。

特に人間と言う物に興味が無いシズにとつて、絡まれる事はさしたる問題ではない。だが、隣のナーベルガンマにとつては耐え難い苦痛なのだろう。

一体、どうしたものかと考えるが、妙案は浮かばない。

今の自分出来る事と言えば、ナーベが爆発しない様に止めるだけ。

(私が、しつかり、しないと)

気持ちとは裏腹に、不気味なまでな沈黙した様子は正に”人形”と言うに相応しく、その沈黙する姿すらも美しく見えてしまう。

だからなのだろうか、何の反応もしていないのにも関わらず、懲りずにシズに喋り続ける者がいるのは。

「なあ、君達の綺麗な声を聞かせてくれないか?」

「絶対に損させないって、な? だから俺達と組もうぜ? な!?」

見るからにチャラチャラした優男達が、シズとナーベを囲んで何かを喚いている。

聞く価値も無い雑音故、細かい事は省略するが要するにチームへの誘い、ちよつとお茶しない? である。

音量スイッチ off にしたシズは兎も角として、ナーベに関してはそろそろ限界に近づいていると言つても過言ではない。



不快極まりない人間達に囲まれているだけでも我慢ならんのに、更にはクソ煩いときている。

その無駄に開く口に魔法をぶちこみたくなる気持ちをも、強靱な精神力で必死に抑えこみ、何とか耐えていた。

何故ならば、モモンから”問題を起こしたら従者クビ”と告げられているから尚の事。

”絶対に負けられない戦いが其処にはある”

喉元までこみ上がる呪詛の言葉を必死で飲み込み、漏れ出そうになる殺意を抑え、ゴミ虫達が過ぎ去るのを待つ。

だが、主達の帰還を前にそれは起きるべくして起きた。

「お、君のその弩凄いなえ！ちよつと俺に見せてよ」

調子に乗ったチャラ男の一人が、シズの背中に担がれた強襲弩に無遠慮にも触れようとした事から始まった。

シズにとって、別に人間が何を喚こうがどうでも良い。

死のうが、生きていようが、全く関係ない。

だが……

「触るな」

だが、それは駄目だ。

それだけは、絶対に、看過出来ない。

底冷えする様な低い声に殺意を乗せ、シズはその沈黙を破る。

「へっ？」

チャラ男が弩に触れようと伸ばした手を掴み、即座に捻りあげると同時に床に引き摺り倒す。

そして、顔面を足で踏みつけながら腕を捻り、拘束した。

「あぐああ！」

「人の、物に、触れるな」

腕の関節を完全に極め、男を制圧するシズ。

接触から制圧までの一連の流れがあまりに唐突、あまりに速く、周囲に居た者は誰も反応出来なかった。

静まりかえる集会場に、関節を極められたチャラ男の情けないうめき声が響き渡る。

あとほんの少しシズが力を込めれば、この男の腕は折れるだろう。

だが、そう簡単には折らない。

シズは絶妙な力加減で、痛みを継続的にチャラ男に与えながら拘束をする。

馬鹿な人間に思い知らせる為に。

ストップパーであるシズの反撃をきっかけに、ナーベの中の”我慢の種”はパリーンと音を立て弾け、覚醒する。

「このゴミ虫めらが……」

ぶち殺す、捻り潰す、もはや塵芥も残さぬ位に。

握る拳には殺意を込めて、睨む目には侮蔑と嫌悪を乗せて、キレたナーベは立ち上がる。

この娘、完全に便乗して暴れるつもりだ……

流星は人間嫌い同盟のエース、ボコれる口実を得てから実行に移すまでがすごぶる速い。

「ナーベ、殺すのは、駄目」

「何故?!」

「正当防衛、殺すのは、やりすぎ」

「つく、でも……!」

「これ以上、問題起こすと、クビになる」

反撃出来る口実を得て、恐らくは手加減無し of 反撃を行使しようとするナーベをシズは止める。

ナーベの拳の直撃を食らえば場合にもよるが、只の人間程度一溜まりもない。

顔面ならば頭蓋を砕き、胴体なら内臓破裂、よしんば防げても瀕死は免れないだろう。無法者相手ならばまだしも、冒険者を白昼堂々半殺しにしてしまつては大問題になる。事間違いなし。

それも冒険者ギルドの中でならば以ての外である。

完全な正論を前に退かざるを得なくなつたナーベ。

寸での所で、大乱闘ふれぷれアデス又はナーベアル無双は発生しなかつた。

問題を起こすなど厳命された、が身に降りかかる火の粉は当然払うべきもの。

正当防衛での武力行使はシズの判断で行う事が出来る唯一の権利である。

もつとも必要に応じ”最小限”の反撃に止めると言う条件付きではあるが。

そもそも武器を扱う者が、己の武器を簡単に触らせる事など絶対に無い。

街の衛兵、侍、警察官、兵士、どんな職業であろうとも、不用意に武器に触れようと

すればどうなるか、嘘だと思つては是非とも試してみると良い。

その身を以て、自分の愚かさを知る筈だ。

「い、痛てえ！痛てえ！」

「喚くな、煩い」

腕をへし折る寸前で止めているのだから痛く無い訳がない。

相変わらずの無表情でギリギリと無慈悲に腕を締める様は、最早不気味と言う他言い

表せない。

全ては男の迂闊さと無遠慮さが招いた自業自得なのだが、馬鹿な人間と言うのはその事を理解出来ない。

故に”馬鹿”と言うのだが。

「君、その手を放したまえ！今なら条件次第では許してやらなくもないぞー！」  
尊大かつ傲慢、この愚か者の仲間には謝罪するどころか挑発してきている。

シズはこの人間達に対して、無関心の底から憎悪とも言える感情が沸々と湧きあがる、そんな気さえしてきていた。

「……………あほくさ」

ボキヤツ!!

「うがあああ!!」

限界まで締め上げられた腕は、豪快な音と同時に折れた。

捻りあげられていた肘は普段は絶対曲がらない方向に垂れ下がり、馬鹿な男の腕は見事に完全骨折していた。

「う、腕の骨が折れたっ……………」

「人間には206本も骨があるのよ、一本位になよ」

激痛で顔を青くする男に対して、ナーベは呆れた顔でそう言つてのける。

確かに骨の数だけで言えば大した事ない様に聞こえるが、そんな事はない。

人間は指の骨一本折れただけでも大問題なのです。

人外にはそれが分からのです。

「これで……後戻りは出来なくなつたぞ！覚悟したまえー！」

「ホーストの腕折つたんだ！容赦しねえぞ！」

「待ちなさい！ギルド内での戦闘行為は禁止ですよ！！」

「構うこたあねえや！やつちまえ！やつちまえ！」

「服を狙え！服！」

正に混沌、正に阿鼻叫喚、収集のつかない暴力的な熱気は一瞬でギルドの中を支配する。

娯楽に飢えた酔っ払いや、単純に騒動に引き寄せられた野次馬、果てはギルドの職員。

”問題よどうか起きるな”と云うタイラントの願いむなしく、起こってしまった大問題。

このままでは良くて乱闘か決闘か、悪けりやギルドと戦争か。

大体、冒険者など言い方は聞こえは良いが元を辿れば血気盛んな荒くれ者と大差はな

い。

女に飢え、酒好きで、暴力を好む。

正に単純、故に脳筋。

まあ、全ての冒険者がそうとは限らないがこの様子を見るに大体は合っているだろう。

「これ、どうするシズ？」

「解らない」

騒動の渦中の二人は、どこか他人事の様子に飄々としていた。

「本当に、謝る気は無いのだな……？」

「煩いわねゴミ虫、口臭いから黙りなさい」

「もう、容赦しねえ……!!」

短髪の剣士とおぼしき男が得物に手をかけ、剣を抜き放とうとした……その時。

「……何をしている」

それはそれは低く、そして邪悪な、どす黒い殺意をはらんだ声が聞こえた。

集会場の喧騒が一瞬で静まり、代わりに静寂が集会場を支配してしまう程に低い声が

聞こえた。

コツ コツ コツ コツ

シンと静まりかえる集会場に規則的な足音が響き渡り、その殺意の塊とも言える者が姿を現す。

全身黒装束の大男で、顔に妙に大きい紅い目が特徴の仮面をした男が。

「……貴様等、俺の部下に何をしている」

それは、まるで殺意と怒りが可視化したかの様な感覚だと言うべきか。

この場に居た人間は皆思った事であろう。

コイツに関わったら、間違いなく”殺される”と。

近づくタイラントに対して、まるでモーゼの十戒の海原の如く、野次馬達の集団は左右に割れた。



## トラブルバスター part 2

割れた人垣を一人進むタイラント。

その様子を見つめる野次馬達は、皆一様に生唾を飲み込んだ。

黒い男から放たれる殺意、或いは怒りの波動は一瞬にして部屋中を支配する。

止めどなく出る冷や汗と、恥ずかしげもなく震える身体。その感覚は、絶対に抗えない怪物といきなり対峙した時と同じだと言えた。

日本の古い諺に”藪を叩いて蛇を出す”と言うものがある。

迂闊な事、要らぬ事をして自ら災いを招く愚かさを戒める諺だ。

この人間達が置かれた状況は、それを如実に物語っていた。そして、この絶望的な状況になって一同は漸く理解に至る。

自分達は”キマイラの尾を踏んだ”のだ、と。

「……全く何たる様だ、失望させてくれる」

身構えて止まる優男達をスルーし、シズとナーベの前で止まり、二人を見下ろしながら冷たくそう言った。

激しい怒りを通り越すと、大体は落胆の感情にたどり着く。

それはシズの手腕、ナーベの自制心に少なからず期待していたからこそ、その落胆は大きかった。

兎に角、起きてしまった事を今更とやかく言うつもりは無い、が信賞必罰はタイラントの基本方針である。

それ故にはつきりと言った、二人に”失望”したと。

「「も、申し訳ございません……」」

深々と頭を垂れる二人、その近くで折れた腕を押さえながら踞る男。

「た、助け……助けてっ」

その様子を見て、何となく事情は察つしたタイラント。

恐らく、この男とその取り巻き達が二人に何かをしたのだろう。そして、見事に返り討ちになった。

んで仲間が騒いで、野次馬がそれに乗った。大体そんな所だろう。

ギルドもギルドで急速に膨れあがったこの馬鹿騒ぎに対応が出来ずに今に至る、と。全く、下らなさ過ぎて涙が出そうだ。

「……まあ兎に角、コイツの手当てだ。誰か医者をおい、赤目野郎！」

タイラントが二人に指示を出そうとした時、遮る様に短髪の剣士の男が声を上げた。

それは恐怖からの震えか、武者震いかは定かではないが男は劍の柄に手をかけながらタイラントに怒鳴り散らしたのだ。

「何俺達を無視して勝手に話を進めてんだ!!」

静寂を払う劍士の怒号は、外野達の消えかけてた野次馬根性に再び火を着けた。

集団心理によつて一気に膨れあがった群衆の根拠のない自信、集団的安心感は本能が感じた危険信号を容易く打ち捨てる。

野次馬達は、口々に聞くに堪えない罵詈雑言を次々に言い出し始める。

そう”乗るしかない、このビッグウェーブに”状態だ。

愚者の集団は、余興を盛り下げられた不満をここぞとばかり爆発させた。

「そ、そうだ!そうだ!」

「白けんだよ!空気読め、空気!」

「男はお呼びじゃないんだよお!」

その騒乱はピークに達し、調子に乗った劍士の男が唸り声を上げて劍を抜こうとした  
……!!!その時。

特大級の衝撃が劍士に襲いかかった。

衝撃と言うよりは”突風の様な物”が身体を一気に突き抜けたと言うべきか。

ドラゴンのプレス、サイクロプスのこん棒、或いは極大魔法、と言った強力かつ無慈悲な一撃を真正面から受けた、そんな感じ。

自身の完全なる”死”のビジョンを剣士の男は確かに見た。

剣士だけではない。この場に集まった野次馬やギルドの職員含めた全ての人間が見ていたのだ。自分自身の死のビジョンを。

その強烈さたるや、奮い起たせた魂や戦士としてのプライド、使命感、野次馬根性、全てを木っ端微塵に吹き飛ばした。

目の前の黒い男から放たれる圧倒的なプレッシャー。

それは今まで感じていたのが”そよ風”に感じられる程に大きく膨れ上がり、そしてより凶悪な物になっていった。

「なんだア？てめえ……」

完全にぶちギレたタイラントは、最初に怒鳴った剣士の方をゆっくりと振り返る。

ほぼ素で激怒した理由の一つは、他の人と会話をしている途中にいきなり話を遮られるのが本当に嫌いだから。

人が喋っている最中は普通待てよ、喋り終わってからでは駄目なのかと常々思う。

そして、二つ目は外野の野次馬が調子に乗って再び騒ぎ出した。

この二点がキレた主な原因である。

(折角穩便に済ませようとしてんのに、いきなり怒鳴るとか何だコイツは)  
この剣士の”いきなり怒鳴る行為”はタイラントの仏の顔残機×3を一気に消費させた。

で外野達の罵詈雑言で見事に役満、元々あまり大きくない堪忍袋は粉々に破裂するに至った。

(コイツ等、俺を嘗めてやがる。完全に嘗めくさってやがる。成る程、俺と喧嘩がしたいと、喧嘩上等であると、そう言う事か)  
よろしい……ならば戦争だ。

「……折角の機会だ、二人共良く見ておけ」

「はっ！」

肩を軽く回し、首を左右に倒すとボキボキと骨が軋む音がする。

喧嘩の準備は万端、呆ける男の前に立つとタイラントは静かに諭す様に言った。

「……売られた喧嘩つてのはなあ」

刹那、タイラントの姿が一瞬消える。

剣士の眼前に迫る黒い塊、それが拳だと認識する事はこのコンマ数秒で出来る訳もなく。  
唯一理解出来た事と言えば、疑いの余地の無い破滅的な衝撃が直ぐにも自分に襲いか

かると言う事。

神が男に与えた猶予の時間、だが懺悔や後悔をするにはその時間は短過ぎた。

「ひいつ!!」

次の瞬間、剣士の男は悲鳴じみた声と共にきりもみ回転しながら、仲間を巻き込んで盛大に吹き飛んでいた。

スバァン!!!!

そして、耳をつんざく音とタイラントの姿が遅れて現れる。

「……………こうやって買うもんだ」

頑丈な素材で出来ているであろう床をへこませ、そのクレーターの中心にタイラントは平然と佇んでいた。

「い、一体何が起きたんだ……………」

「今一瞬、姿が消えたぞ!」

目の前で起こった不可解な現象の前に、皆度肝を抜かれ驚愕している。

恐らくは、黒い男が剣士を殴ったのであろう。

それは解る、だが殴るまでのプロセスが理解が出来ないのだ。

動きが速いとか、そう言う次元での話しではない。黒い男の姿が、目の錯覚でなければ完全に見えなくなっているのだから。

武技“流水加速”を使っても、ああはならない。

それは王国が誇る最強の戦士、ガゼフ・ストロノーフでもあんな動きは出来ないだろう。

「ば、化け物か……」

人間技とは到底思えぬその動き、威圧感、見た目、どれを取ってもタイラントは常軌を逸している。

この男、本当に冒険者なのだろうか？

仮に冒険者だとして、何故今まで噂にもならなかったのか？

一体、この男は何者なのだろうか？

ワーカー？ 戦士？ 異国の武芸者？

何にせよ、皆がたどり着いた結論はコイツは最早“人間と言う枠を越えている”か人間ではない”。

「は、はひえ……」

「……死んではいけない、当てる無いらな」

シヨックで伸びかけてる腕が折れた男にタイラントはそう言った。

男を良く見ると失禁までしているではないか。

腕を折られるは、小便漏らすは、散々な日だなコイツは。

顔だつて悪くない、寧ろ整つてゐる部類だろう。だが流石のイケメンも小便漏らせば、それも台無しだ。

まあ、自業自得と諦めて貰うしかないのだが。

「当ててない……だど？」

その事實は、まとめて目を回してる優男達を見れば一目瞭然だった。

男達は、もの凄い勢いでぶつ飛んだのにも関わらず無傷なのだ。

要するに、この黒い男は”寸止め”をしていたと言う事。しかし、拳の寸止めだけで完全武装した冒険者が紙切れの如く吹き飛ぶだろうか？

一体どんな修行や鍛練を積み、魔法や武技を使えばこんな芸当が出来るのか。

ざわ ざわ ざわ ざわ と色めき立つ野次馬達。次は一体何が起きるのか、そんな奇妙な期待感に溢れていた。

「……で、次は誰が相手だ？」

「え……？」

唐突なタイラントの問いに、完全に面食らった野次馬達は酷く間拔けな声を上げた。

俺達は只の野次馬、この喧嘩の当事者ではないのだと言わんばかりの顔である。

一体全体、コイツは何を言っているのだと。



「ちよ、何を言つて……」

そんな事はお構い無しに、ぐるりと辺りを見回し睨みを効かせるタイラント。

野次馬達は、そんなタイラントの視線に誰も合わす事なく、皆バツが悪そうに顔を背けた、が。

「誰が相手かと言つていゝる」

その一言に込められた”怒りの言霊”。いや、怒りなどでは生ぬるい。それは怒りを超越した感情、正しく”憤怒”と言うに相応しい。

忘れてゐるかも知れないが、タイラントの二つ名は”核弾頭”。敵対する者はおろか街や草木、果ては味方に至る全てを消し飛ばす旧世代の最終決戦兵器。

そして、その無差別兵器の名を冠するは希代の”暴君”。

そう、暴君にとつて”この場に居た者全ての者”がこの喧嘩の当事者なのだ。

絡まれてる女を助けもせず、に、囲み、煽り、騒ぐ野次馬達。回りの熱気に気圧され、己の職務を遂行出来ない職員。絶対安全圏で傍観をし、他人の不幸を見てコソコソと嘲笑う輩。

(日和見の連中に、テメエ等全員が俺の敵だと言う事を思い知らせてやるぜ)

「……どうした、誰も居ないのか？」

その問いに対する答えは、無。

誰も答えず、名乗りでもせず、動きもしない。自分ではない誰かが出るだろう、自分ではない誰かが選ばれるだろう。

この野次馬達から”自分ではない誰かが”と言った考えが透けて見えるようだった。最早呆れを通り越して、哀れみすら感じ始めていた。こんな奴等相手に何を本気になっているのかと。

(あほくさ、もう誰でも良いわ)

「少佐、落ち着け」

今にも野次馬達に殴り掛からんばかりのタイラントの肩を、いつの間にか現れた黒い鎧を着た戦士が抑えた。

直後ビキビキと二人の足元の床が悲鳴を上げ、亀裂が入り始める。

それだけでも、この二人の力のせめぎ合いの凄まじさを物語っていた。

「もう、十分だろう」

黒い戦士のその一言が、合図であった。

その瞬間、フツと部屋を支配していた圧迫感が嘘の様に消え去った。

胸を締め付けられる様な不快感から開放され、安堵からか皆肺に溜まった空気を全て吐き出す。

「……興がそがれた、いくぞシズ」

黒い男はそう言うのと、隻眼の女と共に余りに呆気なくギルドから出て行ってしまった。

「くそ……まだ震えてやがる」

ギルドに残された哀れな野次馬、もとい冒険者達。

大半はカタカタと震える自分の手を見て、漏らした小便を感じて、己の情けなさで迂闊さを大いに恥じた。

冷や汗でベトベトになった身体の不快感すら、自分が今生きている事を実感させた。周りを見れば屈強な筈の冒険者にして、床にへたりこむ者もいる。

無理もない、あんな化け物を前にしては、無理もない話だ。

本当に情けない事だがそう自分に言い聞かせ、無理矢理納得させるしかなかった。



## 素顔

冒険者組合から出たタイラントとシズは、仮拠点と決めた安宿へ向けて歩みを進めていた。

「おい、なんだアイツ……」

「気味の悪い仮面だぜ」

「ママ、あの人「しっ！見ちや駄目！」

相変わらずの妙な服装、妙な仮面なタイラントは一步街中を歩けばこの様である。

最早、慣れたと言うべきか直接ちよっかいを出されなければ別にどうと言う事は無い。

しかし、やはり好奇の目で見られるのはあまり良い気はしない。

そもそもだ、この“ガスマスク”変じやなくてカツコいいだろう……

「……煩わしい事ばかりだ、全く」

先のギルド内の騒動、ある程度予想はしていたとは言え少々頭に血が上り過ぎた。自動精神安定効果で直ぐに落ち着いたが、全く無様を晒してしまったものだ。

あの程度の小物共相手に、一体俺は何をやったんだ。

「……あれか、中途半端だからスッキリしないのか？」

中途半端に発散しきれてないモヤモヤが俺を惑わしているのだろうか。

(「いつそ、”G”でも投与するか?)」

恐らく俺が本気に、いや本来の力の半分以下でもこの街の人間など皆殺しにするなど容易い。

もつと言えば、全力を出したら瞬きする間に街ごと灰にする事すら可能である。

まあ、そんな労力の無駄な事などするつもりは無い。

だが、必要とあれば躊躇なく実行するつもりではある。

しかし、仮にも軍人である俺が非戦闘員を皆殺しする算段を平気で考え、あまつさえ実行するに躊躇や良心の呵責すら感じない……か。

笑えるな、本当に。

「……ふつ、いよいよ俺も異形に染まってきたって事か」

「何か？」

「……いや何、お前には貧乏クジ引かせてしまったな」

「―その様な事は……」

「……嫌でも目立つお前達をあんな所で待たせた俺達も短慮だった。お前はナーベを良く御した、失望したと言ったのは撤回する」

「でも、いえ私は……」

「……正当防衛での反撃は許可している。気にする必要などない」

何かを言いそうなシズにそれ以上は言うなとタイラントは手をかざして制する。

部下の揺るぎない忠誠心は嬉しく思うが、これ以上のやり取りは最早必要ない。

其よりも、早急に考えねばならん事だらけなのだ。

まずギルド長アインザック直々の依頼である”森の賢王”ことハムスケの討伐は、当然失敗に終わった。

代わりと言っては大層なものだが、秘密結社ズーラーノーン壊滅と妖巨人の首の功績でモモンと共にミスリル級へ昇格は出来た。

この段階で銅級からミスリル級に成れたのは僥幸と言って良い。

一重に団長ことモモンとの共闘が功を奏した。

では、このままモモンとずっと組んで冒険者活動するかと言ったらそうではない。

当初の予定通り、それぞれ別れてこの世界の情報収集及び、他のプレイヤーの存在の

有無を探る。

Yggdrasilへユグドラシルと共通する魔法、モンスターが存在するこの世界。

俺達以外にプレイヤーが居ないと考えるには些か早計過ぎる。

対策無しに敵対的な高レベル・プレイヤーと接触して、戦闘ともなれば死ぬかもしれない。

もつとも前衛職の俺と後衛魔法職の団長がタッグを組めば、大抵の単体プレイヤーならば返り討ち出来る。

しかしながら、それは万全の態勢と対策を用意した上での話だ。

ことPK戦において相手の情報を先取りする事は基本中の基本である。

不意なエンカウント、或いは逆に奇襲でもされたと考えると背筋が寒くなる。

俺達は相当恨みを買っていたから、問答無用で襲って来る輩は割と多い筈。

「……敵を知り、己を知れば百戦危うからず。確か「孫子の兵法」だったか？」

確か古い諺だったと認識しているが、割りとのを得た格言だ。

あんまり詳しくは知らないが、インテリな上官がよく言っていた様な気がする。

「少佐、着きました」

「……………うむ」



これ……見たら分かる、安い宿やん。

とりあえず、ギルド紹介された安宿に来てみたが予想通りの宿であった。

一階が受付と酒場兼食堂、二階が客室と言った所か。

まあ、汚染防止個人用簡易シエルターよりかは幾分マシって感じである。

その気になれば野宿でも良いが、そもそも休養を必要としないこの身体。

ある意味、微かに残った“人間性”を失わない為だけに無理やり休養をとろうとしている様な気がする。

無意味だと、理解した上でだ。

「……オヤジ、二人部屋だ」

「見慣れねえ面だな、新人か？」

「……二人部屋だ」

「一応言っておくぞ、銅級の新人は普通は大部屋を選ぶもんだ。その意味は分かるか？」

「……明日にはミスリルになる。二人部屋は有るのか？無いのか？簡潔に答えろ」

無意味な問答に嫌気が差したタイラントは少しイラついていた。

余計なアドバイスなど聞いていない。さっさと此方の要求に対する正しい返答をしてほしいのだ。

「み、ミスリルだつて？ 大口叩く新人は沢山みてきたが……その中でもお前さんは一等だ！」

受付のオヤジの笑いは、瞬く間に酒場の中に伝染した。

(また……このパターンか)

タイラントのイライラゲージが急上昇するが、沸騰寸前の所で強制冷却される。

怒りで見境なくなる心配が要らないのは本当に助かる。

全く、この機能は便利だと感心する。

「おい！ お前の腕にあるプレートは銅だぞ、ミスリルじゃねーぞ！」

一人の酔っぱらいがタイラントに肩を組んできた。

そして、腕に巻いたプレートをわざとらしく引つ張る。

隣のシズが腰に着けた銃剣に手をかけるが、手を伸ばしてそれを制止する。

思った通りの反応が無いタイラントに業を煮やした酔っぱらいは更なる暴挙に出ってしまった。

「気味の悪い仮面着けやがって、おら！ 恥ずかしがらずに……顔みせてみるよ！」

調子に乗った男は、無抵抗を良い事に面白半分でタイラントのガスマスクに手をかけると、そのまま一気に剥ぎ取った。

ガスマスクを取られたタイラントは、男の方へゆつくりと顔を上げる。

「ははは！は、はは……」

「見たナ」

その時は、ほんの”軽い気持ちだった”と後に男は語る。見栄張った新人に手荒い洗礼のつもりだったと。

あわよくば、隣の美人にお近づきになる口実でもあれば、と。

だが、次の瞬間。

下品な笑いが響いていた宿の酒場は一瞬で静まりかえった。

「ひ、ひい……」

赤目のガスマスクに隠されていた、タイラントの素顔。

それを見た、いや見てしまった一同は皆絶句をしていた。

「ば、化け物……」

誰かが、絞り出す様にそう言う。

そして、酒場の誰もがそう思っていた。

何故ならば、その顔面に存在する肌の全体は、焼け爛れたケロイド状。

片目は完全に潰れ、残った目は白く濁り、鼻はない。

口に関しては唇は無く、口を閉じていても歯茎が剥き出しの状態になっている。

そして顔の中心を頭部から斜めに割る様に縫合された大きな傷。

一体どんな事をすれば、どんな事をされればこんな顔になるのか。

最早、人間の顔の要素など微塵も残ってなどいない。

アンデッド、リッチと言われてもおかしくない、其れほどまでに酷い……とても酷い顔だったのだ。

「……ドウシタ、何をソナナに驚イテいる」

「あ、ああ……」

「貴様等が見タがった、男の顔ダ。ドウだ、満足力？」

尻餅をついた男は、この段階において自分の行いのツケの大きさを悟った。

”俺はなんて事をしてしまった”のか、と。

しかし、後悔先に立たずと世間では言う。

この場に至って、酔っていたので覚えていない。

そんな、子供染みた言い訳など通用する筈もなかった。

「か、勘弁してくれ！知らなかったん……がっ！」

必死に謝る男の首を掴むと、タイラントは箸でも持つかの様に軽々と男を持ち上げた。

鎧を着こんだ大の男を片手で持ち上げるのだ。並大抵の腕力では到底出来ない芸当である。

「……今俺ハ、トデモ機嫌が悪イ。何故ダか解る力？」

「がつ！ぐつえつ」

「……煩い駄犬二吠えられル、酷く不快ダ。ん、死なぬと分カラナイか？」

冒険者ギルドでも同じ様な事に巻き込まれ、移動した宿でも同じ様な事に巻き込まれる。

トラブルの梯子に、タイラントはいい加減ウンザリしていた。

(フツ、所詮この世は“力”が物を言う……か)

そう“力”こそ全て、“力”こそパワーなのだ。

(ならば、ぶっ潰してやる……何もかもなあ!!フハハハ!!)

………!!

はい、落ち着きました。すみません。

最高にハイになったテンションは強制的に、賢者タイムばりにまで下がった。

正に急降下、このテンションの上がり下がりの激しさは、人間であれば軽い鬱のそれである。

だがまあ、何事も感情のままに動いてやり過ぎてしまうのは戴けない。

破滅的な結果をもたらしてからでは、取り返しがつかないし。

(少しばかり、俺も反省しなければならぬ)

だが、このアホらしいやり取りを今後しない為にも、やはり一度位は徹底的にやらなければならぬ。

悪い目立ち方は避けたかったが、最早仕方ない。

この職業、一度嘗められたら今後もずっと絡まれるだろう。絡まれる度に貯まるイライラは正直不快以外何物でもない。

馬鹿を躡るには言葉ではなく、鞭……いや鉄拳に限る。

痛みは恐怖を呼び、恐怖は身体を縛る良い楔になるから。

「で、次はドウする？ドウシタ、早く答えろ」

万力の様な腕で首を掴まれ、窒息寸前の男はもがく事すら出来ず、口から吐瀉物を垂れ流しながら痙攣をしている。

死へのカウントダウンは始まっていると誰が見ても明らかだった。

このまま窒息で死ぬか、又は首の骨が折れて死ぬか、最早男に一刻の猶予も無い。

「わ、悪かった！俺達が悪かった！だからそいつを放してやってくれ！頼む！」

男の仲間とおぼしき奴が、慌ててタイラントに懇願をする。

何と都合が良いのか、先程まで馬鹿笑っていた奴とは思えぬ低頭ぶりではないか。所詮、人間なんてこんなものなのだろう。

圧倒的強者には媚へつらい、弱者にはでかい顔をする。

悪党を最後まで貫き通す度胸も、戦士としての誇りも信念も無い。脆弱で軟弱で貧弱な唾棄すべきクズ共には、つくづく感心させられる。

「……ゴミめ」

タイラントは掴んだ男をぶつきらぼうに投げ捨てた。

酒場のテーブルや椅子をなぎ倒し、唾然とする酔っぱらい数人を巻き込みながら勢い良くぶつ飛んでいった。

投げ捨てた死にかけの男を気にかける事なく、青い顔した宿の店主を睨むタイラント。

正に、「蛇に睨まれた蛙」の表情をする店主。

無修正の暴君フェイスの恐怖たるや尋常ではなく、所詮は一般人である店主のズボンを濡らすには十分過ぎた。

「……二度も、言わせるなよ」

「あ、ああ！ほら部屋のカギだ……」

店主は慌てて、タイラントに部屋のカギを投げ渡す。

カギを片手で受けとると同時にガスマスクを着け直し、完全R―指定の顔を漸く隠した。

そして、腰から切り縮めた水平2連式散弾銃を取り出すとこれ見よがしに一番近くの

テーブルに銃を発砲した。

強烈な破裂音と共に木製のテーブルは一瞬で文字通り木っ端微塵になる。

コレが「当たれば必ず死ぬ」。

一目瞭然な結果と聞き慣れぬ銃声は、それを見た者全てを恐怖させた。

「……次は、殺すぞ」

マスク越しの濁ったその声は否応なしに不気味さを倍増させる。

ましてや、その下に隠された顔を知ってしまったのなら尚更に。

皆、凄いい勢いで首を縦にふる以外に出来る事は無かった。

カン！コロコロ……

その時、腰を抜かした冒険者達の足元に見慣れぬ何かが転がってくる。

それは、細長い小さな筒に穴がある妙な物だった。

「??何だコレ……ぎゃっ！」

次の瞬間、その筒はボンッと言う爆音と激しい閃光を放ちながら爆発。

酒場に居た全ての者は、皆意識を刈り取られていた。

”M84スタン・グレネード”

非殺傷兵器、一時的な視覚阻害とスタン効果を合わせ持つ手榴弾の一種。

不意打ちで使用すれば高ランクプレイヤーにも通用する非常に優秀な消耗品である。



相手のレベルや耐性に応じて効果に差はあるが、有効範囲内であれば確実に敵は“怯む”と言う特殊効果がある。

通常の破片手榴弾に比べ値は張るが、効果相応と考えれば納得の値段ではある。

長くタイラントの使用アイテムのレギュラー枠にラインナップされている消耗品だ。

「……暫く寝てろ、屑共め」

気絶する冒険者達を一瞥し、そう吐き捨てる。

そして、静まり返った酒場を尻目にタイラントとシズは悠々と二階の部屋と移動をした。

## 死神の一人旅

粗末な二人部屋に漸くたどり着いたタイラントは、一際大きなため息と共にベッドに腰掛けた。

少し出歩いただけで絡まれるとか正直所勘弁して欲しい。

まあ、絡んだ奴を片っ端からぶち殺せたらこんな気苦労をしないのだが、そんな粗相をする訳にはいかない。

まず以て労力と時間の無駄であるし、何よりもこの段階でお尋ね者になつては今後の行動に支障をきたす。

だが、突発的な激しい破壊衝動を抑えこむのは中々容易ではないのだ。

なんせ軽く小突いただけでも重傷を負い、本気出して殴ろうものならば、恐らく原型を留めぬ肉塊に間違ひなく果てるだろう。

殴るならば、極力怒りを抑え、なるべく気遣いながら殴らなくてはならない。

しかし、そんな事本当に出来るのだろうか……。

(無理だな、絶対)

「……全く、度し難いな。人間と言う物は」

「仰る通り、です」

「……まあ良い。有象無象に構っている暇など無い。今後の我々の行動について通達する、心して聞け」

「御意」

「……まず、我々はこのエ・ランテルから離脱し王都へ向かう。そこで貴様は一度ナザリックへ戻り補給と武器の整備を実施、別命あるまで通常業務をしながら待機しろ。俺は王都までの進路を確認、調査をしながら向かう。何か不明な点はあるか？」

「いえ、ありません」

一見シズ表情に変化は無い様に見えるが、タイラントはその細かな変化を見逃さなかった。

察するに”ナザリックに帰還するのが嫌そう”だ、と。

だが本当にそう思っているのか？と言うと、それを示す根拠はない。

別に他人の思考を読んだとか、エスパーや強化人間の真似ごとをしたと言う訳でもない。

では何故、そう感じたのかと言えば”昔取った杵柄”と言った所だろうか。

時を遡る事、大体30年程前……

深刻な環境汚染が渦巻く極東の島国、日本。

タイラントは、北関東と言われる地方に居を構える”的場家”の長男として生を受けた。

決して裕福な家庭ではなかったが、殊更貧乏と言う訳でもない普通の家庭であつたと言ふ。

しかし物心付く頃には両親が失踪、只一人残された子供は行政に保護される。否応なしに孤児施設に入れられ、中々酷い生活を強いられる事になった。

躰と言う名の殴る蹴るの折檻は当たり前、2〜3日飯抜きだつて日常茶飯事。

(どうして、僕は怒られているのだろうか?)

厳しい折檻の中で自然と芽生えた、小さな疑問。

だが、その疑問の答えを親切に教えてくれる大人など居る筈もない。

何故、殴られなければならないのか。

何故、こんな辛い思いをしなければならないのか。

幼いながら考えた末、ある日一つの結論に達した。

「……よく見よう、アイツ等の事を」

その観察は、”大人を怒らせない為にはどうすれば良いのか”から始まった。大人達の一挙手一投足を観察し、何が駄目で何が良いのかを探した。

折檻されている最中ですら、その職員の癖やパターンをひたすら観察する。

そんな生活を暫くしていると、職員的那の日の機嫌や体調、仮初めの笑顔に隠された嘘が分かる様になつていった。

そんな子供には過酷過ぎる環境の中で培われた”観察眼”は歳を重ねる内に研ぎ澄まされていき、施設を卒業する頃には表情の微妙な変化すらも見逃さない程になった。

そして面白くも無い子供時代を経て、漸く自立出来る年齢になるとゴミでも捨てるが如く施設から出された。

最低限の教育と、最低限のお金を渡してくれたのは一応は政府が監督する施設だからだろうか。

まあ、このご時世の孤児には勿体無い対応だと言えよう。

「しかし、働けと言われてもなあ……」

身寄りのない若造が就職するには、この社会は厳し過ぎる。

ましてや、ギリギリ高等教育を受け終えた程度の学力では並の企業など望むことなど出来ない。

いきなりお先真つ暗である。

取り柄と言えれば身体の頑丈さと要領の良さ位だろうか。

まあ、伊達に過酷な環境で幼少期を過ごしちやあいないのだから。

”急募、国防軍兵士求む!”

何の気無しに、電子掲示板の広告に出てきた国防軍の求人広告。

読んで見れば、中々待遇が良いじゃないか。

身分は特別職国家公務員、衣食住完備の上に過去の経歴は問わないときた。

「戦地昇進有り、チャンスは自分次第か……」

今世界中で資源獲得紛争が勃発していると言う一抹の不安はあるものの、どうせ行き詰まっているのだからと入隊を即断。

だが、意外な事に軍隊の生活は性に合っていた様で、あつという間に一兵卒から下士官になり、気が付けば叩き上げで佐官まで登りつめていた。

正直な所、死にたくない、生き残りたい、只その一心でやっていただけなのだが。

知らずに貯まったお金で念願の高いゲームを買ってからと言うもの、休みの度に没頭していた。

程々にキツイ現実から逃避する為に買った、ファンタジー全開のゲームへと。

だが、どう言う訳かこの“ユグドラシル”と言うゲームは現実よりもシビアな環境だった。

単純にカッコいいからと異形種にしてみれば、人種差別主義者も真つ青な迫害を受ける。

辻斬り、通り魔、無差別殺人、只歩いていただけでも問答無用でPKされるではないか。

なまじゲームがリアルな分、余計に腹が立ったのを今も鮮明に思いだせる。

仮想空間だからこそ人殺しに対する罪悪感も躊躇もない。

異形種とは言え中身は人間である。

自身のエゴと殺人衝動を満足させる為だけの殺戮行為。

「所詮、血も涙も無い化け物は人間だと言う事か……」

それなりの地獄を見てきた筈だが、まさかゲームでそれを気付かされるとは思わなないだ。

しかし、弱ければ強者に淘汰されるのは必然。

弱者には生存する権利も糞もないと言う事は嫌と言う程理解している。

ならば、やるべき事は一つ。

あらゆる物を駆使し、己を強化する。そして全ての不条理を叩き潰す程の強さを手に入れる。

本当の地獄を知らぬ愚民に、鉄槌をぶちかます。

ゲームとは言え、これは最早“戦争”。

異形種の生存を懸けた、戦争だ。

そして、数多の現実と非現実の地獄の中で昇華された観察力と磨かれた直感、異界の地で本当の“異形”と成り果てても尚、己の中に残っていたと言う訳である。

本当、不思議な事に。

「……何だ、不満そうだな。帰還するのは不服か？」

「そ、そんな事は……」

凶星をつかれたシズは珍しく狼狽してしまふ。

主人の命令に不満を感じていた事がバレる。

慌てない従者など居ない訳がない。

「……まあ聞け、何もクビって訳ではないぞ。当初の予想よりも武器の消耗が激しいのは貴様として理解はしているだろう？このデリケートな武器を扱えるのはナザリック広しと言えど俺とお前しか居ない。だからこそ任せる、解るか？」

「お、御方の仰せのままに……」

「……うむ、整備は俺の部屋の道具を使って構わん、念入りに頼む。それと重火器の倉庫からガトリング・ガンと弾薬を準備しておいてくれ。何時でも使用出来るように……」



な

「御意」

「……出発は明朝0600、組合でランク更新後に各個に行動開始。ナザリックへのゲートはこのポイントに用意しておく。俺のゲートは派手だからな、くれぐれも人間に見られるなよ」

翌日、晴れてミスリルとなったタイラントは遠回しに引き止める組合を丁寧に一蹴し王都へと向かった。

乗り合い馬車等を使わず、気ままに徒歩で向かうつもりだ。

理由は特に無いが、強いて言えば気持ち良かったから。

同志ブルー・プラネットが愛して止まなかった汚染されてない自然。

是非彼にこの自然を一目見せてやりたいものだ。

きつと、物凄く感激するだろう。

「……しかし、本当に美しい。これが自然の有るべき姿か」

整備がされているとは言い難い土の道路、新緑の草木、小鳥の囀り。

マスク越しで本当に感じているのかと自分でも疑問に思うが、プラシーボ効果も相

まっつて気分が良い事は確かだった。

発展した技術は人間の利便性のみを追及して資源を食い潰し、自然を破壊し、挙げ句果てに残った資源をめぐる殺し合いを始め母なる大地を汚し続けた。

皮肉な事だが、人は人の手によって滅びるだろう。

自らが招いた闇に飲まれて。

「……いかな、どうも」

豊かな自然に感心していた筈なのに、いつの間にか滅び行く世界の事を考えてしまっていた。

せつかくの一人旅なのだから、のんびり優雅に旅をせねばなるまい。

背負ったバックパックを背負い直すと再び歩き出す。

この簡素地図を見る限り、王都まではそこそこ距離がある。

タイラントは適当に辺りの物を調べながら、道を進んで行った。

「……何だ、これは？」

陽も暮れかけた街道に散乱する物と死体。

死体の状態を見るにさほど時間は経っていないと言える。

其なりの防具と馬の死体、頭や身体に刺さる無数の弓矢。

街道に面する森から襲撃された、それを結論付けるに容易な状態であった。「……統一された装備に軍馬、何かの護衛か？」

そう遠くない範囲で、何か揉め事が起きているのは間違いないだろう。

盗賊、あるいは武装したモンスターのか。

何にせよ、立ち塞がる障害ならば排除するだけの話だ。

タイラントは、少しだけ警戒をしながら街道を進んで行く。

すると、歩いて間もなく街道のど真ん中に倒れる上等な馬車とそれに群れる人ばかりが見えてきた。

どう見てもノー・プロブレムな状況ではない。

見たら分かる、揉め事やん……って感じた。

「我慢出来ねえ！犯しちまおうぜ！」

ほれ見た事か、揉め事どころか完全に犯罪現場でした。

しかも、「犯す」とか凶悪なパワーワードまで聞こえてきました。はてさて、どうしたものか……

「何だコイツは！」

「何処から出てきやがった！」

どうしようか考えていたら、盗賊の何人かに見つかってしまった。

まあ、これだけ接近すれば見つかつてもおかしくないのだが。

しかし、これで穩便に通りすぎると言う選択は出来なくなつたぞ。

「お、お願いします！お嬢様を……！」

「うるせえ！黙れこのアマ！」

人混みの中心には、服を乱暴に引き裂かれた女が二人。

その内の一人はまだ成人をしていない子供であつた。

コイツ等マジでゴミ野郎だな、とナチュラルに思つたタイラント。

正直、見知らぬ奴が死のうが犯されようが知つたこつたやないが、年端もいかない子供が犯されるのを黙つて見過ごすのは寢覚めが悪い。

此処は僅かに残つた自分の良心に従うとしよう。

「……ゴミが群れて何をしているかと思えば、女子供を嬲つていたか」

やれやれ、とわざとらしく挑発する様に言つたタイラント。

その思惑通り、案の定盜賊達は激怒した。

なんと、単純な人種なのだろうか。

「なんだとう、どうやら死にてえようだなテムエ」

各個に武器を取り出し、タイラントを囲む盜賊達。

下品な嘲笑をし、余裕綽々な盜賊の面々を見てタイラントは心底哀れみを感じた。



感じたのだ。

男。見るからに切れ味の良さそうな短刀を逆手に持ち、一步また一步と近付いて来る黒い

早く逃げなければ、と考えるもそれは無理だと本能が察した。  
今、この黒い男から目を放したら死ぬ。

そもそも、身体が許容範囲を越えた恐怖で動かなかつた。

「……小便是済ませたか？神様にお祈りは？地べたに這いつくばって命乞いする心の準備はOK？」

紅い目をした死神がゆっくりと近付いてくる。

自分達を断罪する為に、死神が近付いてくる……

## 駆逐

「……小便は済ませたか？神様にお祈りは？地べたに這いつくばって命乞いする心の準備はOK？」

タイラントは腰にマウントした短刀を取り出し、逆手に構えながら狼狽える盗賊達に向かつて歩き出す。

”妖刀ムラマサ”

黒赤色の刀身から不気味な妖気を放ち、魔法武器である事をこれでもかと主張している短刀。

見た目は魔法武器と言うよりかは、”呪われた”武器と言う方が正しいかもしれない。

そんな、不気味な武器を持った不気味な黒い男。

完全武装の、それも盗賊に取り囲まれてるにも関わらず、動じる様子は微塵もない。寧ろ余裕すら感じさせる振る舞いは、本当にこの黒い男とつて、この状況は余裕なのであろう。

だが、黒い男から放たれる覇気がピリピリと肌に感じる。

間違ひなく凄腕の冒険者、或いは傭兵だと皆確信していた。

「す、すかしてんじやねえぞ！……こらああ!!」

そんな中、痺れを切らした手下の一人がタイラントに斬り掛かった。

(漸く、来たか……)

中々かかつて来ないから、コイツ等やる気が無いのかと思ひ始めていたが杞憂だったようだ。

威勢よくかかってきた命知らずの見た目は、筋肉隆々で毛深い。

体格から察するに力自慢で極めて粗暴、そして不潔。

正しく、賊になるべくして生まれた様な男だ。

手に持つ得物は粗末ではあるが、人間を殺すには十分過ぎるであろう大鉞。

知力のパラメータにポイントを振らず、腕力に全振りしたかのような……馬鹿？

馬鹿な男の馬鹿力、言い当て妙である。

(おいおい……フルスイングかよ)

自分に対して躊躇無しに振るわれる鉞を見て若干引いたタイラント。

この躊躇の無さ、良心の呵責の欠片すら感じさせない一撃。

(コイツ等、明らかに殺し慣れをしてやがる)



その思い切りの良さは賊として評価に値するが……

だが仮にも殺しを生業としているのなら、自分の武器位少しは整備したらどうなのかと思う。

迫る鉞を呑気に観察し、武器の程度の低さに呆れていた。

格闘系。パッシブスキルの効果で、格下過ぎる攻撃がスローになって見えてしまう。

避ける気になれば眼前ギリギリに迫っても余裕で避けれる。

寧ろ、直撃を受けた所でダメージなど皆無。

まあ避ける必要も、ダメージの不安も無い。

故に、こんな状況でも冷静に観察出来る訳だが。

しかし、見れば見る程本当に酷い武器だ。

こんな酷い武器で殺される身にもなって欲しい。

全然研がれて無い刃では綺麗に肉を断つ事は出来ないだろう。

まあ、鉞の重量と腕つぶしの強さで何とかなりそうではあるが。

現に鉞男のフルスイングの一撃は、皮鎧の下に鎖帷子を着こんだ貴族の護衛を真つ二つにしている。

正に”力こそパワー”が武器の性能をアップさせたと言っても過言ではない筈。

(良し、完全に殺った！)

この盗賊団を束ねる頭目の男は、ほくそ笑みながら勝利を確信した。団随一の巨体で馬鹿力のドゴール。

奴の一撃をまともに受けて、生きていた奴など存在しない。

いつもと同じ、馬鹿な男の死体が一つ出来るであろう。

その死体を横目に、俺達はお楽しみみの時間を味わう。

この瞬間、誰もがそれを信じて疑わなかった。

!!!!!!

結果、大鉞はタイラントの顔面に見事に直撃した。

だが、それだけだった。

肉と骨を断つ手応えや、生温かい大量の返り血、死に際の断末魔。

そのどれもが、感じられなかった。

「……なんだア、てめエ」

現実とは時に、残酷なものである。

「そ、そんなな、な……」

鉞の刃はタイラントに直撃した直後、バラバラに碎け散り、柄の一部を残して大鉞は完全に壊れてしまった。

まるで硬い岩にでも叩きつけたかのような、そんな手応え。

間違つても人間相手に感じる手応えではない。

「どうして、こんな事ありえな……ひっ」

茫然自失する盗賊の背後に、いつの間にかタイラントが立っていた。

濃厚な殺意の波に飲まれた盗賊は身動き一つ出来ず、只々立ち尽くす。

「……死ね」

死神の非常に簡潔な死刑宣告。

その一言を聞き終わると同時に、盗賊の意識は永久に途絶えた。

古今東西、背後からの”致命の一撃”は大ダメージ必至。

無論、首を深々と斬り裂かれた鉞男は断末魔すら叫ぶ間すらなく即死。

取れかけた首から、血飛沫が噴水の様に舞う。

が、その血の全てがタイラントが持つ短刀に吸い込まれ、鉞男の身体はあつと言う間に血を吸い尽くされた。

カラカラに干からびた身体は、大男の面影など欠片もない。

枯れ木の様な、ガリガリのミイラへと成り下がった。

ムラマサは久しぶりに血を吸って満足したのか、赤黒い刀身の輝きが一段と増した。まるで生き血を吸って喜んでゐる吸血鬼かの様に。

「な、何んなんだ……これは何なんだ……」

不気味なナイフはともかく、あの男はまともじゃない。

顔に鉞が直撃してピンピンしてるなんて、人間じゃあない。

あの”怪力ドゴール”の大鉞を受けたのに生きてゐるなんて……

楽な貧乏貴族襲撃依頼の筈が、とんでもない事になった。

盗賊頭はドツと出る冷や汗を背中に感じると同時に、身体と本能が特大級の警報を発していた。

”此処から早く逃げろ”と。

「……さて、掃除の時間だ」

だが時既に遅し、逃げる算段を考えるには遅すぎた。

目の前で展開される一方的な虐殺。

部下達は、斬られ、刺され、裂かれ、殴られ、砕かれ、潰され、千切られ、弾かれ、皆等しく殺されている。

その動く黒い霧に飲まれた者は悉く、断末魔と共に見るも無惨な死体となつて霧から吐き出されていた。

(アイツは化け物だ……人間の皮を被った怪物だ)

「に、に、逃げないと……此処から、早く逃げないと」

逃げようにも、迫りくる極大の恐怖は身体の自由を強力に阻む。

意識と身体が乖離した為か、走り出す一歩目に力が入らず、前のめりにコケてしまった。

「ちきしょう……脚が動かねえ！」

この時、襲われているのに逃げない奴ら、獲物の気持ちに漸く理解出来た。

奴らは、只の間抜けではなかった。

逃げないのではなく、逃げれなかったのだ。

死の恐怖に直面して初めて、理解出来た狩られる側の心理。

それは、この場において自分が狩られるべき対象の“獲物”であると言う事に疑いの

余地はなく、只々地面を這いずる様に逃げる事しか出来なかつた。

”地べたに這いつくばって命乞いする心の準備はOK?”

黒い男が言い放った言葉が頭の中でこだまする。

皮肉な事に、今自分が置かれた状況が正に言葉のそれである。

「ちきしよう、ちきしよう! こんな筈……あ」

気が付けば、いつの間にか聞こえなくなつた部下達の断末魔。

そして、間近に感じる冷たい殺意。

恐る恐る顔を上げると、あの黒い男が自分を見下ろしていた。

「……よお、待たせたな」

「ひい! こ、こんな所で俺は死にたくない!」

「……お前、悪党のお手本みたいな奴だな」

地べたに這いつくばり、命乞いをする盗賊を容赦なく蹴り上げる。

硬いブーツの爪先が顎に食い込み、砕けた歯と血が口から吐き出された。

自分の所業を棚にあげた、余りに身勝手な願望。

それを、恥ずかしげもなく喚き散らす哀れ過ぎる姿。

しかし、そんな事は正直どうでも良かった。

この男が、泣こうが喚こうがどの道生きて明日の朝を迎える事は無いのだ。

そして、地べたに這いつくばった盗賊頭をつまみ上げると諭す様に言った。

「……さて、そろそろ終いだ」

「た、たしゆけ……むぐつ！」

盗賊の命乞いなど全く聞く気が無いタイラントは、その無駄に動く口到手榴弾を強引に突っ込む。

口を塞がれた盗賊はモゴモゴと言葉にならない何かを言っているが、お構い無しにタイラントは袖とベルトを掴んだ。

「……おい、空を飛んでみたいと思った事はあるか？」

「むぐつ、むぐぐむ……！」

その突飛な質問に、盗賊頭は自分がこれから何をされるのかを概ね悟った。

タイラントは口突っ込んだ手榴弾の安全ピンを抜くと、その身体を空に向かって投げ飛ばした。

「むがーむぐううウウウ………」

!!!!!!

「……きたねえ花火だ」

空中で爆発四散する様子を見ながら、お決まりの台詞を言うタイラント。

最早、様式美である。

確かに汚いおっさんの肉片が飛び散る様子は、汚いと言う以外に形容しようがない。とにもかくにも、街道の掃除が出来たし溜まった鬱憤もある程度解消出来た。

まさに、一石二鳥とはこの事だ。

清掃に関しては、結果的に散らかしているので何とも言えないが。

「……日が暮れてしまった」

薄暮時の街道、ましてやこんな田舎道にまともな明かりなど皆無。

せめて街灯でもと思うが、文明レベルで無い物を期待しても仕方がない。

タイラント・アイはナイトビジョン内蔵なので夜間でも問題は無いのだが……

あの緑色の視界は酔うので、タイラントは少し苦手意識があった。

「あ、あのこの度は危ない所を……あ、ありがとうございます……」



腕を組んで呆けるタイラントに、肩口から服が裂けた貴族の侍女とおぼしき女が、警戒心を露にしなから声をかけてきた。

こんな状況で警戒するな、と言う方が無理な話だろう。

主の貞操、著しくは生命の危機、そんな緊急事態の最中の一筋の光明。

藁をもすがる思いで助けを乞うたは良いが、冷静になつて見てみればどうだ。

俺、かなりの不審者じゃね？

十人は居た盗賊をナイフ一本だけで皆殺しにするわ、おまけに見慣れない黒装束だわ、全身血塗れ不気味マスクだわ。

うん。警戒しない方がおかしい。

「……おい、その娘は大丈」

!!!!

「お嬢様に触れるな！」

努めて紳士的に、手を差し伸べたのに弾かれました。

何故だ、俺そんなイヤらしい手つきだったか？

そもそも、未成年の小娘なんぞに邪な感情なんて抱く訳がない。

俺の好みは着物が似合う”大和撫子”or”金髪美女”。

そして、勿論ナイスバディ……

要するに、この女達は俺のストライクゾーンには遠く及ばない。

顔を洗って出直して欲しい。

でもまあ、常識的に考えて助けてもらった相手に対する態度ではない。

あれか、下賤な身分の平民は触れるなって事か？

この緊急時に貴族って奴は本当にアホだなと、ある意味感動すらおぼえる。

理解は到底出来そうにないが。

「……日も暮れて森も近く、そしてこの血の臭い。移動した方が賢明だ。まあ大変だろうが”お嬢様”共々頑張れよ」

殺るだけ殺って満足したし、一応は礼？は言われたし。

ならば、こんな所に長居する必要はない。さっさと王都に向かって進むに限る。

そう言うときライアントは、足早に立ち去ろうとするが……

「ちよ、ちよつと待って下さい！」

侍女の必死な声と同時に腰のポーチを引つ張られて、止められた。

辺りに転がる盗賊の骸と、魔物が活発に蔓延る夜の森。

こんな所に女二人置き去りにされたら、その結果は火を見るよりも明らかだろう。

「……なんだ？」

「どうして置いて行こうとするのです！」

「……俺ごときが触れられない” 貴き御方 ” なのだろう？ ならば自分で何とかする事だ」

「そ、それは……その」

バツの悪そうな侍女を見ながら、タイラントは大きな溜め息をついた。

## 切り札

「……女、俺は見ず知らずのお前達の命を助けた。これ以上何を望む」

薄暗い死山血河の街道で僅かな怒気を含んで追いつめる侍女にタイラントは問う。

通りすがりの成り行き、ほんの片手間、僅かに残った良心の呵責。

理由はともあれ、この二人が女性としての尊厳と命を失わずに済んだのは紛れもなくタイラントのおかげである。

感謝しろと、恩着せがましく言う気など毛頭ないがこれ以上何かをするつもりもない。

多少の怪我はあれど、自分で動くには何の問題は無い筈だ。

「そ、それは……こんな所に置いて行かれても困ります！」

「……歩けば良いだろう。その足は飾りか？」

「それが出来るならばそうします！でも私一人なら兎も角、お嬢様が……」

「……そうか、生憎俺にはどうにも出来ん相談だ」

困り果てる侍女に淡々とタイラントはそう答えた。

実際触るなど言われているし、別にわざわざ運んでやる義理もない。

これが仕事であれば話は別だが、そう言う訳でもない。訳分からん奴、特に貴族との無用なトラブルなんて御免こうむるのだ。

「先程の私の無礼に立腹しているのなら謝罪いたします。ですが何卒、何卒お嬢様をせめて安全な所まで……」

頭を地面に擦りつける勢いで謝罪と懇願をする侍女を見て、タイラントは腕を組んで少し考える。

別に捨て置いても良いが、成り行きとは言え助けてしまった手前見捨てるのは少々バツが悪い。

放置して此処で死んでくれれば何の問題もないが、下手に生き残って悪評でも広められたら面倒である。

ましてや相手は貴族、変な圧力や捕縛とかされたら問答無用で殺しかねない。ないきなり王都で凶状持ち、指名手配犯なんて洒落にもならん。

「……これ以上のタダ働きなど御免だ。どうしても言うなら金を払え」  
藁をもすがる思いで懇願する侍女に容赦なく金を請求するタイラント。

この状況で少々無慈悲過ぎではないかと思うだろう。  
だが、やりがいや感謝だけで生活など出来やしない。

労働に対する対価でもなければ、貴重な時間を割いてまで見ず知らずの赤の他人を助

けられるか。

聖人君子でもなければ、ボランティア大好き人間でもお人好しでもない。

いや、そもそも人間ですらない化け物だ。

俺の行動の全ては、我等”アインズ・ウール・ゴウン”にとつて利か損で行動している過ぎない。

誰が”人助け”を好き好んでやるかつて話だ。

「お金は勿論払います！ですから早く！」

言葉とは裏腹に”金”と言うワードを聞いた侍女の嫌悪感をタイラントは見逃さなかつた。

その心底は、女子供が困っているのだから助けるのが当たり前。

まして、此方は貴族なのだから平民は黙って助けると言つた所か。

貴族階級社会の弊害、此処に極まれりだな。

もつとも、俺も似たような考え方しているからドツコイなのだが。

「……契約成立だ、早くそつちの娘をこつちに寄越せ」

この段階で漸く右腕に巻かれたプレートを確認し、侍女はタイラントが冒険者だと気が付く。

異様な服装と不気味な仮面にばかりに目をとられて全く気がつかなかった。暗くて等級までは判別出来ないが、間違いない冒険者のプレートである。

「もつと丁重に！お嬢様が怪我でもしたら……」

「……喚くな女、さつさと移動するぞ。少々長居し過ぎた」

気絶している貴族の少女を肩に担ぐと、タイラントは足早に移動を開始した。

「ちよつと、待って……ひつ！」

素人でも分かる程の禍々しい気配が、いつの間にか辺り一帯を支配している。

何気なしに侍女は気配のする方を見ると、其処には幾つもの赤い目が暗闇から此方を睨んでいた。

それは群れ、魔物の群れである。

血の気が引き、背筋が氷付くとは正にこの事を言うのだろう。

慌てて、タイラントの後を追い、全力で走った。

間近に迫る死の恐怖で気絶しそうになるが、何とか正気を保ちながら追い続ける。

万が一、こんな所で気を失ったら一瞬で魔物の餌だ。

「死にたくない！死にたくない！」

死にもの狂いで走る、走る、走る。

こんな所で”死にたくない”と言うただ一点の思い、いや執念が侍女の身体を動かす

ていた。

「……俺から離れ過ぎるな、喰われるぞ」

酷く恐ろしい事をサラっと言われ、慌ててタイラントへ追従する。

そんな事を言われたら、意地でも後に付いて行くしかないではないか。

少なくとも、この男のそばに居る限り魔物に襲われる事は無いと言う事なのだから。

暗い街道を駆け足で進む、が魔物の気配は一向に消えない。

寧ろ、消えるどころか心なしか数が増えている気さえする。

盗賊に襲われた後に、魔物に襲われる。

一難去つてまた一難、泣きつ面に蜂の状況とはこの事か。

「はあ、はあ、はあ」

侍女の心臓は“もう限界だ”と言わんばかりの速さで鼓動し、“死にたくない”と言う意思を破壊しにかかる。

正直呼吸をするのも辛く、出来る事ならこの場に座り込んで休憩をしたい。

もつとも、そんな事をすれば間違いなく魔物の餌になるだろうが。

「はあ、はあ、も、もう走れ……ない」

しかし、体力と言うものは残酷なまでに正直である。

自分の現状持っている体力以上の動きは出来ないのだから。



根性や執念で何とか出来る範囲にも、限度と言うがあるのだ。

「……止まるな。死にたくなければ、走れ」

後ろを走っていた女が、遂に前のめりに倒れた。

見るからに体力の限界を迎え、倒れたまま立ち上がる事すら出来ない程に疲弊している。

しかし、そんな此方の都合を魔物が考えてくれるなんて事は無い。

残酷な事だが、死にたくないなら走るしかないのだ。

「……群れを分けて挟撃する気か、小賢しい」

この狡猾な魔獣の群れに苛立ちを感じるタイラント。

一人ならば何の問題もない些細な事も、余計なお荷物があるとそうもいかない。

(……獣風情が、狩りを楽しんでやがるな)

業を煮やしたタイラントは、侍女に担いだ少女を預け、臨戦態勢をとる。

突出した群れの出鼻を叩き、思い上がった雑魚に身の程を教えてやる算段だ。

「……女、暫く待ってろ」

腕を鳴らしながら、魔物の群れの方に歩き出すタイラント。

!!

その強烈な殺気を感じた先頭の魔物は、すかさず距離を取る。

だが、後方や死角に居る魔物は逆にジリジリと距離を詰めて来た。

「……囲まれた、か」

ふと辺りをみ回すと、魔物の群れは三人を完全に取り囲んでいた。

お誂え向きの開けた場所でマゴマゴしていれば、こう取り囲まれても文句は言えない。

正に四面楚歌、非常に不味い状況と言えるだろう。

もつとも”人間”にとつては、だが。

「ちよ、ちよつと！ 貴方が居なくなったら私達食べられてしまいますよ！」

「……確かに、一理ある」

頭良いな、とタイラントは感心しながら侍女を褒めた。

「納得してないで、早く何とかしてくださいっ！」

最早、近接戦闘だけで対処出来る範疇の量を越えている。

この女の言うとおり、俺が離れたら間違いないくコイツ等は喰われるだろう。なら銃を使えば良いのでは？ と思うだろうが、あまり使いたくない。

この量を駆除するに最も適しているのは”機関銃”。

それも口径が大きく、弾が多いのが望ましい。

機関銃の圧倒的な火力があれば、こんな魔物程度一瞬でミンチに出来る。

だが、あまり堂々と近代的な銃器を使うのは望ましくない。

こんな取るに足らない人間一人に見られたから何だとも思うが、人の口に戸は立てられぬとも言う。

旧式の単純な銃器ならば誤魔化しようはあるが、近代火器はそうもいかない。

未だ見ぬ敵に、余計な情報を与えかねない物は出来るだけ使いたくないのだ。

非常に面倒ではあるが、ここは銃を使わずに対処せねばならん。

だが、この状況を銃も無しに打破する為には強力な範囲攻撃が必要。

ならば、タイラントに残された手段は一つしかない。

「……仕方ない、”コイツ”を使うか」

そう言うのとタイラントは、腰のポーチから神々しい球体状の”何か”を取り出す。

「これは……一体」

「……何、只の”手榴弾”だ」

それは、手榴弾と言うには綺麗過ぎる彩飾がされた物だった。

特に玉の先端についた”十”クロスが神々しい。

「痛っ！頭に、何か……聞こえる」

主は言われた。

” 聖なるピンを外し、3つ数える”

” 以上でも以下でもなく3つ数えるのだ”

” 数えるのは3つ”

” 4でも2でもいけない。5はもつてのほかである”

” 3つまで数えた時点で、手投げ弾を敵に放り投げなさい”

” 目障りな敵がくたばるであろう”

ア—メン

その時、侍女は何か有難いお告げの様な物が聞こえた。

” 4でもなければ2でもない”

” 5はもつてのほか”

一体、何を言われているか皆目見当がつかなかった。

だが、これが何かのお告げだと言うのであれば、必ず従うべきだと直感した。

「……よし、投げるぞー1、2、……5!」

だと言うのにこの黒服の男ときたら数える数を間違えている。

侍女は、つい反射的に叫んでしまった。

「3!3ですつ!」

「……3!?!」

その直後、黒服の男が”あーめん”と言う妙な呪文を叫びながら、魔物の群れに向かって玉を投げつけた。

!!!!!!!!!!!!!!  
とても、手榴弾が炸裂したとは思えない程の爆発の凄まじさ。

圧縮された聖なる力と、高性能爆薬の見事な融合。

神の神託通り、目障りな敵は残さず”くたばった”。

「聖なる手榴弾」

対聖属性値の高い装備をしていないアンデッド系のプレイヤーがその威力に引かれて迂闊に使えば、その使用者ごと蒸発しかねない危険な爆発物。

聖アツチエラが罪深き多数の敵と戦う為に考案した大量破壊兵器。

その桁外れの威力は、超高位モンスター”殺人うさぎ”ですら一撃で屠る。

かなり貴重な消耗品だが、アイテムと言う物は使うべき時に使わなければ意味がない。

実際、目障りな敵を一掃出来て非常に満足していた。

そして、コレがあれば大抵の敵は大丈夫だと言う確信も得た。

まあ、今回の様な雑魚相手に使うには勿体無い代物ではあるが。

「……アーメン、ハレルヤ、スキヤキ、バンザイだ」

酷く雑なお祈りを爆砕された魔物にしてから、何事もなかったかの様に歩き出した。目の前には極度の疲労で意識を失った侍女、未だ気絶したままの貴族の令嬢が倒れている。

このまま捨て置くか、と一瞬魔が差したが報酬も貰わずに死なれては困ると自分を律した。

「……もう帰りたい」

## 王都に向けて

タイラントは夜道を歩く、女二人を抱えてひたすら歩く。

一人を脇に抱え、一人を肩に担いで、暗い夜道を歩き続ける。

ザツザツザツと、無機質な足音だけが聞こえる夜の静寂が支配する世界。

いや、皆まで言うな。

言われなくとも分かっているさ、この状況が異常だと言う事くらい分かっている。

怪しい男が、夜道で、婦女子二人を担いで歩いている。

「……完全に不審者やんけっ」

見たら分かる、駄目なヤツやん。

どう見ても完全に誘拐犯です、本当にありがとうございました。

と、一人でノリ・ツツコミをするが虚しだけだった。

面倒事に首突っ込んでしまったと、後悔するが所詮後の祭り。

通りすがり上の成り行き、若者風に言えば“その場のノリ”で助けたまでは良い。

だが、こんな状況に陥るとは考えが及ばなかった。

この姿を誰かに見られたら大変な事になるのは言うまでもない。

確実に、通報案件である。

「……野営するつもりはなかったが、仕方あるまい」

街道沿いの少し開けた所で、急遽野営をする事を決めたタイラント。

自分の迂闊さで招いた事態、この程度のペナルティは甘んじて受け入れなければならぬ。

下手に誰かに見られて、より面倒な事に巻き込まれるよりはマシだろう。

王都到着が遅れるだけ、只それだけだ。

「……何故俺が人の目を気にせねばならんのだ」

不本意、甚だ不本意だからこそ出る不満。

もしシズがこの場に居れば、面倒な女二人丸投げして俺はふて寝を堂々とかましていただろう。

まあ、ふて寝と言っても眠れはしないのだが。

実に大人気ないと、世間の大人達は言うだろうがそんな事はクソ食らえだ。

一度嫌だと思うと、とことん嫌になってくるのだから仕方ない。

しかし悲しいかな、全くやる気の無いのに野営の準備は滞りなく終わってしまった。

軍隊生活で身に染み付いた事は中々抜けないようだ。

あの毒ガス並みのスモッグの中、上の連中馬鹿じゃね？と思いつながらテントを設営し



ていた頃が懐かしい。

暴力とパワハラが支配したブートキャンプ。

そこで学んだ事が、よもやこんな所で生きるとは。

いや、あの厳しい基本教育だったからこそ残っていたのかも知れない。

全く、人生とは摩訶不思議アドベンチャーだぜ。

「……後は、焚き火か」

厚手のポンチョを毛布代わりに敷いた所に気絶した二人を移動させ、集めた枝の束にマッチで火を着ける。

パチパチと音を立てて燃える枝を見てみると、これが何だか妙に落ち着く。

まだ深刻な環境汚染が始まる前は、一般人の間でもキャンプが流行っていたそうだ。

喧騒な都会から逃避し、大自然の中で身体と精神を癒す。

敢えて不自由な事を進んでやる、軍人でもないのにご苦勞な事だと、到底理解出来ない趣味だと思っていた。

しかし、こうして体感してみると中々悪くない。

正に、百聞は一見に如かずとはこの事を言うのか。

「……此処は……一体」

焚き火を前に暫く黄昏ていると、貴族の令嬢が目を覚ました。

うるさい侍女の方でなくて良かったと、タイラントは思った。

漸く落ち着いた気分を、あの女の金切り声で台無しにされたら最悪だ。

「……起きたか、生憎今は夜だ。お子様はそのまま、寝ろ」

「こ、此処はどこ？ 貴方は……誰？」

「……場所はエ・ランテル近郊の街道、俺は只の冒険者だ」

「あれ、何で私、馬車に乗ってた筈じゃ……」

「……おま、いや”お嬢様”は盗賊に襲われたんだよ。護衛と御者は、皆死んだ」

「サ、サラは！ 爺は！ 生きてるの!？」

「……サラが誰だかは知らんが、付き人だったら隣で”静かに”寝ている」

混乱する令嬢、回りがあまり見えてない様なので親切に、かつ皮肉たっぷりな物言いで教えてやるタイラント。

どうやら寝ている女がサラで合っていたらしく抱きついて泣いている。

年端もいかない少女が盗賊に襲われ、九死に一生を経験したのだ。

加えて親しい人間を目の前で殺され、自分も陵辱されかけた。

泣いて、喚いて、壊れて、当然だ。

「爺が死んじゃった……、ずつと一緒って言ったのに……」

年端もいかない子供が背負うには重すぎる現実。

だが、現実と言うものはいつだって残酷だ。甘くはないのだ、都合の良い夢のようにには。

「……泣くな、とは言わん。それで気が済むならば、好きだけ泣け」  
「うう……えぐつ、えぐ……」

雑、端から聞いても雑な慰めである。

泣いている子供に対して言うべき慰めではない。

もつとマシな言い回しが出来ないのだらうかと思うだろう。

しかし、カルマ値が極悪の生物兵器にこれ以上の気遣いを期待しないで欲しい。伊達にカルマ値最底辺じゃないんだぞ。

「あ、貴方と言う人は……!」

いつの間にか起きていた侍女が、今日一番の憤怒の顔でタイラントに詰め寄ってきた。

まあ、あんな雑な物言いをすれば、当然と言えば当然の反応であるが。

また、この女の金切り声を聞かなければならないと思うとイライラしてきた。

「……何だ?」

「貴方には……心が無いのですか? もつと気を使いなさい!」

「……フム、」 お可哀想でしたね、お嬢様 とでも言えば良かったか?」

怒る侍女を逆撫でするように、わざと小馬鹿にした物言いをする。

実際、この五月蠅い女にもウンザリしていたし、この位言っても良いだろ。

大体、何で俺がこんな女に説教されにやならん。

盗賊から助けてやって、此処まで運んでもやった。

別に「感謝しろ」と、そんな恩着せがましい事を言うつもりはない。

だが、手前勝手に怒られる謂われなどもつとない。

これはもう、必殺「黙れ！」とドンツと（威圧感）の3点セットで行くしかない。

「……（威圧）黙れ！  
殺すぞ」

はい、異常なく数段上位の言葉に自動変換されました。

これぞ「タイラント・忖度」。

自分の本当の気持ちや推し量って変換してくれる。

やはりカルマ値極悪は伊達ではないぜっ！

「ひっ！」

何の抑揚もない一言、だが侍女の背筋を凍り付かせるには十分過ぎた。

そして、それを裏付けるかの様に襲い来る殺意の波。

只其処に居るだけで息は詰まり、心臓の鼓動が早くなる。

止めどなく吹き出る冷や汗、寒くもないのにガタガタと震える身体。

目の前の男は、間違ひなく怒っている。いや、怒っているなんてものではない。殺意、それも特大級の。

所詮は少し腕が立つ冒険者と、只の平民風情だと、どこかで侮っていたからだ。それが根本的な間違ひなんだと、何故気がつかなかったのか。

どんな人にも、どんな職業にも最低限敬意を払う。こんな簡単な事が、何故出来なかったのか。

自分は、この男に”怒り”ではなく”殺意”を抱かせてしまったのだ。

この段階において、甚だ愚かで身勝手な自らの言動を後悔する侍女。

貴族故の、馬鹿げた選民思考が招いた結果だが時既に遅し。

先程の魔物なんかとは比較にならないドス黒い殺意の塊。

決して敵にしてはいけない者を敵にしてしまったのだと、やっと気が付いた。

そもそも自分達とこの男の関係は、只の利害関係でしかなかった。

しかも、嫌がる彼に無理やり依頼した立場だと言うのに。

辛うじて繋がっていた護衛対象としての”利害関係”と言う糸を、自ら切ってしまったのだ。

「あ、あ、いや、わた、わたしし……」

あわてて謝罪しようにも呂律が回らず、言葉が出ない。

何とか誤解を解こうと頭を下げようとするが、身体が動かない。

絶対的な死の権化。

否が応にも理解してしまう、自らの死。

引いては、仕える幼い主人も間違ひなく殺されてしまうだろうと言う確信。

全ては自分が招いた事、迂闊な行動や言動によって起きるべくして起きた事なのだ。

※ ※ ※ ※ ※ ※ ※

「……いや、もういい」

タイラントの苛つき度数が危険域に入った瞬間、例の如く精神安定が強制発動。

一気に沸騰した怒りは、これまた一気に鎮静化。

ほんの一瞬、本当に殺してやろうかと思つたドス黒い殺意も綺麗さっぱり消えた、よ  
うな気がする。

「あ、あの……」

自分でも怒り成分が残っているか否かは、はつきりとは分からない。

しかし、不機嫌なのは一目みれば分かる程には態度に出していた筈。

そんな中、不意に声をかけられた。

「……………何だ」

再度気絶しそうな侍女を押し退け、先程まで泣いていた貴族の娘がタイラントの前に居た。

焚き火の明かりでは顔色までは分からないが、どうやら泣いてはいない様だ。

「助けてくれて……………ありがとう。それと、サラが失礼な事言つてごめんなさい」  
深々と頭を下げる貴族の娘に、精一杯の誠意を感じたタイラント。

最早どうでも良いと思つていたので、これ以上の謝罪は無用だった。

「……………お前は”まとも”な様だ」

「サラも悪い人じゃないの。だから、どうか許してあげて……………」

「……………分かった」

「良かった、本当に良かった……………」

本当に安心しているのだろう。その姿は年相応の少女だった。

※

それから暫くは無言の時間が過ぎていた。

間違っても自動対人コミュ障のタイラントが自分から話しかける事など無い。

そもそも侍女に至っては”殺意の波動Lv1”に当てられ、あの後直ぐに気絶した。

まあ、非戦闘員の女相手には少々刺激が強過ぎたかと思うが、怒ると自動的に発生してしまうのだからしょうがない。

俺を怒らせる方が悪いのだ。

パチパチと枝の燃える音と、夜鳥の鳴き声が聞こえてくる。

そんな完全に夜も更けた頃、タイラントが焚き火に新たな枝をくべていると唐突に喋りかけられた。

「あ、あの……起きてますか？」

「………何だ」

「あの、えっと、眠れなくて……」

「……明日も早い、休める時に休め」

相変わらずの端的かつ、機械的な物言い。

子供の扱いに慣れていない大人の典型であると言わざるを得ない。

唯一、先程と違う所を上げるとすれば多少の気遣いが含まれていた事だろうか。

「おじ様は………どうして顔を隠してるの？」



この娘、寝る気無いなと瞬時に判断したタイラント。

こうなった手合いの子供は、もう一度睡魔に襲われなければ絶対眠らない。幼少期の経験上、間違いないだろう。

「……おじ、様？お、俺の事を言っているのか」

「はい、おじ様」

自分に向けられた”おじ様”と言うワードに少しショックを受けるタイラント。

幼いが故の無自覚な口撃、その口撃はおっさんの心に確実なダメージを与えていた。自分の中では、まだ”お兄さん”と呼ばれて良い年齢の筈だと思っていた。

断じて”おっさん”ではない、と。

だって、まだ”おっさん”ではない筈だよ……多分。

「……ひ、人前に出せる”顔”ではないからな。だから、コレで隠している」

「ケガ、してるの？」

「……見せれない程度の、な」

「どうしてケガしたの？」

くっ、お子様の”どうして”攻撃が始まってしまった。

無限に湧き出る子供の好奇心は、とどまる事を知らない。

くそっ！コイツを満足させるまで、俺は答えてやるしかないのか！

何か、何か良い方法は無いのか！

考えろ、考えるんだ”タイラント・コンピューター”。

俺に最適解を……導いてくれっ！

※ ※ ※ ※ ※ ※

まあ……暇だから良いか。

俺、寝る必要ないし。

「……話が終わったら、素直に寝ろ」

そう言うタイラントは、焚き火を前に柄にもなく静かに語り始めた。

消えかけた己の記憶を、土の中から掘り起こすかの様に。

マスクでぐぐもった声は相変わらず酷く不気味であったが、貴族の娘は只黙ってタイラントの話に聞き入っていた。

語るもおぞましい化け物の討伐、クラン同士の大規模戦争、荒野での防衛戦、伝説の秘宝の事等、嘗てユグドラシルでプレイした事を多少濁しながらタイラントは話した。

そのどれもが現実離れたお伽噺話の一節の様だが、実際にプレイしたからこそ語れる非常に濃い内容の話だった。

吟遊詩人の歌の様なざっくりとした物語ではなく、異国の戦士が語る本物の冒険章。

子供を夢中にさせるには十分過ぎた。

(いかんいかん、少しお喋りが過ぎた……)

殺伐とした現実から逃れる様にやり込んだゲーム。

良い大人がゲームに没頭する。それを、みつともない、恥ずかしいと言う奴も居るだろう。

だが、こうして誰かに話していても”楽しい”と思える事は得難いものだと思う、本当に。

「……これで、話は終わりだ。寝ろ」

一通り話し終えた頃には、日付が変わる時間帯に差し掛かっていた。

まあ、体内時計の感覚なので正確な時刻ではないが、大体そんな感じの時間帯である事は間違いない。

話す前と同じ様に、タイラントは焚き火に枝を投入する事に没頭する。

なんせ睡眠を必要としない故に、不寝番には最適の身体だ。

だから、余計な心配などせずお子様はさっさと寝てくれたまえ。

「また……お話し、してくれませんか?」

「……さあな」

その夜は、それ以降タイラントが口を開く事はなかった。

※

東の空が朝日で明るくなる頃、足早にキャンプ地を出立する。

程なくして王都へ向かう商人の馬車を見つけると、臨時の護衛を格安で請け負うを条件に荷台に乗せて貰う事になった。

半分脅して、いやいや真つ当な交渉の上での契約である。

流石、ミスリル級冒険者の肩書きは伊達ではないと言った所か。

だが途中のエ・ペスペルとか言う都市を経由して王都に向かうので、多少時間が掛かる。

何ともまどろっこしい事だと思いが、これも現地偵察の一環だと思えば良い。

” 急ぐ乞食は貰いが少ない ” とも言うし、そもそも「ノープランぶらり旅作戦」で言えば当初の予定通りではないか。

最近はどうも” せっかち ” な思考になっていかん。

これは厳に、自分を律しなければならぬ。

「……現在地が、分からん」

商人から平和的な交渉の上、合法的に掻つ払った高級地図。

それをまじまじと見て、溜め息混じりにそう呟いた。

しかし、この世界の地図の大雑把さはどうかと思う。

冒険者組合の地図と正直あまり大差がない。強いて違いを言えば地図の材質だろうか。

内容はほとんど同じで、大きな都市や山脈、都市や集落に繋がる道しか書かれていない。

これで最高級の地図と言うのだから驚きである。

まあ時代相応のクオリティだから仕方がないが、これで大規模な軍事作戦を実行するとなると色々問題があると言わざるを得ない。

所謂“人海戦術”兵力の多さが物を言う戦術思考がこの時代の戦争の常識。

ならば、この程度の情報量で十分なのだろう。

「だ、旦那！空にハーピーの群れがっ」

血相を変えた商人が叫びながら荷台を覗く。

先程からどうも外が喧しいと思っていたが、やはり害獣の類いだったか。

「……そのまま、馬車を走らせろ。絶対に止めるなよ」

「はい！でも、どうするので……？」

「……なに、有害鳥獣は駆除するだけだ」

そう言うのとタイラントは、腰から水平2連ショットガンを取り出し空に向かって銃を構える。

「……お前達は、耳を塞いで頭を低くしている」

「は、はいっ」

!!!!

一応、同乗者の二人に警告をしてから発砲した。タイラントにしては珍しい気遣いである。

「ンギヤ!!」

馬車を襲わんと急降下した先頭の半人半鳥の化け物は、ダブルバレルから発射された12番の散弾をモロに浴びる。

特に、強化された散弾が直撃した上半身はそのほとんどが吹き飛んでいた。

僅かに残った半身が、重力に従い地面にベチャリと落ちる。

臓物を派手にぶちまけ、ピクピクと痙攣する足。

その死骸の様は、端から見てもグロテスクと言わざるを得ない。

ショットガンを警戒したのか暫く様子を伺う様に馬車の周りを旋回していた群れが、リィダーの鳴き声を合図に上空のハーピー達が次々と急降下を始めた。

「わひ、ひいひい！だ、旦那あ！！」

あまりに絶望的な状況を前に半狂乱な声を上げる商人。

まあ、魔物の群れが自分の馬車に向かって一斉に急降下してくるのだから商人のオヤジがビビるのも無理はない。

しかし、半分人間の姿をしているが所詮は低俗な魔物、数で押せば何とかかなると思っ  
ていやがるな。

甘い、全くもって甘い。

この俺のリロード速度は、「レボリユーション」。

水平2連だが、自動ショットガンと同等の発射速度なのだ。

「……来いよ鳥頭、鉛弾を食わしてやるぜ」

迫り来るハーピーの群れに向かって、タイラントは容赦なく引き金を引いた。

## 王都到着

「今日は厄日だ……」

王都の門を前にして商人の男は大量の汗をかきながら、その不快感を吐き捨てるかの如く言った。

あの馬鹿げた量の魔物の群れに追われたのだ。

恨み言の一つや二つ出てもバチは当たらないだろう。

年甲斐もなく悪態をつく初老の男の身体は、幸いな事に五体満足である。

が、対照的に新調したばかりであろう馬車は、見るも無惨な姿である。

魔物の血や臓物で汚れた幌は、その大部分が引き裂かれ穴だらけ。

幌骨は折れるわ歪むわで、ぐにやぐにやになっており、何とか屋根の形を保っている状態。

更に奇跡的な事は、馬車の中の商品が殆ど無事だったと言う事だろう。

馬車は無事でも商品がダメになっていたら意味がない。

商品がなければ当然商売は出来ないし、出来ないと言う事は当然売り上げはない。

たどり着く先の答えは、大赤字一択と言う訳である。



途中で乗せた貴族にある程度請求しても良いかも知れないが、どこまで保証してくれるかも分からないし、下手に貴族から変な難癖でもつけられたら堪ったもんじやない。

とは言え、だ。

あの量の魔物に襲われて死んでない事を、只々神に感謝するばかりだ。

でなけりや、皆仲良くハーピーの腹の中に収まっていたのだから。

伊達に長く行商をやっている訳ではない。

魔物に食い殺された商人達をごまんと見てきたし、魔物の恐ろしさは解っているつもりだ。

だからこそ、今の状況が如何に奇跡じみた事か、”理解”はしている。

「ああ、新調したばかりのワシの馬車がボロボロ……」

「……だが、おかげで早死にしなくて済んだ」

ぐぐもった声と共にボロボロの荷台からヌツと姿を現したタイラント。

眼前に聳え立つ王都の門を見上げるが、特に興味が無かったのか直ぐに目線を戻した。

その後、気だるそうに首を左右に捻りボキボキと骨を鳴らす。

同時に、何かを探す様に腰のポーチに手を伸ばすと注射器と言うにはデカ過ぎる物を

取り出した。

その巨大な筒……いや注射器を首筋に当てると躊躇なく突き刺し、濃緑色の液体を一気に注入する。

濃緑色の抗体が注射器から一気に身体に流れ込み、まるで感電したかの様な痺れが全身を駆け巡る。

その感覚は控えめに言って凄く不快。

控えない表現ならば”ビチグソ”を無理矢理食わされている様な感じ。

まあ、自身を構成する根幹を抑制する異物を体内に取り込むのだ。

少なからずダメージは受けて当然だろう。

だが、こうして定期的にウイルス抗体を摂取しないとこの身体を維持出来ないのはユグドラシルでも同じだった……筈。

もつとも、ゲームでは抗体アンプルを幾ら使おうがこんな不快な思いをする事はなかったが。

「……薬は注射より、飲むのに限る……か」

その昔、壮絶な殉職をした大佐が言っていたと映画好きの先輩から聞いた事があったが、正にその通り。

良薬口に苦しとも言うが、いくら苦くても注射より飲んだ方が断然良いに決まっている……と、俺は思う。

全く、人間に擬態するとなると色々と不便な事が多くて嫌になる。

そんな事は最初から解っていた事だが、面倒な事はやはり面倒だ。

そもそも、T-103型だって生物兵器にしては人間にかなり近い見た目ではある。

少々身体が大きい人だと思えば何とかなる、やもしれん……

決定的な欠点と言えば会話が困難な事と、人相が極めて悪いと言う事。

まあ、目立つ事には変わりはないのだが……

上手く使い分けければ、より潜入の幅が広がるに違いない。

だが、あのガゼフ某にはT-103型は面割れしているから注意せねばいかな。

まあ、変装なんて俺にとってはお茶の子さいさいよ。

ロングコートとコジャレたハットでも被れば完璧だろ（確信）

当面の問題は長期間の”抗体ゲージ”管理と言った所だろう。

”ユグドラシル”のゲーム内では擬態と同時に抗体ゲージが表示され、時間経過とダメージでバーが減少していた。

人間擬態を継続したければT抗体を打ち、”抗体ゲージ”を一定の状態で維持し続けなければならない。

ダメージや時間経過等で抗体ゲージのバーが減り、0になると擬態は強制解除される。

例外は生命に関わる致命的なダメージを受けると、体内の“T-ウイルス”を急激に活性化させ強烈な生存本能を呼び覚ますと言う事。

所謂、暴走モードもとい”スーパー”化だ。

力こそパワー、全力全開、人類絶対滅ぼすメンに変身する。

その際、当然ながら人間的な理性などは欠片も残ってはいない。

目に付く全てを破壊し尽くす正しく”暴君”となるだろう。

人口密集地の街中で強制”スーパー”化しようものなら見境いの無い虐殺、街は阿鼻叫喚の地獄絵図になる事請け合いだ。

まあ、そうなったらそうなったで逆に面白そうではあるが。

逆にT-抗体の過剰投与は肉体を弱体化させステータスを著しく低下させてしまうので、これも要注意だ。

抗体を過剰摂取すれば当然の反応である。だって身体にとっては只の毒だもの。

兎に角、摂取の塩梅が非常に難しいのだ。

が、人間の擬態をする以上摂取する他ない。

(もう面倒くさいから、テキトーで良くね?)

そんな事を思っていた時期が、僕にもありました。

過去に一度、面倒だからといい加減なタイミングでの抗体投与や過剰摂取を繰り返していたら、ウイルスが不安定な状態で活性化して突然変異を起こした事案がある。

見るも堪えない変異の果てに、不完全態の”プロト・タイラント”になつてしまったのだ。

この形態、数ある”タイラント”の派生の中でも特に最悪の形態だ。

著しい知能の劣化と人工皮膚の急激な腐敗、弱点である心臓の体外露出など。

見た目もスペックも酷く中途半端な只の化け物。

特に強くもなく、別に弱くもない。

だが、見た目はどう見ても人類の敵です。

本当にありがとうございます。

それと、非常に厄介な事がもう一点。

ユグドラシルと違って抗体ゲージなんて物は”どこにも”ありやしない。

ちきしょう!ぶつ殺してやるっ!

要するに、抗体の摂取タイミングは自分の体調の変化で判断するしかないって事か。

全く、”フーバー”な事この上ないな!

「……洒落にもならん」

「ん？何か言いやしたか、旦那？」

「……気にするな、何でもない」

手に持った注射器を握り潰し、乱雑に残骸を投げ捨てる。

門付近の人混みを見てるや大きなため息をつき、その気だるさを隠す事なく馬車から飛び降りた。

「へ、へい。そりやどうも……」

妙な筒を投げ捨て、馬車から降りた黒服の冒険者。

何かを呟いていた様だが言い知れぬ恐怖を感じ、それ以上男に追及する事を止めた。

この男、本当に冒険者なのだろうか？

恐らく傭兵崩れか、いや何処かの国の暗部の者……なのかもしれない。

兎に角、怪しすぎる。

思えば、最初に出会った時からかなり怪しかった。

恐ろしい赤目の仮面と黒一色の不気味な装い。

普通、仮面なんて被って生活していたら色々不便の筈だ。

まして冒険者ともなれば、尚更に。

しかし、この男が只の”見栄っぱり”ではないと言う事は良く分かっている。

今まで見てきた冒険者の中でも、別格に強いと言う事も。

それこそ、其処らの冒険者達が皆ボンクラに思えてしまう程に。

そこはミスリル級冒険者の実力、と言えばその通りだが……

時折男から感じる、身震いする程の殺気や、全身に染み付いているかの様な濃い血の臭い。

それは、明らかに普通の冒険者が醸し出す雰囲気ではない。

(こんな血生臭い男が冒険者？本当に悪い冗談だ)

しかし、そんな警戒心以上に気になるのは男の腰に付いている見慣れない武器だか魔具だかわからない”二本の筒”が重なった妙な物。

ソレが、一体どういった物かは皆目見当がつかない。

だが、その筒を相手に向けると稲妻が地面に落ちた様な音を出すのだ。

そして、その音が鳴り響くと同時に空高く飛ぶハーピーが一瞬でボロ雑巾の様になって地面に墜ちる。

その威力たるや驚愕と言う言葉では到底足りない。

雷を落とす道具か何かなのかもしれないし、そうでないかもしれない。

詳細など、見ただけで解る筈もない。

もし出来る事なら、手にとつてじっくり近くで見たい。

雷を好きな場所に落として人間を、いや魔物すら容易く殺せる道具……

そんな物を独占して生産し、かつ売る事が出来たら一体どんな利益をもたらすのだろうか。

想像しただけでも、年甲斐もなく舞い上がりそうになる。

この男、頭のとつぺんから爪先まで何から何まで怪しいし、それでいて恐ろしい。

だが、それを差し引いても魅力的な事もまた事実。

知的欲求、いや単純に商売人としての本能なのかも知れない。

この男の秘密を一つでも知れば、手に入れる事が出来れば……

間違いなく、大儲けが出来る。

”それを、見せて欲しい”

だが、その一言を言わなかった。いや、言えなかった。

それは何故か？

それを”言つたら”最後、得体の知れない闇に飲み込まれる……

いや、引きずり込まれると言つた方が正しいかもしれない。

喉まで出かけた言葉を寸での所で飲みこみ、代わりにブハアと大きなため息を出す。



（コイツは人間ではない、人の皮を被った”バジリスク”だ。下手にちよつかいを出せば、たちまち食い殺されちまう……）

死んだ妻もあの世できつと「止めな、アンタ！」と言っている……かもしれない。

もう余計な事を考えるのは止めだ。

店の為、何より自分の為にも……

ワシはまだ、死にたくない。

「……世話になったな」

鼻息が荒くし、かつ呆けている商人のオヤジに向け親指でピンっとコインを弾く。

「うおつとと……！ま、まいどー」

弾かれたコインを何とか受け取り、慌てた様子で返事をした商人のオヤジ。

渡されたコインは、少し大きめの金貨だった。

大きさから見て、この辺りで流通している物では無いと直ぐに分かった。

金貨たったの一枚？正直に言っただけかなり不満である。

命懸けで此処まで運んだにしては少な過ぎる報酬だ。これでは馬車の修理代の足しにもならない。

（……りや赤字だな……）

もらった金貨を憎々しげに見ていると、何やら変わった意匠が施された不思議な金貨だった。

「なんじゃあ……こりゃ？」

それが混じり物ではない純金の金貨だと知り、オヤジが驚愕するのはもう少し経ってからである。

「ま、まって下さい！」

用事は済んだと見るや、足早に王都に入ろうとするタイラント。

だが、馬車の荷台から慌ただしく降りてきた侍女に呼び止められた。

しかし、振り返りはしない。

これ以上、此処に長居をするつもりはないからだ。

「……何だ」

「あ、あのまだお礼を……」

「……礼など要らん」

「あ、あと恥知らずな事は十分承知しています……ほ、報酬の事でお話が……」

「……安心しろ、最初から“アテ”になどしていない」

実は「報酬」なんて貰えると最初から思っていなかった。

そこいらの盗賊ごときに襲われて、拐かされそうになる貴族（笑）だ。

組合での護衛料の相場が幾らかなど分らないし、正直興味もない。

平たく言うと、この侍女の私達は「助けて貰って当然」だと言う態度が気に入らなかつたのだ。

傲慢な態度の侍女に対する「意趣返し」に金を吹っ掛けた、と言つた所だ。

報酬なんて貰えればラッキー程度で考えていたし、金に困っている訳でもないので貰えなくても別に問題は無い。

（つい、カツとなつて言つた。別にどうでも良かった）

「……話は終わりか？ じゃあな」

大変素つ気ない返事をし、再びさっさと歩き出すタイラント。

有無を言わせない覇気を纏わせながら、足早に王都へと向かつた。

「また、また……逢えますか！」

健気に、去り行くタイラントに向けて精一杯叫ぶ貴族の娘。

だが、その問いに答える事はなく後ろ手を軽く上げて反応するだけだった。

（子供つてのは、やはり苦手だ）

貧乏貴族とは言え貴族は貴族。なまじ権力者に深く関わると大体録な事がない。

故に俺は名を名乗らなかつたし、聞きもしなかつたのだ。

見知らぬ只の冒険者と間拔けな貴族で完結して欲しい。

「……もう会う事など、無い」

誰にも聞こえる事のない呟きとタイラントの姿は、都の喧騒と人混みに瞬く間に飲まれて消えた。

王都の門を抜けると、エ・ランテルのメインストリート以上の人混みが目の前に広がった。

流石は一国の主たる都と言った所か。

これだけ人が多ければ、此方としても仕事は大変やり易いだろう。

”街のゴミ掃除”も”情報収集”も含め色々、な。

「……全く、戦争つてのは地獄だぜ」

珍しく上機嫌な様子でタイラントは冒険者組合に向けて歩き出す。

相変わらずその風変わりな身なりは、王都でも異状なく目立っている。

目立っているが、今の所は只それだけだ。

特に何かちよつかいをされる訳でもなく、道行く人に遠巻きでジロジロ見られている

だけ。

不快ではあるが、でもそれだけで排除するなんて浅はかな真似はしない。

この格好で目立たない方が無理な話だと言う事は、本人が一番理解しているから。まあ、ケンカを売られたら言い値で買うつもりではあるが。

「……しかし、こう人が多いと流石に」息が詰まる「な」

その息苦しさの原因は人混みでは無く、ガスマスクのせいである。

そもそもお前、呼吸が必要な身体ではないだろう。

タイラント今日一番の渾身のギャグ。

それに突っ込む者は、誰も居なかった。

## if ( Abyss Watcher (上)

”深淵の監視者”と、彼等はそう呼ばれていた。

特徴的な長い兜を目深に被り、逆手に持った歪に曲がった短剣と特大剣の二刀流。

二刀の剣技を駆使して集団で獲物を狩る姿は、統率の取れた狼の群れそのもの。

彼の者等が現れる所に、深淵あり。

その姿は、不吉の象徴とまで言われ人々に恐れられた。

”深淵”の兆しあらば其処へ赴き、剣を振るう不死の旅団。

何処からともなく現れ、深淵を探り出しその地から”原因”の全てを一掃する。

それこそ、草の根一本残さず程徹底的に。

老若男女は言うまでもない。

年端もいかぬ子供も、それこそ赤子すら容赦なく斬り捨てる。

正に鬼畜の所業だ、間違いない。

これ以上の地獄は無いだろう、いや存在してはならない。

老いた妻の命乞いをする老人を、子供を抱えた母親を、躊躇無く斬る。

良心の呵責を感じる事も無く、只々斬り捨てる。

悲鳴と断末魔がこだまし、血と肉片の雨が降り注ぎ大地を真っ赤に染め、死屍累々の果てに街は焼け死山河の果てに国は滅びた。

”憎悪すべき深淵”に慈悲など、必要ない。

それを斬る事が正義だと、火の大義だと我等は信じていた。

微塵も疑いもせず、盲目的に信じきっていた。

討つべき闇に汚染され、更には神々に騙されているとも気付かず、火の存続と狼血の誓約と言う甘美な嘘に騙されているとも知らず……

”踊っていた”だけだった。

深淵を斬り、骸と成り果てた者の返り血を浴び、悲鳴と断末魔を聞く程に闇と火の熱に身体も魂も深く侵食されていたのだ。

故に、この有り様は正に因果応報。

至極当然の結果なのだ、これは。

狼血の同胞達、忌まわしき血の我が同胞達よ。

我等は所詮、燃え尽きそうな篝火に焼べられる僅かな薪。

気休めで最初から燃え尽きる定め、只の火の生け贄。

大義名分だった筈の誓約も、これまで信じていた物全てが、嘘だった。

私達は”ソレに気付くのが、遅すぎた”。

後悔もする事も、懺悔する事も、最早許されぬ。

「……来た、か」

忌まわしい神々の使い、目の前に立つ火の嘘に踊らされし者。

私は彼を”救わねば”ならぬ。

僅かに残った理性、人間性が消えぬ限りこの役目だけは全うする。

これが”薪の王”の一人としての使命か、いや只の意地……なのかは分からない。

だが彼を救う為に、私は最善を尽くすとしよう。

この薪が、燃え尽きるまでは。

去れ、火の嘘の被害者よ。

嘘の誓約から貴方を逃がす為に私は行動する。

火の生け贄よ。

私は蝕まれている。



偽りの狼の誓約によって、火の熱によって蝕まれている。

狼の誓約を用いて、私を火の事実から遠ざける為に語られた嘘によって……私の犠牲により闇は弱まり、闇によって火は弱まるのだと。

しかし、闇も火も弱まっている。

そして、私は貴方を火の嘘から遠ざける為に行動するつもりだ。

貴方にこの偽りの誓約の事実を伝えよう。

……だが、私はこの偽りの誓約を愛していた。

私は、愛していた……

灰よ、私は愛していたのだ。

「……見事」

幾多の剣戟を経て、名も無き灰との死闘は漸くその幕を下ろした。

渾身の袈裟斬りを盾で弾かれ、無防備を晒す私の胸を灰の直剣が深々と刺し貫く。

致命の一撃。

ドス黒い血を足らしながら地に伏す我が身体。

直後、身体は黒い炎に包まれ激しく燃えあがる。

同時に、部屋にうず高く積み重なった同胞達の骸も同様に黒い炎に包まれた。

”ファラン不死隊”

そう呼ばれた男の最後は、あまりに呆気なく、そして虚しかった。

いや神々の嘘に踊らされた惨めな者の最後など、所詮こんなものだろう。

死に場所は得た、最早何も望む物などは無い。

火無き灰よ、火は陰り世界の終わりは近い。

我がソウルは消え失せ、”薪の王”としての狼血のソウルは忌まわしき玉座へと戻るであろう。

火無き灰よ、哀れな火の生け贄よ。

貴方が真実を知る時、果たしてそこに”火”はあるか……

其処に……火は……

「……………」  
顔に感じる陽の光の暑さで男は目を覚ました。

おかしい、何かが、おかしい。

朦朧とする意識の中、自分の置かれた状況の異常性を直ぐ様に感じとる。

何故、こんなにも世界が”暖かい”のだと。

”はじまりの火”は消えかけ、こんなにも火の力溢れる暖かさなど無かった。

そもそも我が身は燃え尽き、狼血のソウルは玉座へと戻った筈。

そもそもだ、ソウルの欠片も残らぬ私が、何故存在しているのか。

「……悪い冗談だ」

そう吐き捨てるように言うと、倒れた身体を起こす。

闇と火の熱に蝕まれた身体とは思えない程に、身体が軽い。

寧ろ、その前よりもずっと調子は良いと言つてもいい。

身体を蝕んでいた闇と火の熱が綺麗に消えている、そう確信するのに時間は掛からなかつた。

新緑の匂い、吹き抜ける風、暖かな太陽の光。

闇に汚染されていない穏やかで生命に溢れた、望み、願った清浄な世界。

決して叶う事の無かった世界に、何故私が存在している……

胸を剣で二度貫かれ、完全に燃え尽きた身体とソウル。

不死者たる私に、漸く訪れた”死”と言う名の安寧。

もう二度と甦る筈など無い、そう思っていた。

忌々しい不死の呪いは、まだ解けていないのだろうか。

薪の王たる役目は果たされ、灰すら残らず燃え尽きた私に神々はこれ以上何を求め  
と言うのだ？

「まだ私に”戦え”と言うのか……」

己の半身とも言える大剣を拾い上げ、天に向かって剣先を向ける。

もの言わぬ我が半身も、赤黒く血塗られた嘗ての姿ではなかった。

穢れ無き白銀の刀身。

その鋭さたるや、これが本当に相棒なのかと疑いたくなくなってしまいう程に。

穢れも、狼血の誓約も、使命もない。

まるで糸が切れた操り人形だ、私は。

自らで動く術を知らぬ人形に、一体何が出来ようか。

「……太陽が、美しい」

燦々と輝く、暖かな太陽。

遙か天上より見下ろす太陽に、私の全てを見透かされているように思えてならない。心の奥底に沈殿した、下水の汚物にも劣る忌まわしき我が業、までをも、だ。この光を前に、隠し事など出来る訳がないと確信めいた何かを感じてしまう。そう思ってしまう程に、この太陽は美しく、そして強い。

ああ、これか。

これが、私達が求めていた”火”だったのか。

この暖かさが、この光が、あの世界には決定的に欠けていた。全てを照らし、全てを平等に愛す、この光こそが必要だったのだ。

その昔、太陽を賛美する一人の戦士が居たと聞く。

己の太陽を探す傍ら、使命に挑む誰かの為に戦ったとも言う。

誰とも知らない者の為に戦うなど、正直愚か者のする事だ。

下らぬ偽善だと、嘗ての私ならそう吐き捨てただろう。

私は老若男女、年端もない幼子まで容赦なく斬り捨てた。

一欠片の慈悲も、例外も無くだ。

我が両腕は、血塗られている。

そんな外道が、事もあるうに今更”人助け”など出来るのか？

(火の存続と言う大義の下に切り捨てた者への罪滅ぼしのつもりか)

(馬鹿馬鹿しい、そんな事をして何になると言うのだ)

(偽善者め、それは只の自己満足でしかない?)

私に取り憑く亡者、とりわけ倒れた同胞達が口々に私に言う。

私がやろうとしている事は“無意味”だと。

それは、殺しを正当化する偽善者のやる事だ。

闇の住人であるお前が、太陽の真似事など出来る訳がないと。

殺せ 殺せ 殺せ 殺せ 殺せ 殺せ

殺せ 殺せ 殺せ 殺せ 殺せ 殺せ

今までそうしてきた様に。

斬り殺せ、突き殺せ、くびり殺せ。

それしか知らぬのであろう、出来ぬであらう、と。

(死にたくなかった……)

(私達は殺したのに……?)

(呪いあれ、忌々しい不死隊に、呪いあれ)

私に斬られたであらう亡者の群れは口々に言う。

呪詛、断末魔、聞くに堪えない罵詈雑言を。

家族を、恋人を、友人を、理不尽に斬り殺された怨みの深さたるや想像を絶する。外道は何処まで行っても所詮は外道。

善人の真似事など、出来る筈がないと。

「……分かつている、そんな事は」

太陽に向かい剣を向けもう片手を胸に当てる。

それは、それは見事な”不死隊の儀礼”だった。

大きく偉大な太陽よ、慈悲深き母よ。

暖かな火を持つ貴女に継らせて欲しい。

闇しか知らぬ私には、貴女の光が必要なのです。

どうか弱き私を導きたまえ、暖かな火の下へと。

そして貴女に誓う。

我が誇りと、身体に流れる狼血にかけて誓う。

”我が剣は力無き者の為に振るい、我が心臓と魂はこの誓いと共に太陽へと捧げる”  
ことを。

「?：太陽Y万歳／＼」

新たな誓いを胸に白銀の剣を背負い、男は暖かな異界での一步を踏み出した。

生命力に溢れた森を暫く歩き続けていると、唐突に嗅ぎ慣れた臭いと気配を感じた。間違いなく“濃い血の臭い”である。

野生の獣が獲物を貪り喰っている訳ではない。

最低限の警戒をしながら鋭角な兜を目深に被り、歩を進めると前から何かか此方向に向かって来た。

背中の中の相棒も直ぐにも抜き放てる様に、柄に手を当て構える。

前から現れたのは、息を切らして必死に走る姉妹だった。

衣服は所々破れ、足元は汚れている。

道なき道を、藪の中を逃げてきたと容易に分かった。

「ひっ」

不死隊の男の姿を確認した姉妹は、急停止し絶望的な表情をしてその場に座りこんでしまった。



生きる事を諦めた者の顔をしている、と男は思った。実に見慣れた、そして忌まわしき光景である。

「……すまない、驚かせてしまったな」

剣にかけた手を離し、膝をついて年長者の娘に謝罪をした。

なるべく敵意を見せない様に、慎重に言葉を選んで会話を試みた。

「私は、旅の武芸者だ。君達を害するつもりは無い」

「あ、あの私達」

「……委細は後で聞こう。下がっていなさい」

姉妹と会話をする間もなく、ガチャガチャと音を立てながら鎧兜を着けた騎士が二人現れる。

隠すつもりも無い殺気が、二人の騎士から溢れ出ている。

武器も持たない女子供相手に何をそんなに血走っているのか。

甚だ疑問ではあるが、この騎士達が姉妹の追手である事は間違いないだろう。

「貴様、何者だ」

「私は旅の武芸者だ」

「問答無用だ、まとめて殺せ！」

自分達から問答を吹っ掛けてきておいて、問答無用とは馬鹿なのだろうか。

呆れ半分に私も背中から剣を抜き、短剣と共に構えながら言った。

「まだ年端もいかぬ子供と娘だ、この娘達だけでも見逃してはくれまいか？」

「うるせえ！村人皆殺しつて命令なんだよ！」

「安心しな！てめえも、一緒に殺してやるからよ！」

姉妹の助命への返答は、不可。

成る程、この者等は嘗ての私と同じだ。

ならば、”理由など取るに足らない”事であると言う事は明白。

「……よかろう、ならば是非も無い」

男は騎士に斬りかかる前に、不死隊の儀礼の構えを取る。

敵に対する幾ばくかの敬意と、これから死ぬであろう者に哀れみの念を祈り……

剣の切っ先から濃密な殺気を飛ばした。

「我が誓い、果たさせてもらおう」

「ひ、ひい！」

無抵抗な村人しか斬った事の無い騎士達に、本物の殺意が襲いかかる。

死の恐怖が身体を支配し、その自由を奪うのに一秒もかからなかった。

寒くもないのに身体はガタガタと震え、いつの間にか失禁もしている。

自分の尿の生暖かな不快感もそのままに、逃げ出す算段を必死に考えるのだが、差し

迫る死の恐怖は小賢しい思考など容易に打ち砕く。

戦士に対し剣を向けた以上、己の生き死にで決着をつける他は無い。

要するに、全て自業自得と言う事だ。

そもそも、戦う事を生業にする者にとって彼我の戦力差が分からないと言う事は、致命的な欠陥だと言わざるを得ない。

もつとも今まで無抵抗な者しか斬った事がなかった者に、そんな能力が身に付く筈もない。

獣の類いならば本能で、本物の古兵は経験からソレを理解する。

だが愚か者は、この段階において漸く理解するのだ。

戦ったら間違いなく”死ぬ”と言う事を。

「……参る」

掛け声ともに駆け出す男の特大剣が、震え立ち尽くす騎士の一人に無慈悲に突き刺さる。

威力過剰な男の一閃は、プレートメイルを紙の如く切り裂き上半身を消失させた。

断末魔すら上げる間もなく絶命した騎士の残った下半身は、臓物と血を垂れ流しながら前のめり倒れた。

「くあwせd r f t g y yふじハールp!!」

同僚のあまりにも悲惨な死に様を目の当たりにし、悲鳴とも絶叫とも呼べぬ声を上げ騎士の片割れは逃げ出す。

恥も外聞も無い、実に無様な逃げ様である。

しかし、男は騎士を見逃すつもりなど毛頭無い。

肩に特大剣を担ぎ直すと低い姿勢から再び跳び、逃げた騎士の足元を風ぎ払う。

地面を削り火花を飛ばしながら迫る刃は、馬鹿げた威力そのままに足を両断した。

「ぎゃっー！」

たった一風ぎで両足の膝から下を乱雑に刈り取られ、消失した両足の力。

派手に地面に倒れ、直後に訪れた激痛で騎士はその場でのたうち回った。

見たくはないが、見らずにはいられない。

騎士は見たらきつと後悔すると確信しながらも、激痛の元凶に目を向けてしまった。

案の定、己の両足は無くその切断面から血がドロドロと流れ、これが深手であると嫌でも認識させた。

(どうして自分がこんな目に、楽な任務だったのに！何故！こんな事に！)

その自分勝手な自問自答に答えてくれる者など、誰も居やしない。

芋虫の様に地面に這いつくばり、尚も生き意地汚く逃げようとす。

「死にたくない……死にたくない！」

その様は死に物狂い、と言った所であろう。

死にたくない、生きていたい、と言う思いは瀕死である筈の身体を無理やり動かす。悪鬼から少しでも遠くへ離れようと、必死に残った腕を懸命に動かしていた。

「……狼は、獲物を逃さぬ」

見れば分かるだろうが、重量級の特大剣の一撃は一発一発が常に即死級の威力を誇る。

突こうが斬ろうが、基本的に当たれば大抵の者は死ぬ。

そんな鉄の塊の様な物で斬られた人間の末路は、想像するだけでも吐き気を催す。そして残念な事にこの愚か者達は、まともな死に方は出来そうにない。

もつとも、もう一人は既に肉塊になっているが。

「何より、獲物に”容赦はせぬ”」

不死隊独特の構えから、獲物に食らい付く狼の如く跳躍し唐竹斬り気味に剣を叩きつけた。

「死に、ぺっ!!」

潰れたヒキガエルにも似た断末魔が、この騎士にとつて人生最後の言葉となった。

鎧兜ごと身体を潰され両断された死に様は、相棒に勝るとも劣らない実に惨めなものだった。

